

高知空港拡張整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

田村遺跡群

第5分冊

1986

高知県教育委員会

田村遺跡群

第5分冊

本文 V

例　　言

1. 本書は、高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財－田村遺跡群－の発掘調査報告書15分冊の内、第5分冊である。
2. 調査は、運輸省第三港湾建設局の委託を受け、高知県教育委員会が実施した。調査期間は、昭和54～58年度に発掘調査、昭和58～60年度に整理作業及び報告書作成を行い、7年間にわたった。
3. 遺跡の名称としては、調査対象地の大部分から各時代の遺構、遺物を検出しており、調査区も多いため、これを一括して田村遺跡群と呼ぶこととした。また、各調査区はLoc. 1～48と呼称した。
4. 本書の作成にあたっては、本文執筆、図版作成、写真撮影等の作業を各調査区を担当した調査員が行い、各時期、時代についても担当者を決め、これをまとめた。編集は高知県教育委員会である。
5. 発掘調査、整理作業及び報告書作成を通じて、顧問岡本健児教授（高知女子大学）には、御指導、御助言をいただいた。記して感謝する次第である。
6. 図中の方位はすべて磁北であり、標高は海拔高である。遺構図の縮尺は、竪穴住居址、掘立柱建物址、横列を $\frac{1}{100}$ 、その他の遺構、断面図及びセクション図を $\frac{1}{50}$ とした。遺物実測図の縮尺は、原則として土器については、縄文・弥生時代を $\frac{1}{4}$ 、古墳時代以降を $\frac{1}{2}$ 、石器、金属器を $\frac{1}{2}$ 、木器を $\frac{1}{3}$ とした。写真図版は約 $\frac{1}{2} \sim \frac{1}{3}$ であるが縮尺不同である。
7. 遺構の略号は、竪穴住居址－S T、掘立柱建物址－S B、土塙－S K、溝－S D、井戸－S E、横列－S A、水溜り状遺構－S P、性格不明遺構－S X、ピット－P、自然流路－S Rとした。
8. 調査期間を通じて多くの方々、諸機関に御協力、御援助をいただいた。各々の名称はあげないが、記して感謝する次第である。
9. 出土遺物その他の資料については、高知県教育委員会が保管の任にあたっている。

本文 目次

第V章 弥生時代（中～後期2）

1.	Loc.35B	1
2.	Loc.35C	57
3.	Loc.36A	65
4.	Loc.36B	135
5.	Loc.41	179
6.	Loc.45	195
7.	Loc.46	279
8.	弥生時代中期小結	313
9.	弥生時代後期小結	325
10.	総括I－繩文・弥生時代一	337

挿 図 目 次

1. Loc.35B

- 第1図 調査区設定図
 第2図 調査区セクション
 第3図 調査区セクション (SR 2)
 第4図 ST 1・2、SD 1
 第5図 SK 1~3、SD 2、SX 1
 第6図 ST 1出土遺物
 第7図 ST 2、SK 3、SD 1、SX 1、
 SR 2出土遺物
 第8図 SR 2出土遺物
 第9図 "
 第10図 "
 第11図 "
 第12図 "
 第13図 "
 第14図 "
 第15図 "
 第16図 "
 第17図 SK 2、SR 2出土遺物
 第18図 ST 1・2、SR 2出土遺物
 第19図 SR 2出土遺物
 第20図 ST 1出土遺物
 第21図 "
 第22図 ST 1・2、SX 1、SR 2出土遺物
 第23図 SR 2出土遺物
 第24図 "
 第25図 ST 2、SK 3、SX 1、SR 2
 出土遺物
 第26図 SK 3、SR 2出土遺物
 第27図 SR 2出土遺物
 第28図 "
 第29図 ST 1、SK 1・3出土遺物

第30図 SD 1、SR 2出土遺物

第31図 ST 1、SR 2出土遺物

2. Loc.35C

- 第32図 調査区設定図
 第33図 第V~VI層出土遺物
 第34図 "
 3. Loc.36A
 第35図 調査区設定図
 第36図 調査区セクション
 第37図 SK 2~6、SD 2
 第38図 SK 4、SD 1・2出土遺物
 第39図 SD 2出土遺物
 第40図 SR 2出土遺物
 第41図 "
 第42図 "
 第43図 "
 第44図 "
 第45図 "
 第46図 "
 第47図 "
 第48図 "
 第49図 "
 第50図 "
 第51図 "
 第52図 "
 第53図 "
 第54図 "
 第55図 "
 第56図 "
 第57図 "
 第58図 "
 第59図 "

第60図	S R 2出土遺物	第92図	S R 2出土遺物
第61図	"	第93図	"
第62図	"	第94図	S D 1、S R 2出土遺物
第63図	"	第95図	S R 2出土遺物
第64図	"	第96図	S D 1、S R 2出土遺物
第65図	"	6. Loc.45	
4. Loc.36B		第97図	調査区設定図
第66図	調査区設定図	第98図	調査区セクション
第67図	S T 1、S K 7・8	第99図	S T 1・2
第68図	S R 2南北トレンチセクション	第100図	S T 5・6、S T 6-P 1、 S T 5-P 9
第69図	S R 2東トレンチセクション	第101図	S T 3・4、S T 4炭化物出土状況
第70図	S T 1、S K 8、S R 2出土遺物	第102図	S T 7・8
第71図	S R 2出土遺物	第103図	S T 9・10
第72図	"	第104図	S K 1~4
第73図	"	第105図	S K 5~8
第74図	"	第106図	S K 9~15
第75図	"	第107図	S K 16~18、S D 2
第76図	"	第108図	S D 1
第77図	"	第109図	S D 3~7
第78図	"	第110図	P 1~10
第79図	S T 1、S R 2出土遺物	第111図	P 13・14、18~20、22~26
第80図	"	第112図	S T 1・2出土遺物
第81図	S R 2出土遺物	第113図	S T 2~5出土遺物
第82図	S T 1、S R 2出土遺物	第114図	S T 6出土遺物
第83図	"	第115図	S T 6~8出土遺物
第84図	"	第116図	S T 8・9出土遺物
第85図	"	第117図	S T 9・10出土遺物
第86図	"	第118図	S K 1~5、S K 9~11出土遺物
第87図	"	第119図	S K 11~16出土遺物
第88図	"	第120図	S K 16~19、S D 1出土遺物
5. Loc.41		第121図	S D 1出土遺物
第89図	調査区設定図	第122図	"
第90図	S D 1、S R 2セクション	第123図	"
第91図	S D 2、S R 2出土遺物		

第124図 SD 2出土遺物	第139図 ST 1出土鏡片
第125図 "	7. Loc.46
第126図 "	第140図 調査区設定図
第127図 SD 2・6・7出土遺物	第141図 調査区セクション
第128図 SD 7、P 2・7・12出土遺物	第142図 調査区セクション、SD 1
第129図 ST 3・6・8・9、SK 13出土遺物	第143図 SR 1・セクション
第130図 SD 1・3、ST 6出土遺物	第144図 SR 1出土遺物
第131図 ST 6・9出土遺物	第145図 "
第132図 ST 1・6出土遺物	第146図 "
第133図 ST 6・9出土遺物	第147図 "
第134図 ST 7・9出土遺物	第148図 "
第135図 ST 4、SK 5・9、SD 2出土遺物	第149図 "
第136図 ST 1・4・6・9、SD 6出土遺物	第150図 "
第137図 ST 1・8・9、SK 1・16、 SD 2・7出土遺物	第151図 "
第138図 ST 1・5・6・9出土遺物	第152図 "
	第153図 "

表 目 次

1. Loc.35B
第1表 竪穴住居址計測表
第2表 土塙計測表
第3表 遺構出土土器観察表
第4表 遺構出土石器観察表
2. Loc.35C
第5表 包含層出土土器観察表
第6表 包含層出土石器観察表
3. Loc.36A
第7表 土塙計測表
第8表 遺構出土土器観察表（Aトレンチ）
第9表 遺構出土石器観察表（　　）
第10表 遺構出土土器観察表（Bトレンチ）
第11表 遺構出土石器観察表（　　）
4. Loc.36B
第12表 竪穴住居址計測表
第13表 土塙計測表
第14表 遺構出土土器観察表
第15表 遺構出土石器観察表
5. Loc.41
第16表 遺構出土土器観察表
第17表 遺構出土石器観察表
6. Loc.45
第18表 竪穴住居址計測表
第19表 土塙計測表
第20表 遺構出土土器観察表
第21表 遺構出土石器観察表
7. Loc.46
第22表 遺構出土土器観察表
第23表 遺構出土石器観察表
8. 弥生時代中期小結
第24表 中期に編入される住居址の時期区分
9. 弥生時代後期小結
第25表 後期に編入される住居址の時期区分
第26表 調査区における後期竪穴住居址の規模

1. Loc. 35B

Loc.35B

1. 位置と調査経過

Loc.35Bは、田村遺跡群の北西部に位置し、小字名は、田村川を挟んで西は横手、東は南土居の前である。当地点の北は西見当遺跡であり、南西部には弥生後期の集落址を検出したLoc.34がある。

当地点は、空港拡張事業に伴う田村川改修工事によってその両岸の水田の一部が用水路化されることになったため、急速設定された調査区である。すなわち、田村川の右岸に南北に細長いトレンチ（Bトレンチ）と小トレンチ（Dトレンチ）とを設定し、左岸の工事区域内に4つの小トレンチ（C・E・F・Gトレンチ）を設けた。後に、Bトレンチの北の農道にも拡張工事が行われることになったため、道路下の部分をAトレンチとして調査した。

各トレンチの試掘調査の結果、Bトレンチでは弥生時代の竪穴式住居址が検出されたため、工事区域内全面を拡張発掘した。また、E・Fトレンチでは下層より多量の弥生土器を出土したため、両トレンチをできるだけ拡張し、結果的には1つのトレンチ（Eトレンチ）とした。（それに伴ってGトレンチはFトレンチと改称す。）以下、Eトレンチとは旧E・Fトレンチを指し、Fトレンチとは旧Gトレンチを意味する。全体図等も新トレンチ名で示している。

2. 調査概要

当地点の最終的な発掘面積は、Aトレンチ92m²、Bトレンチ57m²、Cトレンチ8m²、Dトレンチ8m²、Eトレンチ78m²、Fトレンチ14m²で、計257m²に及んだ。

弥生時代に関するものだけに限ってみると、Aトレンチでは土塁2基を確認し、Bトレンチでは竪穴住居址1棟、竪穴状造構1基、土塙1基、溝状造構2条、それに性格不明の落ち込み（S X 1）1ヶ所を検出した。また、Eトレンチの下層においては、非常に多量の遺物（弥生土器、石器）が出土した。このEトレンチは、遺物の出土状況がLoc.35AのSR2およびLoc.36のSR2と類似しており、全体的な位置関係からしても自然流路SR2の一部と考えられる。

3. 層序と出土遺物

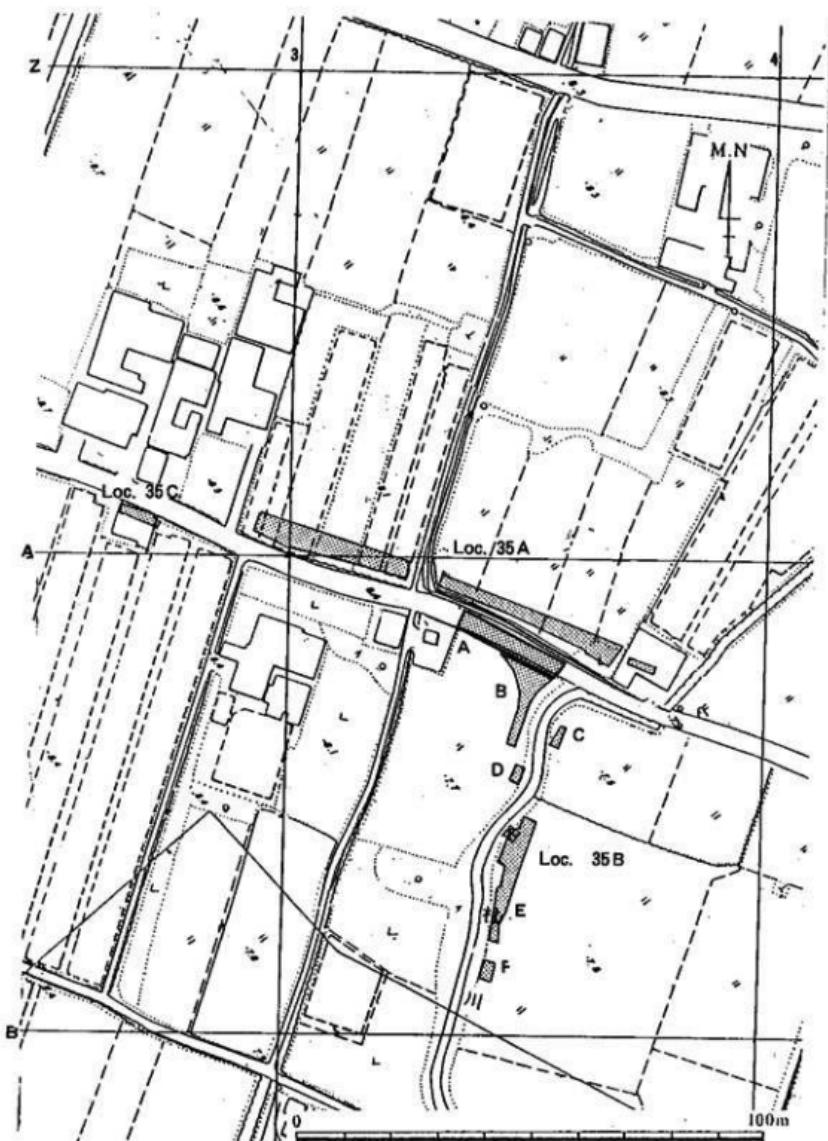
Loc.35Bの各トレンチの層序は余り整然とはしていないが、基本的には、

第I層 耕作土

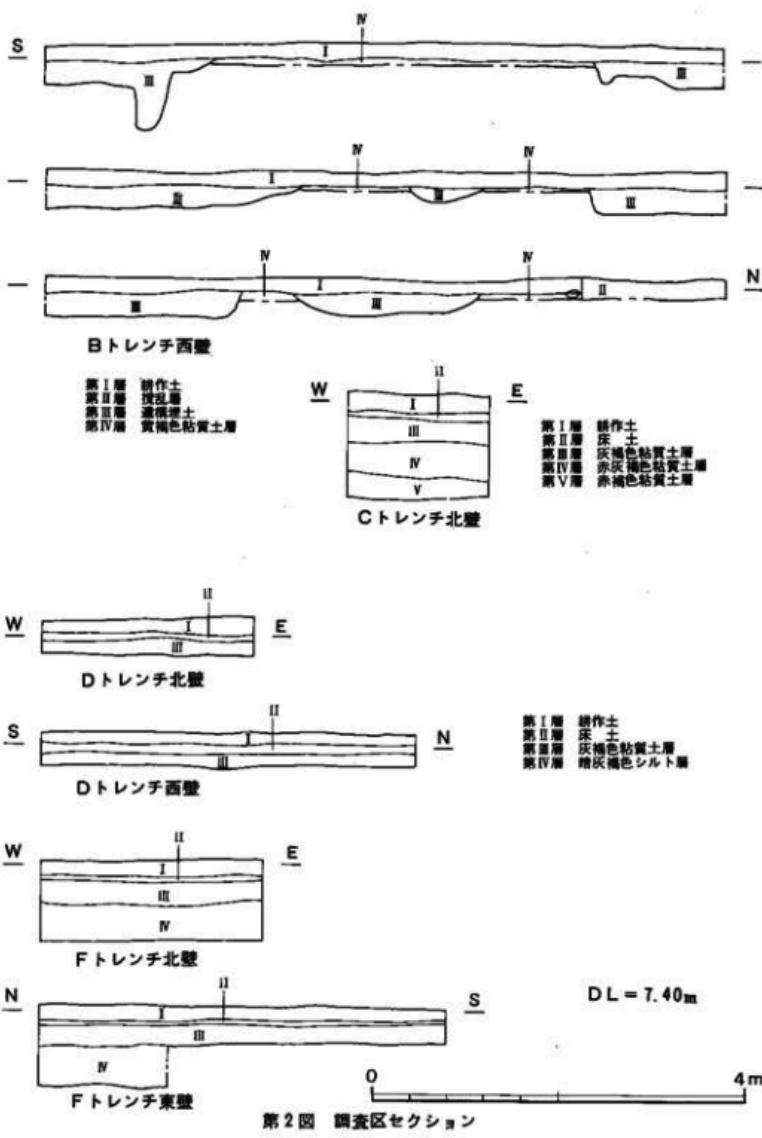
第II層 床土

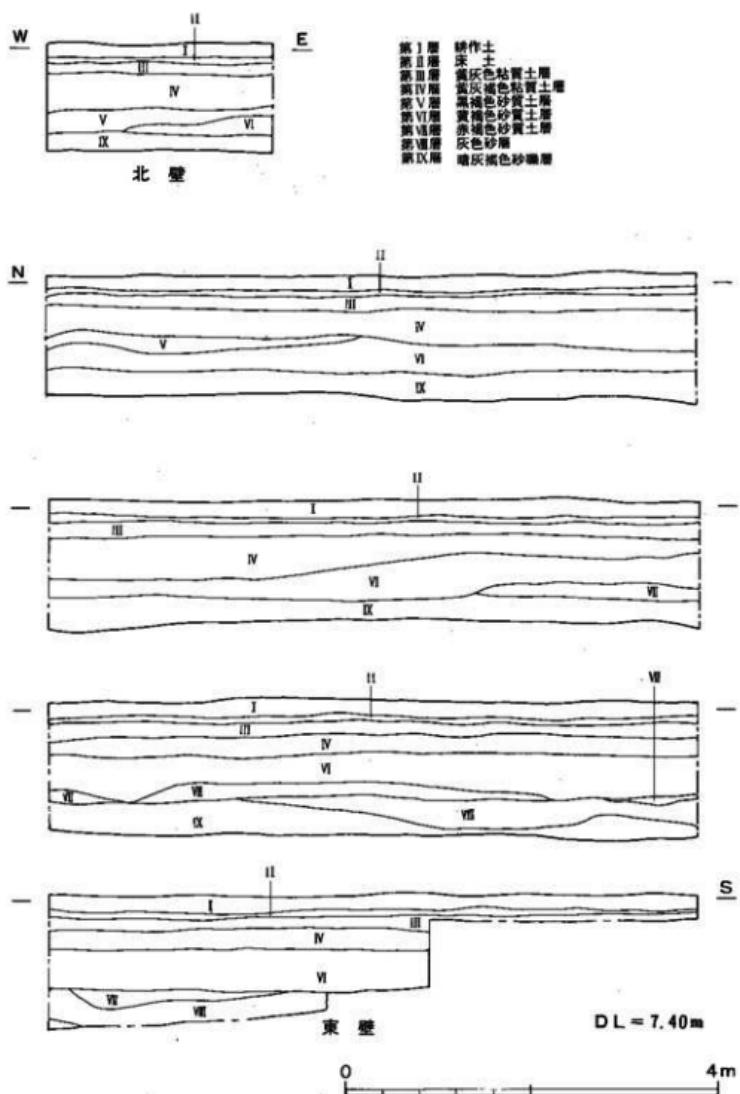
第III層 灰褐色粘質土層

であり、第III層までは統一的に把握できる。但し、Aトレンチは、旧農道工事によって全面が搅乱を受けているため、搅乱層を除去した段階がいきなり遺構検出面（灰褐色粘質土層）となっており、また、Bトレンチでは、第II・III層の堆積はみられず、耕作土除去の時点では遺構が



第1図 調査区設定図





第3図 調査区セクション (SR 2)

確認された。

C～Fトレーニチにおいても、第Ⅳ層以下の層序は、田村川氾濫のためか若干の相違がある。なお、Eトレーニチにおける遺物の出土は第Ⅴ層以下で著しくなっており、同層以下がSR2の埋土として捉えることができ得る。

出土遺物は、各構造や自然流路を別にすると、第Ⅰ～Ⅲ層より若干の弥生土器片と中世土質土器片および近世陶磁類を出土しただけであり、図示できるものはなかった。

4. 遺構と遺物

住居址

ST1

ST1は、Bトレーニチの北部において、耕作土除去直後に検出された。平面形は直径6.10mの円形を呈するものの、北端は旧農道工事によって破壊されており、東端は田村川に接しているため、全容を確認することはできなかった。住居址埋土上面には、南西部を中心に木炭片が広がり、また、木炭塊が弧状をなして並んでいた。

埋土は、黒褐色粘質土をベースとしているが、3層に分層され、第Ⅰ層が灰黒褐色粘質土、第Ⅱ層茶褐色粘質土（両者の差は僅少）、そして第Ⅲ層が黒褐色粘質土であった。深さは0.30mを測り、床面の標高は7.00m前後である。床面の状況は、住居址としては起伏が多く、西側に深さ0.10mほどの方形状の掘り込みを有す。なお、東端部は、田村川の氾濫のためか、埋土に砂礫が混入しており、床面も若干乱れていた。南部は、残存状態が良好であり、壁直下が段状にやや高くなっていた。その東で浅い壁溝が確認されたが、全周を巡るものではなかった。

ピットは、第Ⅱ層除去の段階から検出されたが、第Ⅲ層除去後に確認されたものも多い。主柱穴と考えられるピットはP3～6とP7～10との2組があり、建て替えが行われている。各柱穴の形状は、平面形が直径35cm前後の円形を呈し、深さ40cmを標準とする。中央ピットと目されるP1は、平面形が直径64cmの円形を呈し、深さは42cmを測り、底面中央が若干凹んでいる。P1は北のP2とともに第Ⅱ層除去段階で検出された。なお、ST1の南隣で検出されたSK3は住居址に付属するものと考えられる。

出土遺物の中では、中期II段階を中心とする土器（1～24）の出土が目立ち、また、石器の出土も著しかった（192、193、200～208、238、241、242、250～253）。遺物は、第Ⅱ層出土が主であったが、第Ⅲ層からの出土も少なくなかった。

ピットのうち第Ⅱ層除去段階での確認が明瞭であったのは、P1・2の他にP4・5・6およびP11がある。このことから、まずP7～10を主柱穴とする竪穴住居があつて、後に第Ⅲ層上面を床面としたP3～6を主柱穴とする住居が設営されたのではないか。

ところで、ST 1は、SD 1によって明確に切られている。また、西側はST 2とも切り合ひ関係にある。両者の埋土は同一であり、検出段階ではST 1の南端から弧状に並ぶ木炭塊に沿って発掘を試みた。それゆえ、西側の壁の立ち上がりは極めて不明瞭であった。ST 2からの出土遺物は後期的要素が強く、切り合ひを逆に判断してしまった可能性がある。

ST 2

ST 2も、Bトレンチの北西部において、耕作土除去直後に検出された。先述の如く、ST 1と微妙な切り合ひ関係にあり、北端は旧農道工事によって破壊されており、また、南西部は調査区外であるため、その全容は不明である。

深さは0.20mを測り、底面は比較的平坦であった。但し、底面において検出されたピットは、数も少なく、小規模なものであり、主柱穴らしきものも確認できなかった。ゆえに、ST 2は、住居址と判断することは難しく、現時点では「竪穴状遺構」として扱った方が妥当と考えられる。

埋土は黒褐色粘質土であり、ST 1にみられた黒黄褐色粘質土は下層にも堆積していなかつた。出土土器は25~30で弥生後期1段階のものが主であり、石器は194、195、209、221、222である。底面よりやや浮いた状態での出土が多かった。

土塙

SK 1

SK 1は、Aトレンチの中央部東寄りで、攪乱層を除去した段階で検出された。この攪乱は、旧農道工事に伴うものであり、深さ0.40mに達しており、遺構の残存状態は不良であった。

平面形は、南北方向に長い不整長方形を呈し、長径1.20m、短径0.28mを測る。長軸方向は、N-3°-Wであり、ほぼ真北を指す。埋土は黒褐色粘質土であるが、深さは0.10mと極めて浅い土塙である。東端部より石包丁(240)が出土した。

SK 2

SK 2は、Aトレンチの東部に位置し、攪乱層除去後に検出された。BトレンチのST 1あるいはST 2の延長かと期待されたが、南北両端の攪乱が深く、両者の関連は不明であった。また、平面の形状からしても、ST 1あるいはST 2として扱うことは難しいと判断されたため、単独の土塙として扱った。

底面は、西部と南部はほぼ平坦であるが、北部中央がさらに落ち込んでおり、東北端は盛り上がっていた。また、東半部には大小の礫も混入していた。埋土は、上層が赤褐色粘質土であり、落ち込み部は黒褐色粘質土であった。

遺物は、底面直上より弥生土器片の出土をみたが、図示できるものはなかった。肩平片刃石斧(187)が、ほぼ底面直上より出土している

S K 3

S K 3は、S T 1の南側に位置し、耕作土除去直後に検出された。平面形は直径1.12mの円形を呈し、深さ0.37mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に近く立ち上がっている。但し、その東西は段状に0.10m程凹をなしている。埋土は黒褐色粘質土である。

遺物は、埋土中位を中心に、弥生土器片および石器が出土している。とりわけ石器類の出土が目立った(37、220、224、225、239)。S K 3はその位置からしても、S T 1に付属する施設であると考えるべきであろう。

溝

S D 1

S D 1は、Bトレンチ北部において、耕作土除去後に検出された。幅0.60mで断面U字状を呈し、深さ0.30mを測る。確認長は10mで、東西方向に走る。埋土は、2層に分層され、第I層が褐色粘質土で、第II層が暗褐色粘質土である。

弥生時代後期のものと考えられる溝であり、出土遺物には31~34および243がある。S T 1およびS T 2のはば中央部を切っている。

S D 2

S D 2は、Bトレンチの南部において、耕作土除去の段階で検出された。南北に継走する比較的規模の大きい溝の西肩部と考えられ、底面には不規則な起伏がみられる。埋土は、3層に分層され、第I層黄灰褐色粘質土、第II層灰褐色土、第III層暗褐色粘質土である。

上層の埋土はどちらかと言えば中世的であるが、出土遺物は弥生土器片のみであった。図示できる遺物はなかったが、埋土第III層の状況等から考えて、S R 2の西肩部である可能性がある。この点について確認すべく南側のDトレンチの掘り下げを試みたが、涌水が激しく不可能であった。

性格不明遺構

S X 1

S X 1は、S D 2の北に接する位置において、耕作土除去の段階で検出された。東西方向に流れる溝の可能性もあるが、調査区が狭小で断定できないためS Xとした。南北幅は3.60m、

深さ0.20mを測る。

埋土は灰黒褐色粘質土で、埋土中より多くの弥生土器および石器を出土した(35、36および211、223)。その東南端はSD2によって切られている。

自然流路

SR2

SR2は、Eトレンチを第V層上面まで掘り下げた段階で検出された。

Eトレンチは、第IV層までは粘質土系であり、遺物の出土も僅少であった。ところが、第V層以下では砂質を帯び、所によつては砂礫を噛むようになり、弥生土器の出土が夥しくなった。発掘当初は、これらは単なる弥生の包含層と考えられたが、その全体的な位置関係および埋土の状況からして、Loc.36から続くSR2の延長と判断された。

Eトレンチ全体がSR2の中央部になると推定され、肩部への立ち上がりは確認できなかった。弥生土器の出土は非常に多く、特に、第V・VI・IX層からの出土が著しかった(38~174)。時期的にも前期から後期に至るまで幅が広い。但し、前期Ⅲ段階以前および後期Ⅱ段階以降の遺物は僅少であった。また、各種の石器(175~255)も出土している。

かかる状況から判断すると、弥生時代に機能したSR2の埋土は、セクション図での第V層から第IX層までと考えられる。

5. まとめ

Loc.35Bにおける主要な弥生遺構はBトレンチのST1と、Eトレンチで検出されたSR2である。

ST1は、中期II段階の住居址と考えられ、田村遺跡群内では比較的例の少ない中期中葉遺構の1つである。中期後半の住居址は、当地点より約400m北方にある正善遺跡でも発見されており、この一帯に中期集落が存在していたものと推定される。SR2出土の多くの中期遺物も、その可能性を強くさせるものである。

ところで、SR2からの出土遺物は前期から後期まで広範囲にわたっており、中期に限らず弥生時代を通じて、当地点周辺に集落が形成されていたことを示唆している。また、別の視点から言えば、かかる自然流路の存在そのものが、弥生集落形成のため的一大要因となっていたであろうことも疑いない。

第1表 壁穴住居址計測表

構図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)	主軸方向	柱穴	面積 (m ²)	施設	備考
第4図	S T 1	円形	6.10	—	19	(29.21)		

第2表 土塙計測表

構図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長 座	短 座	深 さ			
第5図	S K 1	不整長方形	1.20	0.28	0.10	N - 3° - W	逆台形	
“	S K 2	—	3.96	—	0.25	—	“	
“	S K 3	円形	1.12	—	0.37	—	“	

第3表 遺構出土土器観察表

構図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口縁 基部 側溝 底溝	形態・文様	手 法	備考
1	S T 1	壺	17.4 (5.8) — —	口縁部外方に扁平な粘土帯を貼付し、肩部を施す。	—	
2	“	“	30.8 (2.9) — —	口縁部は下方に拡張。 口唇部に斜格子文。	—	
3	“	“	16.2 (5.9) — —	大きく外反する口縁部を有す。 口縁部は幅広く弧状を呈し、下端に肩部を施す。	—	
4	“	“	22.2 (4.5) — —	口縁部は柔らかく外反し、幅2cmの粘土帯を貼付。 口唇部は広い面をなし下垂する。	—	
5	“	“	15.4 (5.8) — —	頸部から口縁部にかけてわずかに外反する。頸部には1条のよい凹溝を有す。口縁周辺は内外に肥厚し、口唇部には2条の凹溝を施す。	—	
6	“	“	7.0 (12.5) — —	やや外方に立ち上がる長頸の口縁部。	外面ハケ調整。 内面ナデ調整。	
7	“	“	— (11.2) — 4.4	上部で内側に研磨する面である。	内面ナデ調整。	底部から頂部にかけて黒斑を有す。
8	“	“	— (7.8) — 8.4	上げ底状の底部。	—	底部から下部にかけて黒斑を有す。

標印番号	遺構番号	西 種	法量 (cm)	口徑 器高 製造 底径	形態・文様	手 法	備 考
9	S T 1	壺		(5.5) (8.0)	上げ底気味の底部。	内面が全体的に剥離しており、調査観察不能。	
10	"	"		(9.2) 6.3		外面ナデ調査。	底部から下側にかけて黒斑を有す。
11	"	"		(17.0) 9.2	上げ底状の底部。		
12	"	甌		14.9 (8.3) —	口縁部向らかに外反。 口縁部は面をなす。	口縁部外面横方向の強いナデ調査。	
13	"	"		16.2 (5.0) —	腹部から強く屈曲して外反する。 口縁部は幅広い面をなす。		
14	"	壺		(2.9) 3.0			
15	"	"		(2.9) 6.6	やや上げ底気味の底部。		外底部に黒斑を有す。
16	"	"		(3.5) 5.5			腹部外面に 5cm幅の黒斑を有す。
17	"	"		(4.1) 5.3	上げ底状の底部。	内面に下方から上方へ向かうヘラ 削り。	内面に黒斑を有す。
18	"	"		(3.5) 5.5			外底部全面に 黒斑を有す。
19	"	"		(4.9) 4.0			
20	"	"		(4.6) 5.5		外面剥離が激しく、調査観察不適。	
21	"	"		(6.8) 5.0		内面ナデ調査。	
22	"	"		5.8 — 6.0	上げ底状の底部。	"	
23	"	小型土器		9.4 9.0 4.8	小柄の壺。 底部を各方面につまり出したような 形を呈している。		腹部外面に黒 斑を有す。

標記番号	通査番号	器種	法量 器高 (cm) 底径 底径	形態・文様	手法	備考
24	ST 1	小取土器	全長 (4.1) 径 1.9	口縁部は丸く外反し、口沿部は外板する面をなす。		
25	ST 2	甌	12.1 (4.3) —	口縁部は丸く外反し、口沿部は外板する面をなす。		
26	"	"	14.7 (5.0) —		口縁部を上方へつまら上げて横方向にナデる。縁部内面底下より横方向のヘラ削り。	
27	"	"	— (3.7) 5.4			底部に黒斑を有す。
28	"	"	— (2.8) 5.2			内面に黒斑を有す。
29	"	"	— (4.0) 6.5		外面ハケ調整。	底部から下端部にかけて黒斑を有す。
30	"	不明	14.6 (4.8) —	口径が密しく小さい。	内面墨跡が激しく、調査結果不詳。	高杯か。
31	SD 1	盃	12.2 (9.3) —	直線的にゆるく外反する唇部に外反した口縁部がつく。口縁部を上方に板張させ、口唇部に2条の凹線文を施す。	縁部の上に粘土を練ぎだして口縁部を模倣している。 外側ハケ調整。	擬口縫を観察できる。
32	"	"	— (2.7) 6.0	断面台形を呈する上げ底状の底部。		
33	"	高杯	— (3.2) 13.8		内面のヘラ削りの方向が(右→左)である。高杯は(左→右)であり、他の口縁部とするよりも高杯の脚部とした方が妥当であろう。	
34	"	甌	10.6 (7.3) —	口縁部は「く」の字状に外反。口沿部は面をなす。		底部外側に黒斑を有す。
35	SX 1	"	12.5 (5.4) —	丸く外反する口縁部を有し、外面部粘土を不規則な線で結びしており、その部分が肥厚している。	口縁部は横方向の強いナデ調整により凸状をなす。内面は右から左へ強く削っている。	内面に黒斑を有す。
36	"	"	12.0 (7.4) —	口縁部は強く外方に屈曲し、上方に板張している。 口縁部に2条の弱い切線有り。	外面白下りのハケ調整を施し、上方墨跡はナデ消している。 内面のヘラ削りの苔痕は不明。	
37	SK 3	"	— (6.6) 4.9	上げ底状の底部。		
38	SR 2	甌	43.1 (10.0) —	大型甌。口縁部は強く外反し、縁部は面をなす。口沿間に1条のヘラ削れ線を有す。		口縁部内面および上側部に黒斑を有す。

探査番号	遺構番号	基層	法量 (cm)	口縁部 最高 底面 底面	形態・文様	手 法	備考
39	SR 2	土	11.2 (4.0) — —	口縁部はあまり発達していない。 口縁部は丸くおさめる。 窓部外側に5条のヘラ筋沈線を有す。			
40	"	"	15.6 (6.7) — —	「く」の字伏に外反する口縁部。 口縁部は刻目を有し、口縁部は外傾する面をなす。窓部に3条のヘラ筋沈線、その下に刻文を配す。			
41	"	"	20.8 (5.7) — —	大きく外反する口縁部内に1cm幅の粘土帯を貼付。口縁部は凹面をなし、上下に刻目を配す。窓部外側に5条のヘラ筋沈線、上から2条と3条の間及び3条と5条の間に刻文を配す。			
42	"	"	21.3 (8.1) — —	窓状を有する口縁部の上下に刻目を配す。窓部外側に7条のヘラ筋沈線を有し、その下に双線による直線文を2列、さらにその下にヘラ筋沈線を2条有す。	口縁部横方向の強いナゲ調整。		
43	"	"	16.0 (13.5) — —	口縁部は窓部から滑らかに外反、口縁部は凹面をなし、下端に刻目を有す。上端部に2条のA突起を有す。		窓部外側に擦痕あり。	
44	"	"	28.4 (4.7) — —	溝手式土器。口縁部下端に刻目、口縁部外側にA突起。窓部外側にり窓部突起3条よりなる上弦の重腹文を有す。	口縁部の刻目は右方角からハケ状原体によって施されている。 内面ナゲ調整。		
45	"	"	17.4 (8.4) — —	滑らかに外反する口縁部を有し、口縁部は外傾する面をなす。窓部に9条のヘラ筋沈線を施す。その上に2条の穴突Aを貼付している。	穴突A貼付によって、ヘラ筋沈線2条は見えなくなっている。 内外面ハケ調整。	窓部の筋土は窓部と同じ。	
46	"	"	11.4 (9.0) — —	滑らかに外反する口縁部。口縁部は凹面をなし、窓部内側に15条のヘラ筋沈線と4条のA突起。			
47	"	"	14.4 (7.2) — —	口縁部は滑らかに外反。口縁部外側に粘土帯を貼付。口縁部内側に2条のA突起、窓部突起部に2~3条のヘラ筋沈線。	外面横方向のハケ調整。 内面横方向のハケ調整。	内面の突起は一部つながっている。	
48	"	"	22.8 (9.2) — —	口縁部は大きく外反。窓部に3条の粘土突起A。突起部に屈曲痕文を施す。筋土が美しい。 口縁部内側には口縁部底面に屈曲痕文を施す。	口縁部は横方向の強いナゲ調整によって凹状をなす。内外面ハケ調整。	出村式土器の典型。	
49	"	"	21.6 (10.1) — —	表面的に立ちあがった窓部から滑らかに外反する口縁部。窓部外側に3条1段の屈曲直線文を4条の間にA突起。口縁部は筋状をなし、上下に刻目。	口縁部は横方向のナゲ調整により上にやや肥厚している。 在施文部に爪による压痕を不規則に施す。	大溪式土器一様の筋土とは異なり、乳白色を呈す。	
50	"	"	22.2 (9.0) — —	滑らかに外反する口縁部。窓部外側に3条1段の屈曲直線文を4条の間にA突起。口縁部は筋状をなし、上下に刻目。	口縁部は横方向の強いナゲ調整により同形状をなす。内面に2条のA突起を貼付し、その上からハケ状原体により押庄を加えている。	突起と窓部の筋土とは全く異なる。	
51	"	"	28.1 (6.6) — —	窓部から滑らかに外反する口縁部。窓部外側に屈曲直線文を施す。その下にA突起。口縁部の上下に刻目。	口縁部に断続三角形の粘土帯を貼付し、厚い口縁部をつくる。		
52	"	"	25.2 (4.7) — —	滑らかに外反する口縁部。口縁部は粘土帯を貼付。口縁部下端に屈曲刻目。	口縁部は横方向のナゲ調整により凹状をなす。内面横方向、外表面横方向のハケ調整。		
53	"	"	27.0 (11.8) — —	滑らかに外反する口縁部。口縁部は凹面をなす。口縁部外側にA突起5条を有す。その間に屈曲直線文。	文様部と口縁部は横方向のハケ調整。口縁部下は横方向のナゲ調整によってハケは消えている。中期土器には珍しく、粘土等接合部がみられる。	突起と窓部の筋土が異なる。	

辨別番号	道橋番号	基面	法量 (cm)	口縫 筋面 傾斜 傾度	形態・文様	手 法	備 考
54	S R 2	垂	17.8 (4.0) — —	口唇部は面をなし、ハケ状筋体による割目を有す。口縫内面にハケ状筋体による圧痕、その上に細いヘア状疣状。その外側に筋筋状文。	口縫部に粘土带を接続することによって、外反する口縫部をつくっている。		
55	"	"	15.1 (6.1) — —	粘付口縫。口唇部はハケ状筋体による割目。口縫部内面も同筋体による割目を有し、その上を3條の沈線がある。			
56	"	"	15.4 (7.0) — —	頬部から脣から外反する口縫部で2cm程の粘土带を粘付。口唇部は面をなし、網格子文を配す。			
57	"	"	16.2 (6.0) — —	やや外反状態に立ち上がる頬部から口縫部は強く外反。口唇部上下にハケ状筋体による圧痕。頬部に横筋状文。	口縫外面は幅2cmの粘土带粘付。口縫部横方向のナダ調整により、やや凹状を呈す。		
58	"	"	24.4 (7.9) — —	口縫部外面に粘土带を粘付して肥厚させる。口唇部がやや下垂。	粘付粘土带の上に脂頭疣痕が噴出。外反ハケ調整。		
59	"	"	15.6 (3.8) — —	直立気味の頬部は粘土带を接合し、外反した口縫部をつくる。口縫部は帆状をなし。若干下垂気味。	口縫部横方向の強いナダ調整。外反ハケ調整後に粘土帶粘付。		
60	"	"	21.4 (9.9) — —	口縫部は大きく外反し、外面に粘土带を粘付。頬部に円形浮文を粘付し、その上を刺突。その下には筋筋状文。	粘土帶粘付の際のヒゲ状の疣痕が残る。口縫部は横方向の強いナダ調整により凹状を呈す。		
61	"	"	18.8 (6.2) — —	強く外反する口縫部を有し、口唇部は面をなし。	口縫部外面に幅2cmの扁平な粘土带を粘付する。		
62	"	"	13.9 (7.8) — —	脣から外反する口縫部を有し、口縫部外面に粘土带を粘付。口唇部は筋筋状を呈し、上面に割目を施す。	口縫部に横方向の強いナダ調整。口縫部内外面ナダ調整。頬部外面横方向のハケ調整。		
63	"	"	17.6 (5.7) — —	脣から外反する口縫。口唇部は帆状をなし、わずかに肥厚。	幅3cmの粘土带を頬部に粘付して口縫を形成。		
64	"	"	13.3 (5.7) — —	脣状に外反する口縫部を有し、外面に粘土带粘付。口縫部は外反する面をなし、下方にやや肥厚する。	粘付部には脂頭疣痕が新しい。	外面が隠されている。	
65	"	"	13.4 (3.9) — —	口縫部外面に扁平な粘土带を粘付。口縫部は水平に近く折り曲げている。口唇部は丸くおさめる。	外反横方向のハケ調整。		
66	"	"	18.0 (5.5) — —	脣から外反する口縫。外面幅2cmの粘付口縫。口唇部は面をなし。			
67	"	"	17.3 (6.3) — —	粘土帶粘付口縫。口縫部は帆状をなし、わずかに下垂する。	口縫部横方向の強いナダ調整。		
68	"	"	20.0 (6.4) — —	口縫部は大きく外反し、外面に幅1cmの粘土带を粘付。口唇部は帆状をなし。	"		

標図番号	造綱番号	器種	法量 (cm)	口縫部高さ 測定位置	形態・文様	手 法	備 考
69	SR 2	壺	21.1 (12.5) — —	長い粗部から滑らかに外反する口縫部を有し、口縫部外端に幅2.5cmの粘土帶貼付。	内外面共に調整觀察不能。		
70	"	"	17.8 (13.0) — —	滑らかに外反する口縫部を有し、口縫部外端に粘土帶を貼付。口縫部は凹状をなす。	外面にヘラ磨きを認める。 口縫部内面横方向のハケ観察。 上縫部内面に指頭圧痕観。		
71	"	"	17.0 (5.0) — —	薄手で大きく外反する口縫部をもつ。瓶部は丸くおさま。下縫部は削り有す。	内外面横方向のナギ調整。	薄手式土器。	
72	"	"	28.6 (2.7) — —	強く大きく外反する口縫部。口縫部はなし。下縫に削目。口縫部近くに穴あきB、瓶部近くに穴あきDを貼付。		"	
73	"	"	17.8 (3.8) — —	口縫部は強く外反。瓶部は解い、面をなす。口縫部の下縫に削目。口縫部外端に穴あきD。その上下に側溝有。		"	
74	"	"	14.8 (3.7) — —	口縫部は強く外反、外表面を厚くつくり、端縫下縫に削目。削目直下に穴あきBを貼付。		"	
75	"	"	15.6 (3.0) — —	"		"	
76	"	"	13.6 (7.9) — —	口縫部はわずかに外反して立ち上がる。 口縫部は外傾する面をなす。	口縫部上端外面には扁平な粘土帶を貼付。指頭圧痕が残る。		
77	"	"	14.2 (7.4) — —	球形に若い頭部をもつものと考えられ。口縫部は頭部から滑らかに外反。 上縫部にC字突起。	口縫部外面に幅1cm余りの粘土帶を貼付。		
78	"	"	17.3 (4.6) — —	口縫部は滑らかに外反。 口縫部は丸くなし。下縫に削目状の削目。	口縫部外面に幅1.5cmの扁平な粘土帶を貼付。		
79	"	"	19.0 (7.6) — —	滑らかに外反する口縫部。幅広い口縫部は削り状をなし。ハケ状突起で前及び斜め方向の正直を施す。	口縫部外面に幅2cmの粘土帶を貼付。端縫を指頭で強くおさえ、外方につまみ出す。		
80	"	"	15.6 (10.9) — —	直線的に外方に立ち上がる頭部に外反する口縫部がつく。口縫部は面をなす。	口縫部に粘土帶貼付。 端縫上胸縫以下左から右へのヘラ削り。		
81	"	"	9.6 (4.0) — —	外反性味に立ち上がる頭部から口縫部は丸く外方に屈曲。 口縫部に双孔。頭部下縫に削突。	口縫部外面に扁平な粘土帶貼付。 穿孔は焼成前。		
82	"	"	(3.8) 9.4	直線的に外方にのびる口縫部。 頭部は丸く仕上げる。			
83	"	"	23.0 (5.4) — —	口縫部は滑らかに外反。口縫部は凹状を呈し、下縫に削目を配す。	口縫部外面に粘土帶貼付。 口縫部は横方向の強いナギ調整。		

種別番号	造機番号	基準	法量 (cm) 器高 器幅 器深	形態・文様	手 法	備 考
84	SR 2	基	12.7 (5.5) — —	外反して立ち上がる口縁部。端部は肥厚し、口縁部に2条の凹縫文。端部内側が段状をなす。	口縁部外面に粘土等貼付。口縁部内外面ナデ調整。	口縁部に窓孔を有す。
85	"	"	17.6 (5.0) — —	僅く外方にカーブする口縁部。口縁部は厚く、3条の凹縫文。上下端はわずかに拡張。		
86	"	"	27.8 (9.8) — —	大型盤の口縁部。口縁部外面は肥厚し、口縁部には2条の凹縫文。		
87	"	"	33.4 (12.0) — —	口縁部が僅く外反。口縁部に平裁竹管による凹縫文を2列配す。(ほぼ、横方向なるも、5~7個毎に逆方向)。		
88	"	"	14.9 (5.8) — —	外方に僅くカーブする口縁部。口縁部内側、口縁部外面にハケ状工藝によるやや長目約の割目。	口縁部は横方向の強いナデ調整。	
89	"	"	19.8 (6.9) — —	脇らかに外反する口縁部。口縁部は肥厚なし、下端にヒラ状原体による割目。端部に糸点文。	外表面方向のハケ調整の上を部分的に横方向のヘラ削き。	
90	"	"	16.6 (5.8) — —	脇から口縁部へ脇らかに外反。端部は肥厚なし、ヒラ状原体による割目。端部に糸点文。	口縁部外面横方向のナデ調整。	
91	"	"	13.9 (7.0) — —	球形に近い削面から外反する口縁部。口縁部は外輪する面をなし、下端にヒラ状原体による割目。	口縁部横方向のナデ調整。 端部外面横方向、内表面横方向のハケ調整。	
92	"	"	11.2 (9.3) — —	削面中央に最大径。口縁部は端部から脇らかに外反。口縁部は凹状をなす。	口縁部横方向の強いナデ調整。 口縁部外面横方向のナデ調整。	
93	"	"	10.6 (6.8) — —	脇らかに強く外反する口縁部。口縁部は面をなす。全体的に歪曲が無い。	上唇部内面左から右へのヘラ削り。	
94	"	"	12.4 (5.8) — —	直立気味に立ち上がる端部から強く外反する口縁部。口縁部は上下にわずかに拡張され、面をなす。		
95	"	"	18.0 (6.5) — —	脇らかに外反する口縁部を有し、口縁部は面をなす。		
96	"	"	13.2 (5.3) — —	脇らかに外反する口縁部を有し、端部は凹状をなす。	口縁部横方向の強いナデ調整。	
97	"	"	23.2 (6.2) — —	脇らかに外反する口縁部。口縁部は外輪する面をなす。	口縁部外面は横方向のハケ調整の上を横方向に強くナデしている。	
98	"	"	24.0 (10.0) — —	大きく外反する口縁部を有し、沿線は薄い。口縁部は凹状をなす。		大型盤。

擇図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 底径	形態・文様	手法	備考
99	S R 2	壺	9.6 (4.6) — —	口縁部は強く外反。 口唇部は直状をなす。	口唇部横方向の強いナデ調整。		
100	"	"	15.6 (6.2) — —	腹部が激しいが、外傾する口唇部に2条の凹縞をわずかに認める。			
101	"	"	15.2 (7.3) — —	口唇部は下方に拡張され、沈黙化した凹縞文が2条入る。			
102	"	"	— (19.6) 5.9	上開部に微細波状文2帯。 底体は5条で右廻り、不連続点有り。			長開の者。
103	"	"	— (1.8) 7.7	やや上げ底気味の底部。 薄手。			
104	"	"	— (3.6) 8.0				薄手式土器。
105	"	"	— (5.3) 7.8				
106	"	"	— (4.6) 4.4	やや上げ底気味の底部。			
107	"	"	— (4.5) 5.2	"			脛部の一部に黒斑。
108	"	"	— (5.0) 8.5	"	外側ハケ剥離。 複口縁を観察できる。		下開部に黒斑。
109	"	"	— (3.8) 8.8	上げ底気味の底部。			
110	"	"	— (4.1) 7.0	わずかに外に張り出した底部。			脣部内面が保 けている。
111	"	"	— (4.1) 9.5	厚い底部。	複口縁の一部が觀察できる。		
112	"	"	— (5.4) 13.4	"	接合部で剥離している。		
113	"	"	— (6.8) 9.2	上げ底状の底部。			内面に黒斑。

検査番号	通査番号	器種	法量 (cm) 器高 網底 底径	形態・文様	手 法	備考
114	SR 2	壺	(6.3) 7.2		内外面とも擦耗。	
115	"	"	(6.1) 4.0			底部内外面に 黒斑。
116	"	"	(5.2) 11.6			
117	"	"	(9.3) 8.0		外底ハゲ調査の上をナゲ調査。 底部と網底との接合部を明瞭に観察できる。	
118	"	"	(9.4) 9.0		内外面とも調整難度不全。	
119	"	"	(6.0) 6.8	上げ底状の底部。		
120	"	壺	(7.5) 7.6	上げ底気味の底部。	内外面ナゲ調査。	
121	"	壺	(7.6) 8.8		内外面沿底の黒れがひどく、調査 難度不能。	
122	"	"	(7.1) 6.8	上げ底気味の底部。		
123	"	"	(6.9) 8.8	上げ底状の底部。		外底の一帯及 び下部に大 きな黒斑。
124	"	"	(11.1) 8.8		内面擦耗によるナゲ調査が著しい。	剝離下端に黒 斑。
125	"	"	(7.2) 5.7		外底黒斑が完れており、調査難度 不能。	
126	"	"	(8.5) 8.4	上げ底状の底部。	内外面とも器底磨耗。	
127	"	"	(6.7) 9.8		内外面剥離が著しい。	
128	"	"	(6.1) 8.2			剝離下端に黒 斑。

検査番号	遺構番号	器種	法線 (cm)	口縁 器底 底盤 底盤	形態・文様	手 法	備考
129	SR 2	壺	(4.8) 8.0				底部外面に黒斑。
130	"	"	(11.1) 7.8				下脚部と底部の一部に黒斑。
131	"	"	(5.9) 6.5	上げ底状の底部。	内外面とも器表擦耗。		
132	"	"	(9.3) 5.8		外面わずかにハケ剥離が認められる。	脚部外面は焼けている。	
133	"	"	(13.1) 7.0	上げ底状の底部。	内外面調整観察不能。		
134	"	"	(5.9) 8.8				
135	"	"	(7.3) 9.6				底盤内面に黒斑。
136	"	"	(13.1) 9.2				下脚部に黒斑。
137	"	"	(6.8) 10.0				
138	"	"	(6.1) 13.8		内外面擦耗。		
139	"	壺	14.5 (10.1) — —	滑らかに外反する口縁部。 口縁部は外傾する面をなし。下端 に部分的にわずかに肥厚。 上脚部に突起B 2 個。	口縁部外面及び内面のハケ調査。 脚部外脚部及び内脚部のハケ調査。 口縫下をハケ剥離後横に強く ナメる。		
140	"	"	18.1 (12.7) — —	口縁部は外傾する面をなし。下端 が部分的にわずかに肥厚。 上脚部に突起C。	口縁部の肥厚はつまみ出しによる ものか。 脚部内面板状工具による痕跡あり。 外底ハケ調査。		
141	"	"	26.1 (7.4) — —	口縁部やかに外反。壺部に刻印。	壺口縁を観察できる。	縄文系の瓶長 上に位置付け られる新段階 の瓶。	
142	"	"	13.1 (4.5) — —		口縁部つまみ上げ。 内面底部底下よりへラ削りあり。		
143	"	"	14.8 (4.5) — —	底ね上がり口縁。	口縁部をつまみ上げて、横方向 に強くナメる。内面底部底下より 左から右へのへラ削り。		

特許番号	造模番号	器種	法長 (cm)	口唇 基部 厚径 底径	形態・文様	手 法	備考
144	SR 2	壺	15.3 (4.7) —	口縁部「く」の字状に外反。 上下に拡張された幅広い口唇部に 2条の回線文。	唇部内面直下より右から左へのヘ ラ削りあり。		
145	—	—	14.0 (4.1) —	口縁部は「く」の字状に屈曲。 口唇部はやや上下に肥厚し、頭状 を呈す。口縁部内面が段状を呈す。	口唇部に横方向のナデ調整。 唇部内面底面下に下から上へのヘラ 削りあり。		
146	—	—	12.9 (7.2) —	口縁部は一旦水平に屈曲し、上方に 立ち上がる。内面唇基部は後をな す。口唇部1条の回線文。	口縁部内外沿横方向のナデ調整。 唇部外面ハケ需要。		
147	—	—	17.3 (7.6) —	口縁部は内面に後をなして水平に 近く屈曲し、跡れ上がり口縁を呈 す。 口唇部に3条の回線文。	上唇部内面以下右から左へのヘ ラ削り。		唇部中位に最 大径を有する ものか。
148	—	—	— (3.2) 6.2	上げ底状の底部。 基部が著しく高い。			唇部内面が裸 けている。
149	—	—	— (3.1) 5.5				"
150	—	—	— (4.0) 6.2				"
151	—	—	— (5.8) 6.5		内面下から上方へのヘラ削り。 底部内面に脂胡麻痕跡。		唇部外面火を 受けて変色。 内面裸けてい る。
152	—	—	— (6.2) 6.0				
153	—	—	— (6.1) 5.0	上げ底気球の底部。	外面ヘラ磨き。 内面唇部による強いナデ調整。		
154	—	—	— (6.6) 7.8	上げ底状の底部。			
155	—	高杯	— (8.8) 13.8	底部に鋭利な工具による挫線6条。 その上に横方向の挫線。 唇端部はやや回状。	唇部に横方向の強いナデ調整。 内面は先端がひどい(ヘラ挫りが あったものか)。		横方向の挫線 は3条1単位 か。
156	—	—	— (8.8) 7.2	唇部に7条のヘラ挫挫痕。	内面にしぶり口あり。		
157	—	—	— (3.0) 10.6	脇輪部は頭状をなす。	内面右方向へのヘラ削り。		
158	—	—	— (3.7) 12.0	脇部に三角形の透かしを有す。	透かしは外面から入れてある。 脇輪部外壁をつまみ、横方向のナ デ調整。		

標図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 周径 底径	形態・文様	手 法	備 考
159	SR 2	高杯		(5.5) 5.4	器壁が厚い。 接合部で火熱している。		
160	"	"	22.3 (3.0)	—	外面に 5 条の鋸凹線。 口唇部は面をなす。		
161	"	"	19.4 (3.1)	—	杯部立ち上がりは棱をつくらず滑らかにカーブする。 底部は外傾する面をなす。	口縁部横方向のナデ調査。 内面ハケ調査を横方向に施した後、 中心部に向かって調査。	
162	"	"	26.0 (3.2)	—	口縁部は内傾に立ち上がり、肩部 は面をなす。外面に 2 条の粗線文 を認める。		
163	"	鉢		(7.0) 4.1 7.7	脚付鉢。 外方にしっかりとふんばった脚を有す。		
164	"	"		(7.4) 7.0	脚付鉢。 脚端部は外反気味に開く。		
165	"	"		(4.8) 4.2	上げ底状の底部。		下側部から底 部外面にかけて 黒斑。
166	"	"		(5.2) 5.0	指でつまみ出したような瘤状の底 部。		
167	"	"		(5.5) 5.8	舌付鉢。		
168	"	"		(6.3) 4.3	底部は断面内形状で、上げ底状を 呈す。	底部は指端によって外方につまみ 出している。	製埴土器の可 能性大。
169	"	"		(6.7) 5.3	瘤状を呈する底部。		下側部から底 部外面にかけて 黒斑。
170	"	"		(8.8) 5.5	断面凸形を呈する厚い底部。	底部外側にハケ調査が残る。	
171	"	小型土器		1.8 3.0 — 1.2	ミニチュア。 手捏上器。		
172	"	"		2.6 3.3 — 1.4	"		
173	"	"		(2.5) 2.6	小型土器の底形。		

補図番号	遺構番号	器種	法量 （cm） 直径 高さ 銅鑄 成形	形態・文様	手法	備考
174	SR 2	鉗頭斧	直径 5.2 厚さ 1.1 重量(g) 34.0	土器軸用鉗頭斧。	削離している部分が粘土等接合部 と考えられる。	

第4表 遺構出土石器観察表

補図番号	遺構番号	器種	計測値 （cm. g） 最大長 最大幅 最大厚 重	材質	特徴	備考
175	SR 2	石斧	(11.2) 5.9 (2.8) 390.0	緑色片岩	大型始刃石斧の下半部欠損品である。 既存面はよく研磨されている。	
176	〃	〃	(14.5) 6.3 4.2 755.0	〃	大型始刃石斧であるが、基盤部が欠損して いる。後に叩石に転用されたものと考えら れ。刃部先端も痕されている。	
177	〃	〃	(15.7) 7.5 5.2 1115.0	〃	大型始刃石斧の未製品。整形段階で刃部が 欠損したものと考えられる。	
178	〃	〃	(10.9) 6.1 4.0 422.0	〃	大型始刃石斧の下半部欠損品である。 表面はよく研磨されており、また、短角縫 窓の一帯にも敲打痕が残る。	
179	〃	〃	6.4 1.7 9.0 15.7	〃	小剣の局部磨製石斧である。下半が縮小し ているのは、使用によって欠損した後も使 用したあとと考えられる。	
180	〃	〃	8.0 1.2 2.2 35.0	〃	柱状片刃石斧の未製品と考えられ。側縫部 を研磨することによって、刃部を作り出そ うとしている。	
181	〃	〃	5.4 1.5 0.7 7.6	結晶岩（真岩）	柱状片刃石斧の側辺部破片。刃部の形状か らして、よく使い込まれていたものと考え られる。	
182	〃	〃	(9.7) 5.3 2.2 192.5	砂岩	上半部が欠損しており、表面の風化が進し て、短角縫窓、長側縫窓とともに敲打痕が残 る。	解説。
183	〃	〃	(13.2) 6.8 3.9 520.0	緑色片岩	大型始刃石斧の刃部欠損品である。表面の 研磨は全面には及んでおらず、製作段階で の欠損の可能性がある。	
184	〃	〃	(13.2) 5.0 2.6 291.0	〃	磨製石斧の刃部欠損品である。全面に研磨 が施されているが、側縫部に敲打痕が残っ ており、欠損後叩石に転用された可能性も ある。	
185	〃	〃	6.2 1.8 0.7 12.0	〃	自然石そのまま利用した両刃の局部磨製 石斧である。	
186	〃	〃	6.2 2.2 1.5 32.0	真岩	両刃の局部磨製石斧である。 裏面に横方向の擦痕が残る。	

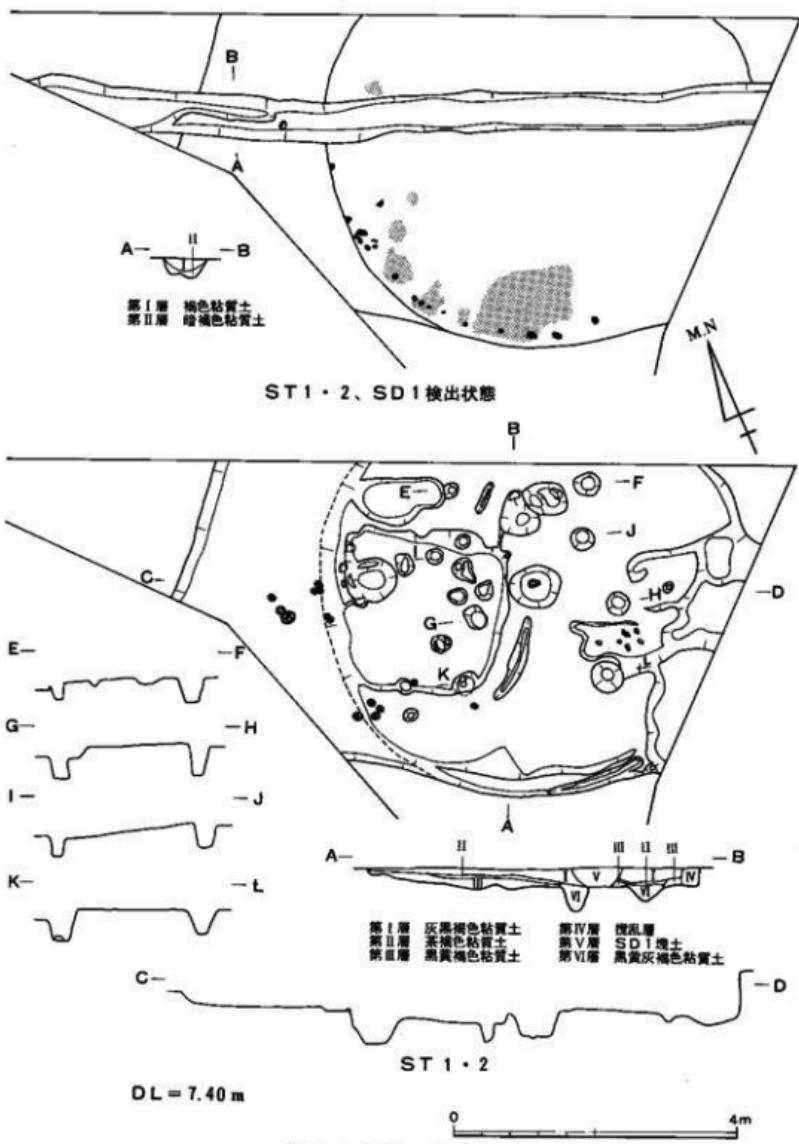
測定番号	遺構番号	基 種	計測値 最大幅 最大厚 (cm, g)	材 質	特 徴	備 考
187	S K 2	石 斧	(6.6) 4.6 2.4 128.0	頁 岩	基盤部を欠損しているが、全面を研磨によつて整えている。 刃部に刃こぼれが見られる。	
188	S R 2	"	(5.1) 3.9 7.5 45.0	砂 岩	扁平片刃石斧の刃部欠損品である。 欠損部も新しく刃部を作り出して使用している。	
189	"	"	7.0 4.0 1.5 79.0	"	よく使い込まれた扁平片刃石斧であり、刃部の一方の磨耗が著しい。 長削縫部と短削縫部とに換りが作られていく。	
190	"	"	(5.4) 3.3 1.0 36.0	砾片岩	基部を損傷した扁平片刃石斧の未製品と考えられる。 刃部にもシャープさがない。	
191	"	"	8.1 3.3 1.5 65.0	泥 岩	よく使い込まれており、刃部から基部にかけて刃部に削られているが、扁平片刃石斧の類であろう。	
192	S T 1	叩 石	(9.8) 5.4 4.7 322.0	砂 岩	棒状の叩石であるが、上手部を欠損している。 短削縫部に荒い敲打痕が残る。	床面出土。
193	"	"	(9.3) 4.3 (2.4) 168.0	頁 岩	棒状の叩石で基端部が欠損している。短削縫部のみではなく、長削縫部の一部にも敲打痕が見られる。	
194	S T 2	"	10.6 2.7 1.5 89.0	"	細い棒状の叩石である。 短削縫部に敲打痕を残す。	
195	"	"	7.7 3.9 2.1 97.5	砂 岩	河原石を利用したもので、両短削縫部に敲打痕が見られる。	
196	S R 2	"	12.0 6.4 3.7 436.0	泥 岩	両短削縫部に敲打痕が見られ、表面中央部と右端部に敲打痕を残す。表層河原石とも研磨されており、摩耗も確認できる。	
197	"	"	11.2 49.5 2.7 362.5	砂 岩	棒状の叩石で、両短削縫部に敲打痕が残る。	
198	"	"	12.5 6.5 2.7 322.5	"	河原石をそのまま利用したもので、両短削縫部に敲打痕が残る。	
199	"	"	15.5 4.2 1.5 105.0	粘板岩(頁岩)	短削縫部及び長削縫部の片面に敲打痕が残る。 但し、正面は研磨されており、石斧頭の未製品を転用したものと考えられる。	
200	S T 1	"	9.3 8.4 3.4 395.0	砂 岩	河原石を利用したもので、周縁部に若干の敲打痕を残す。	
201	"	"	10.9 8.6 2.6 375.0	"	河原石を利用したもので、正面中央部と長削縫部の一部に敲打痕が見られる。	

擇因番号	造構番号	器 種	計測値 最大長 最大幅 (cm. g) 重 量	材 質	特 徴	備 考
202	S T 1	叩 石	12.4 8.6 2.9 472.0	砂 石	河原石を利用したもので、表裏両面の中央部に敲打痕が見られる。 周縁部にも2ヶ所に敲打痕を残す。	
203	"	"	10.3 8.3 3.5 428.0	"	河原石を利用したもので、表裏両面の中央部及び周縁部に敲打痕を残す。	
204	"	"	12.0 9.9 4.3 740.0	"	河原石をそのまま利用したものである。周縁部に若干の敲打痕を残すが、あまり使い込まれてはいない。	
205	"	"	7.0 6.5 2.2 155.0	"	円形の河原石を利用したもので、周縁部に若干の擦痕を残すのみである。	
206	"	"	11.0 8.9 3.0 433.0	"	河原石をそのまま利用しており、周縁部に若干の擦痕が確認できる。	
207	"	"	9.8 8.0 2.9 360.0	"	河原石をそのまま利用したもので、表裏両面及び周縁部に敲打痕を残す。	
208	"	"	9.1 8.6 1.8 320.0	"	河原石をそのまま利用したもので、表裏両面の中央部に敲打痕が見られる。 特に反面の方は、敲打による凹みが激しい。	
209	S T 2	"	9.0 7.5 3.0 323.0	"	表裏両面中央部と周縁部に浅い敲打痕を残すのみである。	
210	S T 1 P 6	"	(8.5) 8.2 3.2 335.0	"	河原石を利用したもので、中央部の敲打痕を残す。部分から半分を欠損している。全体の形状は初期形態を保するものと考へられる。 周縁部にも若干の敲打痕が見られる。	
211	S X 1	"	9.7 7.3 1.8 292.0	"	河原石をそのまま利用したもので、主面中央に敲打痕が見られる。	
212	S R 2	"	6.5 6.5 3.7 217.5	"	円形の河原石をそのまま利用したもので、中央部に若干敲打痕が残るが、磨石の範囲に入れるべきものかもしれない。	
213	"	"	10.5 7.8 2.6 315.0	"	河原石をそのまま利用したもので、主面中央部と周縁部に敲打痕を有す。	
214	"	"	9.5 9.1 4.0 490.0	"	河原石をそのまま利用したもので、中央部に敲打痕がある。	
215	"	"	9.9 7.9 2.9 355.0	"	よく使い込まれており、表裏両面の凹みも激しく、また、長時間の敲打でも最悪である。	
216	"	"	11.9 9.1 4.0 660.0	"	表面は中央部が凹む一般的な形状を呈しているが、裏面は中央部の擦痕が微弱で、上方に丸い凹みがあり、下方にも横に長い敲打痕が残っている。	

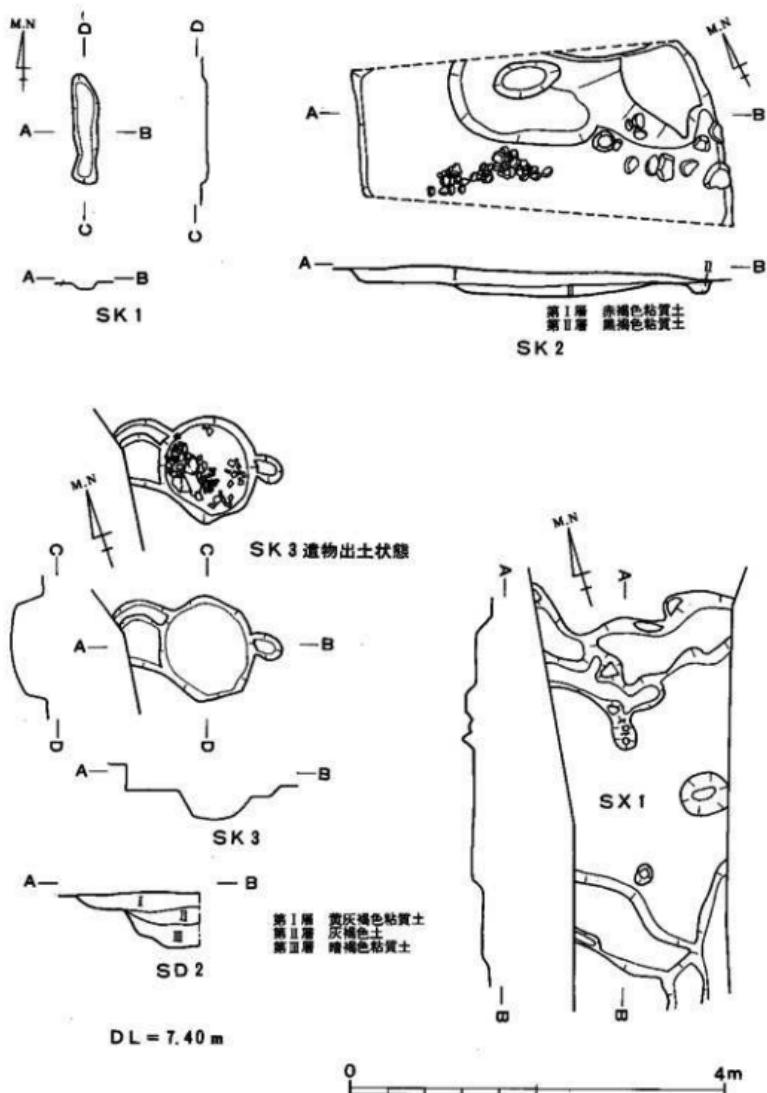
標図番号	遺跡番号	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 (cm. g)	材質	特徴	備考
217	S R 2	叩石	10.9 12.1 5.1 925.0	砂岩	表裏両面の中央部が敲打により凹んでいる。 周縁部にも若干の敲打痕が見られる。	
218	"	"	24.7 (15.0) 5.0 2500.0	"	大型の叩石であり、中央部の凹状の使用部を中心に平均してある。 台石として利用されたものと考えられ。正面の一帯に研磨面を有す。	
219	"	"	8.2 6.7 1.8 140.0	"	自然面と剥離面とからなる。 周縁部に敲打痕を有す。	
220	S K 3	"	6.9 4.4 1.2 41.0	"	河原石を利用したもので、自然面と剥離面とからなる。 あまり使い込まれてはいない。	
221	S T 2	"	9.1 6.3 1.8 134.0	"	自然面と剥離面とからなり、形状は叩石のようであるが、片側の長軸端部を研磨した形跡がある。	
222	"	"	8.5 5.4 1.3 75.5	"	自然面と剥離面とからなる。 使用歴は少ない。	
223	S X 1	"	10.8 6.4 1.6 152.0	"	自然面と剥離面とからなる。剥離面側の中央部にも敲打痕が見られる。 短軸端部の一方にも敲打痕が確認できる。	
224	S K 3	"	8.8 5.2 1.5 75.0	"	河原石を利用したもので、自然面と剥離面とからなる。長軸端部を中心にして若干の敲打痕が見られる。	
225	"	"	9.5 6.5 1.6 110.0	"	河原石を利用したもので、自然面と剥離面とからなる。長軸端部の両端に敲打痕がみられる。	
226	S R 2	"	6.4 7.1 1.8 120.0	"	自然面と剥離面とからなる。弧状の周縁部に敲打痕が残る。	
227	"	"	14.2 8.1 2.2 325.0	"	河原石を打削することにより製作している。 周縁部の敲打痕は強烈である。	
228	"	"	8.4 6.2 1.8 100.0	"	自然面と剥離面とからなる。 柄縁部に敲打痕が残る。	
229	"	"	8.0 7.5 2.0 140.0	"	自然面と剥離面とからなる。よく使い込まれており、周縁部に敲打痕が著しい。	
230	"	"	9.1 4.6 1.1 45.0	"	自然面と剥離面とからなる。周縁部に浅い 敲打痕が残る。	
231	"	"	11.0 5.8 2.2 159.0	"	長軸端部に敲打痕が認められ、扁平叩石の 欠陥品と考えられる。	

標本番号	造構番号	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 (cm, g) 重量	材 質	特 徴	備 考
232	SR 2	叩 石	14.6 6.7 1.4 140.0	砂 岩	自然面と剥離面とからなる。反側縫部に敲打痕が残っており、扁平叩石の範疇に入るものと考えられる。	
233	"	"	7.3 4.9 1.2 51.0	"	自然面と剥離面とからなる。小型で周縁部の敲打痕が他の。	
234	"	"	10.1 8.6 1.5 162.5	"	河原石を利用したもので、自然面と剥離面とからなる。周縁部に敲打痕が残る。	
235	"	"	9.5 8.4 2.2 222.0	"	河原石を利用したもので、自然面と剥離面とからなる。周縁部に敲打痕が見られる。	
236	"	"	11.4 7.4 2.2 189.0	"	自然面と剥離面とからなる。周縁部に浅い敲打痕が残る。	
237	"	"	9.9 7.8 1.4 134.0	"	自然面と剥離面とからなる。周縁部に敲打痕が残る。	
238	ST 1 P 12	砥 石	17.5 12.1 7.5 2065.0	"	4面を使用している。そのうち2面は水平でシャープな面をもつが、他の2面は使用によって凹状になっている。	流紋岩かもしれない。
239	SK 3	"	4.6 2.6 1.9 32.0	流紋岩	4面を使用している。小型であるが研磨面は堅苦で、よく使い込まれている。	
240	SK 1	石包丁	(5.2) 4.0 0.8 25.0	真 岩	外側刃両刃である。全体の刃はどこを欠損しているが、1つの円孔の一部を確認できる。	磨製。
241	ST 1	"	— 1.3 93.0	"	外側刃両刃の形状を呈しているが、抉りの位置からして、元は直刃であった可能性もある。	"
242	"	"	5.0 9.5 8.6 65.0	"	打制によって整形した肉瘤に抉りを有する直刃片刃的な石包丁である。背部も直線的に仕上げられている。	"
243	SD 1	"	(7.0) 4.2 8.8 45.0	砂 岩	刃孔の直刃型の石包丁で、欠損品である。自然面と剥離面とからなるが、全面に研磨が施されている。	
244	SR 2	"	4.5 12.8 0.8 84.0	粘板岩(真岩)	刃端の片方が若干外側する直刃の石包丁で、刃部の一部を欠損している。刃孔を持つが、周面より穿孔している。背部の一部も研磨によって調整されている。	
245	"	"	(11.8) 4.7 0.9 75.4	綠色片岩	刃孔を有する磨製石包丁である。刃部は直刃型の片刃である。背部まで研磨されている。	
246	"	"	(12.0) 4.9 0.7 70.0	真 岩	双孔を持つ直刃型の石包丁である。刃孔の周辺に敲打痕が両面に見られる。刃部は直刃であるが、よく使い込まれており、刃こぼれが見られ、底部を欠損している。	

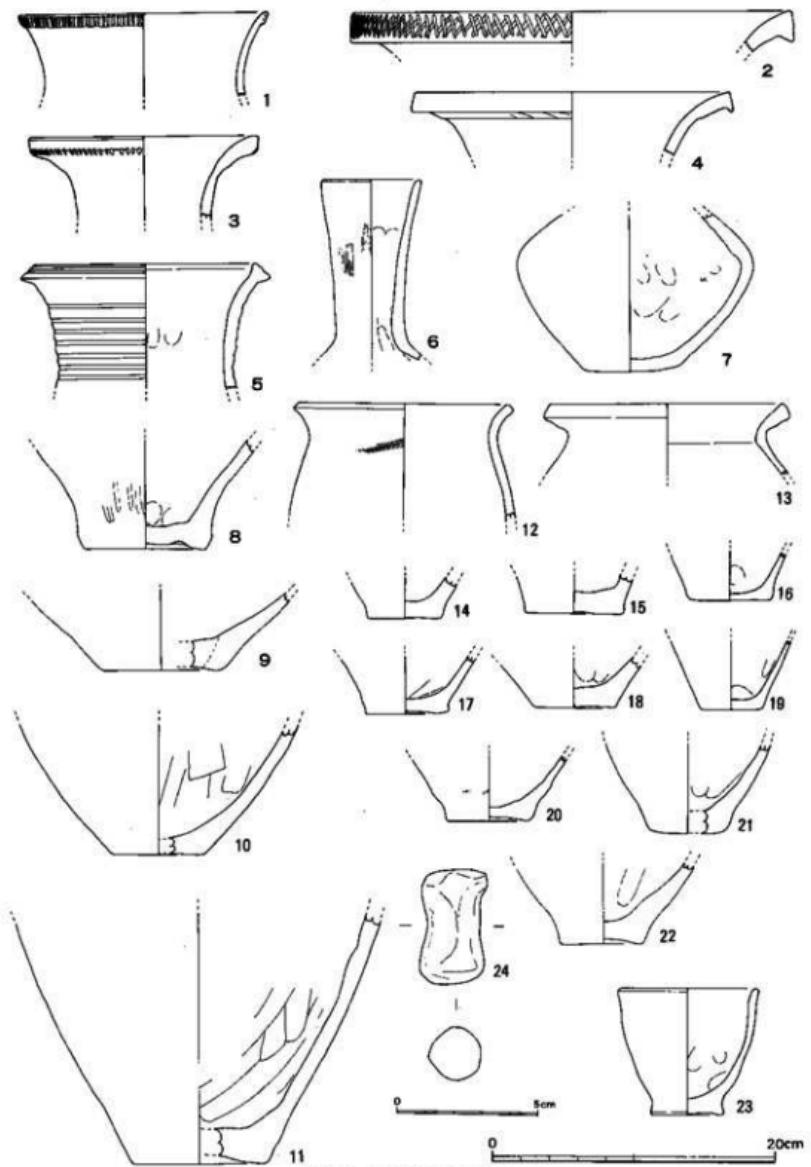
標図番号	遺構番号	器種	計測値 最大幅 最大厚 (cm, g) 重量	材質	特徴	備考
247	S R 2	石包丁	— 6.5 42.0	細粒砂岩	双孔を持つ石包丁で、両側から穿孔されている。刃部が欠損しているが、全面研磨されており、刃部は両刃で直刃型である。	
248	—	—	(4.7) 5.5 0.7 27.0	千枚岩	双孔の両刃石包丁の欠損品である。全面が研磨によって調整されている。背面が外側としており、刃部は直刃型のものと考えられる。	
249	—	—	(7.4) 5.0 1.3 55.0	粘岩	磨製石包丁の未製品である。穿孔の際の敲打によって欠損したものと思われる。	
250	S T 1 P 2	石鎌	2.5 1.8 0.4 1.7	サスカイト	扁平な刃基式打製石鎌である。基部刃部とも両面から押圧剝離によって調整されている。	
251	S T 1	—	2.0 2.0 0.4	—	平基式石鎌で、刃部・基部とも、両面を押圧剝離によって調整されている。	
252	—	—	3.1 2.3 0.4 2.5	—	平面形は三角形で扁平な平基式打製石鎌である。刃部・基部とも、両面から押圧剝離によって調整されている。	
253	—	—	2.8 1.7 0.3 1.5	—	刃基式の打製石鎌である。刃部・基部とも、両面から押圧剝離によって調整されている。	
254	S R 2	石劍	9.9 3.3 1.3 55.0	千枚岩	表面両面にしっかりした縞を有する鉄劍型石劍である。よく研磨されているが、基部頭部を若干欠損している。平面彫刻を呈するが、刃部は強烈的に曲取りがなされている。	
255	—	防禦車	直径 5.3 厚さ 0.6 重量(g)17.5	頁岩	石製防禦車の半成品である。全面よく研磨されており、縁部は棱をなして絶縁する。	



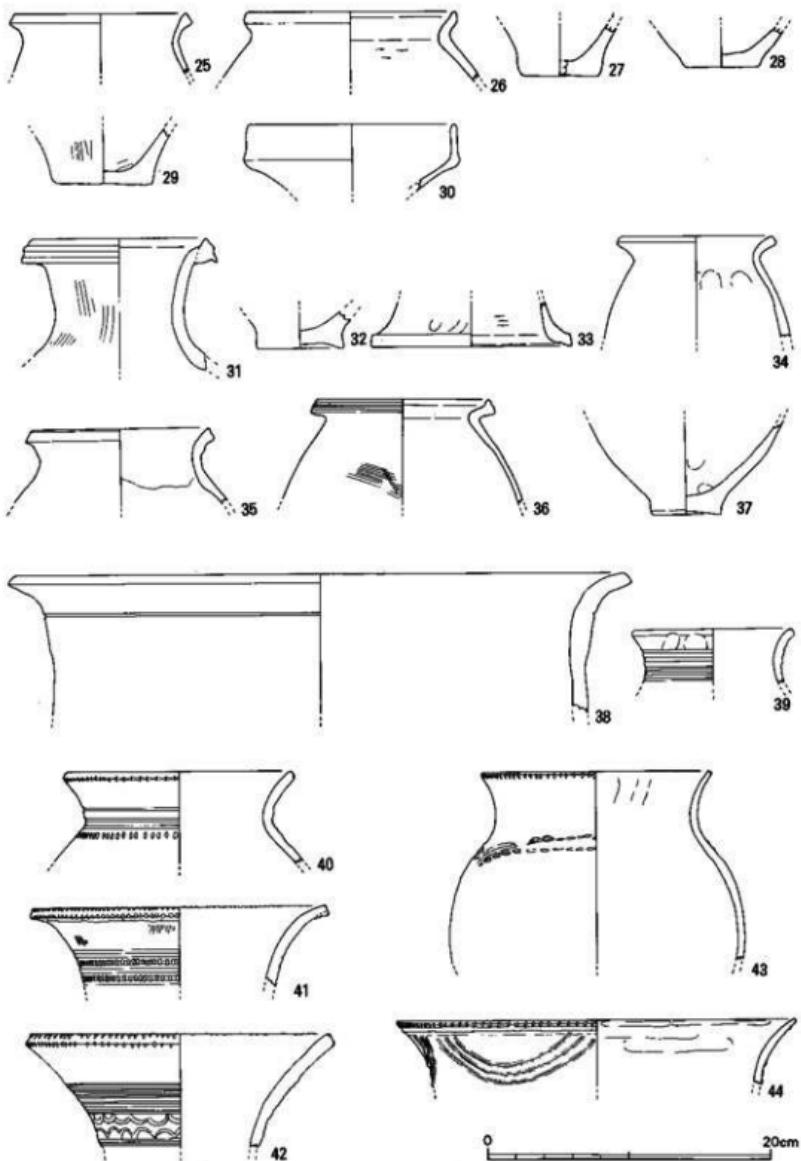
第4図 ST1・2, SD1



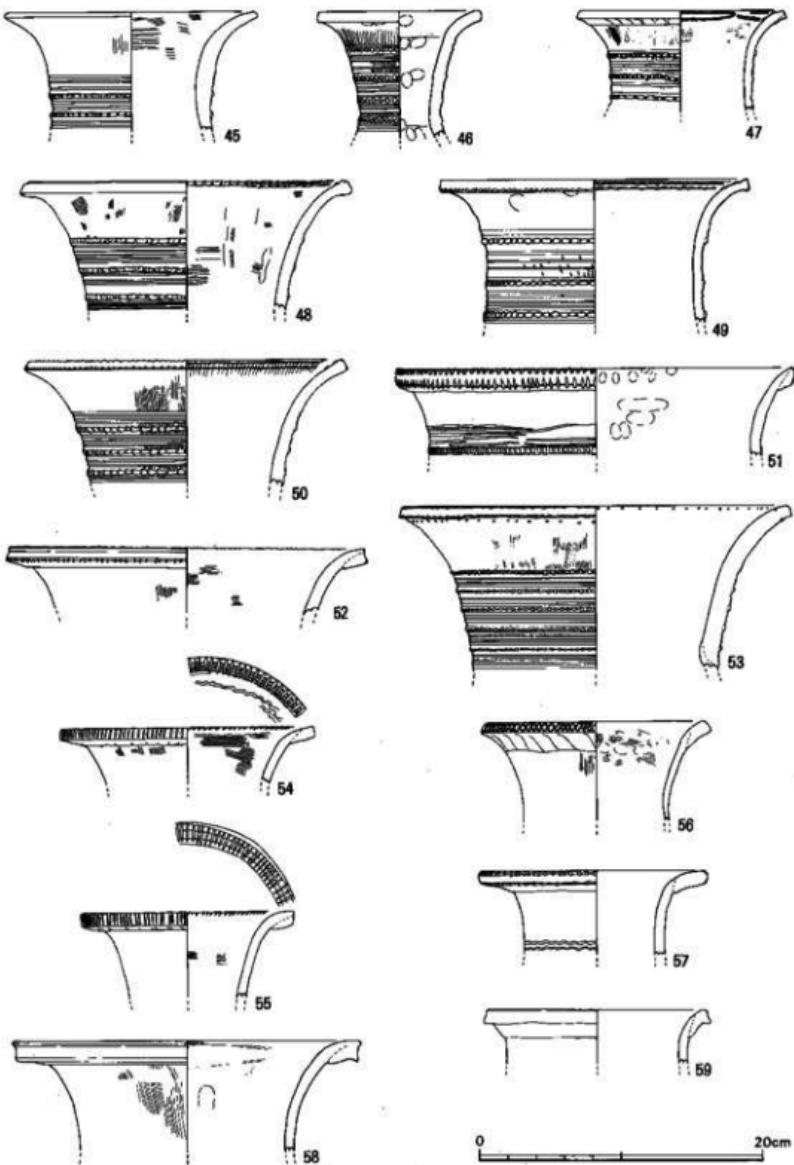
第5図 SK1~3、SD2、SX1



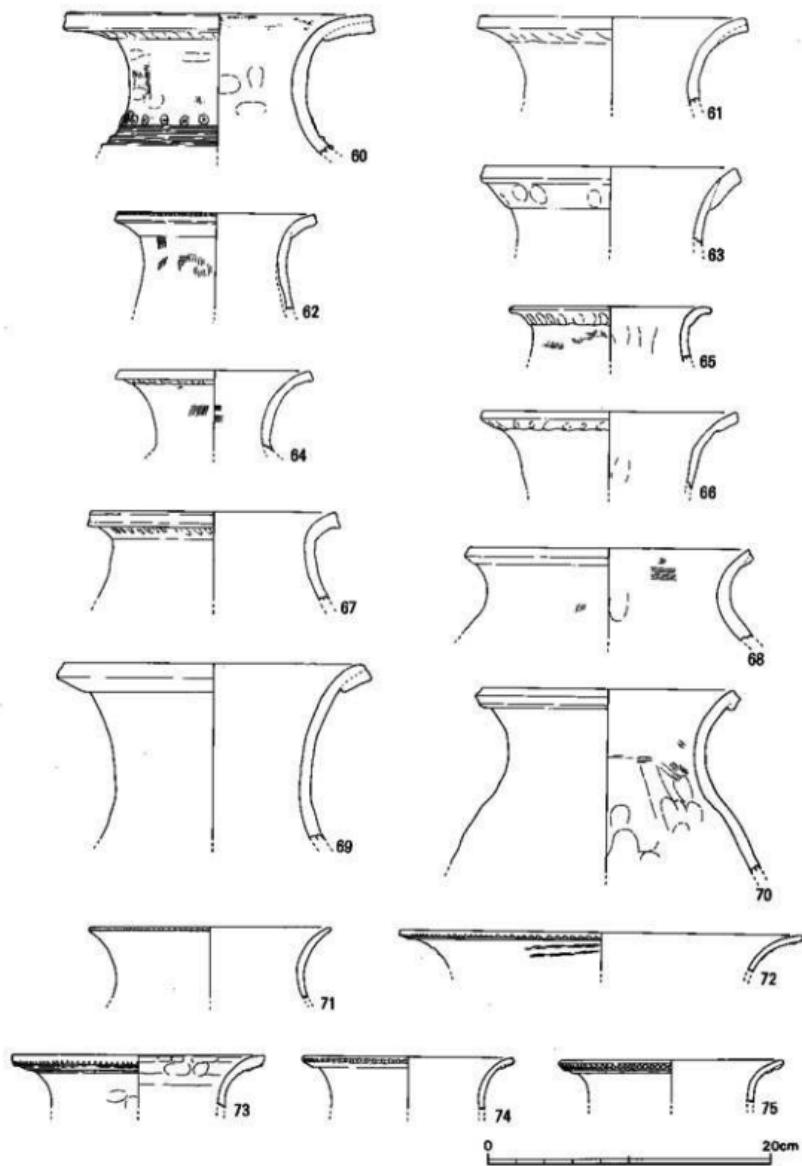
第6図 ST 1出土遺物



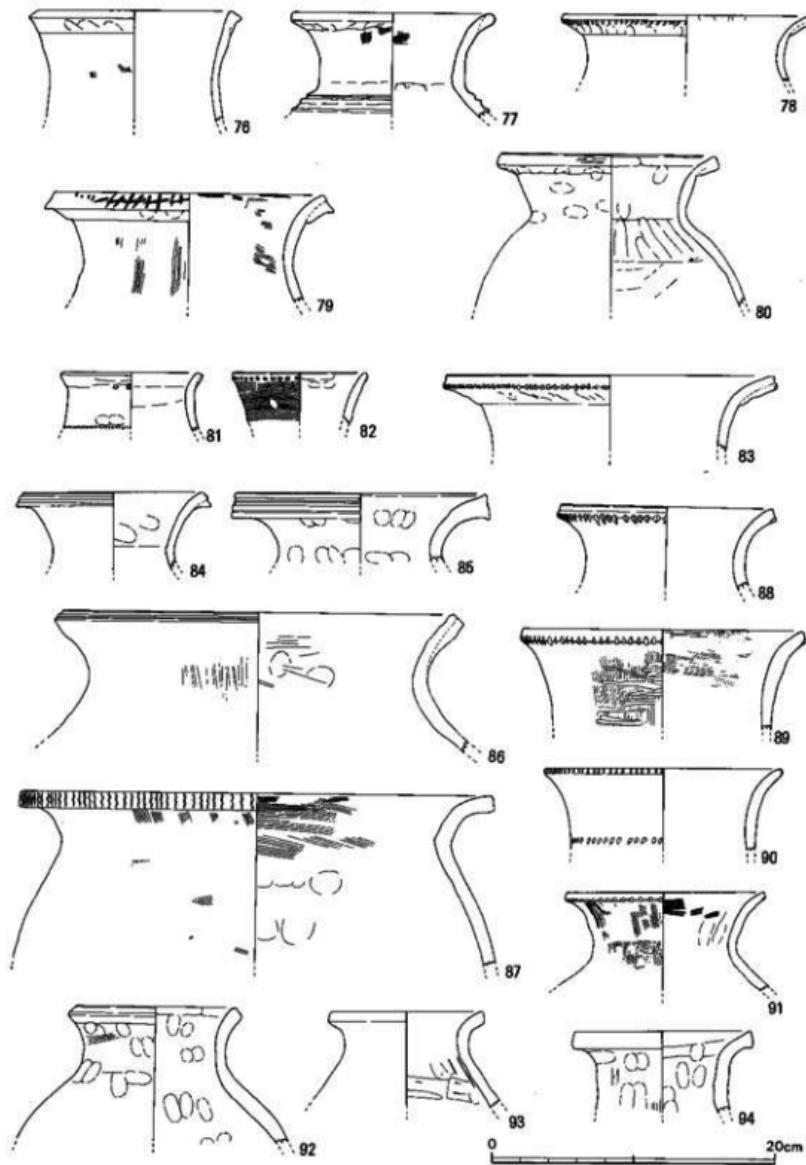
第7図 ST2、SK3、SD1、SX1、SR2出土遺物



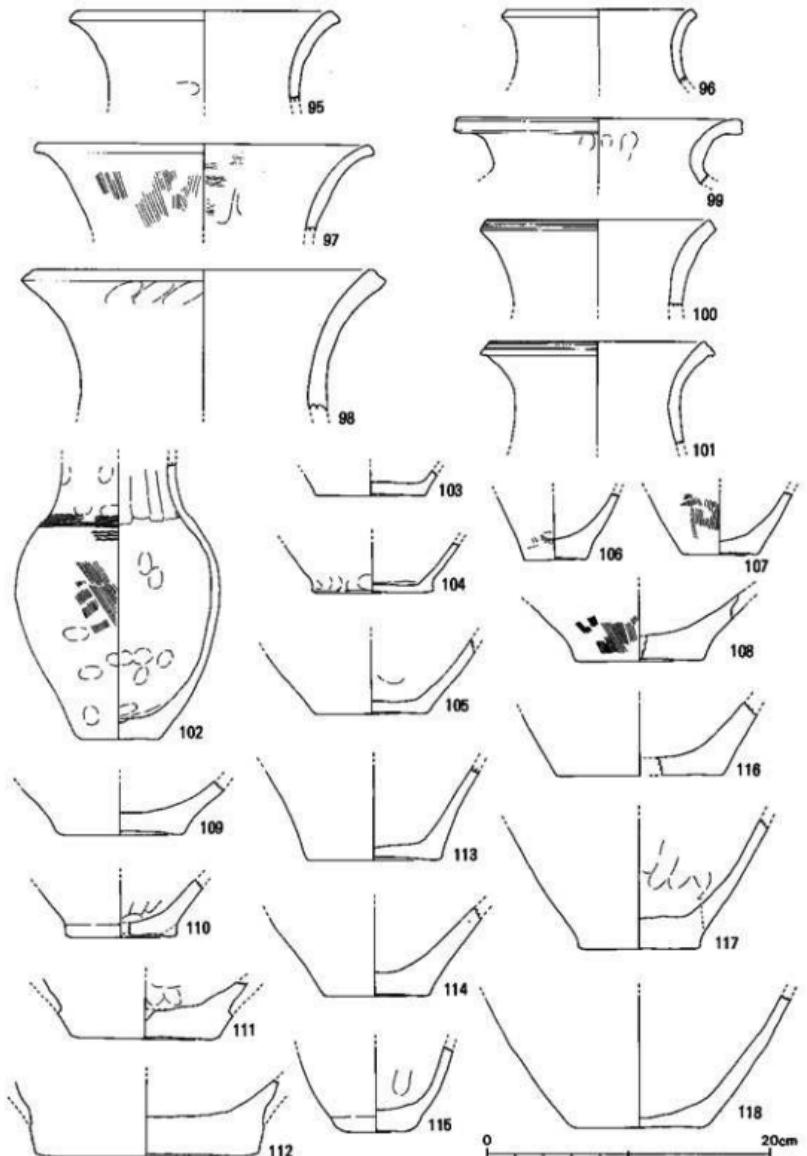
第8図 SR 2出土遺物



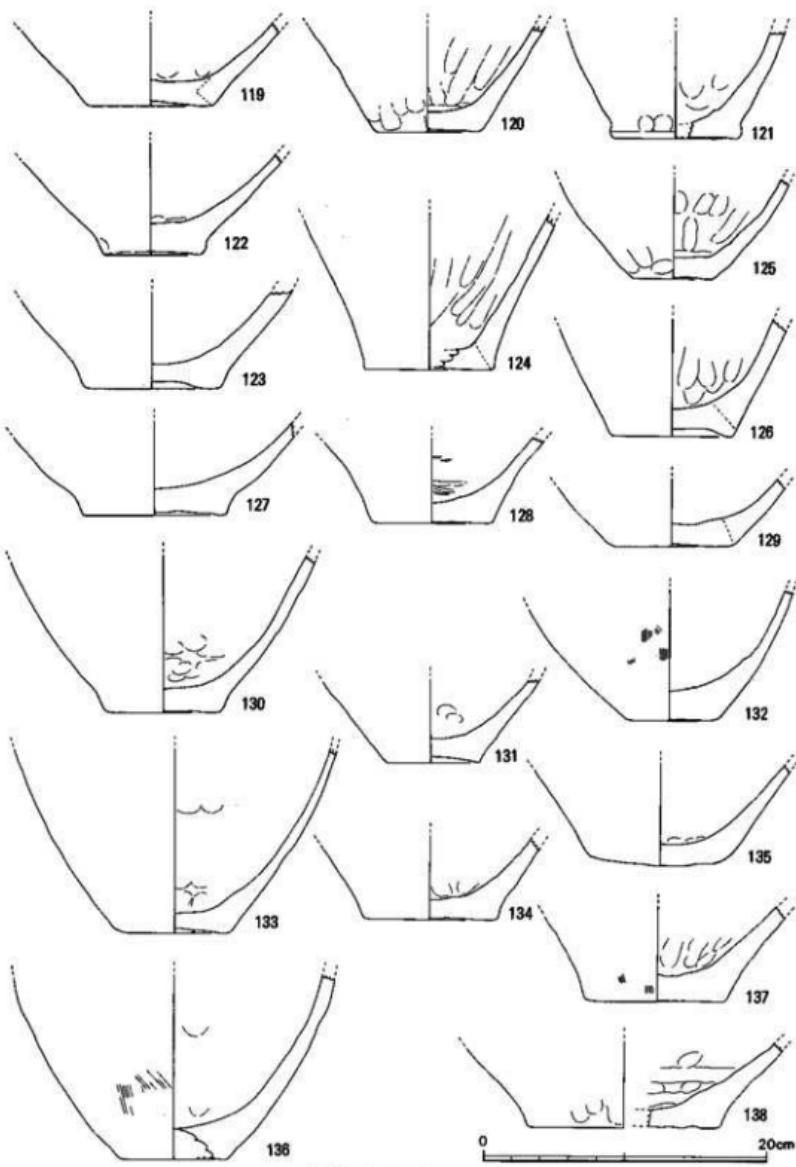
第9図 SR 2 出土遺物



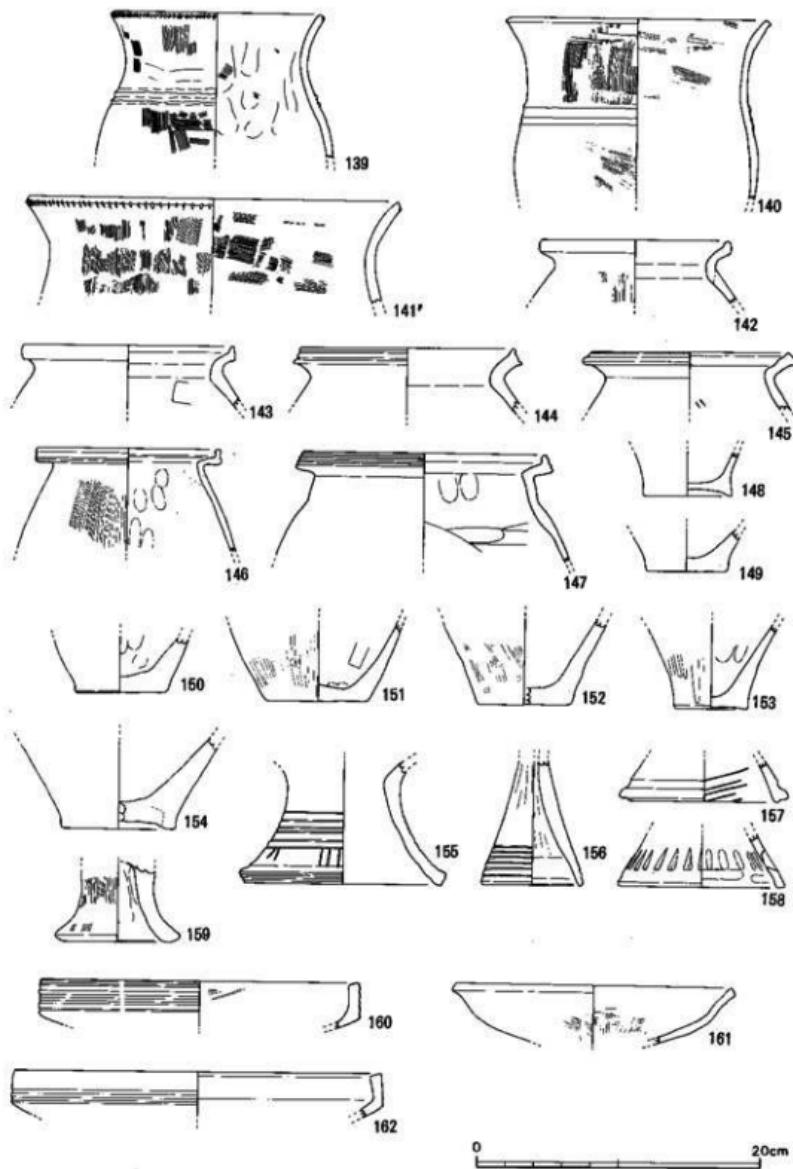
第10図 SR 2出土遺物



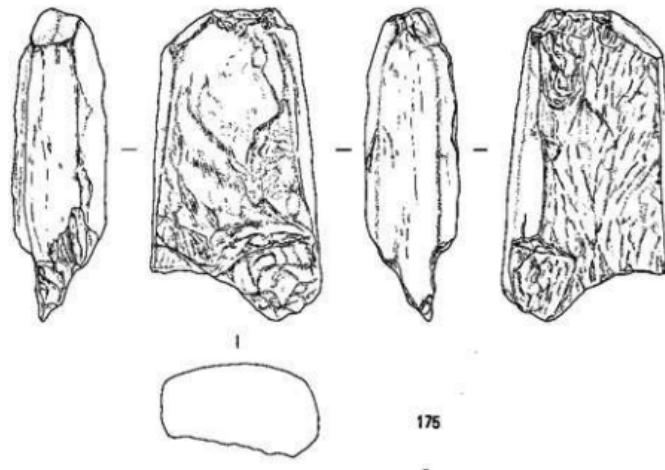
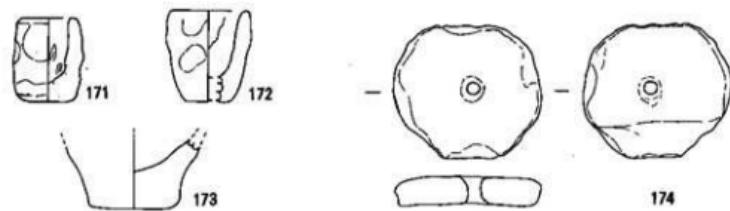
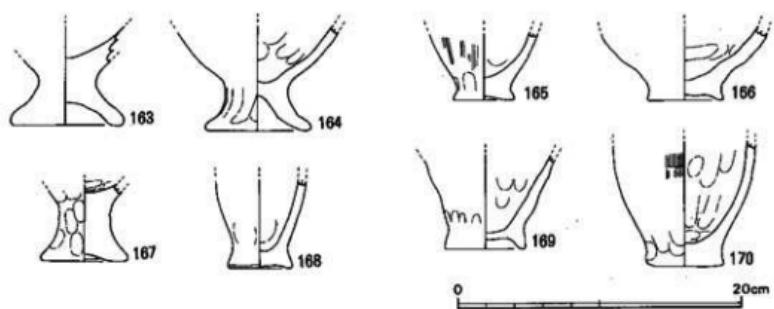
第11図 SR 2出土遺物



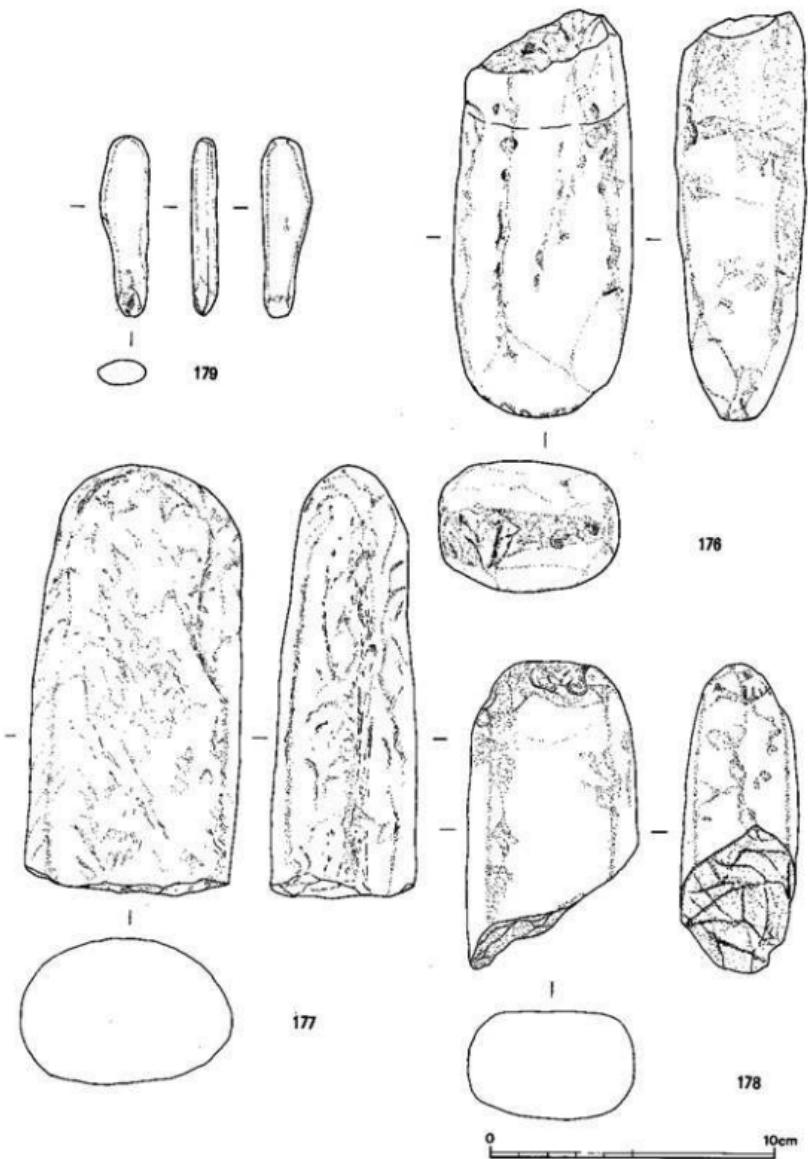
第12図 SR 2出土遺物



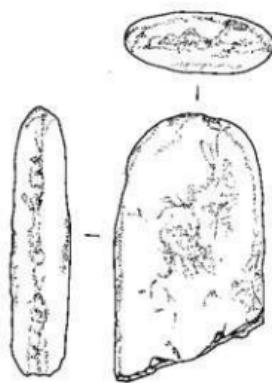
第13図 SR 2出土遺物



第14図 SR2出土遺物



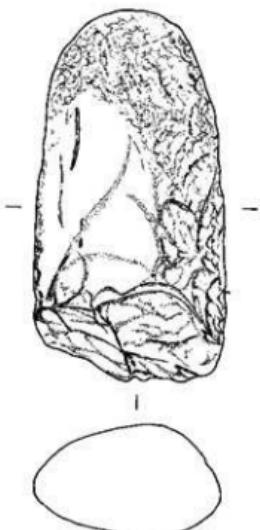
第15図 SR 2出土遺物



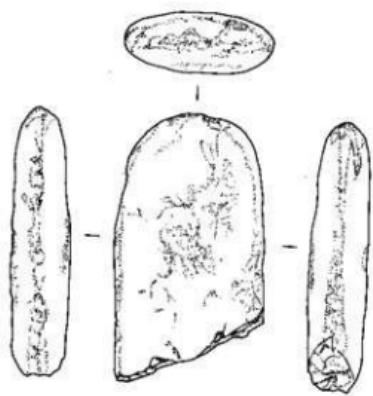
182



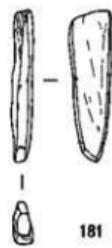
180



181

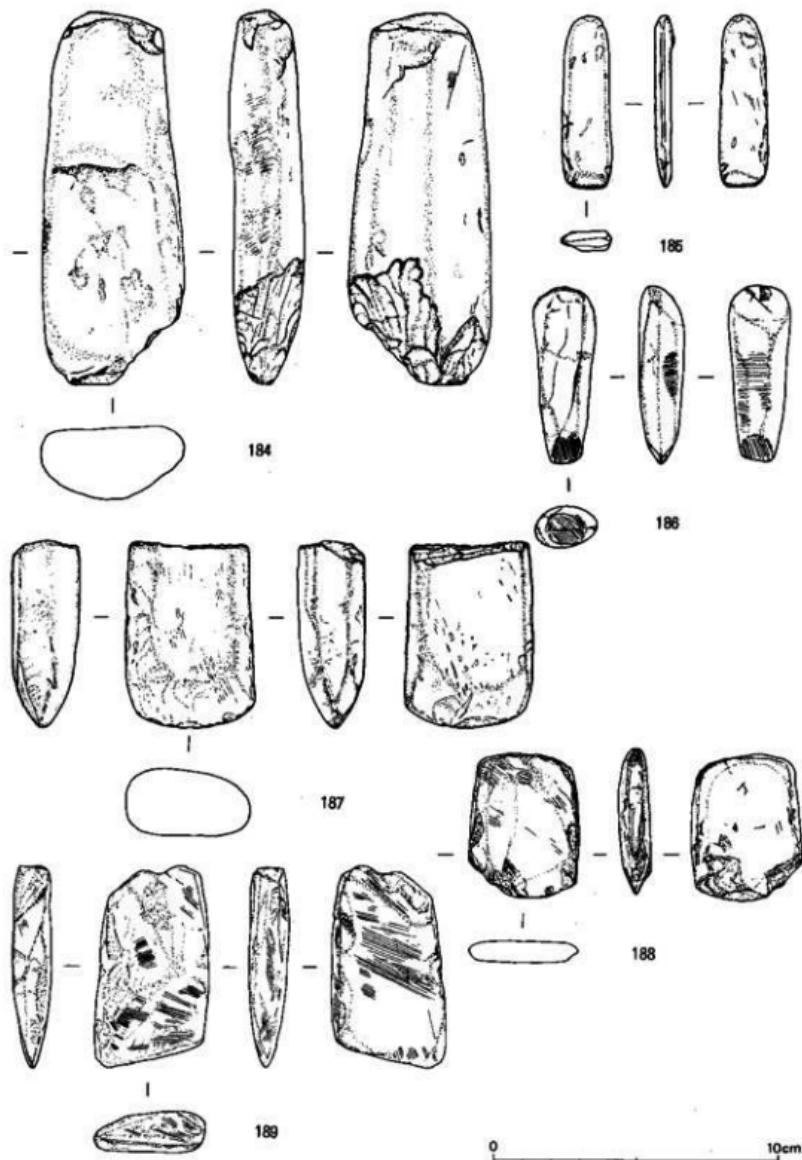


182

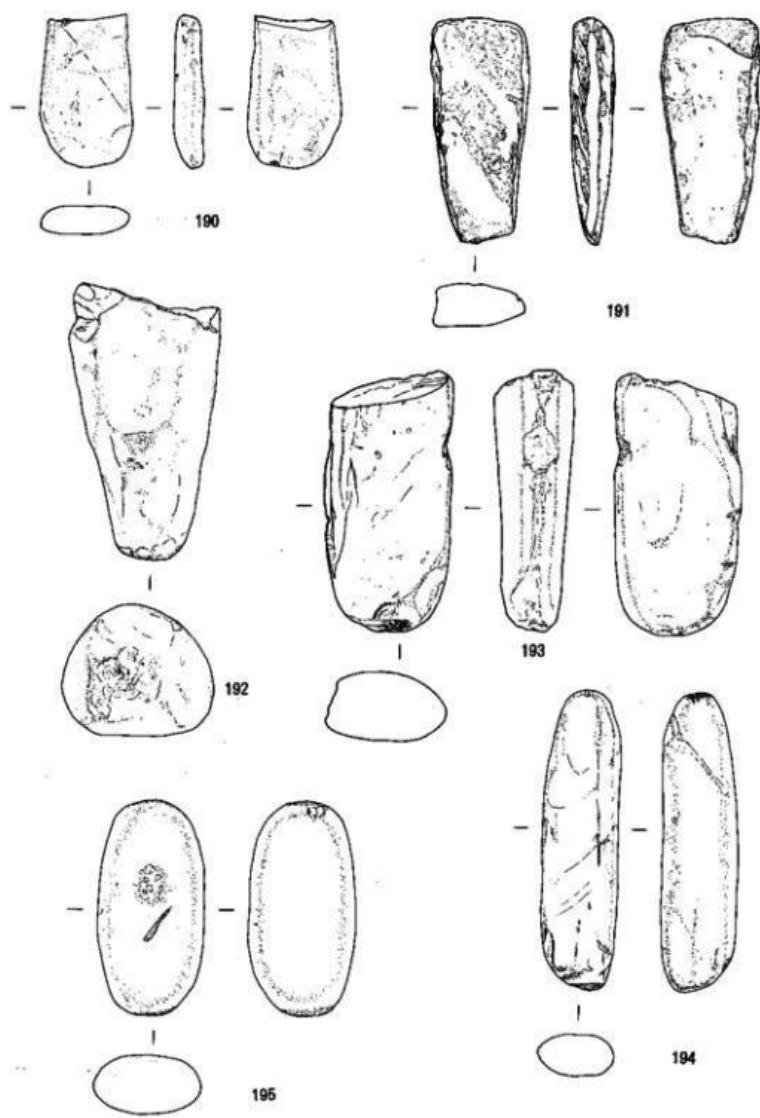


第16図 SR 2出土遺物



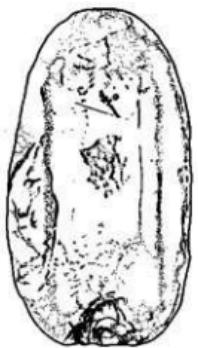
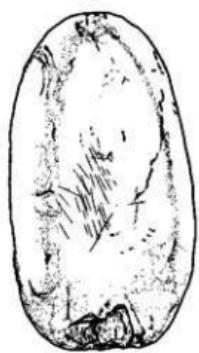


第17図 SK 2, SR 2出土遺物



第18図 ST 1・2、SR 2出土遺物





196

197



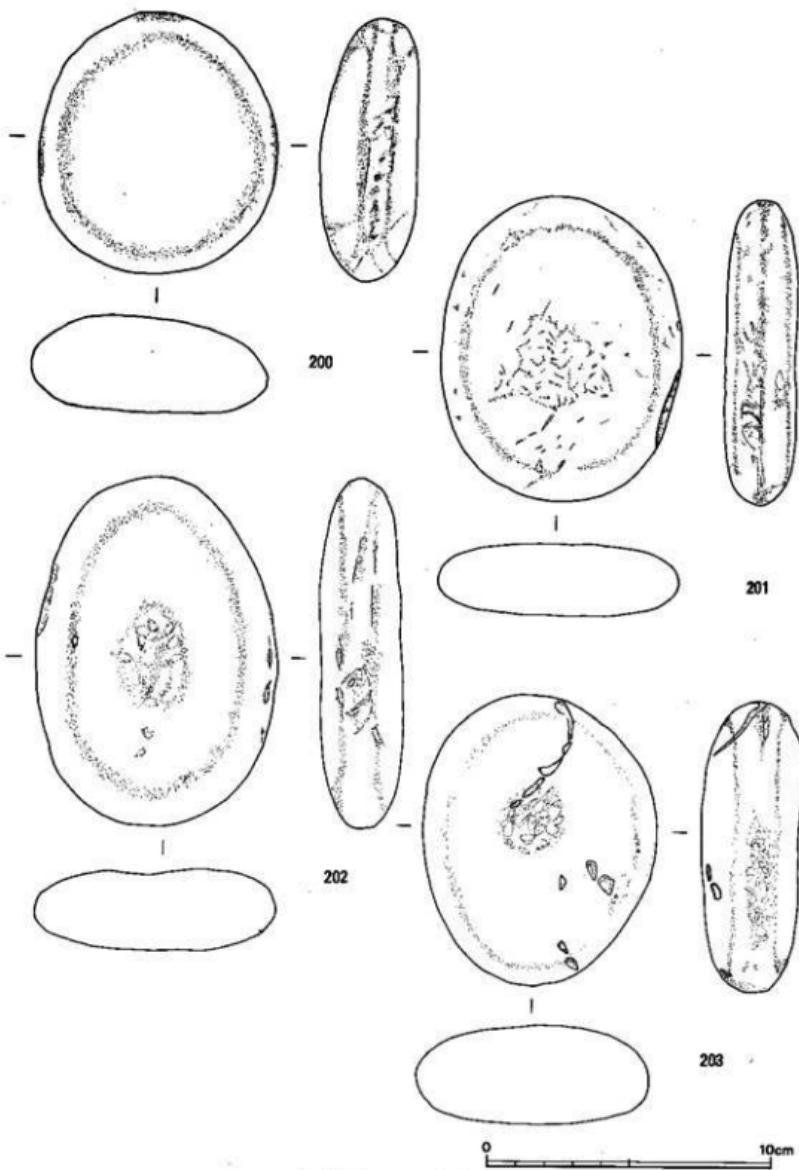
198



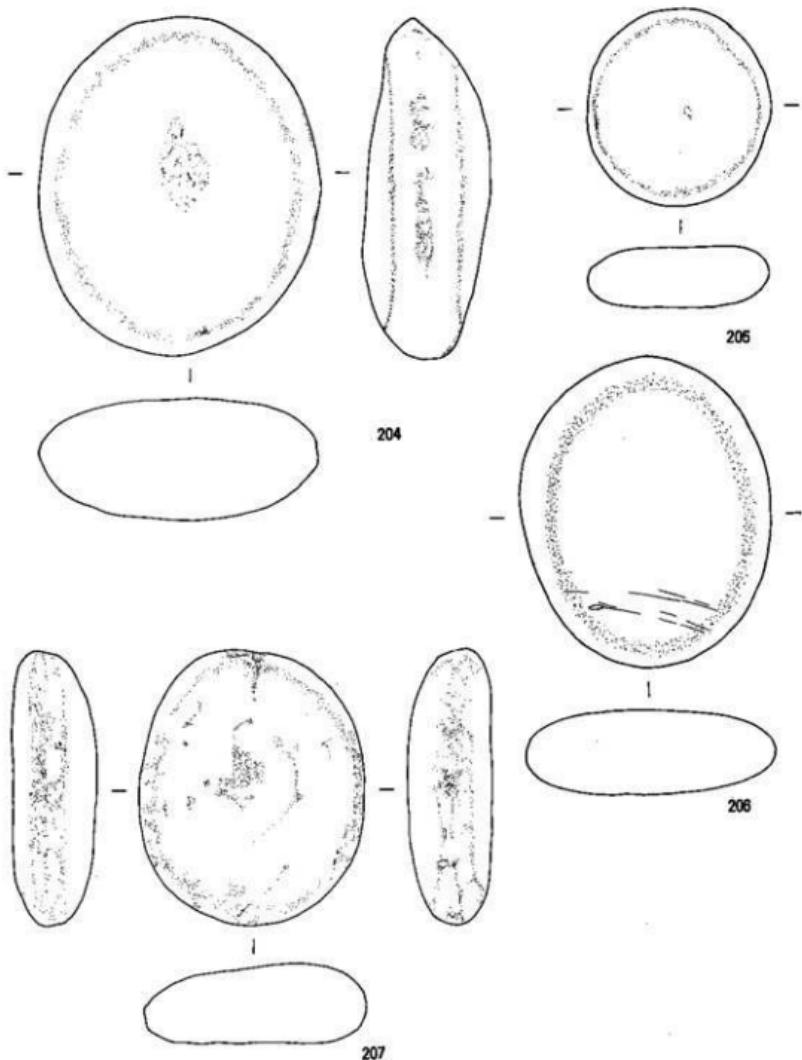
199

0 10cm

第19図 SR 2出土遺物

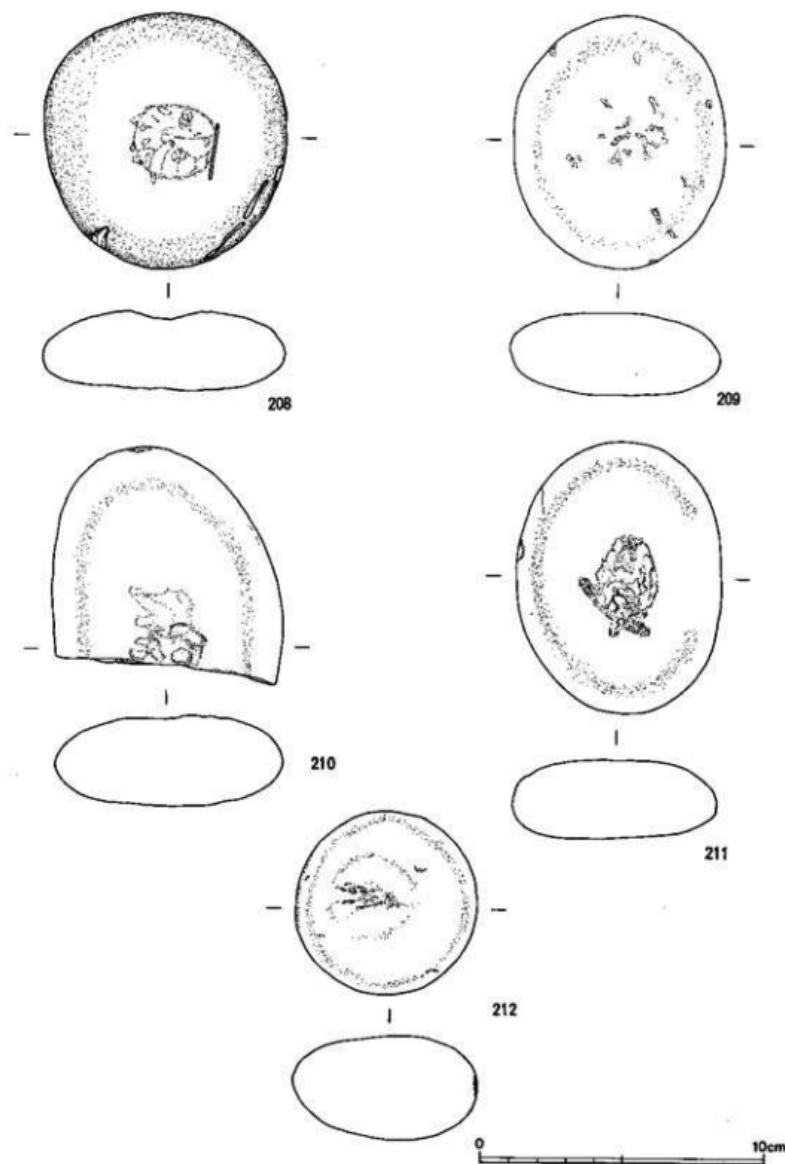


第20図 ST1出土遺物

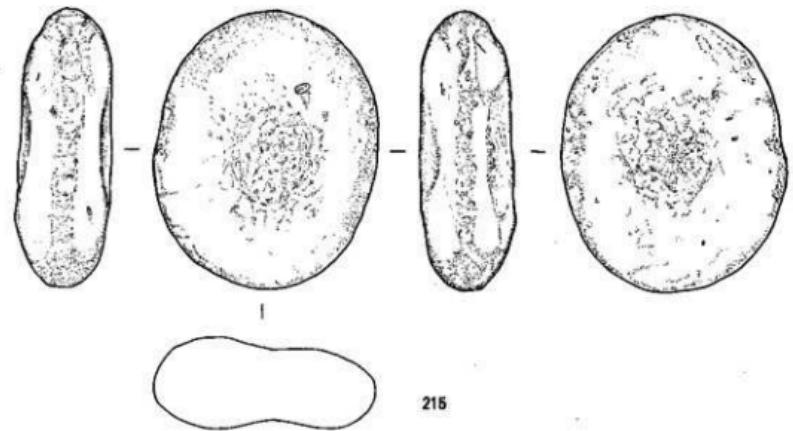
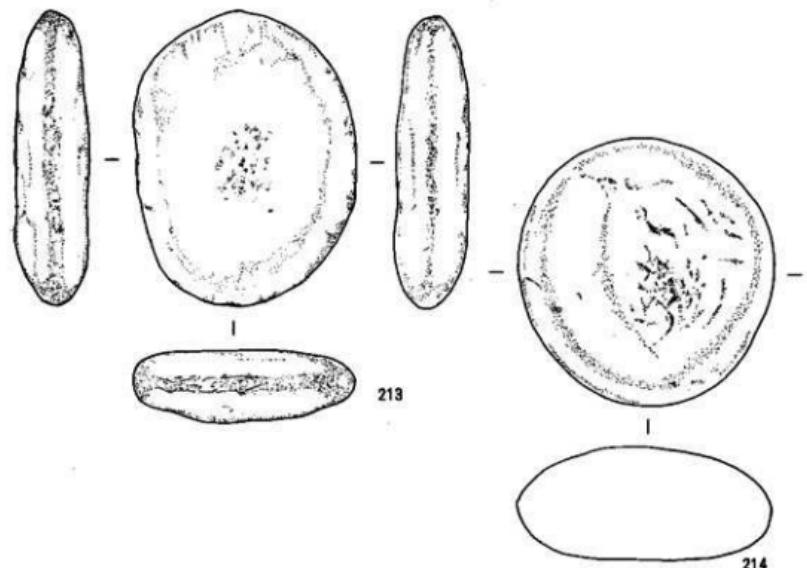


第21図 ST 1出土遺物



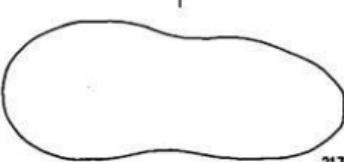
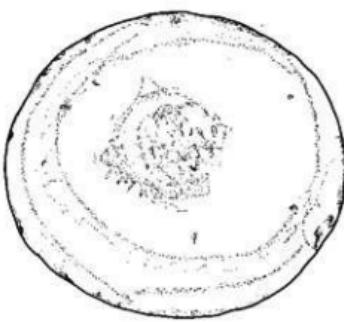
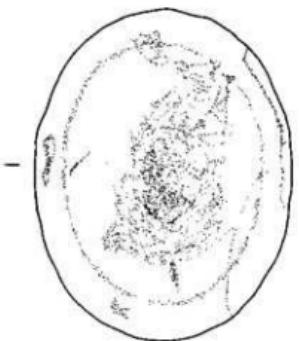


第22図 ST1・2、SX1、SR2出土遺物

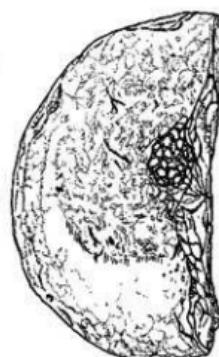
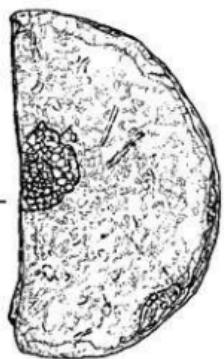


0 10cm

第23図 SR 2出土遺物

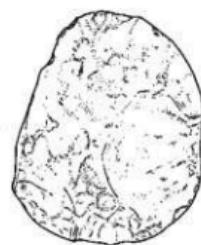
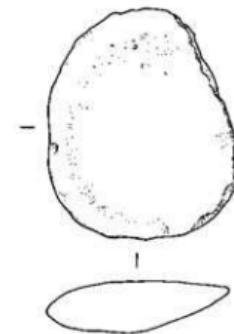


0 10cm

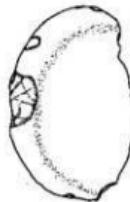


0 20cm

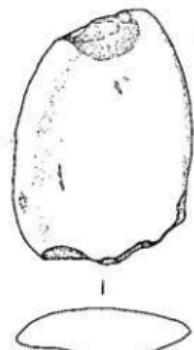
第24図 SR2出土遺物



219



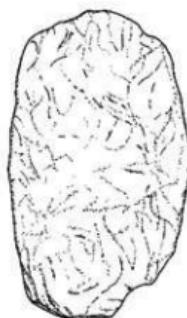
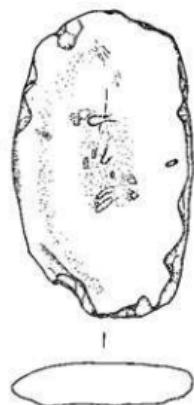
220



221



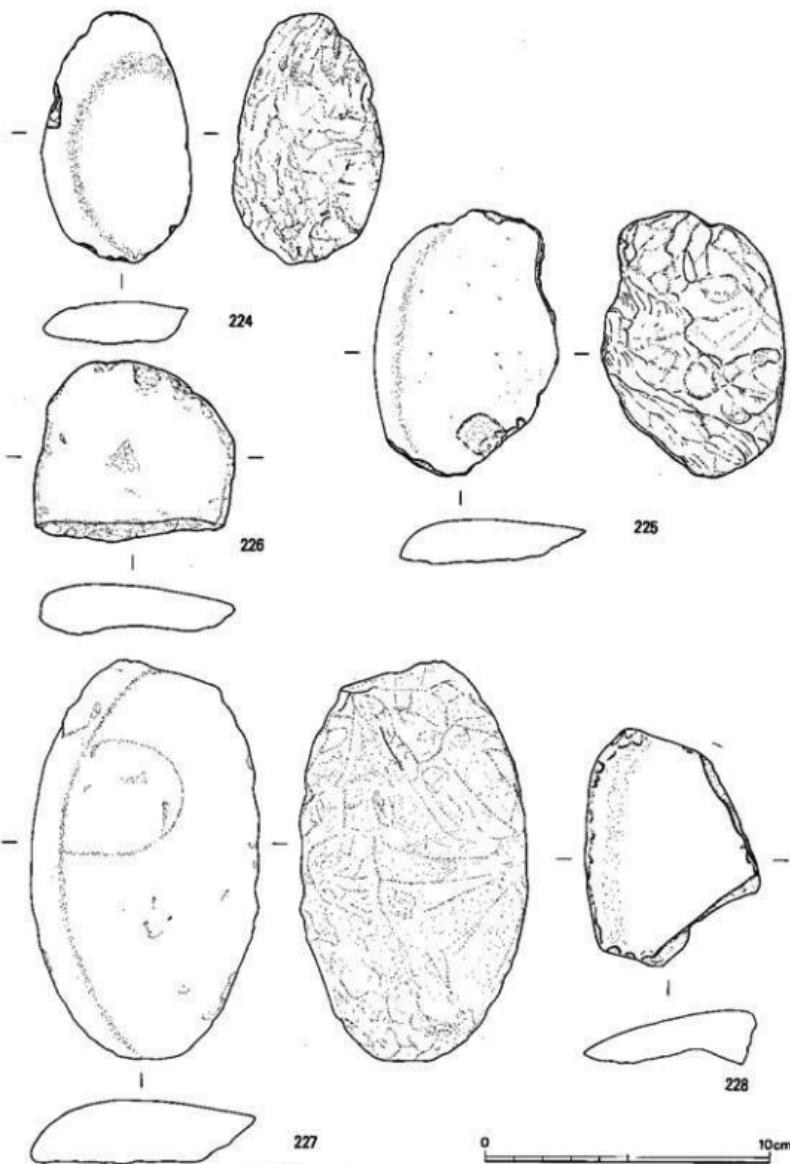
222



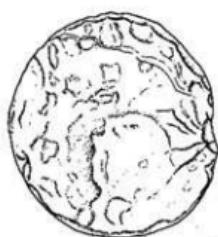
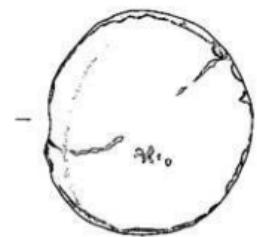
223



第25図 ST2、SK3、SX1、SR2出土遺物



第26図 SK 3、SR 2出土遺物



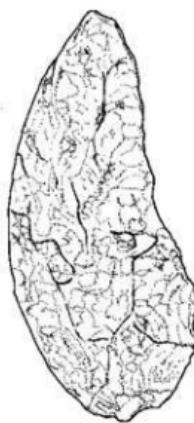
229



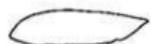
230



231



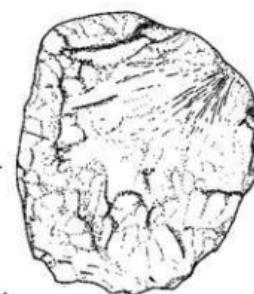
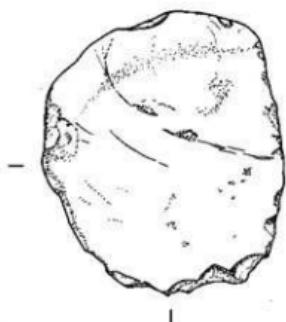
232



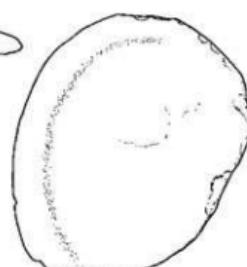
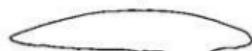
233



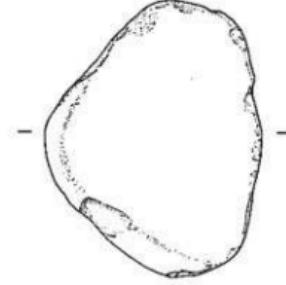
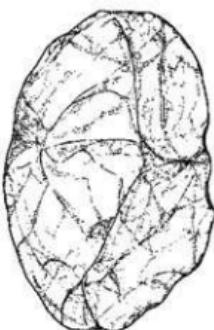
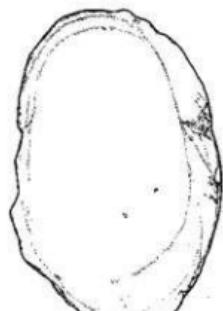
第27図 SR2出土遺物



234



235



237

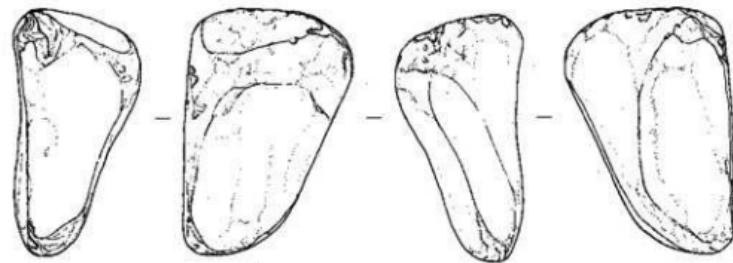


236

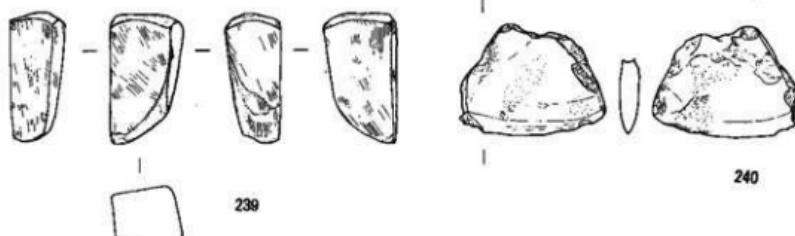
0

10cm

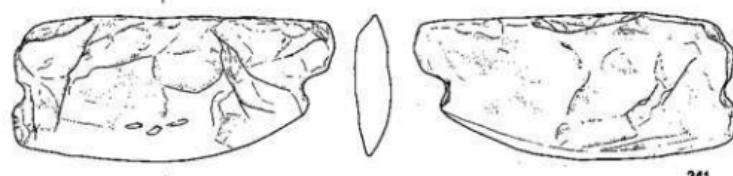
第28図 SR 2出土遺物



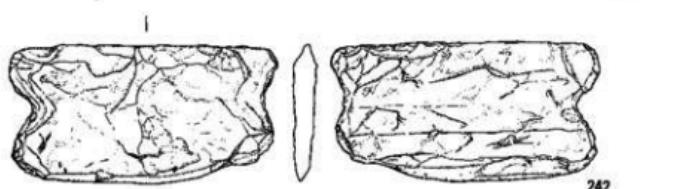
0 20cm



240

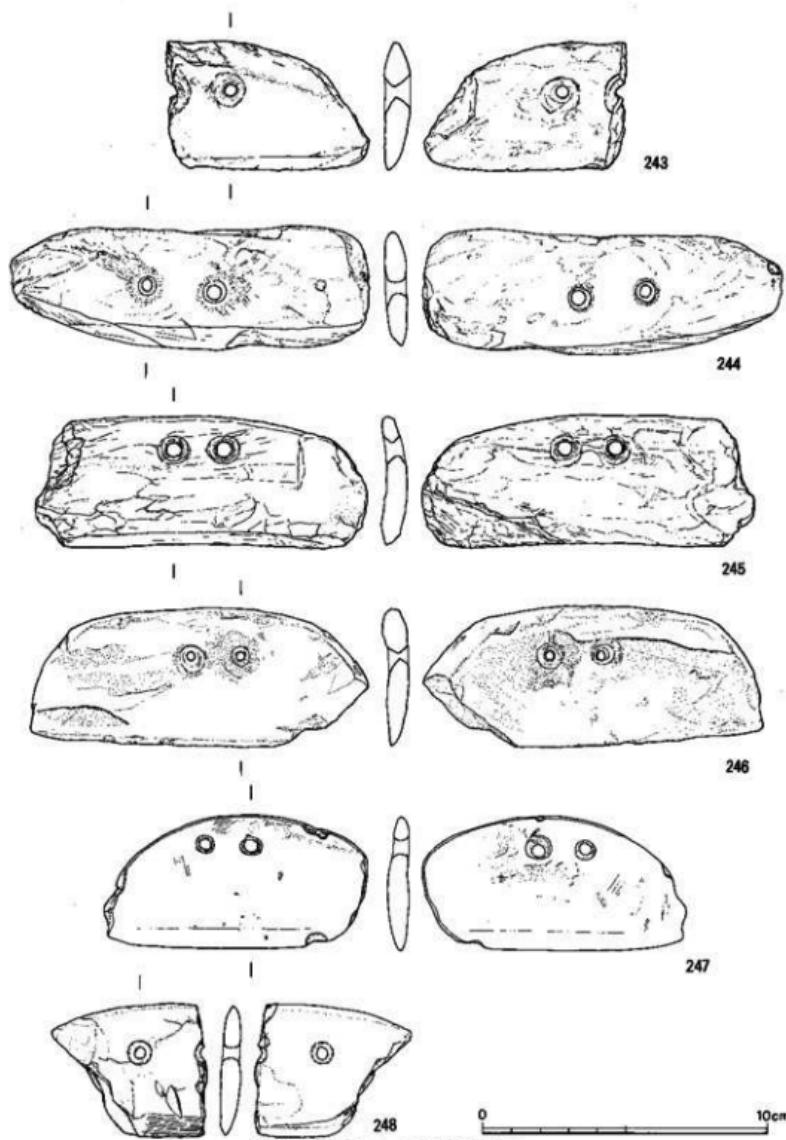


241

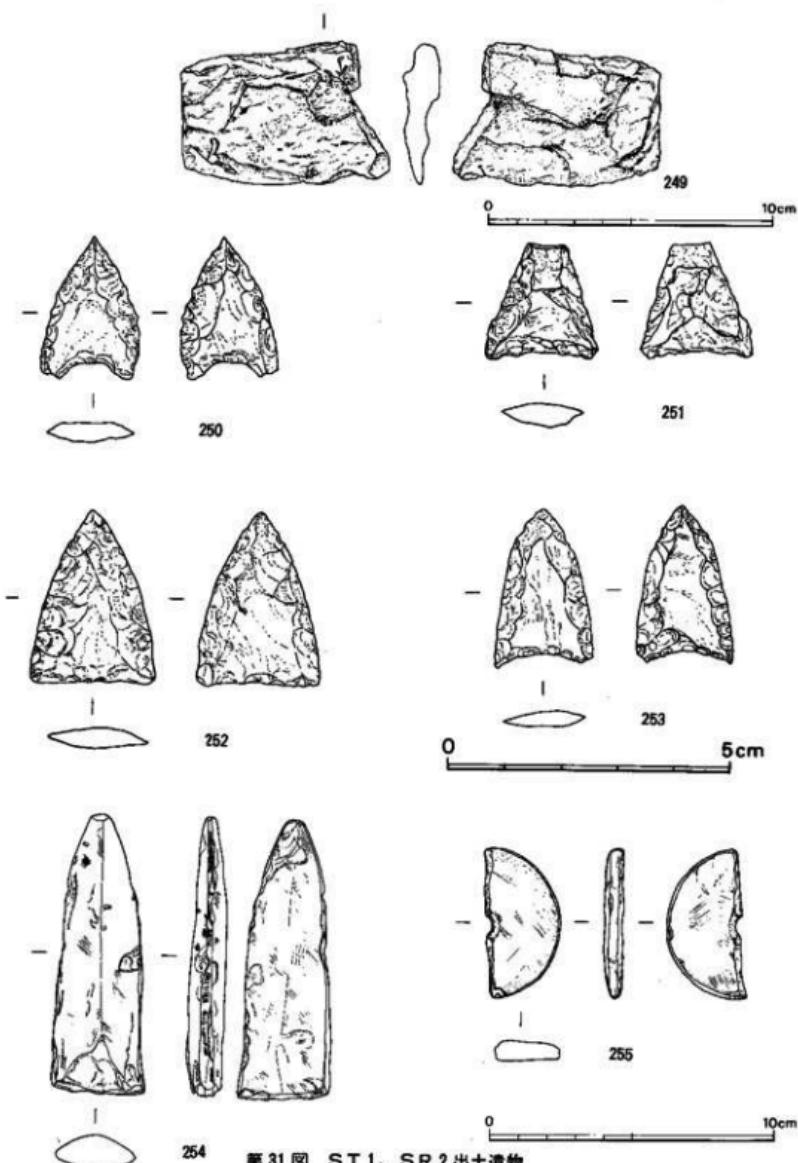


10cm

第29図 ST1、SK1・3出土遺物



第30図 SD1、SR2出土遺物



第31図 ST1、SR2出土遺物

2. Loc. 35C

Loc.35C

1. 位置と調査経過

Loc.35Cは、田村遺跡群の西北端、Loc.35Aの更に西に位置し、小字横手の北端にあたる地点である。当調査区は、空港周辺整備事業の一環として行われた農道拡幅工事に伴い、急速水田部分に設定された小トレンチである。

2. 調査概要

Loc.35Cは幅0.70m、長さ3.80mの小さな東西トレンチであり、明確な遺構は検出されなかった。しかし、下層より多くの弥生遺物を出土しており、調査区全域が溝状遺構あるいは自然流路の一部にかかっていたものと考えられる。

3. 層序と出土遺物

Loc.35Cで確認された層序は、

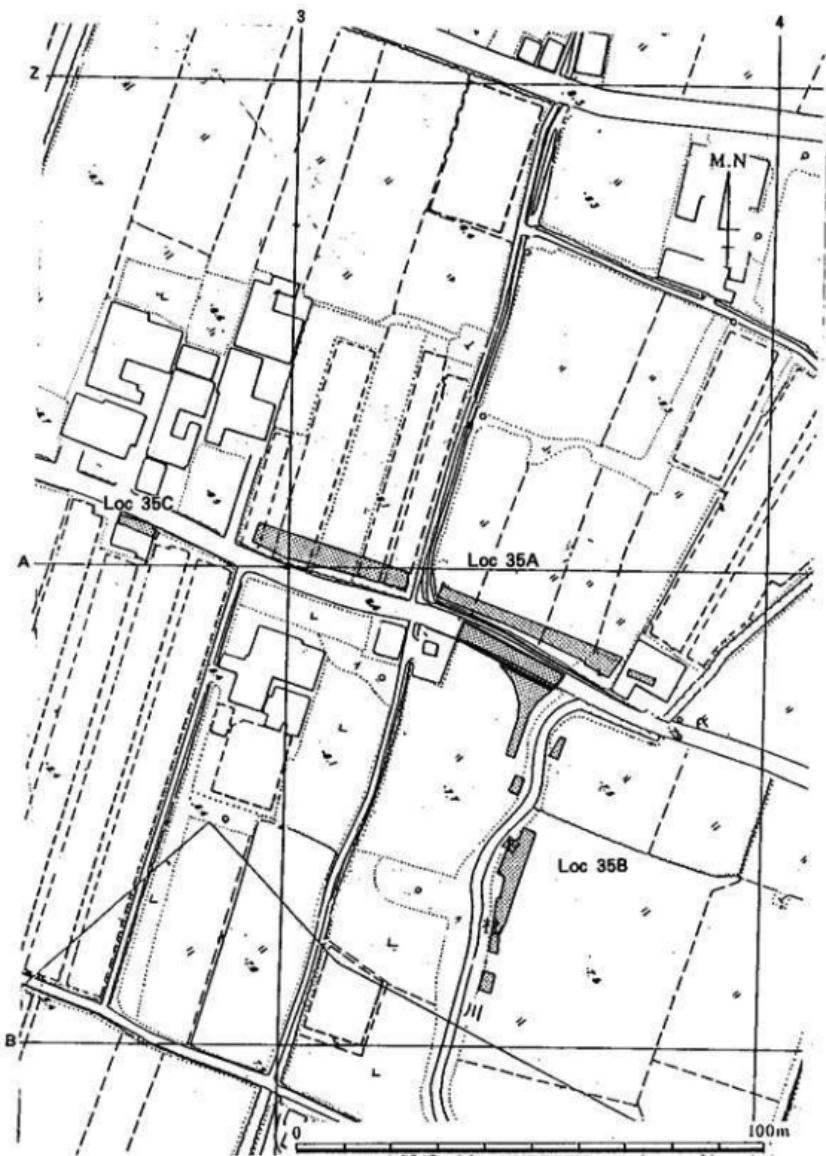
- 第Ⅰ層 耕作土
- 第Ⅱ層 床土
- 第Ⅲ層 灰褐色粘質土層
- 第Ⅳ層 青灰色砂層
- 第Ⅴ層 黑褐色粘質土層
- 第Ⅵ層 黑灰褐色粘質土層
- 第Ⅶ層 砂礫層

であり、第Ⅴ層から第Ⅶ層上面にかけて弥生遺物が大量に出土した（1～13）。土器は中期IIから後期Iの時期のものであり、石器の中では磨製石包丁の出土が著しかった。

4. まとめ

Loc.35Cは、極めて狭小な調査区であり、多くの弥生遺物を出土した第Ⅴ層以下が、いかなる平面形を有しているのか不明である。とは言え、その遺物出土量の多大さ、なかんずく石包丁の著しい出土は、調査面積に比して異常とも言うべきものがある。

幸いにも、当調査区周辺は空港用地とされていないので、今後の調査が期待される。



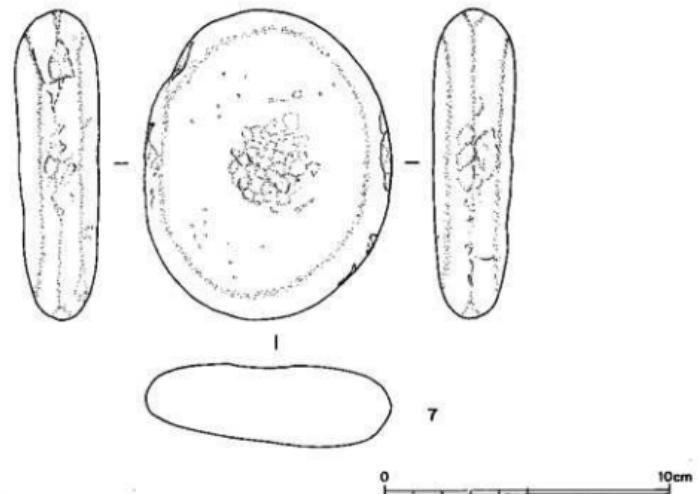
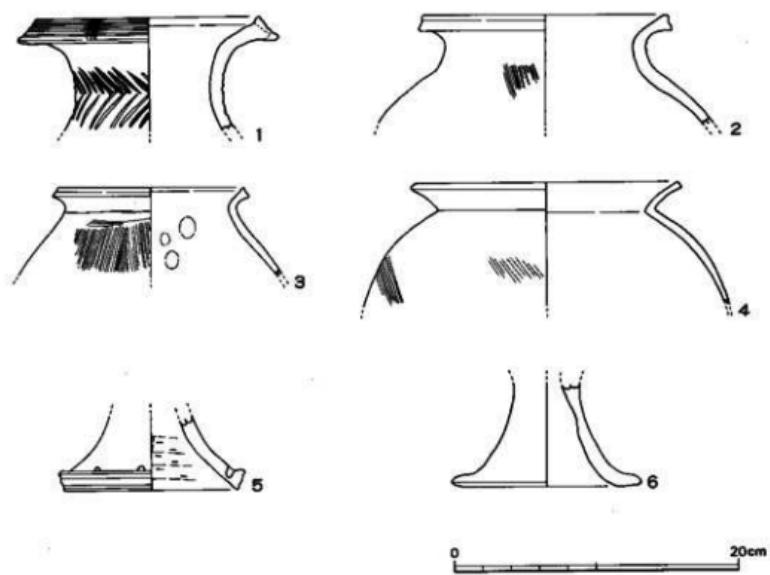
第32図 調査区設定図

第5表 包含層出土土器観察表

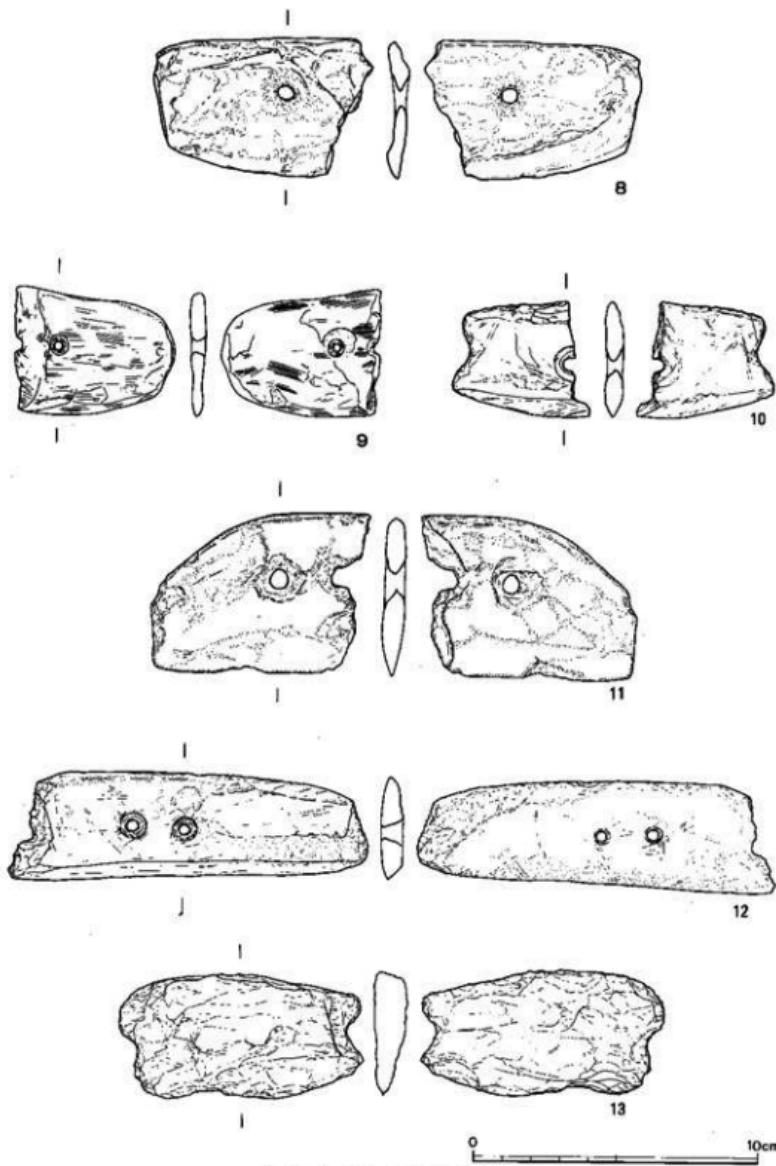
標因番号	層位	器種	法量 (cm) 口縫 基部 側壁 底盤	形態・文様	手法	備考
1	第V層	盃	15.8 (8.0) — —	口縫部は大きく外反し、端部は上部に膨張され、4条の細縦文、側部に部分的にヘラ状原体で圧痕を残す。 底部にも頭状文様に圧痕を残す。	頭部の圧痕はハケ状原体による。 口縫部内外面横方向の強いナデ痕。	
2	"	甕	17.4 (7.8) — —	肩の張った上側部に短い頭部。口縫部は大きく外反し、端部はやや肥厚。口縫部は頭状をなす。		
3	第VI層	"	13.2 (6.4) — —	頭部中央に最大径を有す。口縫部は「く」の字形に外反し、端部を上方に立ち上げて張り出し、口縫部は頭状をなす。	口縫部内外面横方向の強いナデ痕。 頭部内部指頭による頭方向のナデ痕。	
4	第IV層	"	18.6 (8.8) — —	肩の張った頭部から口縫部は「く」の字形に外反し、内面に縫をなす。口縫部は頭状をなす。	口縫部内外面横方向のナデ痕。 頭部外面は木理の粗いハケ状体によく右下がりのハケ痕。	
5	"	高杯	— (5.3) — 12.2	「へ」の字形に開く頭部、頭部は上方に膨張し、その上部に縫を記す。 板部には裏返ししない円孔を残す。		
6	"	"	— (7.4) — 13.4	「へ」の字形に開く頭部で、頭部は水平に曲げ、端部は丸くおさめる。	杯底は円板充填であるが剥落している。	外面に黒斑あり。

第6表 包含層出土石器観察表

標因番号	層位	器種	計画値 最大長 最大幅 (cm, g) 重 量	材 質	特 徴	備 考
7	第V層	叩石	11.0 8.8 3.0 445.0	砂 岩	河原石をそのまま利用した叩石である。 表面中央部及び両側縫合部に敲打痕を残す。	
8	"	石包丁	(7.7) 4.9 0.8 38.9	粘 板 石	外成形磨製石包丁である。円孔は1つしか確認できないが、双孔を持つものと考えられる。敲打による穿孔で両面から穿たれている。刃部は片刃である。	
9	第VI層	"	(5.7) 4.6 0.5 21.7	"	双孔を持つ直刃型磨製石包丁の半成品である。 刃部は両刃と左刃突出である。円孔は両面より穿たれている。全面研磨されており、擦痕が残る。	
10	"	"	(4.3) 4.2 0.7 19.1	千枚岩	外成形刃型磨製石包丁である。抉りと双孔とを併せ持つタイプである。 円孔は両面から穿たれている。 刃部はよく研磨されている。	
11	"	"	(7.7) 5.7 0.8 46.5	粘 板 石	双孔を持つ直刃型磨製石包丁である。 穿孔に沿うて敲打は見られない。 両面に研磨擦痕が見られる。	
12	"	"	(12.7) 3.7 0.8 71.5	砂質片岩	双孔を有する直刃型磨製石包丁である。 穿孔に沿うて敲打は見られない。 刃部は内湾気味である。	
13	"	"	8.6 4.5 1.2 52.9	石灰質綠色岩	両面に抉りを有する打製石包丁である。 刃部は両面より調整されている。	



第33図 第V～VII層出土遺物



第34図 第V～VI層出土遺物

3. Loc. 36A

Loc. 36A

1. 位置と調査経過

Loc.36は、田村遺跡群の北西部に位置しており、小字は、旧田村川を境にして西側が横手で、東側が南土居の前である。

当調査区は、場周道路の工事及び田村川の改修工事等の関係で、昭和56年度と昭和57年度の兩年度にわたって調査を実施した。昭和56年度に試掘調査を実施した箇所をA地点（Loc. 36A）とし、設定した各トレンチを西部からAトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチとする。昭和57年度にはLoc.36AのAトレンチの南部の発掘調査を実施しており、この箇所をB地点（Loc. 36B）とする。

2. 調査概要

Loc. 36Aは、昭和56年度に試掘調査を実施した箇所であるが、場周道路及び田村川の改修工事等の関係から、各トレンチで検出した遺構を完掘せざるを得ない状況であった。

Aトレンチは、旧田村川の西側に設定した東西方向に細長いトレンチで、中央部が南側に方形状に突出している。Aトレンチでは弥生時代の土塙、溝、自然流路等の遺構を確認することができた。

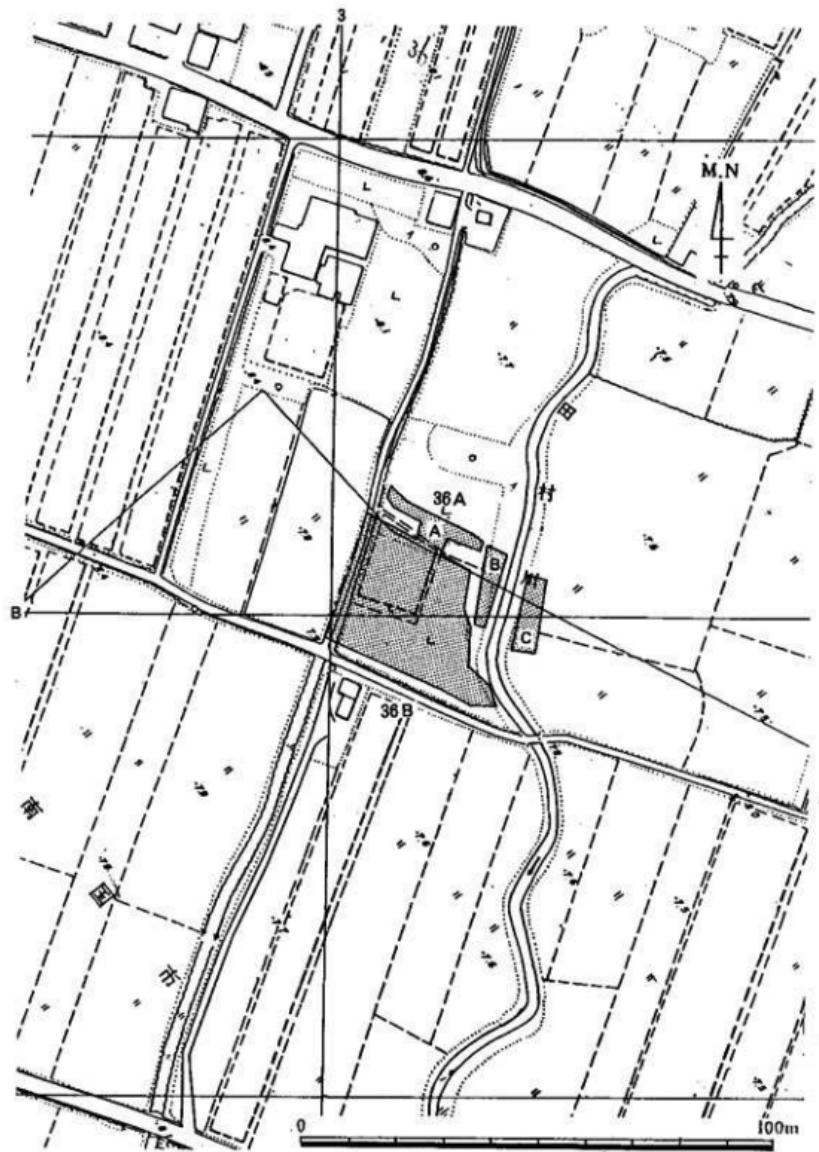
Bトレンチは、Aトレンチの南東方向に近接して設定した南北方向のトレンチで、自然流路（S R 2）の中に入り込んでいるが、北東部では縱方向に現代の擾乱を受けた箇所がある。

Cトレンチは、旧田村川の東側に設定した縱方向に細長いトレンチであり、遺構及び遺物を確認することはできなかった。

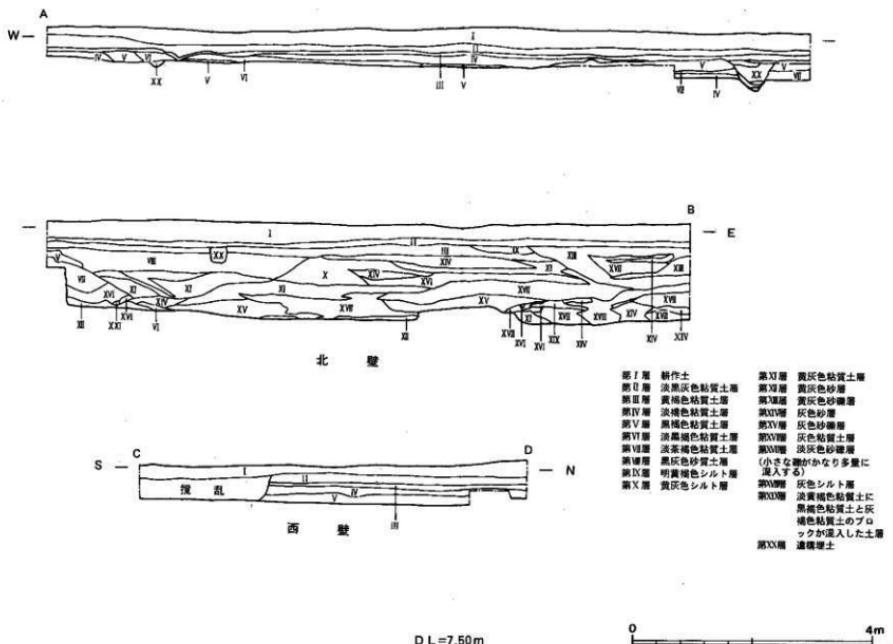
3. 層序と出土遺物

Loc.36AのBトレンチは、自然流路（S R 2）の中に入り込んでおり、Cトレンチは遺構、遺物共に皆無であるために、B、C両トレンチの層序は省略し、Aトレンチの層序についてのみ記述する。

第Ⅰ層	耕作土
第Ⅱ層	淡黒灰色粘質土層
第Ⅲ層	黄褐色粘質土層
第Ⅳ層	淡褐色粘質土層
第Ⅴ層	黒褐色粘質土層
第Ⅵ層	淡黒褐色粘質土層
第Ⅶ層	淡茶褐色粘質土層
第Ⅷ層	黒灰色砂質土層



第35図 調査区設定図



第36図 調査区セクション

第Ⅷ層	明黄褐色シルト層
第Ⅸ層	黄灰色シルト層
第Ⅹ層	黄灰色粘質土層
第Ⅺ層	黄灰色砂層
第Ⅻ層	黄灰色砂礫層
第Ⅼ層	灰色砂層
第Ⅽ層	灰色砂礫層
第Ⅾ層	灰色粘質土層
第Ⅿ層	淡灰色砂礫層
第ⅰ層	灰色シルト層
第ⅲ層	淡黄褐色粘質土に黒褐色粘質土と灰褐色粘質土のブロックが混入した土層

第Ⅰ層は耕作土で全域に堆積がみられた。第Ⅱ層の淡黒灰色粘質土層は、中世の遺物包含層であり、西部ではやや厚く堆積している。第Ⅲ層の黄褐色粘質土層は、中世の遺構検出面である。第Ⅳ層は、淡褐色粘質土層で無遺物層である。第Ⅴ層の黒褐色粘質土層は西部に堆積がみられるが、無遺物層で、弥生時代の遺構検出面である。第Ⅵ層の淡黒褐色粘質土層は、V層に酷似しており、無遺物層である。第Ⅶ～Ⅹ層に至る土層は、自然流路（S R 2）に堆積した土層で複雑な様相を呈している。

4. 遺構と遺物

Aトレントのはば全域で弥生時代の遺構がみられ、西部では土塙群及び溝を検出し、東部では自然流路を確認した。

土塙

SK1

SK1は、現代の擾乱塙で、SD1の南部を切り取っており、現代の瓦等が出土している。

SK2

SK2は、西端部付近で検出された不整円形の土塙で深く、断面形は擂鉢形を呈す。長径0.88m、短径0.80m、深さ約0.52mを測る。長軸方向はN-72°E、埋土は暗茶褐色粘質土で、ごく少量の弥生土器片が出土している。

SK3

SK3は、西部で検出された橢円形の土塙で、南東部はSK4に切られており、上層は擾乱を受けている。長径0.88m、短径0.76m、深さ約0.28mを測る。長軸方向はN-59°W、埋土は暗茶褐色粘質土であり、弥生土器片が数点出土している。

SK4

SK4は、西部で検出された円形の土塙で、北西部と南東部の2箇所に小段を有し、SK3の南東部を切り取っている。長径0.78m、短径0.76m、深さ0.32mを測る。長軸方向はN-4°W、埋土は茶褐色粘質土であり、壺(1)の他に少量の弥生土器片が出土している。

SK5

SK5は、西部で検出された不整橢円形の土塙で、北半部が調査区外に延びているため、全体の形状は不明である。長径0.88m、短径の残存長0.36m、深さ0.26mを測る。長軸方向はN-62°W、埋土は茶褐色粘質土であり、ごく少量の弥生土器片が出土している。

SK6

SK6は、西部で検出された不整円形の土塙で、南端部は調査区外に延びている。長径1.04m、短径の残存長0.76m、深さ0.36mを測る。長軸方向はN-80°E、埋土は茶褐色粘質土で少量の弥生土器片が出土している。

溝

SD1

SD1は、西端部で検出された溝で、北部から南部に向かって縱走する。北部と南部の両端部が調査区外に延びているため、全長は不明であるが、検出長は約3mである。断面形はゆるやかなU字状を呈し、幅0.54m、深さ0.30mを測り、南部は現代の擾乱堆に切られている。

埋土は茶褐色粘質土であり、かなり多量の弥生土器片が出土している。SD1からは壺(2)、3)、甕(4~7)、小型土器(8)等の遺物が出土している。

SD1は、中期IIIの時期に機能し、廃絶した溝で、自然流路(SR2)に向かって流れたと考えられる。

SD 2

SD 2は、Aトレンチのほぼ中央部で検出した溝で、北部は調査区外に延びているため、全長は不明である。検出長約3.40m、幅0.68m、深さ0.52mを測る。断面形はV字形を呈し、埋土は5層に分層される。

第Ⅰ層は、淡黄褐色粘質土に黒褐色粘質土と灰褐色粘質土の小ブロックが混入した土層で、約0.10mほど堆積しており、少量の弥生土器片を含んでいる。第Ⅱ層は、淡黒灰色砂質土で、約0.30mほど堆積しており、多量の弥生土器片を含んでいる。第Ⅲ層は、黒灰色砂質土で、約8cmほどレンズ状に堆積しており、少量の弥生土器片を含んでいる。第Ⅳ層は、黒灰色シルトで、約8cmほどが西寄りに堆積しており、多量の弥生土器片が出土している。第Ⅴ層は、灰褐色粘質土で黒褐色粘質土と黄褐色粘質土の小ブロックが混入しており、約4cmほど堆積し、多量の炭化物と弥生土器片が出土している。

SD 2からは壺(9~22)、甕(23~27)等の遺物が出土しており、中期Iの溝か、もしくは細長い溝状の土塹と考えられる。

SR 2

SR 2は、Aトレンチの東半部で検出された自然流路で、北東方向から南西方向に向かって南流する。Aトレンチの中央部でSR 2の西壁を確認したが、端部が調査区外に延びているために、全長や全幅等は不明である。残存長約9.0m、残存幅10.2m、深さ1.9mを測る。

SR 2の基底部には島状の高まりがあり、その西側はやや低くなっている。拳大程度の自然礫が集中して堆積している。また、島状の高まりの東側はかなり傾斜して低くなっている。

AトレンチのSR 2から出土した弥生土器は、壺(28~274)、甕(275~346)、甕用の蓋(347)、鉢(348~350)、高杯(351~366)、小型土器(367)等である。石器は、石斧(368~379)、穿孔具(380)、叩石(381~387)、砥石(388~396)、石包丁(397~406)、石鐵(407、408)等が出土している。

Aトレンチで検出したSR 2からの出土遺物は、前期IVから後期Iの時期であり、SR 2は、前期IVの時期にはすでに機能しており、後期Iの時期に廃絶したと考えられる。

Bトレンチ及びCトレンチがSR 2の東壁付近であろうと考えて調査を進めたが、SR 2の東壁を確認することはできなかった。

以上のことから、Bトレンチのすぐ東側に旧田村川が隣接していることを考えると、SR 2の東壁は旧田村川に切られていることが判明した。

BトレンチのSR 2からも弥生時代の遺物が多量に出土している。BトレンチのSR 2から出土した弥生土器は、壺(409~443)、甕(444~460)、高杯(461)等であり、石器は、石斧(462)、叩石(463)、石包丁(464~467)等が出土している。

5. まとめ

Loc.36Aでは、Aトレンチの西半部で弥生時代中期の溝及び土塙群を検出したが、その中でも、SD2から出土した弥生土器は中期Iの非常に良好な一括資料である。また、Loc.36AのA～Cの各トレンチを調査した結果、SR2の推定幅は、約36mと非常に広大であることが判明した。

第7表 土塙計測表

探査番号	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向	断面形	備 考
			長 径	短 径	深 さ			
—	S K 1	不整円形	1.36	(0.84)	0.60	N- 72°-W	かまぼこ形	
第37図	S K 2	"	0.88	0.80	0.52	N- 72°-E	鐘鉢形	
"	S K 3	楕円形	0.88	0.76	0.28	N- 59°-W	逆台形	
"	S K 4	円 形	0.78	0.76	0.32	N- 4°-W	鐘鉢形	
"	S K 5	不整椭円形	0.88	(0.36)	0.26	N- 62°-W	逆台形	
"	S K 6	不整円形	1.04	(0.76)	0.36	N- 80°-E	"	

第8表 遺構出土土器観察表（Aトレンチ）

標図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 基部 底径	思 想・文様	手 法	備 考
1	SK 4	壺	14.3 (4.7) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。	口縁部外面はヨコナデで、内面はヨコハケのあとにヨコナデである。肩部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	
2	SD 1	"	18.8 (2.1) — —	口縁部は鋭く外反する。	口縁部は贴付口縁でヨコナデで仕上げる。	薄手の壺である。
3	"	"	— (7.3) — 10.1	平底である。	ナデで仕上げる。	
4	"	壺	16.5 (2.7) — —	くの字状にかなり鋭く外反する口縁部で縁部で飛び上がり口縁である。口唇部に2条の粗縞文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	口唇部に小さな斑斑がある。
5	"	"	14.0 (3.1) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で口唇部に3条の回線文を施す。	"	口縁部外面に環状沈化物が付着する。
6	"	"	19.7 (3.5) — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で肩はかなり張る。口唇部に2条の回線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上肩部外面はナデで仕上げ、内面は横方向へのハラ削りで仕上げる。	
7	"	"	15.4 (16.7) 19.4 — —	くの字状に鋭く外反する口縁部で肩もやや張り出す。口唇部に1条の粗縞文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上肩部外面はナデで仕上げ、内面はヘラ削りで仕上げ、内面はヘラ削りである。	
8	"	小型土器	— (1.6) — 2.7	小型土器底部で上げ底を呈す。	ナデで仕上げる。	焼成は良好である。
9	SD 2	壺	19.0 (5.8) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
10	"	"	17.2 (3.4) — —	ゆるく外反する口縁部で口縁部内面に2条の貼付口縁を施す。口唇部上端に肩目を施す。	口縁部外面はヨコナデで仕上げる。	
11	"	"	22.7 (6.0) — —	かなり鋭く外反する口縁部で口唇部の上下両端に肩目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
12	"	"	16.3 (19.1) 22.1 — —	ゆるやかに外反する口縁部に長削の肩部が続く。口唇部下端に肩目を施す。上肩部に1条のヘラ削施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。肩部はハケ削施す。あとにナデで仕上げる。上肩部外面はハケ削のあとにヘラ削を施す。	上肩部に施した1条のヘラ削施す。肩部の上下両端に肩目を施す。
13	"	"	17.4 (6.6) — —	かなり鋭く外反する口縁部である。口唇部下端に肩目を施す。	器表面は磨耗し、調整は不明である。貼付口縁である。	
14	"	"	23.5 38.1 28.4 9.4 — —	ゆるく外反する口縁部に鋭く口縁部はゆるく外反する。肩部は塑型である。肩部を側面施底縞文と4条の貼付口縁で飾る。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデのあとにヨコナデで仕上げる。肩部はハケ削施す。あとにナデで仕上げる。上肩部外面はハケ削のあとにヘラ削を施す。内面はナデである。	完形で口縁部内面にも4条の縦い突起を貼付する。
15	"	"	15.0 (8.4) — —	ゆるく外反する口縁部に鋭く口縁部はゆるく外反する。上肩部に3条の側面起沿がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部以下はナデで仕上げる。	薄手の壺である。

種別番号	造形番号	器種	法量 (cm)	口縁 基部 銅延 底径	形態・文様	手 法	備 考
16	SD 2	壺	— (8.6) 18.4 —	ゆるく外反する口縁部に続く制部 は張りがない。上側部に3条の微 細な帶文有し、その下に円形浮文 をつらぶ。	ナデで仕上げる。	底手の壺であ る。	
17	"	"	— (7.6) 16.2 —	長鶴の腹部である。上側部に10条 のやや乱れた横筋波状文が施され る。	外面はタテハケのあとにナデで仕 上げ。右下よりのヘラ磨きを加え る。内面はナデで仕上げる。		
18	"	"	— (16.8) 28.2 —	原型のやや長鶴の下脚部である。	外面は右下より方向のハケ調整の あとにナデを施し、絞方向のヘラ 磨きを加える。内面はナデである。		
19	"	"	— (14.5) 16.8 —	原型のやや長鶴の胸部である。	外面はナデで仕上げ、内面は絞方 向の指ナデで仕上げる。		
20	"	"	— (23.4) 26.6 8.1 —	原型を出した長鶴の下脚部である。	外面は右下より方向のハケ調整の あとにナデを施し、ヘラ磨きを加 える。内面は絞方向の指ナデであ る。		
21	"	"	— (5.2) 10.5 —	平底の底部で器壁は非常に厚い。	ナデで仕上げる。		
22	"	"	— (6.7) 9.5 —	平底の底部である。	器表面が擦耗し、調整は不明であ る。		
23	"	壺	15.0 (12.8) 17.4 —	ほぼ直立気味に立ち上がる口縁部 に続く制部はやや張る。	口縁部は丁寧なヨコナデで仕上げ、 上側部はナデで仕上げる。	外面の口縁部 から上側部に かけての部分 に陳化物 が付着する。	
24	"	"	— (4.8) 4.8 —	平底の底部で腹の張りが弱い。	ナデで仕上げる。		
25	"	"	— (4.2) 6.5 —	"	"	下脚部内面に 黒斑がある。	
26	"	"	— (3.5) 7.8 —	平底の底部である。	器表面が擦耗し、調整は不明であ る。		
27	"	"	— (3.6) 10.2 —	"	外面はタテハケのあとにナデで仕 上げ、内面はナデである。	底部からも しない。	
28	SR 2	壺	18.9 (3.2) — —	かなり強く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内面はヨコハケ のあとにヨコナデで仕上げる。		
29	"	"	— 17.8 (3.1) — —	強く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
30	"	"	— 20.4 (3.5) — —	"	口縁部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内面はヨコハケ のあとにヨコナデで仕上げる。		

辨別番号	造構器号	器種	法量 (cm)	口徑 筋肉 鰓後 側後	形態・文様	手 法	備考
31	S R 2	老	17.7 (2.9) — —		緩く外反する口縫部である。	口縫部はヨコナデで仕上げる。	
32	"	"	15.0 (2.2) — —		かなり緩く外反する口縫部で3倍 1対の穿孔がある。	"	
33	"	"	17.6 (5.5) — —		ゆるく外反する口縫部である。	口縫部外表面はヨコナデで仕上げ, 内面はヨコハケのあとにヨコナデ で仕上げる。	
34	"	"	20.6 (8.0) — —		口縫部はゆるやかに外反する。口 筋部の縫取りをしている。	口縫部外表面はヨコハケのあとにヨ コナデで仕上げ, 内面はヨコナデ で仕上げる。	薄手の巻か?
35	"	"	16.6 (4.0) — —		ゆるく外反する口縫部である。頭 部に2条のヘラ括沈線がある。	口縫部外表面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ, 内面はヨコハケ のあとにヨコナデで仕上げる。	
36	"	"	10.7 (5.4) — —		直立する兩部に緩く口縫部はゆる やかに外反する。頭部に6条のヘ ラ括沈線がある。	口縫部はヨコナデで仕上げ, 頭部 はナデで仕上げる。	やや細頭の巻 である。
37	"	"	15.1 (7.1) — —		直立気味の頭部に緩く口縫部はゆ るやかに外反する。頭部に7条の ヘラ括沈線を施し, その下に刺突文 をめぐらす。	口縫部外表面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ, 内面はヨコナデ である。頭部外表面はタテハケのあ とナデで仕上げ, 内面はナデであ る。	
38	"	"	18.8 (2.4) — —		ゆるやかに外反する口縫部で口唇 部に斜めを施す。頭部に1条のヘラ 括沈線がある。	口縫部外表面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ, 内面はヨコナデ で仕上げる。	
39	"	"	9.7 (5.7) — —		ゆるやかに外反する口縫部である。 口縫部に2個の穿孔がある。頭部に 7条のヘラ括沈線と3条の貼付突 起がある。	口縫部外表面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ, 内面はヨコハケ のあとにヨコナデで仕上げる。	やや細頭の巻 である。
40	"	"	19.4 (7.0) — —		かなり緩く外反する口縫部で頭部 に6条のヘラ括沈線と2条の貼付突 起がある。	表面が磨耗し, 調整は不明であ る。	
41	"	"	18.4 (6.9) — —		直立する頭部に緩く口縫部はかな り緩く外反する。頭部をヘラ括 沈線と貼付突起で飾る。	口縫部外表面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ, 内面はヨコハケ のあとにヨコナデで仕上げる。頭 部はナデで仕上げる。	
42	"	"	26.4 (5.2) — —		口縫部はゆるく外反する。口縫部 下端に前孔を入れる。頭部にヘラ括 沈線と貼付突起がある。	口縫部はヨコナデで仕上げる。	広口巻 である。 口縫部に2個 1対の穿孔が ある。
43	"	"	22.8 (10.0) — —		直立する頭部に緩く口縫部は緩く 外反する。頭部をヘラ括沈線と貼付 突起で飾る。	口縫部はヨコナデで仕上げる。頭 部外表面はナデで仕上げ, 内面はヨ コハケのあとにナデで仕上げる。	広口巻
44	"	"	11.8 (5.0) — —		むずかに外反する頭部に緩く口縫 部はかなり緩く外反する。頭部を 貼付突起で飾る。	口縫部はヨコナデで仕上げ, 頭部 はナデで仕上げる。	口縫部外表面に も2条の輪の 狭い貼付突起 がある。
45	"	"	18.8 (3.7) — —		ややゆるやかに外反する口縫部で ある。口縫部外表面に2条の痕跡起 帶がある。	II縫部はヨコナデで仕上げる。	薄手の巻

辨認番号	造模番号	基 構	法量 (cm) 口徑部 羽根 底径	形 狽・文 種	手 法	備 考
46	S R 2	臺	18.5 (3.7) —	ゆるく外反する口縫部である。口縫部に1条の糸縫起がある。	口縫部はヨコナデで仕上げる。	薄手の底である。
47	"	"	23.7 (3.1) —	かなり強く外反する口縫部である。	口縫部はヨコナデで仕上げる。口縫部をヨコナデにより強張する。	
48	"	"	14.6 (3.0) —	ゆるく外反する口縫部である。口縫部下端に糸目がある。	"	
49	"	"	18.6 (3.4) —	かなり強く外反する口縫部である。底部に2条のヘラ状突起がある。口縫部に小穿孔がめぐらされる。	口縫部はヨコナデにより仕上げる。	
50	"	"	20.9 (5.3) —	かなり強く外反する口縫部である。口縫部下端に糸目が施される。	口縫部外表面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。口縫部をヨコナデにより強張する。	
51	"	"	16.0 (2.8) —	かなり強く外反する口縫部である。口縫部内面に3条の貼付突筋がある。口縫部上端に糸目がある。	口縫部外表面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。	
52	"	"	18.6 (5.3) —	ゆるやかに外反する頭部に続く口縫部は強く外反する。口縫部下端に糸目がある。頭部に複数枚皮状又は透歯文がある。	口縫部外表面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頭部外表面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
53	"	"	21.8 (10.5) —	わずかに外反する頭部に続く口縫部は強く外反する。口縫部下端に糸目がある。	口縫部外表面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頭部外表面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	
54	"	"	21.0 (2.6) —	非常に強く外反する口縫部である。口縫部下端に糸目がある。	表面が磨耗し、調整は不明である。	
55	"	"	22.0 (2.3) —	強く外反する口縫部で口縫部下端に糸目がある。口縫部内面に複数枚皮状又は透歯文による施文があるが判然としない。	表面が磨耗し、調整は不明である。貼付口縫である。	
56	"	"	22.6 (2.5) —	かなり強く外反する口縫部である。口縫部の上下両端に糸目を施す。	口縫部外表面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。貼付口縫である。	
57	"	"	19.8 (2.2) —	強く外反する口縫部である。口縫部下端に糸目がある。	口縫部はヨコナデで仕上げる。貼付口縫である。	
58	"	"	20.9 (3.5) —	かなり強く外反する口縫部である。口縫部内面に3条の貼付突筋がある。口縫部内面に3条の小円孔がある。	表面が磨耗し、調整は不明である。	
59	"	"	28.5 (2.3) —	強く外反する口縫部である。口縫部に小円孔がめぐらされる。口縫部内面に3条の貼付突筋がある。	"	
60	"	"	14.4 (2.1) —	強く外反する口縫部である。口縫部の上下両端に糸目がある。口縫部内面に2条の貼付突筋がある。	口縫部はヨコナデで仕上げる。	口縫部に小円孔がめぐらされる。

標図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	LHIE 基高 測定 結果	形態・文様	手法	備考
61	SR 2	壺	21.2 (3.7) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部は軽く外反する。口縁部に割目がある。LHIE基高内面に2条の貼付突帯を施し、その間に模様波状文がある。	口縁部はヨコナデである。		口縁部内面の波状文はかなり乱れている。
62	"	"	27.2 (3.2) — —	軽く外反する口縁部である。口縁部の上下両端に割目を施す。口縁部に小内孔がめぐらされる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。貼付口縁である。		
63	"	"	26.4 (4.3) — —	かなり軽く外反する口縁部で頸部に5条の模様直線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。		
64	"	"	26.2 (2.9) — —	軽く外反する口縁部である。口縁部の上下両端に割目を施す。頸部に3条の模様直線文がある。	"		
65	"	"	26.4 (4.8) — —	かなり軽く外反する口縁部である。口縁部上端に割目を施す。頸部に5条の模様直線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
66	"	"	24.4 (3.4) — —	軽く外反する口縁部である。口縁部の上下両端に割目を施す。頸部に1条のヘラ模様がある。	"		
67	"	"	20.3 (8.2) — —	わずかに外反する頸部に続く口縁部はかなり軽く外反する。頸部を貼付突帯と模様直線文と波状文で飾る。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。		口縁部内面に3条の軽い貼付突帯がある。
68	"	"	20.7 (7.2) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部はかなり軽く外反する。口縁部には小内孔がめぐらされる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。		口縁部内面に小内孔がめぐらされる。頸部外面を貼付突帯と模様直線文で飾る。
69	"	"	23.3 (9.6) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部は軽く外反する。口縁部内面に2条の貼付突帯がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。		
70	"	"	23.6 (10.0) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部はかなり軽く外反する。口縁部内面に3条の貼付突帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。		
71	"	"	15.4 (6.7) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部は軽く外反する。口縁部に3倍1対の小内孔がある。頸部を貼付突帯と模様直線文で飾る。	"		
72	"	"	21.0 (6.0) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。口縁部に割目を施す。頸部を貼付突帯と模様波状文と直線文で飾る。	表面が磨耗し、調査は不明である。		
73	"	"	20.8 (5.0) — —	軽く外反する口縁部である。口縁部内面に2条の貼付突帯がある。	"		
74	"	"	26.6 (3.9) — —	軽く外反する口縁部である。口縁部内面に2条の貼付突帯がある。口縁部に3倍1対の小内孔がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
75	"	"	18.0 (4.0) — —	軽く外反する口縁部で、内面に3条の貼付突帯がある。口縁部に3倍1対の小内孔がある。	表面が磨耗し、調査は不明である。		

標本番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 器高 例 底径	形態・文様	手法	備考
76	SR 2	壺	20.2 (4.2) —	かなり強く外反する口縁部で内面に3条の割目突起がある。口縁部に3倍1割の小円孔がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
77	"	"	22.8 (8.1) —	ゆるく外反する壺部に続く口縁部はなめらかで外反する。口縁部内面に2条の貼付突起がある。口縁部に6割の割の小円孔がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付突起はタテハケのあとにヨコナデで仕上げる。内面はヨコハケのあとにヨコナデである。	壺部を貼付突起とヘラ施化線で飾る。
78	"	"	23.7 (9.8) —	やや斜行する壺部に続く口縁部はゆるやかで外反する。口縁部下端に削目がある。上縁部に2条の抜起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。壺部はナデで仕上げる。	
79	"	"	— (7.2) —	かなり弱く張る上縁部である。上縁部に4条の横擦痕直線文を配し、その下に乱れた横擦痕状文を施す。	上縁部はナデで仕上げる。	
80	"	"	16.9 (4.4) —	かなり強く外反する口縁部である。口縁部の上下両端に削目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
81	"	"	25.3 (3.1) —	強く外反する口縁部である。口唇部の上下両端に削目を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
82	"	"	16.4 (2.7) —	"	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。貼付口縁である。	
83	"	"	10.0 (2.5) —	"	器表面が磨耗し、調整は不明である。貼付口縁である。	
84	"	"	21.3 (4.7) —	かなり強く外反する口縁部である。口縁部の上下両端に削目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
85	"	"	25.4 (3.8) —	強く外反する口縁部である。口唇部の上下両端に削目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。貼付口縁である。	
86	"	"	20.6 (2.3) —	強く外反する口縁部である。口唇部の上下両端に削目を入れる。口縁部内面に彫像直線による削文がある。	器表面が磨耗し、調査は不明である。貼付口縁である。	
87	"	"	19.2 (5.1) —	ややゆるやかに外反する壺部に続く口縁部である。口縁部の上下両端に削目を施す。	"	
88	"	"	25.2 (7.1) —	ゆるやかに外反する壺部に続く口縁部はやや外反する。口縁部の上下両端に削目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、壺部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	
89	"	"	23.1 (10.6) —	直立気味の壺部に続く口縁部はかなり強く外反する。口縁部の上下両端に削目がある。	"	上縁部外面にも削円形の削文が施される。
90	"	"	20.0 (7.0) —	ゆるく外反する口縁部である。口縁部の上下両端に削目を施す。壺部下端に削文がある。	"	

標因番号	遺構番号	基 種	法量 (cm)	口縁 石底 周径 底深	形 態・文 様	手 法	備 考
91	S R 2	板	23.3 (6.0) —	直立気味の頸部に続く口縁部はかなり強く外反する。口唇部下端に刻目がある。	口縁部外側はヨコナデで仕上げ、内面はタテカケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外側は縱方向のアーチで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデ。		
92	〃	〃	13.8 (4.9) —	ゆるく外反する口縁部である。口唇部の上下両端に刻目がある。	器表面が軽く削減し、調整は不明であるが、口縁部内面には右下かり刃向のハケ目痕が残る。		
93	〃	〃	14.0 (5.4) —	ゆるく外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。底部下端にも列点文がめぐらされる。	口縁部外側はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。		
94	〃	〃	15.6 (3.7) —	ゆるやかに外反する口縁部で口唇部下端に刻目がある。	口縁部外側はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。		
95	〃	〃	14.8 (4.8) —	かなり強く外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
96	〃	〃	18.5 (4.8) —	ゆるやかに外反する口縁部である。	"		
97	〃	〃	14.6 (3.2) —	かなり強く外反する口縁部で口唇部下端に刻目がある。	口縁部外側はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。		
98	〃	〃	17.6 (9.6) —	直立する頸部に続く口縁部はゆるく外反する。口唇部下端に刻目がある。口縁部外側に2全の微隆起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	上頸部外側に3条の微隆起帯がある。頸部外側に2全の微隆起帯がある。	
99	〃	〃	19.6 (8.5) —	わずかに斜行する頸部に続く口縁部は強く外反する。頸部に縱方向の微隆起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外側はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	上頸部にも3条の微隆起帯がある。	
100	〃	〃	12.7 (3.6) —	強く外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	口縁部外側はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。		
101	〃	〃	20.7 (4.0) —	ゆるやかに外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	口縁部内面に墨斑がある。	
102	〃	〃	10.6 (5.0) —	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。	"	細頸曲か?	
103	〃	〃	11.4 (1.9) —	かなり強く外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	"	細頸曲か? 頸部に縱向底縫文がある。	
104	〃	〃	11.2 (4.7) —	わずかに外反する頸部に続く口縁部は強く外反する。口唇部下端に刻目がある。口縁部外側には見えない刻目がある。	口縁部外側はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外側はタテハケのあとにナデで仕上げる。	やや頸の細い者である。	
105	〃	〃	12.9 (3.7) —	かなり強く外反する口縁部である。口唇部下端に刻目がある。	口縁部外側はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。		

捕獲番号	造構番号	器種	法長 (cm)	口縫 器高 後脚 底径	形態・文様	手 足	備考
106	SR 2	參	14.3 (4.6) —	ゆるく外反する口縫部である。口 唇部下端に創目がある。	口縫部はヨコナデで仕上げる。貼 付口縫である。		
107	"	"	18.2 (2.8) —	かなり鋭く外反する口縫部である。 口唇部下端に創目がある。	"		
108	"	"	17.4 (3.4) —	"	口縫部外縫はヨコナデで仕上げ, 内縫はヨコハケのあとにヨコナデ で仕上げる。貼付口縫である。		
109	"	"	20.4 (3.0) —	ゆるやかに外反する口縫部で口器 底下端に創目を施す。	口縫部はヨコナデで仕上げる。貼 付口縫である。		導手の姿であ る。
110	"	"	19.9 (4.6) —	ゆるく外反する頸部に崎く口縫部 は鋭く外反する。頭部に1条の突 起を貼付し、その下に横隔波状文 を施す。	口縫部はヨコナデで仕上げ、頭部 はナデで仕上げる。貼付口縫であ る。		
111	"	"	17.5 (6.0) —	ゆるく外反する口縫部に崎く口縫部 は鋭く外反する。口縫部下端に創 目を施す。頸部外縫に面方向への テラ墨状飾がある。	"		
112	"	"	22.3 (4.7) —	鋭く外反する口縫部である。口唇 上縫に横隔波状体による創目が部 分的に残る。口縫部内縫に横隔 波状文がある。	口縫部外縫はヨコナデで仕上げ, 内縫はヨコハケのあとにヨコナデ で仕上げる。		
113	"	"	35.1 (6.1) —	直立気味の頭部に崎く口縫部はゆ るく外反する。口唇部に創目があ る。	口縫部はヨコナデで仕上げる。頭 部内縫はタテハケのあとにナデで 仕上げ、頭部にはナデがある。		上縫部に1各 のヘタ横波状 物と、その 子に創文を めぐらす。
114	"	"	18.0 (3.2) —	かなり鋭く外反する口縫部である。 口唇部に創目を施す。	口縫部外縫はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内縫はヨコナデ である。		
115	"	"	13.0 (7.0) —	ほぼ直立気味に立ち上がる頭部に 崎く口縫部はゆるやかに外反する。 口唇部に創目がある。	口縫部はヨコナデで仕上げる。頭 部はナデで仕上げる。貼付口縫であ る。		
116	"	"	15.2 (6.2) —	わずかに外斜する頭部に崎く口縫 部はゆるやかに外反する。口唇部 に創目を施す。	器表面が擦耗し、調査は不明であ る。貼付口縫である。		
117	"	"	13.8 (7.2) —	"	器表面が剥離し、調査は不明であ る。貼付口縫である。		
118	"	"	15.0 (5.4) —	"	口縫部はヨコナデで仕上げ、頭部 はナデで仕上げる。貼付口縫であ る。		
119	"	"	20.8 (4.6) —	わずかに外反する頭部に崎く口縫 部は鋭く外反する。口唇部に創目 を施す。	"		
120	"	"	26.0 (4.0) —	鋭く外反する口縫部である。口 唇部に別格子状に創目を入れる。 口縫部内縫にはハケ状原体で房状文 を施す。	口縫部外縫はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内縫はヨコハケの あとにヨコナデで仕上げる。貼 付口縫である。		施文はハケ状 原体で施して いる。

博物番号	造構番号	器種	法量 (cm)	口縁部内 外反する 部位	形態・文様	手 法	備 考
121	S R 2	壺	30.8 (5.0) — —	かなり強く外反する口縁部である。 口唇部にハケ状原体による割目を施す。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、 内面はヨコハケのあとにヨコナデ で仕上げる。貼付口縁である。		
122	"	"	36.9 (4.6) — —	強く外反する口縁部で口唇部にハ ケ状原体による割目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼 付口縁である。		
123	"	"	31.0 (2.8) — —	かなり強く外反する口縁部である。 口唇部に点穴文風の割目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内面はヨコナデ で仕上げる。	広口壺である。	
124	"	"	19.4 (7.8) — —	やや斜行する頬部に強く口縁部は 強く外反する。口唇部に割目を施し、 頬部下端に1条の貼付文帯が ある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頬部 はナデで仕上げる。貼付口縁であ る。		
125	"	"	24.2 (4.5) — —	強く外反する口縁部である。口唇 部に割目を施し、口縁部内面に橋 状原体で扁影文をめぐらす。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、 内面はヨコハケのあとにヨコナデ で仕上げる。貼付口縁である。		
126	"	"	16.5 (4.2) — —	かなり強く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内面は表面が 磨耗し、不明である。貼付口縁で ある。		
127	"	"	15.1 (4.2) — —	強く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内面はヨコハケ のあとにヨコナデで仕上げる。貼 付口縁である。		
128	"	"	15.3 (3.9) — —	かなり強く外反する口縁部である。	"		
129	"	"	15.6 (2.2) — —	強く外反する口縁部である。	"		
130	"	"	12.0 (4.4) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げ、貼付 口縁である。		
131	"	"	15.1 (5.7) — —	直立する頬部に強く口縁部は強く 外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内面はヨコハケ のあとにヨコナデで仕上げる。貼 付口縁である。		
132	"	"	16.0 (3.4) — —	かなり強く外反する口縁部である。 表面が磨耗し、調整は不明であ る。			
133	"	"	15.9 (3.0) — —	強く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内面はヨコハケ のあとにヨコナデで仕上げる。貼 付口縁である。		
134	"	"	17.0 (5.4) — —	わずかに外反する頬部に強く口縁 部は強く外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内面はヨコハケ のあとにヨコナデで仕上げる。頬 部外面はタテハケのあとにナデで 仕上げる。貼付口縁である。		
135	"	"	16.2 (2.0) — —	強く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼 付口縁である。		

辨認番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 周径 底径	形態・文様	手 柱	備考
136	SR 2	盃	14.0 (3.1) —	軽く外反する口縁部である。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
137	"	"	20.2 (3.1) —	"	口縁部外面はタテハケのあとヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
138	"	"	18.5 (5.6) —	ゆるやかに外反する頸部に軽く口縁部は軽く外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	口縁部はヨコナデとなりぬき文様になる。
139	"	"	17.2 (3.2) —	軽く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
140	"	"	18.4 (6.2) —	ゆるく外反する頸部に軽く口縁部は軽く外反する。	裏表が磨耗し、調査は不明である。貼付口縁である。	
141	"	"	15.0 (3.4) —	かなり軽く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
142	"	"	17.8 (3.9) —	軽く外反する口縁部である。	裏表が磨耗し、調査は不明である。貼付口縁である。	
143	"	"	18.0 (4.8) —	かなり軽く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとヨコナデで仕上げる。内面はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
144	"	"	11.6 (4.4) —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	
145	"	"	17.9 (7.2) —	ゆるく外反する頸部に軽く口縁部は軽く外反する。	口縁部外面はタテハケのあとヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとナデで仕上げ、内面はナデ。貼付口縁である。	
146	"	"	20.7 (5.9) —	口縁部は軽く外反する。	裏表が磨耗し、調査は不明である。貼付口縁である。	
147	"	"	11.1 (3.8) —	やや削形する頸部に軽く口縁部は軽く外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	
148	"	"	20.7 (3.7) —	軽く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
149	"	"	19.5 (6.9) —	ゆるやかに外反する頸部に軽く口縁部は軽く外反する。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ磨きで仕上げる。頸部はナデである。貼付口縁である。	
150	"	"	11.5 (5.6) —	直立気味の頸部に軽く口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部外面はタテハケのあとヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとヨコナデである。頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	

標本番号	遺構番号	岩種	法算 (cm)	口縁部高 度	形態・文様	手法	備考
151	SR 2	巖	19.8 (3.7) — —	19.8 (3.7) — —	軽く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
152	—	—	12.7 (5.2) — —	12.7 (5.2) — —	やや斜行する頭部に続く口縁部は軽く外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
153	—	—	17.3 (1.9) — —	17.3 (1.9) — —	軽く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。貼付口縁である。	
154	—	—	20.1 (7.9) — —	20.1 (7.9) — —	ゆるやかに外反する頭部に続く口縁部は軽く外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頭部はヨコナデで仕上げる。口縁部はヨコナデにより押んでいる。貼付口縁である。	
155	—	—	16.0 (2.8) — —	16.0 (2.8) — —	直立する頭部に続く口縁部は軽く外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	上側表面に 鱗状炭化物が 付着する。
156	—	—	24.6 (2.9) — —	24.6 (2.9) — —	軽く外反する口縁部である。口縁部外面に刻目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	やや広口の巖である。
157	—	—	15.8 (3.2) — —	15.8 (3.2) — —	ゆるやかに外反する口縁部外面に刻目を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
158	—	—	23.8 (1.6) — —	23.8 (1.6) — —	軽く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
159	—	—	24.4 (3.6) — —	24.4 (3.6) — —	—	口縁部はヨコナデで仕上げる。口縁部はヨコナデによりや回んでいる。貼付口縁である。	
160	—	—	22.8 (2.8) — —	22.8 (2.8) — —	—	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。貼付口縁である。	
161	—	—	24.3 (1.7) — —	24.3 (1.7) — —	—	器表面が擦耗し、調査は不明である。	
162	—	—	22.9 (3.3) — —	22.9 (3.3) — —	かなり軽く外反する口縁部である。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	やや広口の巖である。
163	—	—	24.3 (3.9) — —	24.3 (3.9) — —	—	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
164	—	—	22.5 (4.5) — —	22.5 (4.5) — —	—	器表面が擦耗し、調査は不明である。貼付口縁である。	口縁部内面に 黒斑がある。
165	—	—	20.9 (4.0) — —	20.9 (4.0) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	

検査番号	通査番号	器種	法量 (cm) 口縁部 側面 底面	形態・文様	手 足	備考
166	S R 2	卷	24.2 (5.3) — —	かなり強く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
167	"	"	22.8 (3.1) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
168	"	"	23.5 (3.4) — —	かなり強く外反する口縁部である。	"	
169	"	"	18.5 (4.8) — —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部は強く外反する。	"	
170	"	"	13.8 (3.7) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
171	"	"	18.1 (5.9) — —	斜行する頸部に続く口縁部はゆるく外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。	
172	"	"	12.6 (3.1) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	裏表面は磨耗し、調製は不明である。貼付口縁である。	
173	"	"	14.0 (3.0) — —	"	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
174	"	"	15.4 (3.3) — —	"	"	
175	"	"	15.4 (2.7) — —	強く外反する口縁部である。	"	
176	"	"	17.0 (4.0) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	"	
177	"	"	12.1 (3.1) — —	ややゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
178	"	"	15.0 (2.7) — —	強く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
179	"	"	14.8 (2.7) — —	ややゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。裏表外面はヨコハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。貼付口縁である。	口縁部外面に保状炭化物が付着する。
180	"	"	6.9 15.7 11.4 4.5	ゆるやかに外反する口縁部に卵型の脛部が続く形態である。	口縁部はヨコナデで仕上げ、裏表外面はヨコハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。貼付口縁である。	完形である。

検査番号	追跡番号	器種	法量 (cm)	口縁部 周長 側面 底径	形態・文様	手 法	備考
181	SR 2	雀	16.4 (3.0) —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縫である。		
182	—	—	16.8 (4.2) —	"	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
183	—	—	19.8 (7.6) —	"	底表面が削耗し、調整が不明である。貼付口縫である。		
184	—	—	17.0 (3.7) —	かなり強く外反する口縁部である。	口縁部外側はヨコハケのあとにヨコタケで仕上げる。底面はヨコナデで仕上げる。貼付外表面はヨコナデで仕上げ、内面は紙方向のナデ。貼付口縫である。		
185	—	—	17.0 (3.3) —	直立する兩側に缺く口縁部は強く外反する。口唇部に刺目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縫である。	薄手の雀である。	
186	—	—	21.6 (4.0) —	かなり強く外反する口縁部である。口唇部下端に刺目がある。	口縁部外面はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。貼付口縫である。	"	
187	—	—	20.0 (4.0) —	強く外反する口縁部である。口唇部外面に刺目がある。口縁部外面に2条の後縫起帯がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコタケで仕上げ、内面はヨコナデである。	薄手の雀である。口縁部外面に横掛直筋文がある。	
188	—	—	20.6 (4.8) —	ゆるやかに外反する口縁部である。口唇部に刺目がある。口縁部外面に2条の後縫起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	薄手の雀である。	
189	—	—	20.2 (3.7) —	口縁部は強く外反する。口唇部に刺目があり。口縁部外面に2条の後縫起帯がある。	"	"	
190	—	—	19.7 (2.2) —	かなり強く外反する口縁部である。口唇部に刺目がある。口縁部外面に2条の後縫起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縫である。	"	
191	—	—	20.8 (2.8) —	強く外反する口縁部である。口縁部外面に刺目を入れ、その下に2条の後縫起帯をめぐらし、列点文を加えた。	"	"	
192	—	—	19.5 (2.7) —	強く外反する口縁部である。口唇部下端に刺目を入れる。口縁部外面に2条の後縫起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	薄手の雀である。口縁部外面に横掛直筋文がある。	
193	—	—	23.4 (1.5) —	強く外反する口縁部で口唇部下端に刺目を入れ、その下に2条の後縫起帯をめぐらす。	"	口縁部外面に紙方向の横状序文がある。	薄手の雀である。
194	—	—	27.0 (1.7) —	非常に強く外反する口縁部で口唇部に刺目をめぐらす。口縁部外面に2条の後縫起帯がある。	"		薄手の雀である。
195	—	—	20.6 (2.6) —	ほぼ直立気味にゆるく外反する口縁部である。口唇部に刺目を施す。	"		薄手の雀で、口縁部外面に保状炭化物が付着する。

拂団番号	造綱番号	器種	法量 (cm)	口徑 器高 柄径 底径	形態・文様	手 法	備 考
196	S R 2	壺	16.6 (5.4) —	ゆるく外反する頸部に続く口縁部はなめらかに外反する。口唇部下端に刻目がある。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、開口部外面はナデである。口縁部内面は微隆起が施されし、調整が不明である。	口縁部外面に横状波紋がある。手の感である。	
197	〃	〃	11.0 (6.0) —	ゆるやかに外反する口縁部である。口縁部外面には2条の微隆起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。	薄手の感か？	
198	〃	〃	12.1 (6.5) —	直立気体の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口縁部外面に刻目文を施し、その下に災文を貼付する。	器表面が磨耗し、調整が不明である。		
199	〃	〃	12.4 (7.0) —	内窪して屈曲する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。		
200	〃	〃	13.8 (2.3) —	かなり強く外反する口縁部である。口縁部内面には横状波紋により山形文をめぐらす。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	口縁部内面に1条の花線を入れ、施文部位の区画をしている。	
201	〃	〃	19.0 (3.2) —	強く外反する口縁部である。口縁部内面には幅の狭い2条の貼付点をめぐらし、その上にハラ刺繡点文を加える。	—		
202	〃	〃	17.1 (4.5) —	ゆるやかに外反する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口縁部外面に2条のハラ刺繡点文を施す。その上にヘラ状波紋で刻目を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はナデである。	口縁部外面の上端にはハラ刺繡点文による正反がある。貼付口縁である。	
203	〃	〃	23.7 (2.5) —	強く外反する口縁部で内面に3条の微隆起帯を施している。	口縁部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。		
204	〃	〃	14.3 (4.7) —	直立気体の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口縁部内面に横状波紋がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はハラ刺繡点文のあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。		
205	〃	〃	11.2 (3.6) —	かなり強く外反する口縁部である。口縁部内面に横状波紋と山形文がある。	口縁部はヨコナデである。貼付口縁である。		
206	〃	〃	16.3 (7.1) —	ゆるく外反する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部は2条の回線文がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。貼付口縁である。		
207	〃	〃	16.7 (14.3) —	直立気体の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口唇部に2条の回線文がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。	上縫部外面はタテハケで仕上げ、内面はナデである。	
208	〃	〃	27.6 (12.0) —	ゆるく外反する頸部に続く口縁部は強く外反する。口縁部に3条の回線文を施す。ヒゲ部に2条の點文を加える。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。		
209	〃	〃	21.9 (5.7) —	かなり強く外反する口縁部で口唇部に3条の山形文が施される。	器表面が磨耗し、調整が不明である。		
210	〃	〃	22.0 (8.4) —	ゆるく外反する頸部に続く口縁部は強く外反する。口縁部に4条の回線文がめぐらされる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。		

特許番号	造模番号	基種	法値 (cm)	口唇 部周囲 延長	形態・文様	手 法	備考
211	S R 2	造	21.6 (5.1) —	かなり鋭く外反する口縁部で口唇部に5条の凹回線文がある。口縁部外面に1~2条割裂点文がめぐられる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。		
212	"	"	14.3 (7.0) —	直立気味の頭部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口唇部に4条の凹回線文があり、その上に割目を部分的に入れる。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頭部はナデで仕上げる。	頭部外面にはハケ状筋体で羽状文を施す。	
213	"	"	16.6 (8.9) —	わずかに斜行する頭部に続く口縁部は鋭く外反する。上唇部もやや張る。口唇部に1条の凹回線文を入れる。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頭部はナデで仕上げる。上唇部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口縁部に円形の竹筋文を施す。頭部下側にも削り文をめぐらす。	
214	"	"	18.2 (3.1) —	鋭く外反する口縁部で口唇部に2条の凹回線文を施す。口唇部に円形竹筋文がみられ、口縁部外面には割点文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
215	"	"	13.7 (2.9) —	直立気味の頭部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口唇部に2条の凹回線文がある。	"		
216	"	"	18.8 (2.5) —	ゆるやかに外反する口縁部で口唇部に2条の凹回線文がある。	"	口縁部内面に小さな黒斑がある。	
217	"	"	17.2 (3.0) —	かなり鋭く外反する口縁部で口唇部に2条の山筋文がある。	"		
218	"	"	15.4 (4.2) —	直立する頭部に続く口縁部は鋭く外反し、口唇部に2条の凹回線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頭部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。		
219	"	"	14.6 (7.3) —	ゆるやかに外反する口縁部で口唇部に3条の凹回線文がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頭部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。		
220	"	"	17.0 (3.3) —	ややゆるやかに外反する口縁部で口唇部に3条の凹回線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
221	"	"	14.1 (3.9) —	斜行する頭部に続く口縁部はかなり鋭く外反する。口唇部に3条の凹回線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頭部はナデで仕上げる。		
222	"	"	13.3 (3.5) —	ゆるやかに外反する口縁部で口唇部に3条の山筋文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
223	"	"	15.2 (3.4) —	直立気味の頭部に続く口縁部は鋭く外反し、口唇部の縦取りをして2条の凹回線文を入れる。	"		
224	"	"	16.4 (4.4) —	ゆるやかに外反する頭部に続く口縁部は鋭く外反し、口唇部に2条の凹回線文を入れる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。		
225	"	"	14.0 (6.1) —	ゆるやかに外反する口縁部で口唇部に2条の山筋文を入れる。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頭部はナデで仕上げる。		

総合番号	遺構番号	種類	法縦 基高 側面 直角	口縫 基部 脇部	形態・文様	手法	備考
226	SR 2	垂	18.0 (6.2) — —	直立気味の頭部に続く口縫部は約 く外反し、口縫部に2条の偽縫跡 文を施す。	口縫部はヨコナデで仕上げ、頭 部外面はタテハケのあとビナデで 仕上げ、内面はヨコハケのあとニ ナデで仕上げる。		
227	—	—	15.0 (5.0) — —	かなり鋭く外反する口縫部である。 口縫部に2条の偽縫跡文がある。 頭部外面に櫛状直縫文がある。	表面が磨耗し、調査は不明であ る。		
228	—	—	10.8 (5.0) — —	ゆるやかに外反する頭部に続く口 縫部は鋭く外反する。口縫部に2 条の偽縫跡文がある。	口縫部はヨコナデで仕上げ、頭部 はナデで仕上げる。	頭部下端にハ ケ状痕跡によ る例文がめぐらされる。	
229	—	—	20.0 (5.8) — —	ゆるやかに外反する口縫部で口縫 部に1条の偽縫跡文が施す。	口縫部はヨコナデで仕上げ、頭部 はナデで仕上げる。貼付口縫である。		
230	—	—	19.4 (3.5) — —	非常に鋭く外反する口縫部で口縫 部に1条の偽縫跡文がある。	口縫部はヨコナデで仕上げる。 貼付口縫である。		
231	—	—	16.0 (2.4) — —	鋭く外反する口縫部である。	表面が磨耗し、調査は不明であ る。		
232	—	—	17.4 (3.6) — —	かなり外反する口縫部である。	表面が磨耗し、調査は不明であ る。		
233	—	—	11.7 (5.0) — —	直立気味の頭部に続く口縫部はや やかに外反する。	口縫部はヨコナデで仕上げ、頭部 はナデで仕上げる。		
234	—	—	18.4 (7.0) — —	ゆるく外反して立ち上がる口縫部 である。	口縫部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内面はヨコハケ のあとにヨコナデで仕上げる。		
235	—	—	14.9 (6.7) — —	直立気味の頭部に続く口縫部はゆ やかに外反する。	口縫部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内面はヨコハケ のあとにヨコナデで仕上げる。頭 部はハケ調整のあとにナデ。	口縫部外側に 大きな黒斑が ある。	
236	—	—	13.3 (3.7) — —	直立気味の頭部に続く口縫部は短 いが鋭く外反する。口縫部に竹骨 状工具による円形の網文がある。	口縫部はヨコナデで仕上げ、頭部 はナデで仕上げる。	頭部上端にも 剥がれがめぐら される。	
237	—	—	(11.1) (23.6) 17.6 5.8	直立気味に立ち上がる口縫部に削 製の頭部が鋭く。	頭部外面はタテハケのあとにナデ で仕上げ、内面はナデである。削 部は表面が磨耗し、調査は不 明である。		
238	—	—	13.2 (6.3) — —	直立する頭部に続く口縫部はゆる やかに外反する。	表面が磨耗し、調査は不明であ る。		
239	—	—	13.2 (3.5) — —	ややゆるやかに外反する口縫部で ある。	口縫部はヨコナデで仕上げる。		
240	—	—	15.4 (10.1) — —	わずかに外反気味に立ち上がる口 縫部である。	口縫部外面はヨコナデでは上げ られずヨコハケのあとにヨコナデ で仕上げる。頭部外面はタテハケ のあとにナデ、内面はナデで仕上 げる。		

標本番号	遺構番号	基種	法長 (cm)	口縫部 基底 底面	形態・文様	手 法	備 考
241	SR 2	齒	14.7 (5.5) — —	ゆるく外反気味に立ち上がる口縫部である。	口縫部はヨコナデで仕上げ、頭部はナデで仕上げる。	"	
242	"	"	12.6 (5.7) — —	ゆるやかに外反しながら立ち上がる頭部に続く口縫部は短いが、強く外反する。	"	"	
243	"	"	14.4 (12.0) — —	直立気味に立ち上がる口縫部に続く上縫部は張りがない。	唇表面が磨耗し、潤滑は不明である。	"	
244	"	"	14.2 (5.0) — —	わずかに斜行する頭部に続く口縫部は短いが、強く外反する。	口縫部はヨコナデで仕上げ、頭部はナデで仕上げる。	頭部外縫に輪積の2条の黒帯状線がある。	
245	"	"	12.0 (2.8) — —	ゆるく外反する頭部に続く口縫部は短いが強く外反する。口縫部はヨコナデによりやくむ。	口縫部外縫はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。		
246	"	"	8.6 (11.5) — —	ほぼ直立しながら立ち上がる細長い口縫部に続く上縫部は張りがない。	口縫部外縫はタテハケのあとに輪積方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。上縫部はナデで仕上げる。	結果歯か?	
247	"	"	16.0 (6.0) — —	ほぼ直立する頭部に続く口縫部はなめらかに外反する。	口縫部外縫はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頭部はナデで仕上げる。	磨光面が磨耗もしくは剥落する。	
248	"	"	16.4 (8.8) — —	かなり強く外反する口縫部に続く上縫部は張りがない。頭部下端に1度のヘラ磨き線がある。	口縫部外縫はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上縫部はナデで仕上げる。上縫部内縫は輪積方向のナダで仕上げる。		
249	"	"	17.4 (6.4) — —	ゆるく外反しながら立ち上がる頭部に続く口縫部はかなり強く外反する。	口縫部外縫はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頭部外縫はタテハケのあとにナデで仕上げる。内面はナデで仕上げる。	頭部内縫に輪積み或形板が残る。	
250	"	"	17.0 (5.6) — —	直立して立ち上がる頭部に続く口縫部はゆるく外反する。	口縫部はヨコナデで仕上げ、頭部はナデである。		
251	"	"	27.0 (6.3) — —	ゆるく外反して立ち上がる頭部に続く口縫部はなめらかに外反する。	口縫部外縫はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。		
252	"	"	24.1 (11.9) — —	ゆるく外反して立ち上がる頭部に続く口縫部はゆるやかに外反する。	口縫部外縫はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頭部外縫はタテハケのあとにナデで仕上げる。内面はナデである。上縫部はナデで仕上げる。		
253	"	"	15.6 (4.8) — —	ゆるく外反する口縫部である。	口縫部外縫はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縫である。	頭部外縫に輪積み或形板が残る。	
254	"	"	13.1 (8.3) — —	直立気味の頭部に続く口縫部はゆるく外反する。上縫部の張りは弱い。	口縫部外縫はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上縫部外縫はタテハケのあとにナデで仕上げる。	上縫部内縫は輪積方向のナダで仕上げる。貼付口縫である。	
255	"	"	15.5 (8.2) — —	直立気味に立ち上がる頭部に続く口縫部は短いが強く外反する。	口縫部外縫はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上縫部外縫はタテハケのあとにナデで仕上げる。内面はヨコハケのあとにナデ貼付口縫である。		

種別番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 器高 横径 底径	形態・文様	手 法	備考
256	SR 2	壺	20.8 (8.0) — —	直立状態の腹部に統く口縁部はゆるやかに外反する。上縁部の盛りは低い。腹部下縁にハラ彫刻文がある。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	
257	"	"	14.0 (9.6) — —	ほぼ直立状態で立ち上がる腹部に統く上縁部は非常に強く張り出す。	表面が磨耗し、調整は不明な点が多い。上縁部内面は右下がり方向のヘラ削りで仕上げる。	
258	"	"	14.4 (4.2) — —	直立して立ち上がる腹部に統く口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げ、腹部はナデで仕上げる。	口縁部外面に漆状焼物が付着する。
259	"	"	14.6 (3.6) — —	かなり強く外反する口縁部である。	表面が磨耗し、調整は不明である。口縁部外面にハラ目盛が残る。	
260	"	"	15.9 (7.8) — —	ほぼ直立して立ち上がる腹部に統く口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。腹部はハラ目盛がある。	
261	"	"	13.7 (3.9) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
262	"	"	18.8 (2.5) — —	かなり強く外反する口縁部である。	"	
263	"	"	17.0 (6.3) — —	ほぼ直立して立ち上がる腹部に統く口縁部はなめらかに外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、腹部はナデで仕上げる。表面は表面が磨耗し、調整は不明である。	
264	"	"	27.8 (5.8) — —	ゆるく外反して立ち上がる腹部に統く口縁部は強く外反する。口縁部に二枚貝の腹縫部で施文した跡目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。腹部はハラ調整のあとにナデである。	
265	"	"	14.9 (2.9) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	器の口縁部からしない。口縁部外面に漆状焼物が付着する。
266	"	"	17.3 (3.5) — —	斜行する腹部に統く口縁部は弱いが強く外反する。	"	
267	"	"	14.2 (4.7) — —	直立する腹部に統く口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。腹部はタテハケのあとにナデで仕上げる。颈部内面はナデである。	
268	"	"	11.1 (4.1) — —	斜行する腹部に統く口縁部はややゆるやかに外反する。	表面が磨耗し、調整は不明である。	
269	"	"	13.9 (3.9) — —	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	器の口縁部かもしない。
270	"	"	14.1 (5.5) — —	わざかに外反して立ち上がる口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	

機器番号	構造番号	器種	法量 (cm) 頭径 底径	形態・文様	手 法	備 考
271	SR 2	轟	11.4 (4.7) — —	ゆるく外反する口縁部でやや脣が張る。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとヨコナデで仕上げる。貼付口縁の名残りをとどめる。	
272	—	—	16.6 (5.9) — —	わずかに斜行する頭部に続く口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部は軽いヨコナデで仕上げ、頭部はナデで仕上げる。	
273	—	—	15.2 (4.9) — —	斜行する頭部に続く口縁部はかなり鋭く外反する。	器表面が磨耗し、調査は不明である。	
274	—	—	17.9 (4.8) — —	なめらかに外反する口縁部である。	口縁部は軽いヨコナデで仕上げる。	
275	—	轟	21.6 (5.5) — —	如意形に外反する口縁部に続く上脣部の張りは弱い。	器表面が磨耗し、調査は不明である。	
276	—	—	24.7 (4.4) — —	如意形にゆるく外反する口縁部で脣の張りは弱い。	口縁部外面は軽いタチハケのあとヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。	
277	—	—	21.2 (5.3) — —	如意形に非常に鋭く外反する口縁部で脣の張りは弱い。	器表面が磨耗し、調査は不明である。	
278	—	—	19.4 (7.8) — —	如意形にかなり鋭く外反する口縁部で脣の張りは弱い。口縁部に刺目を施す。	口縁部外面はタチハケのあとヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。上脣部外面はタチハケのあとヨコナデで仕上げ、内面はナデ。	上脣部外面に黒斑がある。
279	—	—	21.0 (4.6) — —	如意形にゆるく外反する口縁部で口縁部に刺目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上脣部外面はナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとヨコナデで仕上げる。	
280	—	—	20.0 (2.5) — —	—	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
281	—	—	21.9 (3.2) — —	如意形にゆるく外反する口縁部である。上脣部に3条のヘラ筋の跡がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。器表面が磨耗する。	
282	—	—	23.0 (3.5) — —	如意形にゆるやかに外反する口縁部である。口縁部に刺目を施し、上脣部に6条のヘラ筋の跡がある。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとヨコナデで仕上げる。上脣部はナデで仕上げる。	
283	—	—	20.9 (4.0) — —	逆L字状口縁の轟でやや脣が張る。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上脣部はナデで仕上げる。	
284	—	—	24.5 (3.9) — —	逆L字状口縁の轟で口縁部に刺目を施す。上脣部に10条のヘラ筋の跡がある。	口縁部は丁寧なヨコナデで仕上げ、脣部は丁寧なナデで仕上げる。	胎土は精選され、成形も非常に良好な精製の要である。
285	—	—	16.0 (4.4) — —	如意形にゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	

検査番号	通査番号	器種	法量 (cm)	口唇 器高 脣延 底縫	形態・文様	手法	備考
286	B R 2	蟹	20.8 (9.8) —	如意形にゆるやかに外反する口縫部に続く前部はやや張り出す。上脣部に3条の微隆起がある。	口縫部はヨコナデで仕上げ、上脣部はナデで仕上げる。		
287	—	—	17.4 (6.4) —	如意形に軽く外反する口縫部で脣の張りは弱い。口唇部に前部を差し、上脣部に1条の突起がある。	口縫部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。上脣部はナデで仕上げる。貼付口縫である。		
288	—	—	14.9 (7.4) —	如意形にややゆるやかに外反する口縫部に続く前部は張りが弱い。	口縫部はヨコナデで仕上げ、上脣部はナデで仕上げる。		
289	—	—	12.6 (8.9) —	如意形にゆるく外反する口縫部に続く前部は張りが弱い。	口縫部はヨコナデで仕上げ、上脣部はナデで仕上げる。口唇部はヨコナデで仕上げる。	やや小形の蟹である。上脣部外面にかなり大きな黒斑がある。	
290	—	—	13.4 (15.8) 13.1	如意形にかなり軽く外反する口縫部で脣の張りが弱い。前部が細く。	口縫部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。前部外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。内面はナデで仕上げる。	貼付口縫の體で下脣部外面にかなり大きな黒斑がある。	
291	—	—	14.0 (3.9) —	くの字状に軽く外反する口縫部に続く上脣部はやや張り出す。口唇部の縫取りをして2条の回紋文を入れる。	口縫部はヨコナデで仕上げる。上脣部はナデで仕上げる。	跳び上がり口縫である。	
292	—	—	16.0 (3.4) —	くの字状にかなり軽く外反する口縫部で口唇部に3条の回紋文を施す。	口縫部はヨコナデで仕上げる。	—	
293	—	—	16.8 (2.4) —	くの字状に軽く外反する口縫部で口唇部の縫取りをして2条の回紋文をめぐらす。	—	—	
294	—	—	15.2 (3.3) —	くの字状に軽く外反する口縫部で上脣部に2条の偽回紋文を施す。	口縫部はヨコナデで仕上げる。上脣部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ。内面はナデである。	—	
295	—	—	14.8 (3.7) —	くの字状にかなり軽く外反する口縫部で口唇部に2条の回紋文を施す。	口縫部はヨコナデで仕上げる。上脣部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ。内面は横方向のヘラ割りである。		
296	—	—	15.2 (2.5) —	くの字状に軽く外反する口縫部で上脣部に3条の回紋文を施す。	口縫部はヨコナデで仕上げる。	跳び上がり口縫である。	
297	—	—	12.9 (2.6) —	くの字状に軽く外反する口縫部で口唇部に2条の偽回紋文が施される。	口縫部はヨコナデで仕上げる。上脣部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ。内面はナデである。	—	
298	—	—	13.8 (3.2) —	くの字状に非常に軽く外反する口縫部で口唇部の縫取りをして2条の回紋文を施す。	—	やや跳び上がり口縫である。	
299	—	—	14.4 (2.4) —	くの字状に軽く外反する口縫部で口唇部の縫取りをして3条の偽回紋文を施す。	口縫部はヨコナデで仕上げる。		
300	—	—	13.1 (2.6) —	くの字状にやや軽く外反する口縫部で口唇部の縫取りをして3条の偽回紋文を施す。	口縫部はヨコナデで仕上げる。上脣部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ。内面はナデである。	跳び上がり口縫である。	

検査番号	通査番号	器種	法量 (cm)	口唇 基部 屈筋 屈筋	形態・文様	手 法	備考
301	SR 2	蟹	15.2 (3.1) —	くの字状にゆるやかに外反する口 縫部である。口唇部の縫取りをして 3条の偽回縫文を施す。	口縫部はヨコナデで仕上げる。		
302	"	"	13.6 (3.1) —	くの字状にゆるやかに外反する口 縫部で口唇部の縫取りをして 2条の偽回縫文を施す。	"	口縫部外面に 環状硬化物が 付着する。	
303	"	"	12.5 (3.5) —	くの字状にゆるやかに外反する口 縫部で口唇部に1条の偽回縫文を 施す。	口縫部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内面はヨコハケ のあとにヨコナデで仕上げる。		
304	"	"	17.4 (3.0) —	くの字状に軽く外反する口縫部で 口唇部を拡張して2条の偽回縫文を 施す。	口縫部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内面はヨコナデ である。		
305	"	"	13.3 (2.6) —	くの字状に軽く外反する口縫部で 口唇部を拡張して、2条の偽回縫 文を施す。	口縫部はヨコナデで仕上げる。	跳び上がり口 縫である。	
306	"	"	12.1 (2.9) —	くの字状に軽く外反する口縫部で 口唇部がややほんじている。	"	"	
307	"	"	16.2 (3.5) —	くの字状にゆるく外反する口縫部 で口唇部に2条の偽回縫文を施す。	"		
308	"	"	16.9 (4.5) —	くの字状にかなり軽く外反する口 縫部で口唇部に2条の偽回縫文を 施す。	口縫部はヨコナデで仕上げる。上 唇部外面はナデで仕上げ、内面は 横方向のヘラ削りである。		
309	"	"	16.2 (3.0) —	くの字状にかなり軽く外反する口 縫部で口唇部に1条の偽回縫文を 施す。	口縫部はヨコナデで仕上げる。		
310	"	"	14.8 (3.2) —	"	口縫部はヨコナデで仕上げる。上 唇部外面はタテハケのあとにタデ で仕上げ、内面は横方向のヘラ削 りである。		
311	"	"	16.6 (3.8) —	くの字状にかなり軽く外反する口 縫部で口唇部に2条の偽回縫文が 施される。	口縫部はヨコナデで仕上げる。上 唇部外面はナデで仕上げ、内面は 横方向のヘラ削りで仕上げる。		
312	"	"	15.8 (4.5) —	くの字状に軽く外反する口縫部で 口唇部に1条の偽回縫文がある。	口縫部はヨコナデで仕上げる。上 唇部外面はタテハケのあとにタデ で仕上げ、内面は横方向のヘラ削 りで仕上げる。		
313	"	"	16.4 (4.9) —	くの字状に非常にゆるく外反する 口縫部で口唇部に3条の偽回縫文 が施される。上唇部はかなり強く 張り出す。	口縫部はヨコナデで仕上げる。上 唇部外面はナデで仕上げる。	口唇部に小さ な黒斑がある。	
314	"	"	15.6 (5.1) —	くの字状にかなり軽く外反する口 縫部で口唇部に2条の偽回縫文が ある。	口縫部はヨコナデで仕上げる。上 唇部外面はタテハケのあとにタデ で仕上げ、内面はナデで仕上げる。	口縫部外面に 環状硬化物が 付着する。	
315	"	"	18.5 (3.4) —	くの字状に軽く外反する口縫部で、 口唇部を拡張して3条の偽回縫文を 施す。	口縫部はヨコナデで仕上げる。	跳び上がり口 縫である。	

種別番号	被験者番号	器種	法規 器高 鉛直 底板	形態・文様	手 法	備 考
316	SR 2	盤	20.0 (3.0) — —	くの字状に強く外反する口縁部で口唇部を拡張して2条の角回線文を施す。	口縁部はヨコナダで仕上げる。	跳び上がり口縁である。
317	〃	〃	21.2 (3.3) — —	くの字状にかなり強く外反する口縁部で口唇部に3条の角回線文を施す。	〃	口縁部外面に螺旋状化物が付着する。
318	〃	〃	21.2 (3.6) — —	くの字状にやや強く外反する口縁部で口唇部を拡張して3条の角回線文を施す。	〃	跳び上がり口縁である。
319	〃	〃	19.5 (2.8) — —	くの字状に強く外反する口縁部で口唇部の縫取りをして2条の角回線文を施す。	〃	上縫部外面に螺旋状化物が付着する。跳び上がり口縁である。
320	〃	〃	19.4 (3.1) — —	くの字状にゆるく外反する口縁部で口唇部の縫取りをして2条の角回線文を施す。	口縁部外面はヨコナダで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナダで仕上げる。	
321	〃	〃	17.4 (7.4) — —	くの字状にかなり強く外反する口縁部で口唇部の縫取りをして2条の角回線文を施す。	口縁部はヨコナダで仕上げる。上縫部外面はタテハケのあとにナダで仕上げ、内面はナダである。	
322	〃	〃	16.5 (7.3) — —	くの字状にやや強く外反する口縁部で口唇部を拡張して2条の角回線文を施す。	口縁部はヨコナダで仕上げる。上縫部外面はナダで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。	上縫部外面には螺旋状化物が付着する。
323	〃	〃	20.3 (6.1) — —	くの字状に強く外反する口縁部で口唇部に2条の角回線文を施す。	口縫部外面はヨコナダで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナダで仕上げる。上縫部外面はヨコハケのあとにナダで仕上げる。上縫部外面はナダで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。	
324	〃	〃	20.3 (6.3) — —	くの字状にゆるやかに外反する口縁部で口唇部に2条の角回線文がある。	口縫部外面はヨコナダで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナダで仕上げる。上縫部外面はナダで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。	上縫部外面に螺旋状化物が付着する。上縫部外面はナダで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。
325	〃	〃	19.0 (7.5) — —	くの字状にゆるく外反した口縁部でやや脱が落ちる。	口縫部外面はタテハケのあとにヨコナダで仕上げ、内面はヨコナダで仕上げる。上縫部外面はタテハケのあとにナダで仕上げる。内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。	上縫部外面に螺旋状化物が付着する。
326	〃	〃	13.4 (2.5) — —	くの字状にゆるく外反する口縁部で上縫部はやや張り出す。	口縫部はヨコナダで仕上げる。	
327	〃	〃	14.6 (2.4) — —	くの字状に強く外反する口縫部である。	口縫部はヨコナダで仕上げる。上縫部外面はナダで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。	跳び上がり口縫である。上縫部外面に螺旋状化物が付着する。
328	〃	〃	19.9 (3.3) — —	くの字状にややゆるやかに外反する口縫部である。	口縫部はヨコナダで仕上げる。	
329	〃	〃	14.7 (6.0) — —	くの字状にやや強く外反する口縫部で上縫部の張りは弱い。	口縫部はヨコナダで仕上げる。上縫部外面はタテハケのあとにナダで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。	口縫部に小さな黒斑がある。
330	〃	〃	18.8 (3.5) — —	くの字状にやや強く外反する口縫部である。	口縫部外面はタテハケのあとにヨコナダで仕上げ、内面はヨコナダで仕上げる。	

特徴番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 器高 横径 厚径	口縁 部高 部長 部幅	形態・文様	手法	備考
331	SR 2	壺	20.0 (7.4) — —	くの字状にややゆるやかに外反する口縁部で上肩部の張りは弱い。	口縁部外表面はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上肩部外表面はヨコハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。		
332	—	—	19.0 (9.8) — —	くの字状に強く外反する口縁部で上肩部はやや張る。	器表面が磨耗し、調整は不明である。		
333	—	—	13.0 (5.9) — —	くの字状に強く外反する口縁部で肩の張りは弱い。口唇部に「尖の角」の彫刻文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上肩部外表面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。		
334	—	—	16.2 (3.7) — —	口縁部はくの字状にゆるく外反する。	口縁部外表面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げる。上肩部外表面はヨコハケで仕上げる。口縁部外表面は横方向のヘラ削りで仕上げる。		
335	—	—	14.5 (2.2) — —	くの字状にやや強く外反する口縁部である。	口縁部はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。		
336	—	—	14.8 (4.3) — —	くの字状に非常にゆるく外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上肩部外表面はナデで仕上げ、内面は横方向の削りへラ削りで仕上げる。		
337	—	—	16.3 (4.8) — —	くの字状にかなり強く外反する口縁部に強く上肩部はやや張り出す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上肩部外表面はナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。	口縁部内面に輪組み成形模が残る。	
338	—	—	12.7 (4.9) — —	くの字状にかなり強く外反する口縁部で上肩部の張りは弱い。上肩部外表面にヘラ彫刻点をめぐらす。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上肩部はナデで仕上げる。		
339	—	—	14.2 (3.2) — —	くの字状に強く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。		
340	—	—	16.2 (4.4) — —	くの字状に強く外反する口縁部に強く上肩部の張りは弱い。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上肩部外表面はナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。	上肩部内面に輪組み成形模が残る。	
341	—	—	15.7 (5.7) — —	くの字状にかなり強く外反する口縁部で上肩部の張りは弱い。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上肩部外表面はナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。		
342	—	—	14.2 (3.5) — —	くの字状にややゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	口縁部外表面に壓延焼成物が付着する。	
343	—	—	19.5 (5.1) — —	くの字状に強く外反する口縁部に強く上肩部の張りは弱い。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上肩部外表面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。		
344	—	—	12.8 (4.7) — —	くの字状にゆるく外反する口縁部に強く上肩部の張りは弱い。	口縁部外表面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上肩部外表面はタテハケのあとにナデである。	上肩部内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。上肩部外表面に壓延焼成物が付着する。	
345	—	—	15.6 (5.3) — —	くの字状にかなりゆるく外反する口縁部で上肩部はやや張る。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上肩部外表面はヨコハケのあとにタテハケで仕上げ、内面はナデである。	外沿全体に壓延焼成物が付着する。	

標図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 器高 縦径 底径	形態・文様	手 法	備考
346	SR 2	壺	14.4 (3.4) — —	くの字状にややゆるく外反する口縁部である。	口縁部外側はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。口唇部にもヨコハケが残る。	口縁部外面に垂状模化物が付着する。
347	〃	壺	17.2 11.2 — 5.2	傘形の蓋で器高の割りに口径が小さい。なだらかに外方に下がる体部に統く口縁部は脱く外方に聞く。	体部外側はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げる。口縁部内面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げる。	器表面がやや磨耗する。
348	〃	鉢	17.0 14.9 — 10.1	平底のかなり安定した底部に統く体部はゆるく外反して立ち上がる。	口縁部はヨコナデで仕上げる。底部はナデで仕上げる。底部内面に大きな黒斑がある。	
349	〃	〃	20.5 (8.5) — —	ゆるやかに外反して立ち上がる体部に統く口縁部は内凹する。	口縁部外側は横方向のヘラ削きで仕上げ、内面はヨコナデである。体部外側は右方より方向のヘラ削きで仕上げ、内面はナデである。	焼成は非常に良好である。
350	〃	〃	19.6 (4.9) — —	如意形にゆるく外反する口縁部である。口底部に1条の偽回線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、体部外側はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
351	〃	高杯	21.0 (4.0) — —	かなり脱く外反する体部に統く口縁部は底立窓部に立ち上がる。口縁部に2条の回線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、体部はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	焼成は良好である。
352	〃	〃	20.1 (2.9) — —	外反する体部と強く口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部に2条の回線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、体部はナデで仕上げる。	
353	〃	〃	19.9 (4.5) — —	外反する体部に統く口縁部はわずかに内凹して立ち上がる。口縁部に4条の偽回線文がある。	器表面が磨耗して調整は不明である。	
354	〃	〃	21.3 (4.4) — —	むずかに外反して立ち上がる口縁部である。口縁部に2条の回線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
355	〃	〃	14.6 (3.9) — —	外反する体部に統く口縁部はわずかに外反して立ち上がる。	口縁部外側はヨコナデのあとに縱方向のヘラ削りで仕上げ、内面はヨコナデである。体部はナデで仕上げる。	
356	〃	〃	23.7 (5.4) — —	かなり脱く外反する体部に統く口縁部はわずかに外反して立ち上がる。	口縁部はヨコナデで仕上げる。体部はタテハケのあとにナデで仕上げる。	
357	〃	〃	19.3 (7.4) — —	外反してひらく体部に統く口縁部は直立して立ち上がる。かなり器高の深い杯部である。	口縁部外側はヨコナデで仕上げ、内面はヘラ削りで仕上げる。体部外側はナデで仕上げ、内面はヘラ削りで仕上げる。	
358	〃	〃	24.6 (4.5) — —	外反してひらく体部に統く口縁部はわずかに外反して立ち上がる。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	口縁部外面に小さな黒斑がある。
359	〃	〃	26.2 (9.2) — —	外反して大きく開く体部に統く口縁部は直立して立ち上がる。	口縁部外側はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデである。体部外側は縱方向のヘラ削りで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	口縁部外面に黒斑がある。
360	〃	〃	20.2 (7.6) — —	外反して開く体部に統く口縁部は直立気味に立ち上がる。器高の深い杯部である。	口縁部はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。体部外側はタテハケのあとにナデで仕上げる。内面はナデで仕上げる。	杯部外面に黒斑がある。

標図番号	遺構番号	石種	寸法 (cm)	口縫 高さ 側溝 底溝	形態・文様	手法	備考
361	S R 2	玄武岩	(10.7)	— — —	かなりゆるやかに外方に聞く脚部で中空である。	脚部はナダで仕上げる。 粘土板充填法である。	基部内面に黒斑がある。
362	"	"	(8.2)	— — 8.2	かなりゆるやかに外方に聞く脚部で中空である。脚部外間に横溝線文が施される。	外表面は丁寧なナダで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。 粘土板充填法で基部内面に粒目が残る。	脚部の中央部に4孔を有し、基部には2個1対の穿孔が4箇所ある。
363	"	"	(8.4)	— — 10.4	柱状部から基部に向かってゆるやかに聞く。脚部外間に横溝線文がある。	脚部外表面は丁寧なナダで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。 柱状部内面に粒目が残る。	口縫部を抵張して2条の凹溝文をめぐらす。
364	"	"	(9.5)	— — —	かなり深い杯部に中空の脚部が複く形態である。	口縫部はヨコナダで仕上げる。外表面はタハケのあとにナダで仕上げ、内面はナダである。脚部外表面はタハケで、内面はヘラ削りである。	基部外間に複数のヘラ削りの底跡がある。
365	"	"	(4.8)	— — 15.0	柱状部から基部に向かって外方に大きく聞く脚部である。	脚部外表面はヨコハケのあとにナダで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナダで仕上げる。脚部はヨコナダにより、わずかにくぼむ。	
366	"	"	(6.0)	— — 16.8	柱状部から基部に向かって外方に大きく聞く脚部である。基部部に2条の凹溝文を入れる。	表面が剥離し、調整は不明である。	
367	"	小型土器	3.9 4.5 4.2 2.9	器底の割りに口縫の広い底の小形土器で底部は上部である。上部に竹籠状工具による円形の削文がある。完形である。	口縫部はヨコナダで仕上げる。脚部外表面はヨコハケのあとにナダで仕上げ、内面はナダである。	口縫部と口縫部内面にも円形の削文がある。底部外面に黒斑がある。	

第9表 遺構出土石器観察表 (Aトレンチ)

標図番号	遺構番号	石種	計測値 (cm, g)	最大長 最大幅 最大厚 度	材質	特徴	備考
368	S R 2	石斧	(17.3) (7.5) 4.2 985.0	— — —	緑色岩	大型始刃石斧で刀部を欠損する。全面に擦痕が残るが、周辺部は横方向の擦痕で中央部は縦方向の擦痕である。	
369	"	"	(10.1) 6.9 4.0 489.0	— — —	—	大型始刃石斧で基部は全面欠損する。全面に擦痕が残る。刀部の先端部は磨滅がかなり著しい。	
370	"	"	16.6 7.3 5.2 1039.0	— — —	はんれい青質綠色岩	大型始刃石斧の未製品で両面に擦痕が残る。	
371	"	"	16.7 6.8 4.4 834.0	— — —	—	大型始刃石斧の未製品で両面に擦痕がわずかに残る。	
372	"	"	(13.4) (6.4) (3.2) 500.0	— — —	—	大型始刃石斧で刀部を欠損する。両面に擦痕が残る。	
373	"	"	8.8 0.8 1.6 22.8	— — —	黑色片岩	小型の柱状片岩石斧で完形である。全面に擦痕が残る。また、表裏両面に小さな抉りがある。	

総固番号	速構番号	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 重 量	材 質	特 徴	備 考
374	SR 2	石斧	(4.5) 3.7 0.9 26.8	真 岩	扁平片刃石斧で基部が全て欠損する。全面に擦痕が残る。	
375	"	"	(3.9) (4.6) (1.3) 45.3	"	扁平片刃石斧で刀部を全て欠損する。全面に擦痕が残る。	
376	"	"	11.5 10.9 3.7 795.0	はんれい岩質綠色岩	圓状石斧の未製品ではば全面に敲打痕が認められる。	
377	"	"	9.7 3.2 1.5 65.8	真 岩	小形の肉刃石斧で完形である。刃部に明顯な擦痕が残る。	
378	"	"	5.9 1.8 1.0 17.6	千枚岩	非常に小型の肉刃石斧で完形である。全面に擦痕が残る。基部の内側に小さな抉りがある。	
379	"	"	8.7 2.0 1.0 29.0	綠色岩	不規則長指円形を呈した細長い両刃の石斧で完形である。基部は小底形で全面に擦痕がわずかに残る。	
380	"	穿孔具	12.7 2.8 2.6 144.3	砂質頁岩	圓状石斧用の穿孔具で先端部に横方向の擦痕が残る。細長い小底形な形であるが完形である。	
381	"	叩 石	8.9 4.4 1.3 87.2	砂 岩	両面に自然の擦皮面を大きく残し、周縁部に小剝離面を残す。表面に縱方向の擦痕が残る。敲打痕は認められない。	小形の石斧の未製品かもしれない。
382	"	"	6.9 8.5 3.5 363.0	"	不整円形を呈した叩石で周縁部と表裏両面の中央部に明瞭な敲打痕が残る。	表裏両面の中央部がくぼんでいる。
383	"	"	15.3 5.0 3.1 298.0	"	細長い長指円形を呈した叩石で上下両端部に明瞭な敲打痕が残る。	
384	"	"	9.7 8.1 4.4 475.0	"	椭円形を呈した叩石で両面に自然の擦皮面を大きく残す。周辺部の一部に剝離面を残す。周縁部に明瞭な敲打痕を残す。	
385	"	"	(7.8) 3.9 1.0 47.4	砂質頁岩	不整長方形を呈し、両面に自然面を大きく残す。周辺部の一部に剝離面を残す。敲打痕は認められない。	小型の石斧の未製品かもしれない。
386	"	"	9.8 11.3 2.2 230.0	砂 岩	扁平叩石で表面は擦皮面を大きく残し、裏面は主剝離面である。両面の周辺部に小剝離面がある。周縁部に敲打痕の残る箇所がある。	
387	"	"	8.5 (6.7) 1.4 73.1	"	扁平叩石で刃程度が欠損する。表面は自然の擦皮面で裏面は主剝離面である。明瞭な敲打痕は認められない。	
388	"	砥 石	9.4 9.1 3.7 539.0	"	不整方形を呈した砥石で表裏両面と左側面の3面に研磨面が残る。表裏両面の中央部に敲打痕が残る。	

標団番号	遺構番号	器種	計測値 (cm, g)	材質	特徴	備考
389	S R 2	磁石	(9.5) (6.4) (9.1)	砂岩	磁石の破片で表面と右側面の2面に研磨痕が残る。	
390	"	"	9.9 9.5 4.5 452.0	"	不定形の磁石で表裏両面に研磨痕が残る。 裏面は火熱を受け、赤く変色している。	やや大型の磁石である。
391	"	"	13.6 11.9 3.6 864.0	"	不整長方形を呈した磁石で全面に研磨痕が残る。	"
392	"	"	15.5 13.8 4.4 1392.0	"	不整長方形を呈した磁石で表裏両面と左側面の3面に研磨痕がある。裏面は火熱を受け、黒化した跡がある。	"
393	"	"	(7.4) 5.5 1.9	磁石	不定形な形をした磁石で表裏両面と下面の3面に研磨痕が残る。荒礪として使用されたものか?	表裏両面と下面の3面に擦痕が残る。小型の磁石である。
394	"	"	8.3 6.4 5.7 334.0	砂岩	不整長方形を呈した磁石で、表裏両面と左側面の3面に研磨痕が残る。表面には火熱を受け、赤変した跡がある。	
395	"	"	9.4 (2.7) 1.6 79.8	粘板岩	縦円形のやや細長い磁石で縦方向に破損する。破損部以外の全面に擦痕が残る。	小型の磁石である。
396	"	"	10.9 7.3 2.7	砂岩	不整長方形を呈した磁石で表面と左側面の2面に研磨痕が残る。	
397	"	右包丁	5.8 3.8 0.9 28.5	千枚岩	表裏両面にかなり大きな削離面を残した粗製の右包丁である。刃部は背面から研ぎ出され片刃である。	粗製の右包丁である。
398	"	"	(5.3) 5.1 0.6 21.1	"	外側する背部に直線状の刃部が続く形態で半分以上を欠損する。両面に擦痕を残し、中央部附近に縫合1箇が認められる。	縫合の右包丁である。
399	"	"	(4.9) (4.8) 8.0 19.5	"	外側する背部に直線状の刃部が続く形態の右包丁で片刃である。大半を欠損するが、両面に擦痕が残る。また、中央部附近に縫合1箇が認められる。	縫合の部分の両面に明瞭な敲打痕が残る。擦痕である。
400	"	"	10.7 4.1 0.7 43.0	"	外側する背部に直線状の刃部が続く形態の右包丁で片刃である。中央部に縫合1箇がある。片刃で両面に擦痕が残る。	両側刃部がわずかに欠けるがほぼ完形である。擦痕である。
401	"	"	8.5 4.2 0.8 46.2	"	外側する背部に直線状の刃部が続く形態の右包丁で片刃である。中央部に縫合1箇があり、両側刃部に小さな突起がある。	両面に擦痕がわざわざ残る。擦痕である。完形である。
402	"	"	(9.1) (3.2) 1.0 34.2	"	塊状にかなり無長い形態の右包丁で中央部に1箇の縫合が認られるが刃部は全て欠損する。両面に擦痕が残る。	右包丁の未製品かもしれない。擦痕である。
403	"	"	(7.8) (4.5) (0.9) 36.9	"	背部と刃部が直線状を呈し、両側刃部に抉りのある形態であるが、刃部の大半を欠損する。表裏両面にかなり大きな削離面を残す。	両面に擦痕が残る。擦痕である。

種別番号	通総番号	器種	計測値 最大長 最大幅 (cm, g)	材質	特徴	備考
404	SR 2	石包丁	7.4 4.3 0.8 31.7	下枚岩	両側刃部に抉りのある打製の石包丁である。表面は主に磨面で裏面にも大きな剝離面を残す。両面の刃部に小剝離面を残しており、両刃である。	両面共に器表面がやや摩耗する。
405	*	*	10.2 4.5 1.1 72.5	*	刃部と背部は共に直線状を呈し、両側刃部に抉りのある形態である。刃部のみ稍い彎曲を仕上げた始端磨製の石包丁で、両刃である。	両面共にかなり大きな削離面を残す。刃部に横方向の擦痕がある。
406	*	*	(5.4) (5.3) (1.2) 37.4	粘板岩	外溝する背部に直線状の刃部が続く形態の石包丁で大半を欠損する。両面に擦痕が残り、片刃である。研削の石包丁である。	
407	*	石鑿	3.2 1.2 0.3 1.6	サスカイト	柳葉型を呈した凸基盤式の打製石器ではほぼ完形である。先端部にはやや大きな剝離面を残すが、基盤は入念な押圧剥離により小さな剝離面を残す。	
408	*	*	6.0 2.3 0.5 9.4	黑色片岩	磨製の石器で先端部しか残存しない。両面に下向きの方角の擦痕がある。	

第10表 遺構出土土器観察表 (Bトレンチ)

種別番号	通総番号	器種	計量 口絆 器底 周縁 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
409	SR 2	壺	14.0 (8.2)	ゆるく外反する頸部に続く口絆部は短いが強く外反する。頸部下端に断面台形の突起を黏付する。	口絆部はヨコナデで仕上げる。頸部以下はナデで仕上げる。	貼付突起上に1箇所のヘラ彫丸線がある。
410	*	*	6.3 (13.3) 15.0	ほぼ直立完缺に立ち上がる細長い口絆部に続く頸部は張りが弱い。頸部以下をヘラ彫沈線等で飾る。	口絆部はヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。上頸部外面はタチハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	縦隔壁である。上頸部内面に複数枚み形成が残る。
411	*	*	18.2 (3.6)	かなり強く外反する口絆部で口絆部下端に貼付突起を施し、その直下に小穿孔をめぐらす。口絆部内面にも3条の突起を黏付する。	口絆部はヨコナデで仕上げる。	頸部は斜目を施した貼付突起と横彫直線文で飾る。
412	*	*	31.0 (4.8)	ややゆるやかに外反する口絆部で、頸部に彫刻直線文を施す。	口絆部はヨコナデで仕上げる。貼付口縁である。	広口壺である。
413	*	*	15.9 (6.1)	ほぼ直立完缺に立ち上がる口絆部に続く口絆部はわずかに斜行する。口絆部下端に1条の貼付突起をめぐらす。	口絆部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はヨコナデのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	薄手の壺である。
414	*	*	19.6 (4.7)	かなり強く外反する口絆部で口絆部下端に斜目を施す。	口絆部はヨコナデで仕上げる。口絆部外側に沿って頸部直線痕がある。	
415	*	*	14.0 (5.2)	ゆるく外反して立ち上がる頸部に続く口絆部はゆるやかに外反する。口絆部下端にヘラ状突起による斜格子状の斜目がある。	口絆部はヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。	
416	*	*	16.6 (2.4)	かなり強く外反する口絆部で口絆部下端に斜目を施す。口絆部外側に1条の微隆起部をめぐらし、その下に彫刻直線文がある。	口絆部はヨコナデで仕上げる。	

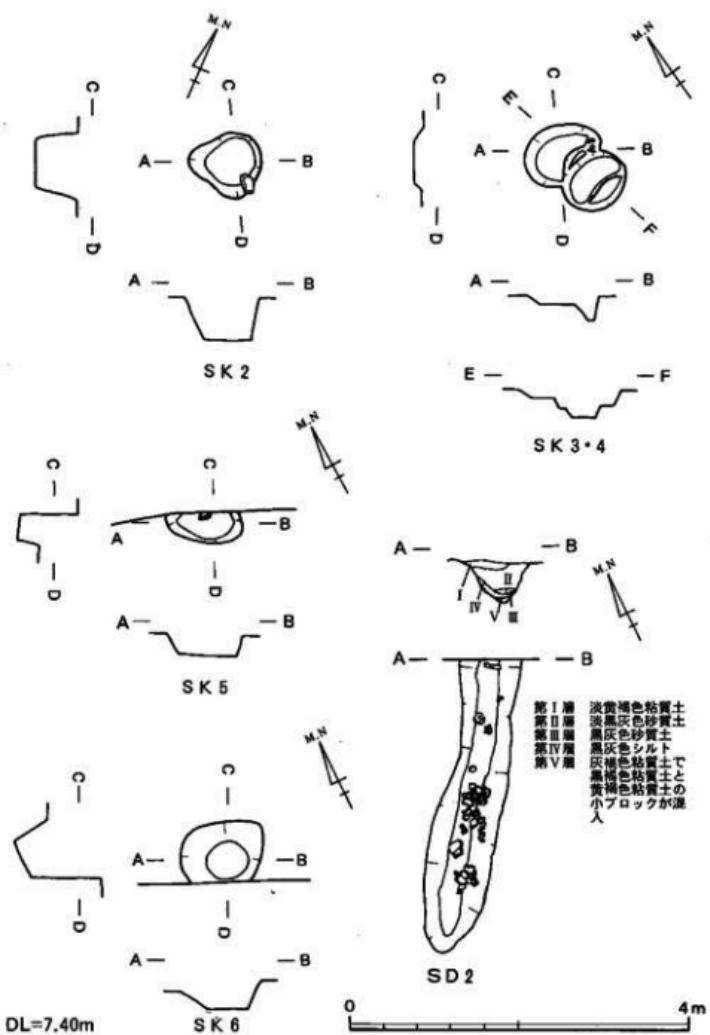
種別番号	遺傳番号	器種	性別	口縫 唇部 副性	形態・文様	手法	備考
417	S R 2	雌		17.5 (7.8) —	ゆるやかに外反して立ち上がる口縫部である。口縫部外面に3条の突起を施す。	口縫部はヨコナデで仕上げ、頭部はナデで仕上げる。	
418	-	-		26.0 (6.0) —	直立気味の短い類似に続く口縫部は軽く外反する。口縫部下端に刺目を施す。頭部下端にヘアライン文をめぐらす。	-	広口巻か?
419	-	-		17.6 (7.1) —	直立気味に立ち上がる頭部に続く口縫部はゆるやかに外反する。頭部下端に突起を施し、鳥目を入れる。	口縫部はヨコナデで仕上げる。頭部外端はナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	
420	-	-		13.4 (4.1) —	ゆるやかに外反して立ち上がる頭部に続く口縫部は軽く外反する。口縫部にハケ状原体による刺目がある。	口縫部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。頭部外端はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	貼付口縫である。
421	-	-		24.3 (9.8) —	ゆるやかに外反して立ち上がる頭部に続く口縫部はゆるやかに外反する。口縫部にハケ状原体で斜格子目状に刺目を入れる。	-	
422	-	-		17.8 (5.7) —	ゆるやかに外反して立ち上がる頭部に続く口縫部は軽く外反する。	口縫部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頭部外端はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	貼付口縫で口縫部内面にハケ状原体によく刺目文がある。
423	-	-		18.5 (13.5) —	わずかに外反して立ち上がる頭部に続く口縫部はゆるやかに外反する。口縫部にはハケ状原体による斜格子目状の刺目がある。	-	口縫部外面にはハケ状原体によく刺目文がある。上縫部には頭部副性がある。
424	-	-		— (14.5) 11.8 5.2	ゆるやかに外反して立ち上がる頭部に続く前脚は長脚で最大径はかなり下位にある。	頭部外端はナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにビトナデで仕上げる。頭部外端はハケ調整のあとにナデで仕上げ。内面はナデである。	
425	-	-		— (15.4) 15.5 5.4	無規定期を呈した頭部で最大径はやや上位にある。頭部下端に円形刺目文がある。	上縫部はナデで仕上げ、下縫部はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	上縫部内面にかなり大きな黒斑がある。
426	-	-		20.4 (6.2) —	ややゆるやかに外反する口縫部で口唇部に2条の偽回文が施される。	口縫部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頭部外端はタテハケのあとにナデ。内面はナデ。	
427	-	-		10.4 (4.9) —	ややゆるやかに外反する口縫部で口唇部に2条の偽回文が施される。	口縫部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。	
428	-	-		19.6 (7.9) —	直立気味に立ち上がる頭部に続く口縫部は軽く外反する。口縫部に3条の回文文を施す。	口縫部はヨコナデで仕上げる。頭部外端はタテハケのあとにナデで仕上げ。内面はナデである。	口縫部は程取りして張りしておらず、下方にたれ下がる。
429	-	-		15.6 (3.8) —	ゆるやかに外反する口縫部で口唇部下に刺目を施す。	口縫部はヨコナデで仕上げる。貼付口縫である。	薄手の糸である。
430	-	-		19.6 (3.6) —	ゆるやかに外反する口縫部で口唇部下に刺目を施す。	-	-
431	-	-		16.6 (6.3) —	直立して立ち上がる短い頭部に続く口縫部はややゆるやかに外反する。	唇表面が剥離し、調査は不明である。	

標図番号	通稿番号	器種	口径 基部 周長 (cm)	形態・文様	手注	備考
432	S R 2	盃	15.4 (5.2) — —	わずかに斜行して立ち上がる短い 瘤部に続く口縁部は軽く外反する。	器表面が磨耗し、調査は不明である。	
433	*	*	— (7.1) — 7.4	平底の底部で脚の張りは弱い。	外表面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。器表面が磨耗する。	
434	*	*	— (5.7) — 8.0	平底の底部でやや脚が張り出す。	外表面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
435	*	*	— (5.5) — 8.9	平底の底部で脚の張りは弱い。	ナデで仕上げる。	
436	*	*	— (4.0) — 9.4	平底の底部である。	外表面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
437	*	*	— (5.3) — 7.4	平底の底部で器壁はかなり厚く、 中央部がややくぼむ。	ナデで仕上げる。	
438	*	*	— (8.0) — 8.0	平底の底部で脚の張りは弱い。	器表面が磨耗し、調査は不明である。	
439	*	*	— (5.8) — 9.0	"	外表面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ割りである。	
440	*	*	— (6.1) — 8.0	"	ナデで仕上げる。	
441	*	*	— (8.4) — 7.8	"	外表面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
442	*	*	— (13.8) — 7.6	平底の底部で、長脚の脚部である。	"	
443	*	*	— (8.2) — 9.8	平底の底部でやや脚が張る。	外表面はタテハケのあとにヘラ磨きで仕上げ、内面はタテハケ調査のあとにナデで仕上げる。	
444	*	盃	15.2 (4.7) — —	逆L字状口縁の盃で口縁部にハケ 状痕跡による割目がある。上脚部 に5条のヘラ描花線を施す。	口縁部外表面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上脚部外表面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
445	*	*	14.3 (5.3) — —	逆L字状口縁に類似した盃である。 物語系無文土器か。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上 脚部外表面はナデで仕上げるが、内 面は器表面が磨耗して調査は不明 である。貼付口縫である。	
446	*	*	18.0 (6.3) — —	"	口縫部はヨコナデで仕上げる。上 脚部外表面はハケ調査のあとにナデ で仕上げ、内面はナデである。貼 付口縫である。	

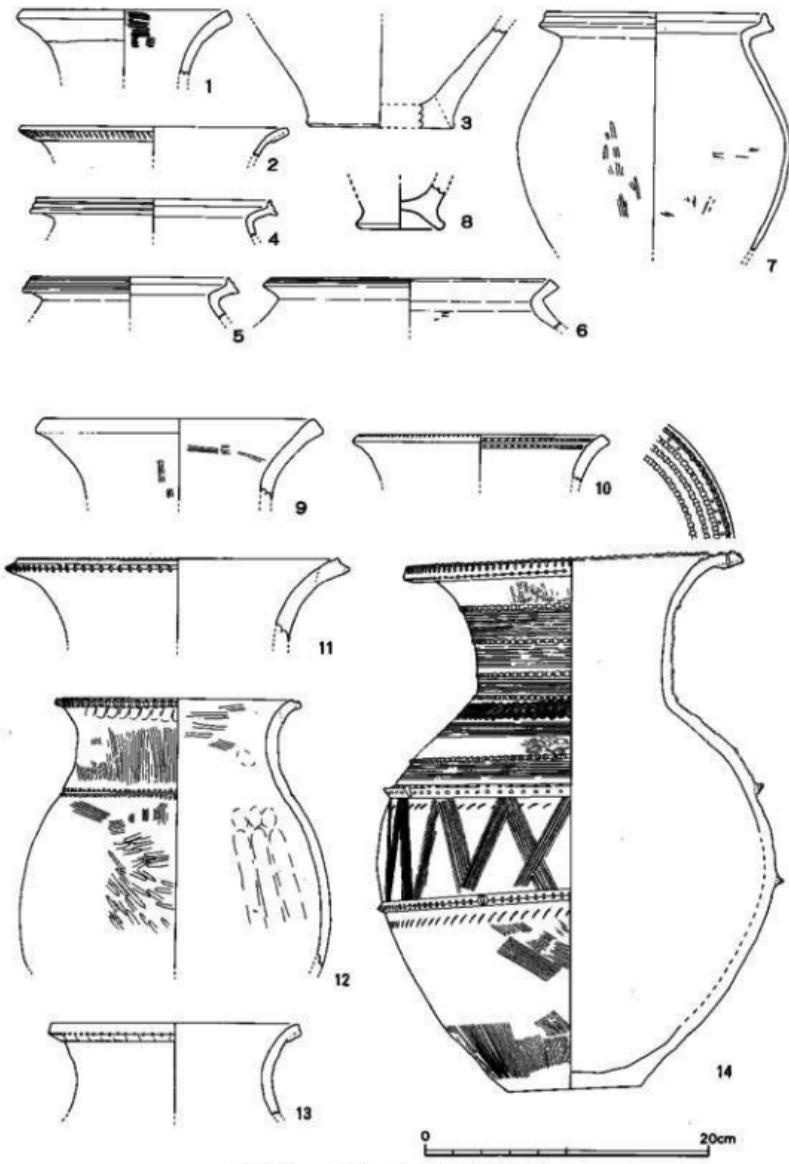
採集番号	波浪番号	器種	法量 (cm) 最高 最低 平均	形態・文様	手 法	備考
447	8 R 2	壺	15.6 (4.3) —	如意形にゆるく外反する口縁部で 口縁部下端に創目を施す。上唇部 に3条のヘラ彫り模様がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上唇 部はナデである。	
448	"	"	21.6 (12.3) 22.4	如意形にゆるく外反する口縁部に 軽く削痕はやや残る。上唇部に3 条の彫り模様がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内面はヨコナデ で仕上げ。上唇部外面はタテハケの あとにナデで仕上げる。	口縁部と唇部最 大径 上唇部外面に 彫り模様化物が 付着する。
449	"	"	16.9 (3.8) —	如意形にゆるく外反する口縁部で ある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上 唇部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内面はヨコハケのあと にナデで仕上げる。 駄門口盤である。	口縁部外面に 彫り模様化物が 付着する。
450	"	"	10.4 (6.1) —	如意形にゆるく外反する口縁部で 口縁部に2条の仙鷲文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部 はナデで仕上げる。	
451	"	"	13.0 (7.2) —	くの字状に軽く外反する口縁部で やや脇が張る。口唇部に3条の仙 鷲文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上 唇部外面はナデで仕上げ、内面は 竪方向の指ナデで仕上げる。	
452	"	"	15.1 (4.4) —	くの字状に軽く外反する口縁部で やや脇が張る。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上 唇部外面はタテハケのあとにナデ で仕上げ、内面はナデである。	
453	"	"	15.0 (14.0) 19.2	くの字状に軽く外反する口縁部で やや脇が張る。口唇部はヨコナデ により、ややくぼむ。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸 部外面はハケ彫りで仕上げ、内面 はヘラ彫りである。	上唇部外面は横 方向のヘラ彫り で、下唇部内面 は竪方向のヘラ 彫りである。
454	"	"	15.5 (8.6) —	くの字状にやや軽く外反する口縁 部で脇がかなり張り出す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上 唇部外面はハケ彫りのあとにナデ で仕上げ、内面はナデである。	
455	"	"	23.2 (5.4) —	くの字状にややゆるやかに外反す る口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨ コナデで仕上げ、内面はヨコナデ である。上唇部内面に彫り模様 がある。	やや大型の壺 である。
456	"	"	(3.8) 6.8	平底の底部で器壁は非常に薄い。	ナデで仕上げる。	
457	"	"	(4.3) 5.2	平底の底部で脇の張りは弱い。	"	
458	"	"	(5.4) 5.3	平底の底部で器壁は薄い。脇の張 りもやや弱い。	"	
459	"	"	(3.8) 7.9	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕 上げ、内面はナデである。	
460	"	"	(5.8) 7.3	平底の底部で器壁はやや厚いが、 脇の張りは弱い。	外面はタテハケのあとにナデで仕 上げ、内面はナデである。	
461	"	高杯	(6.7) —	充実した柱状部である。	タテハケのあとにナデで仕上げる。	外面にかなり 大きな黒斑が ある。

第11表 遺構出土石器観察表（Bトレンチ）

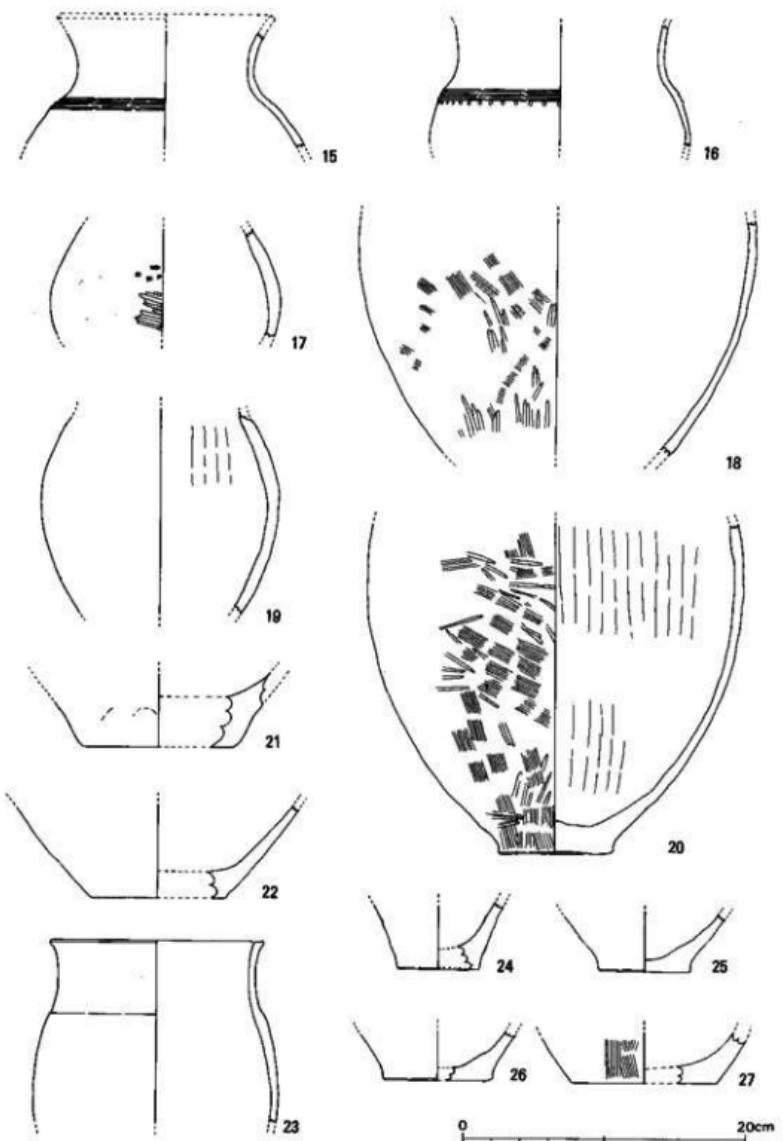
遺構番号	遺構番号	器種	最大刃 片厚 最大厚 (cm. g) 厚	材質	特徴	備考
462	SR 2	石斧	6.6 3.5 1.0 27.8	千枚岩	短い打製の石斧であるが表面の刃部のみ研磨し、表面が滑る。両面にかなり大きな剥離面を残した尾部磨製石斧で完形である。	
463	"	卑石	10.0 5.9 1.9 141.1	砂岩	扁平叩石で表面には自然の剥離面を大きく残し、裏面は主剥離面である。表面の中央部及び周縁部に明瞭な敲打痕がある。	
464	"	石包丁	(3.5) (4.9) 0.6 12.8	千枚岩	磨製の石包丁の破片で大半を欠損する。両面に擦痕が残る。両面に穿孔を意識した敲打痕が残る。	
465	"	"	(6.7) (4.9) 0.6 17.6	"	磨製の石包丁の破片で大半を欠損する。外側する背部に直線状の刃部の純く形態で両方である。	裏面に擦痕が残り、中央部のやや上に穿孔が1個残る。
466	"	"	10.0 3.9 1.1 51.1	砂質頁岩	表面に大きな剥離面を残す打製の石包丁で短いくつくりである。両刃で側面部に挟りはみられない。	
467	"	"	(9.1) 4.5 0.8 43.9	結晶片岩	表面に自然の剥離面を大きく残し、裏面は主剥離面である。外側する背部に近く両側近部には小さな孔がありが刃部を全て欠損する。	裏面が磨耗するが背面と端に研磨板が残る。



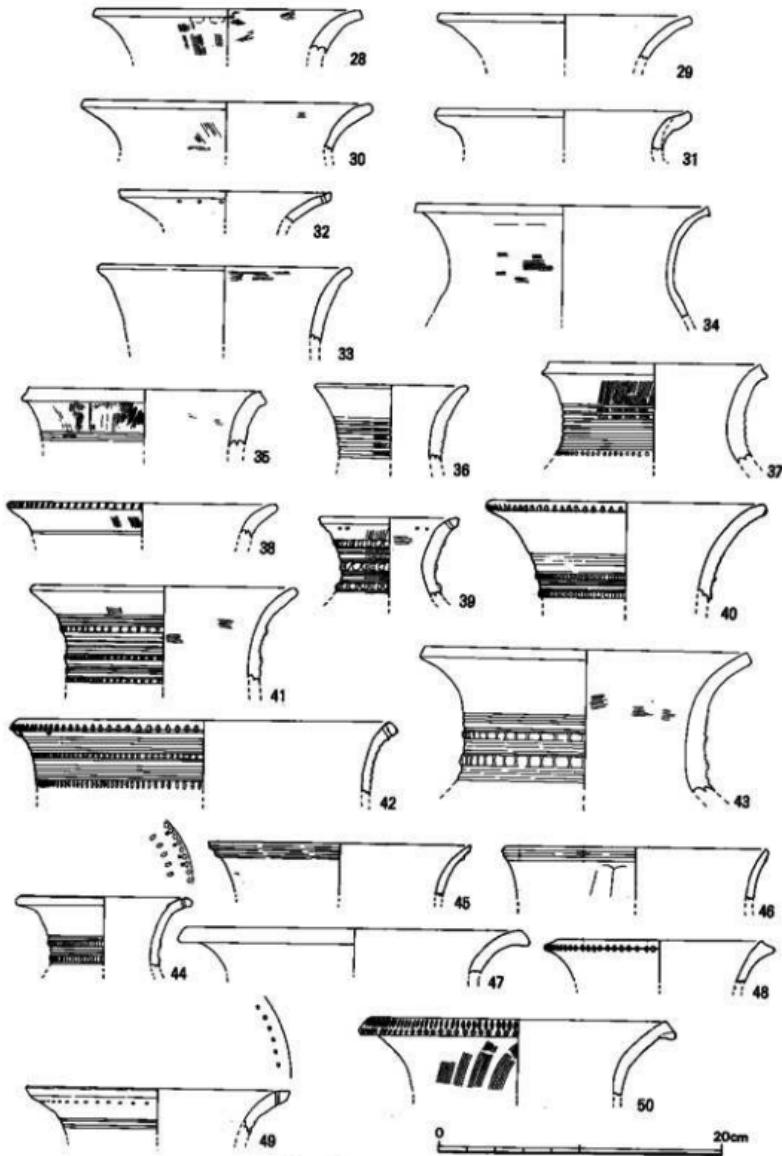
第37図 SK 2~6, SD 2



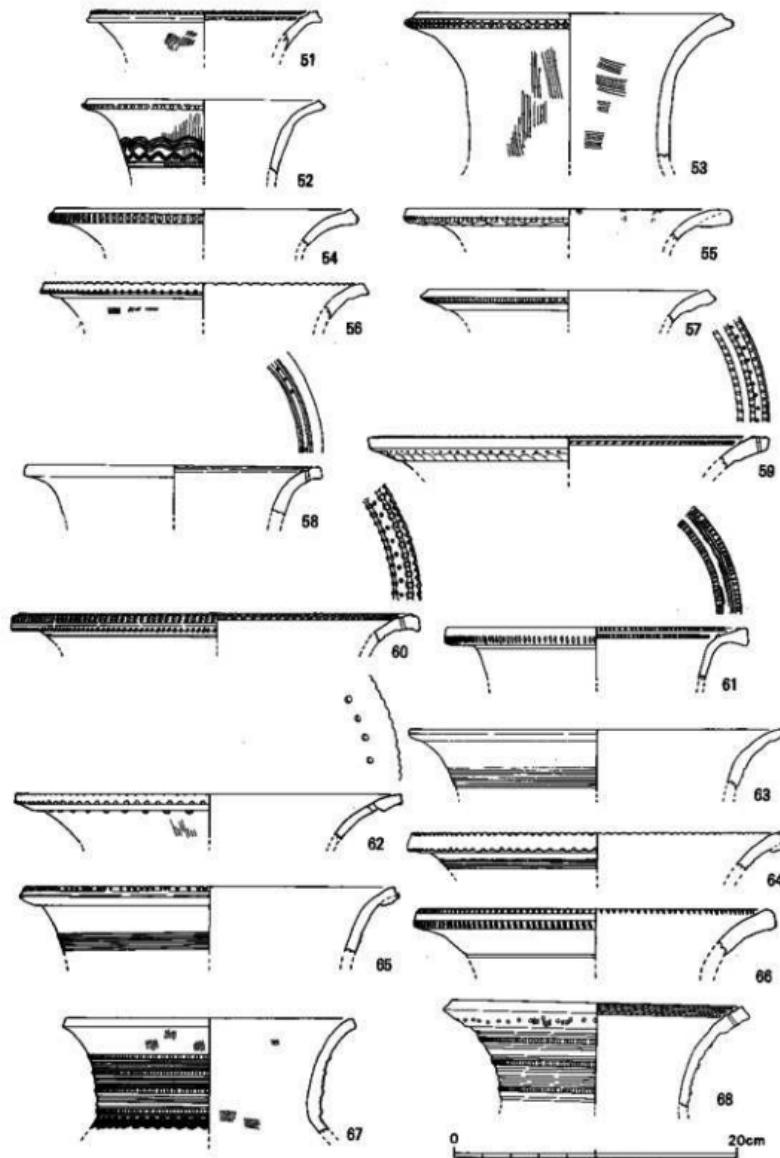
第38図 SK 4, SD 1・2出土遺物



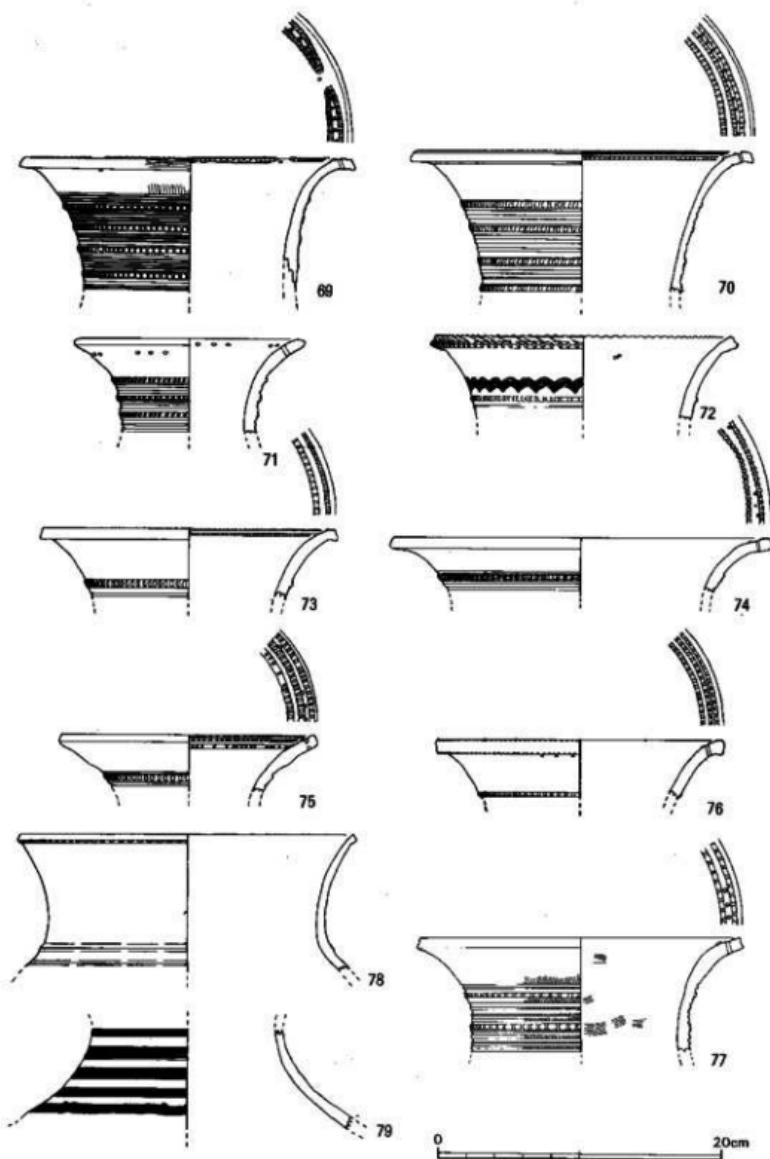
第39図 SD 2出土遺物



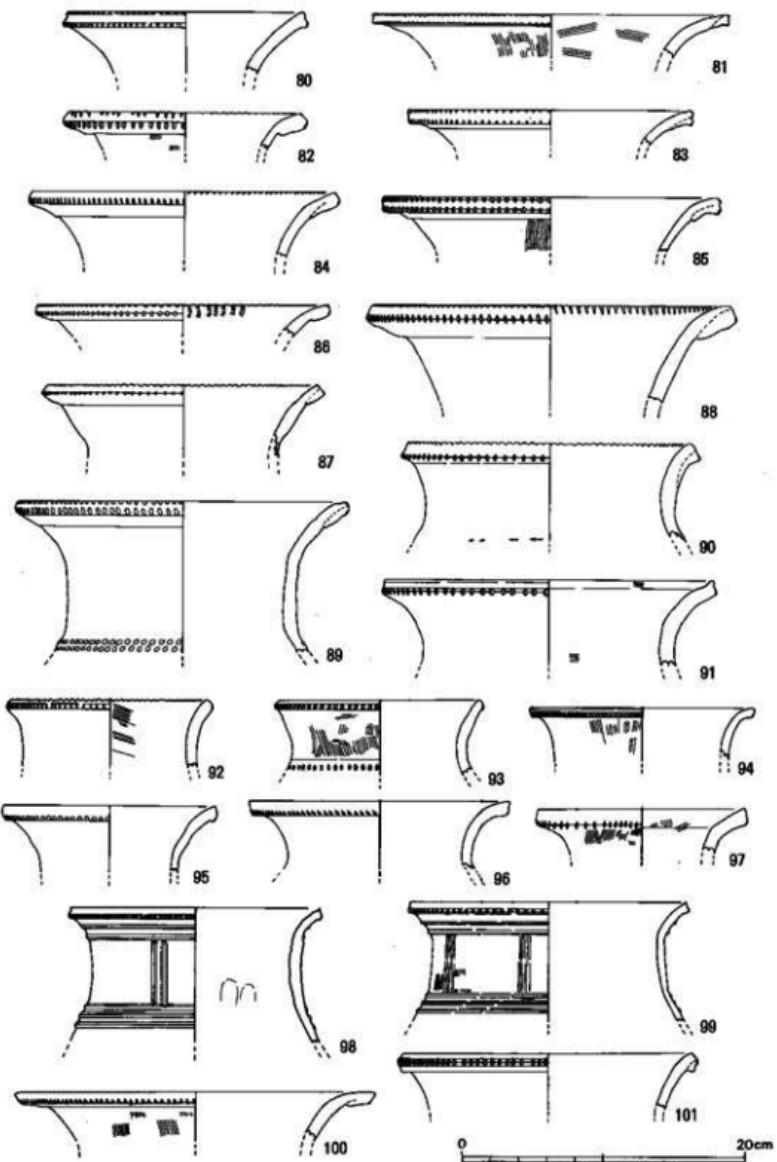
第40図 SR 2出土遺物



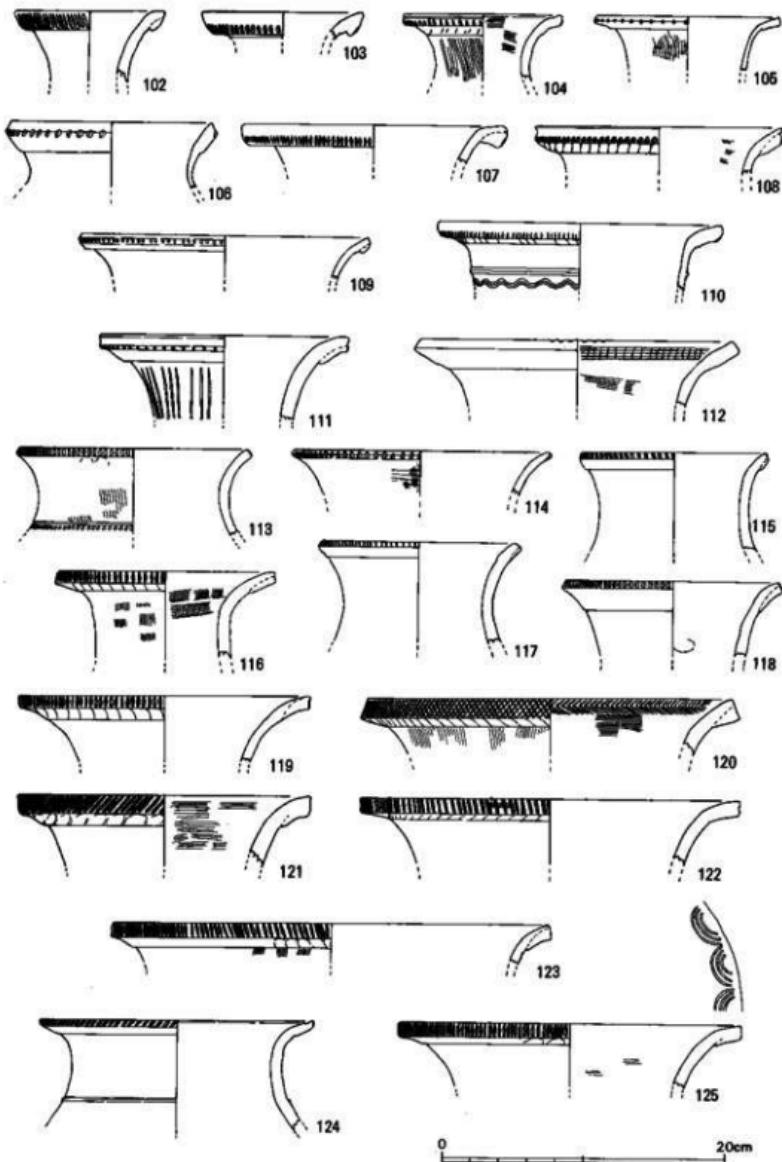
第41図 SR 2出土遺物



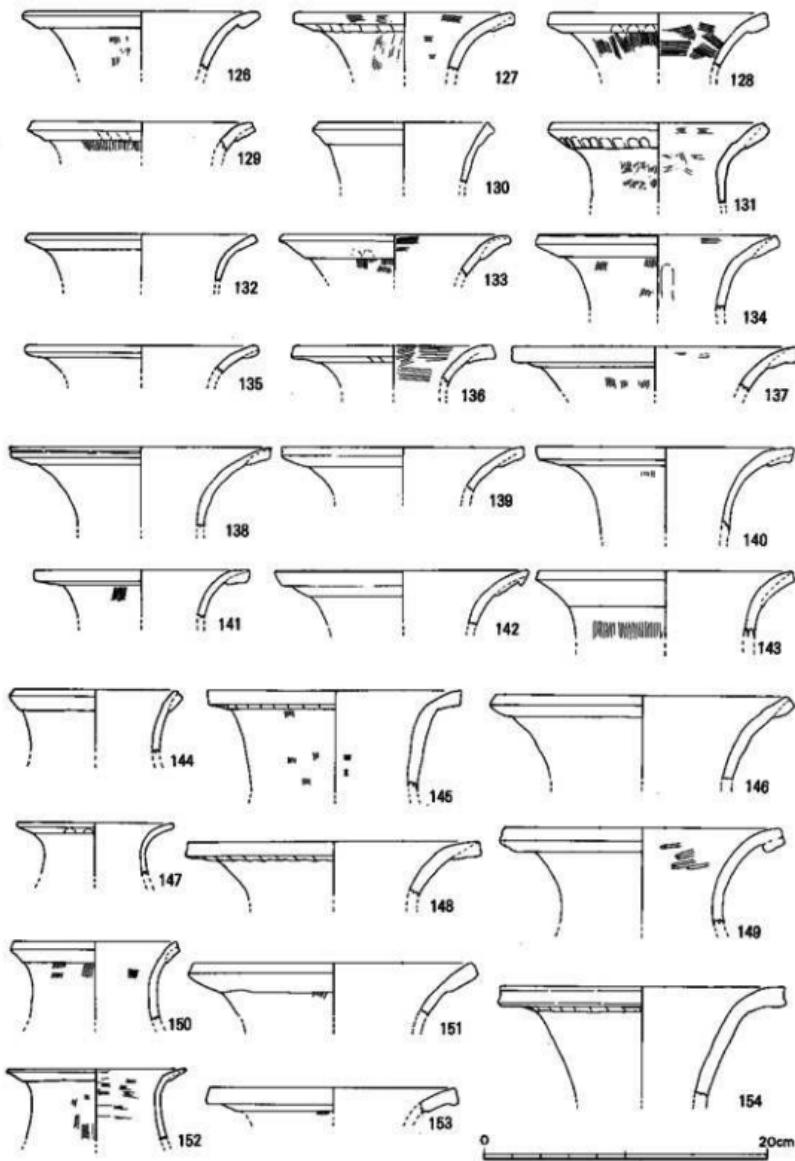
第42図 SR 2出土遺物



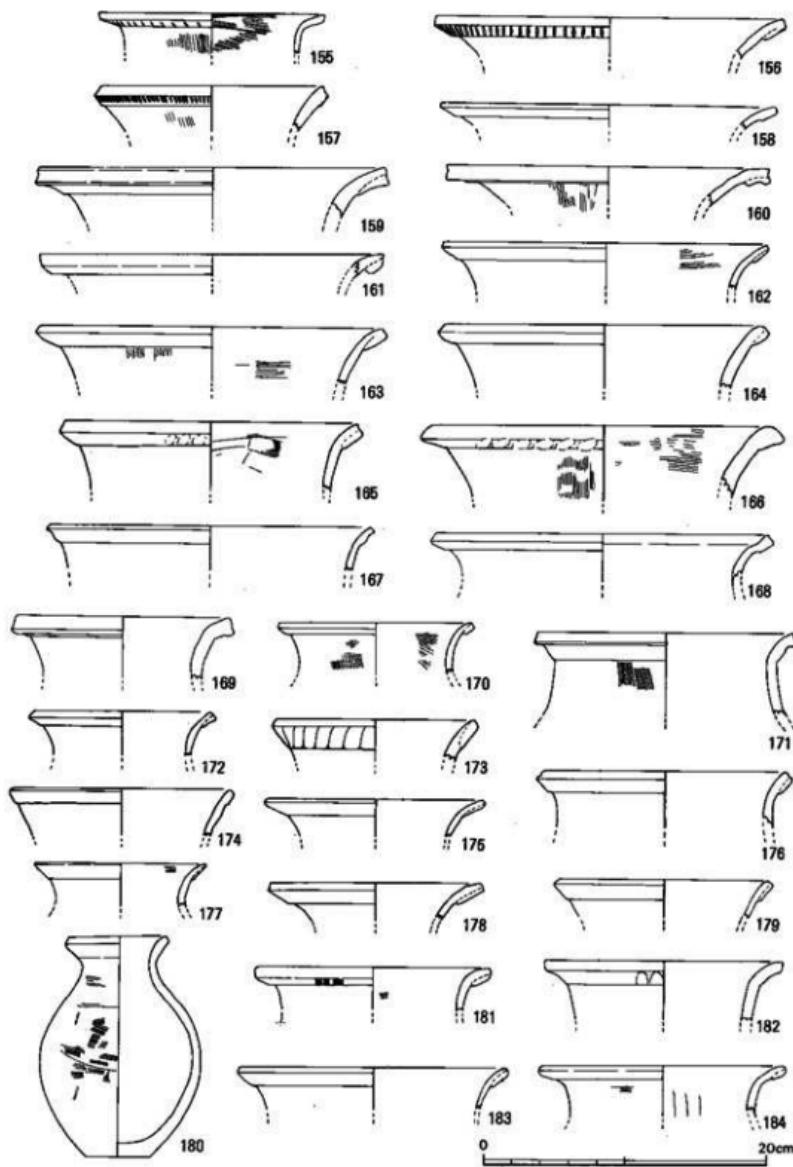
第43図 SR 2出土遺物



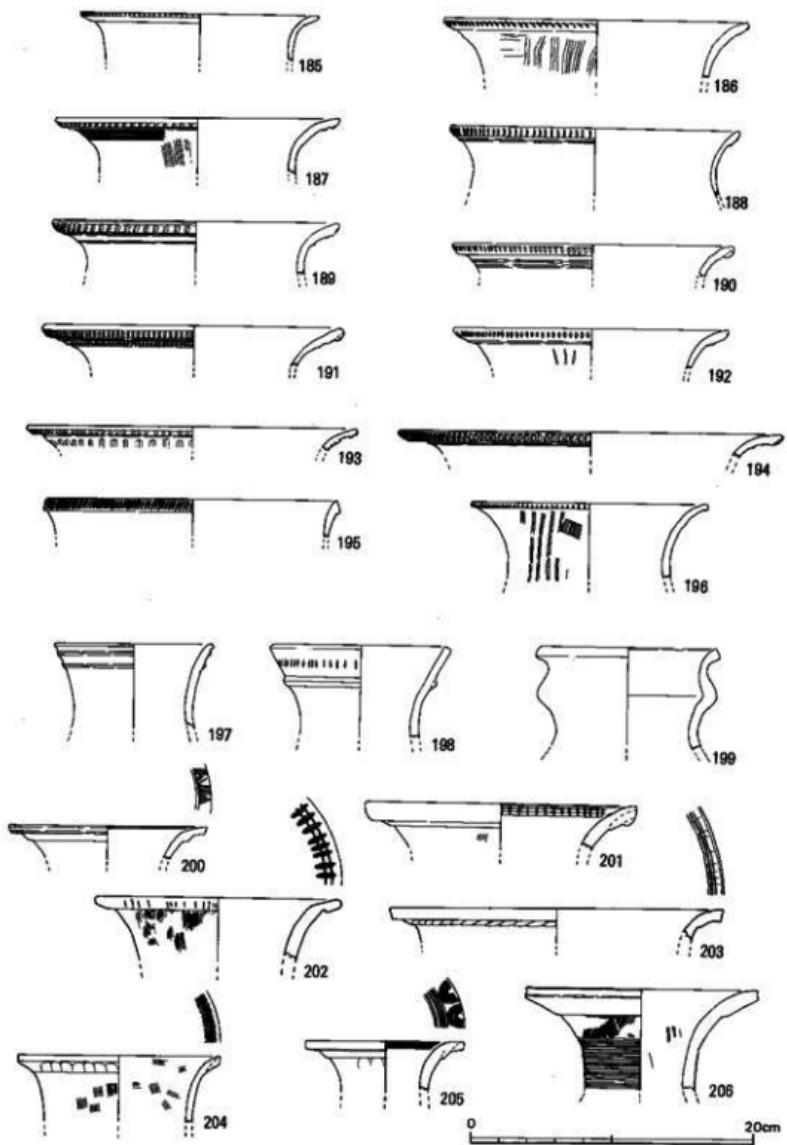
第44図 SR 2出土遺物



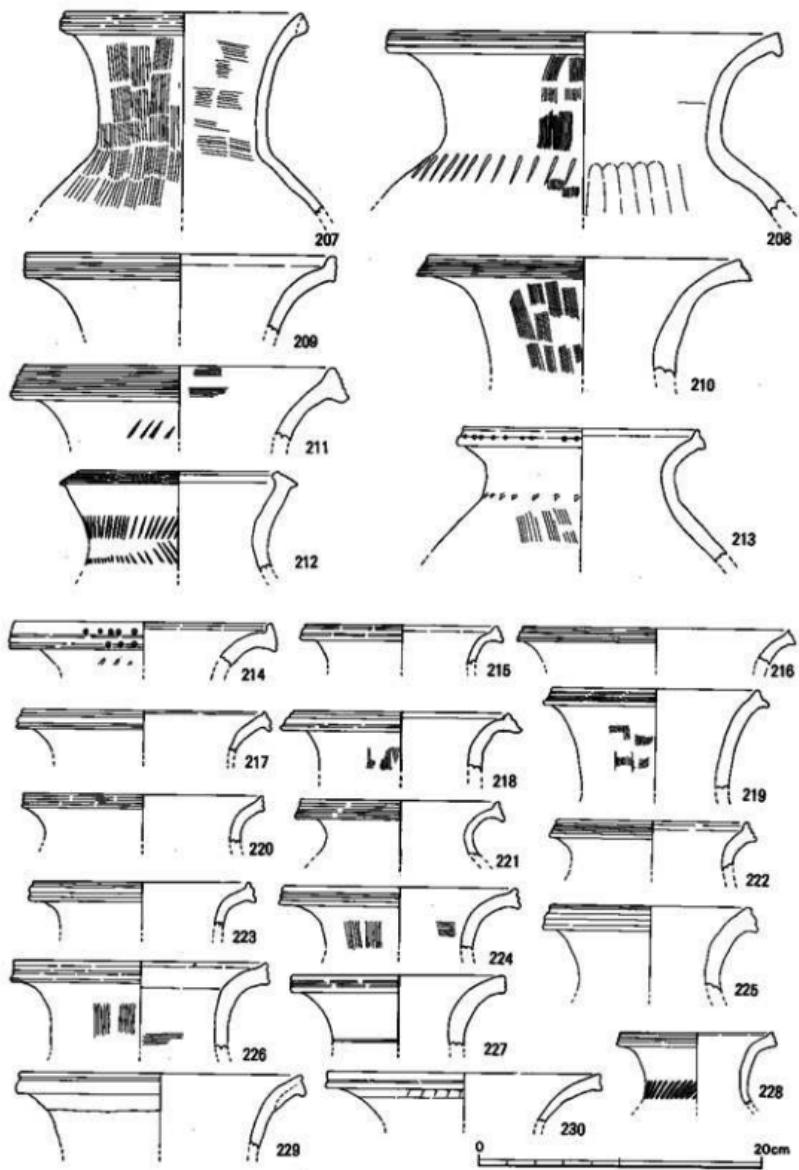
第45図 SR 2 出土遺物



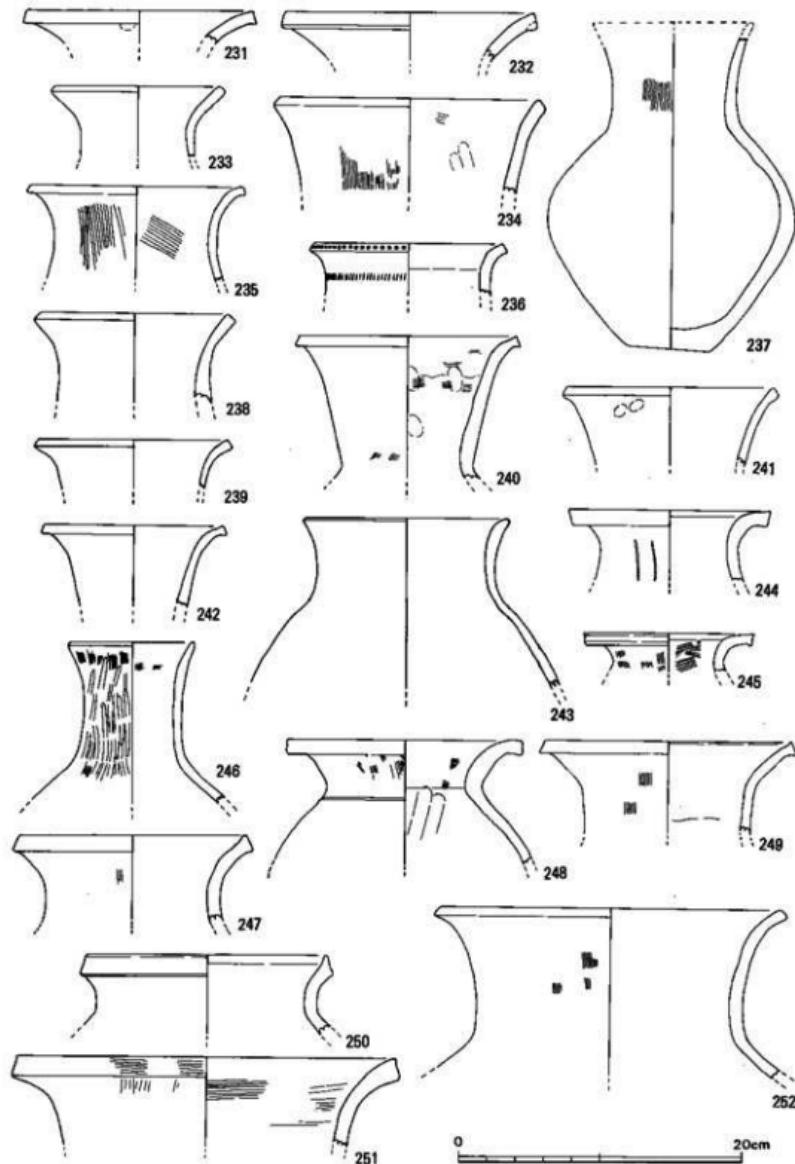
第46図 SR 2 出土遺物



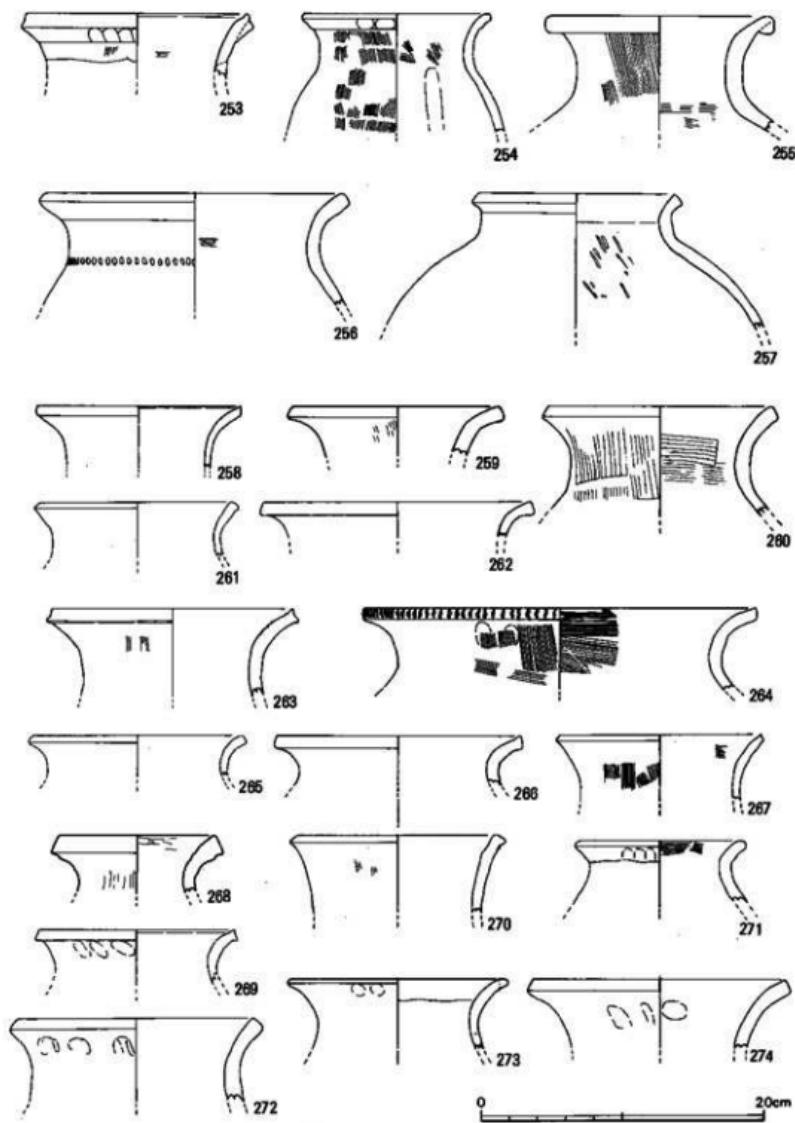
第47図 SR 2 出土遺物



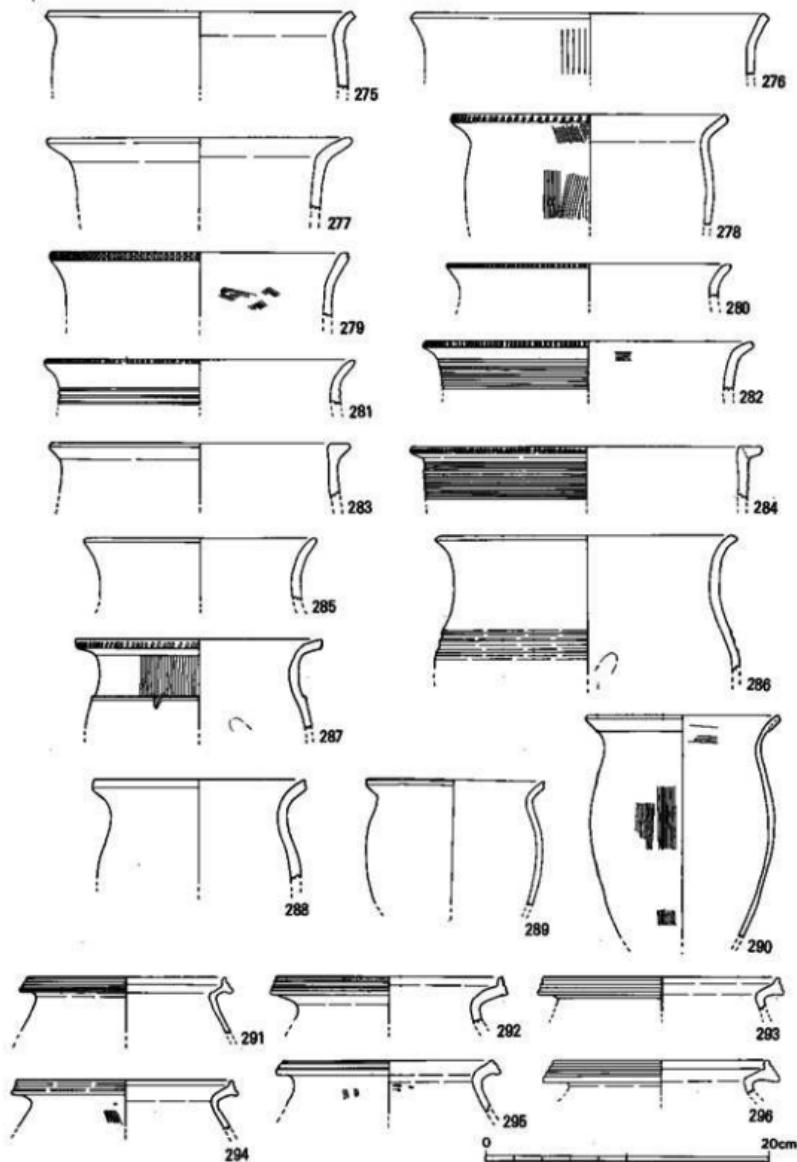
第48図 SR 2出土遺物



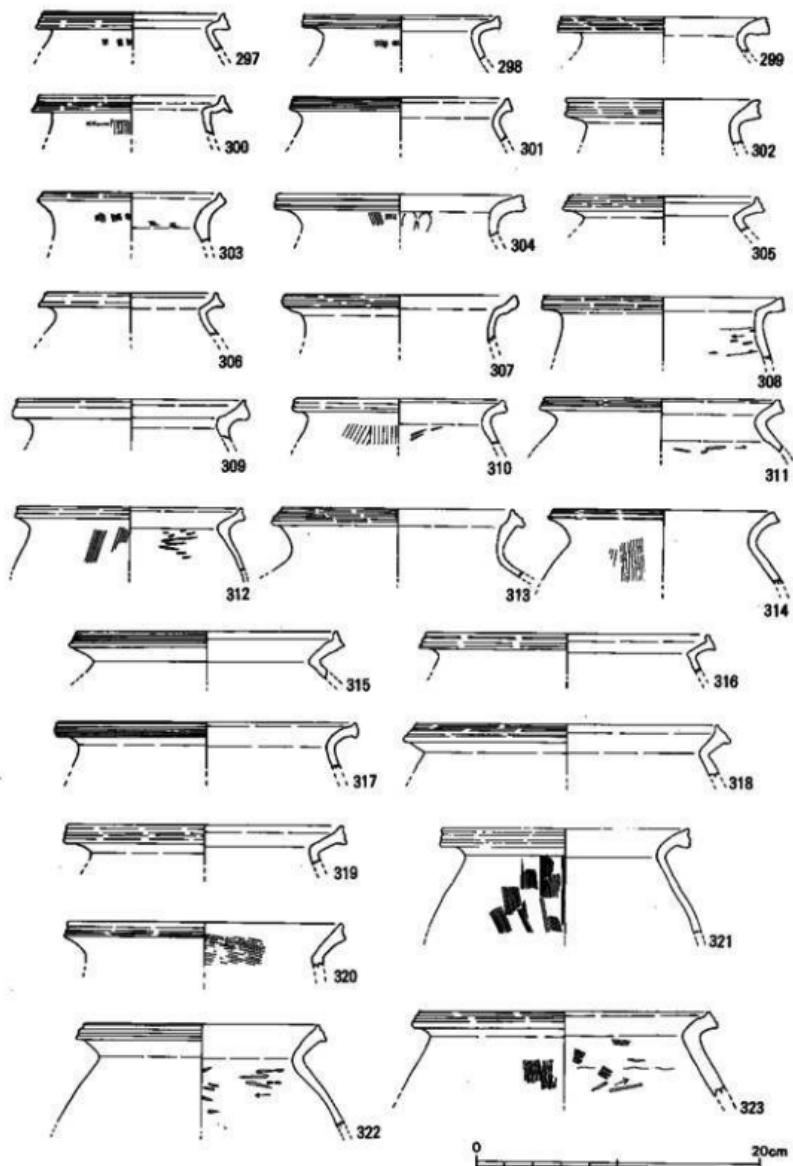
第49図 SR2出土遺物



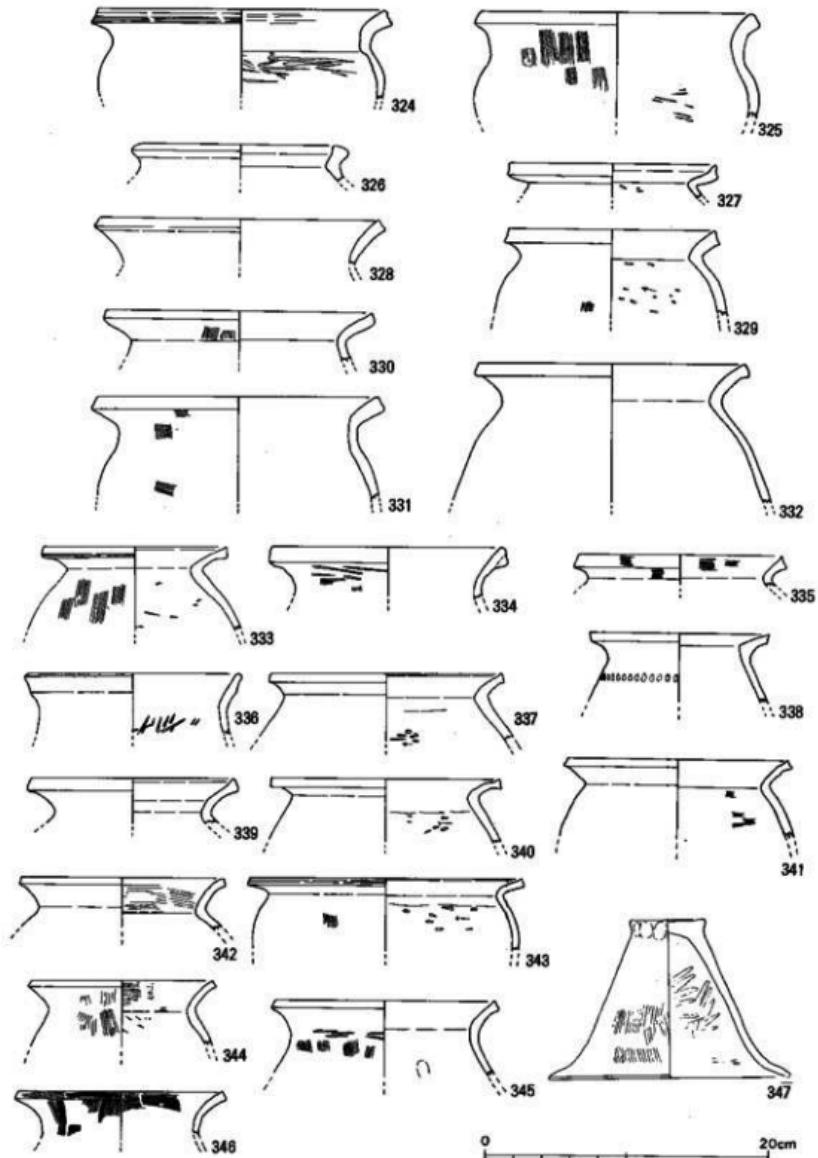
第50図 SR2出土遺物



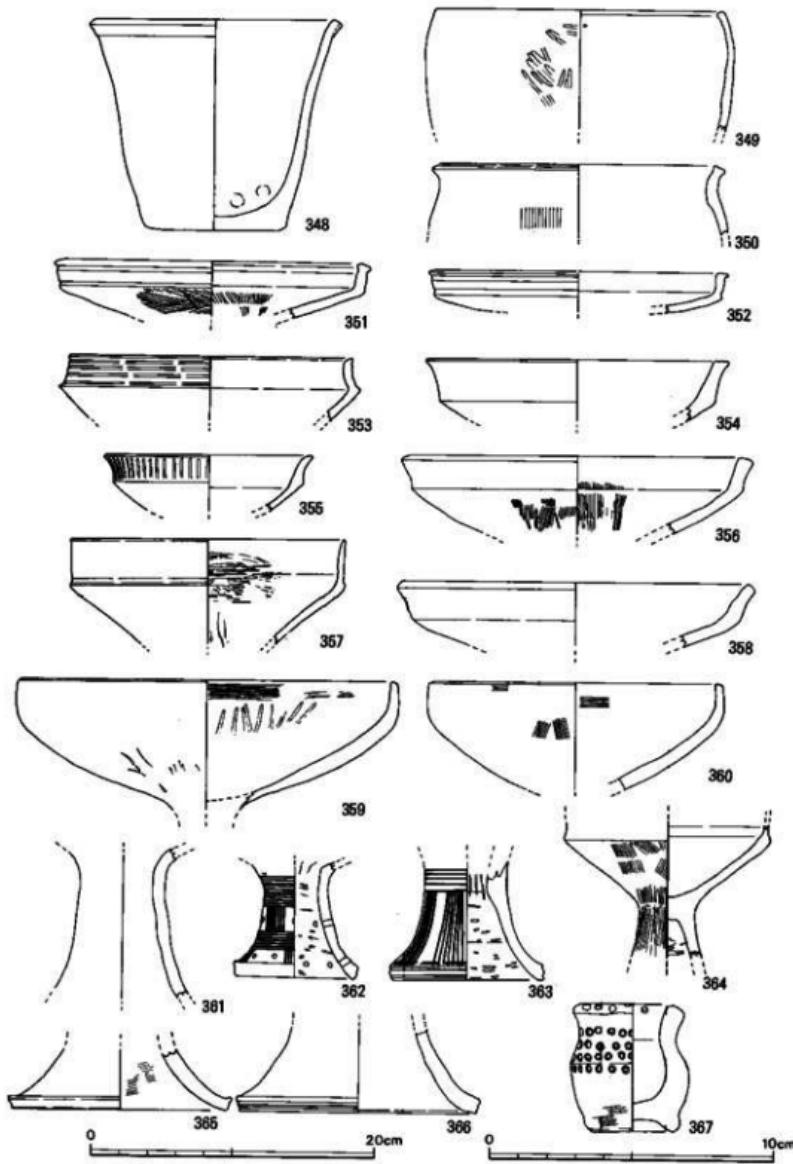
第51図 SR 2出土遺物



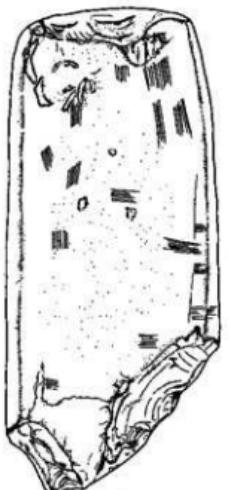
第52図 SR2出土遺物



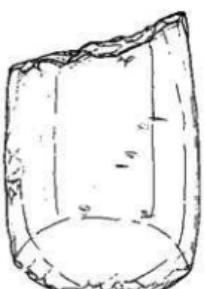
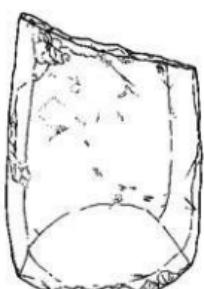
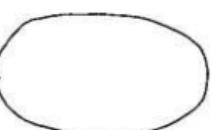
第53図 SR 2出土遺物



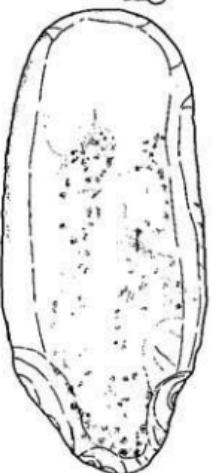
第54図 SR 2出土遺物



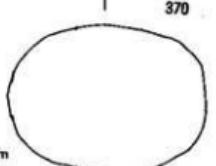
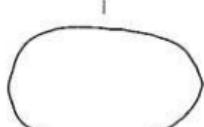
368



369

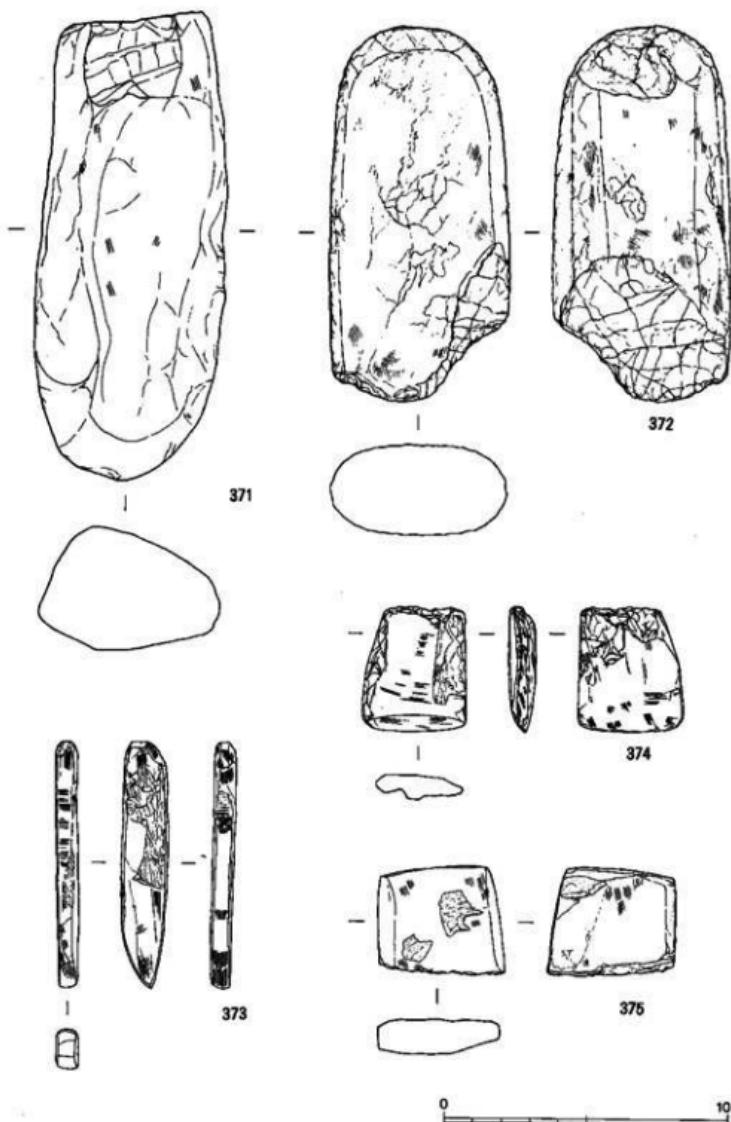


370

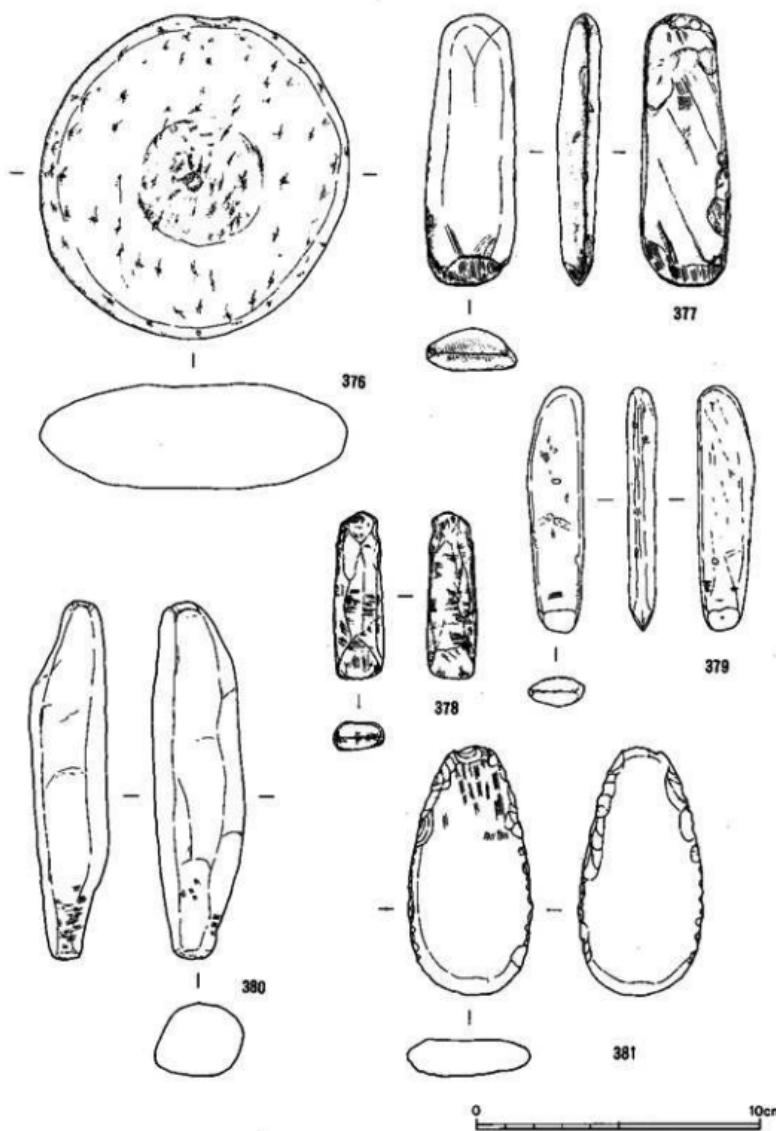


0 10cm

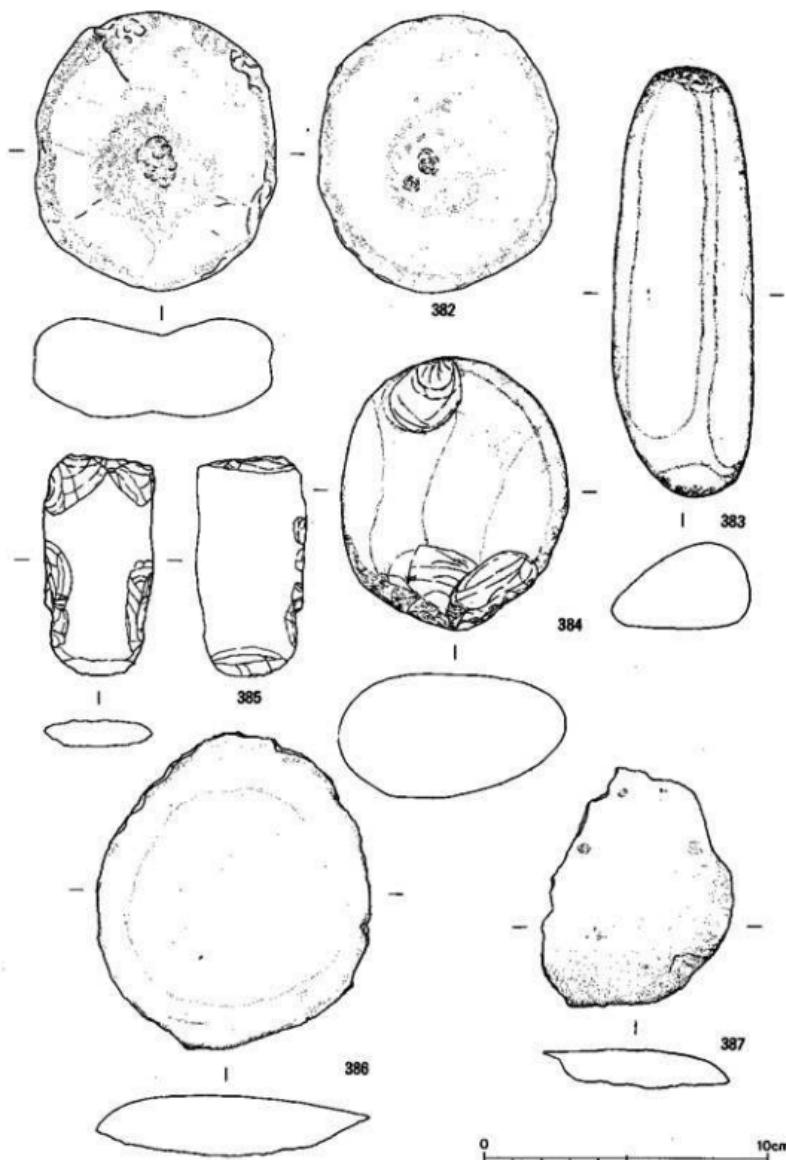
第55図 SR2出土遺物



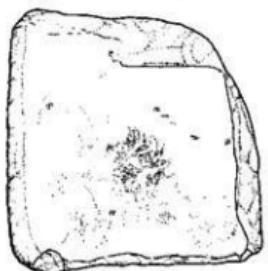
第56図 SR 2出土遺物



第57図 SR 2出土遺物



第58図 SR 2出土物



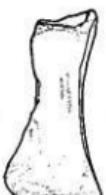
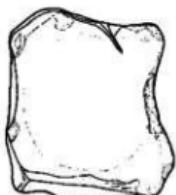
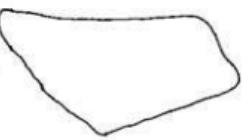
388



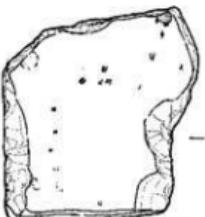
389



390



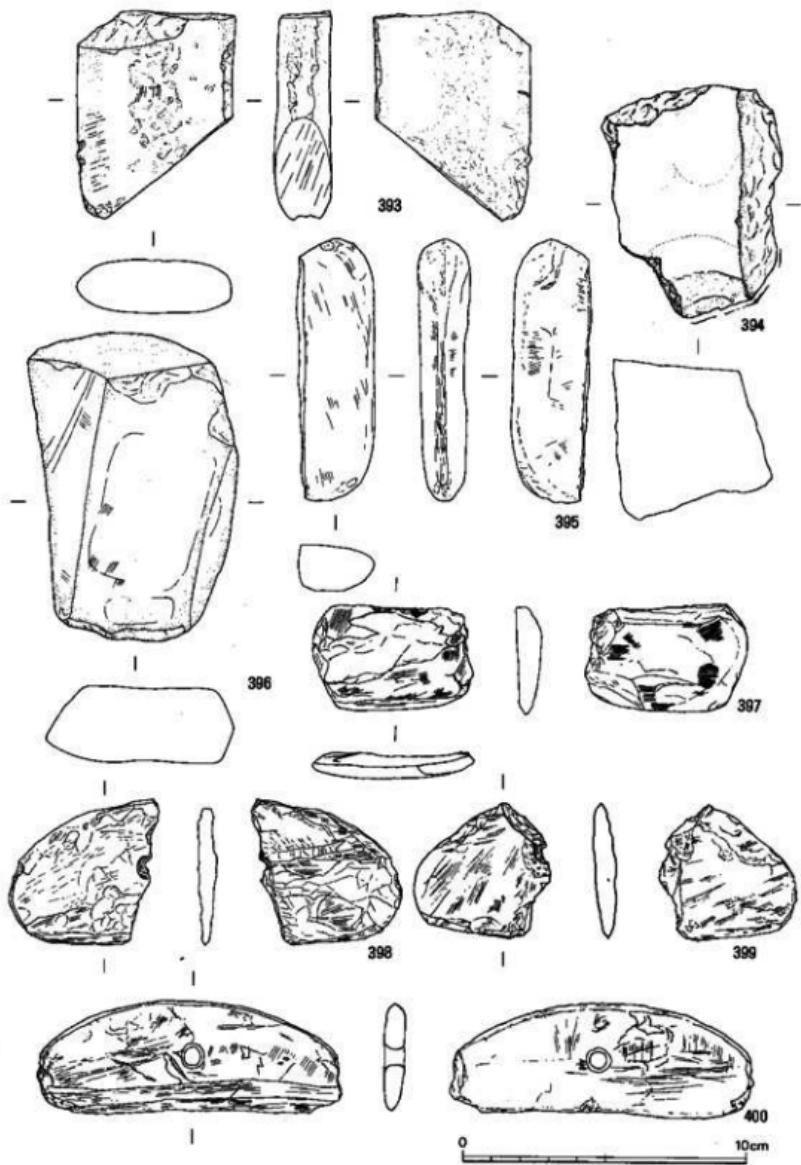
391



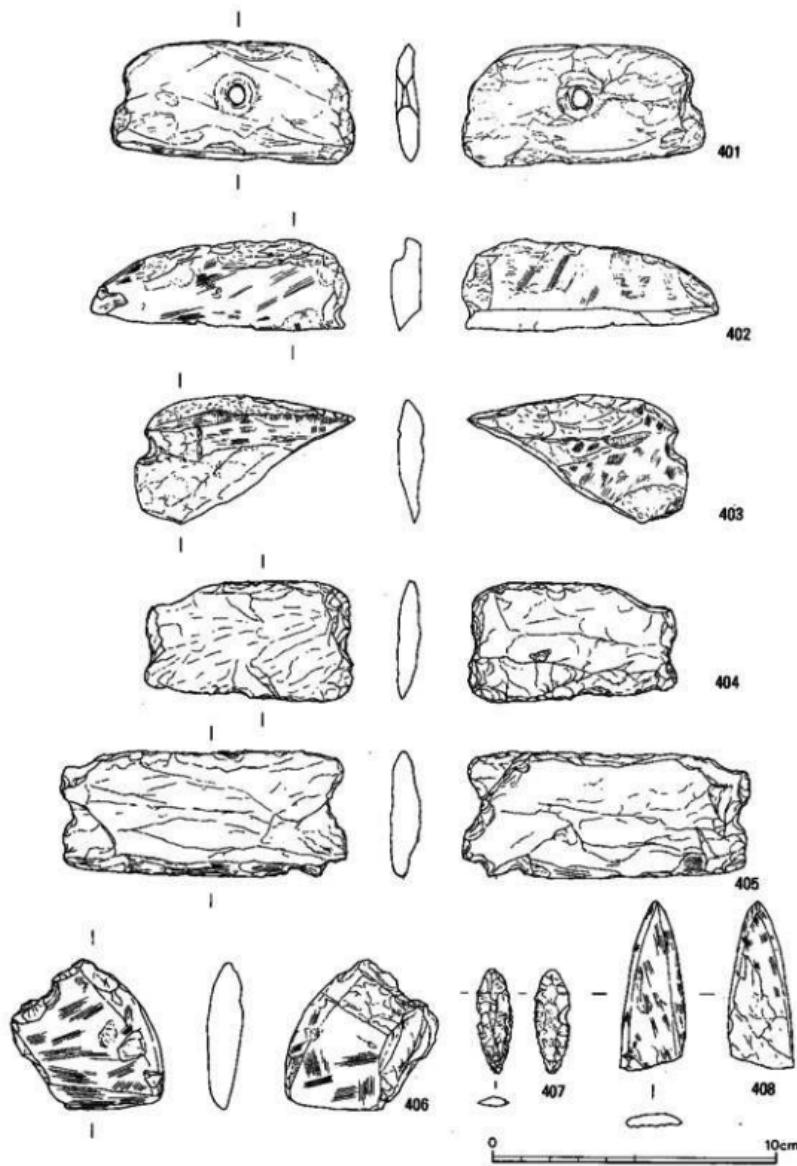
392

0 10cm

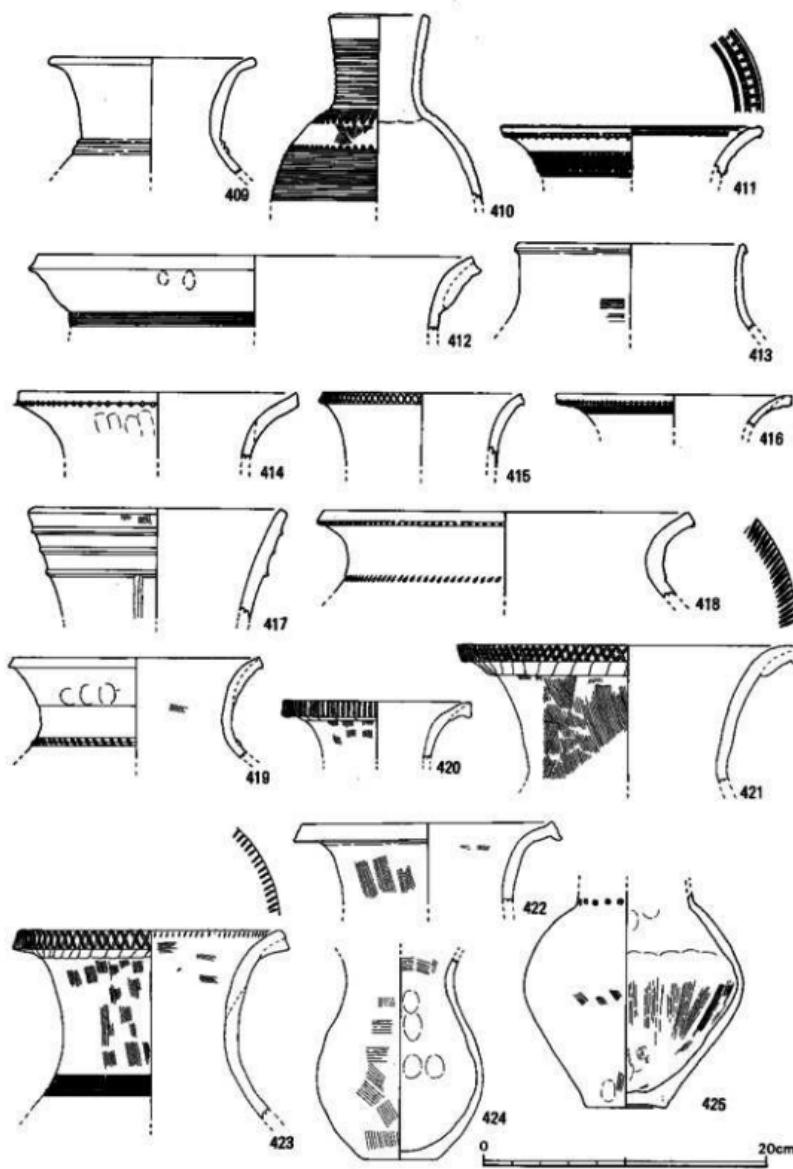
第59図 SR2出土遺物



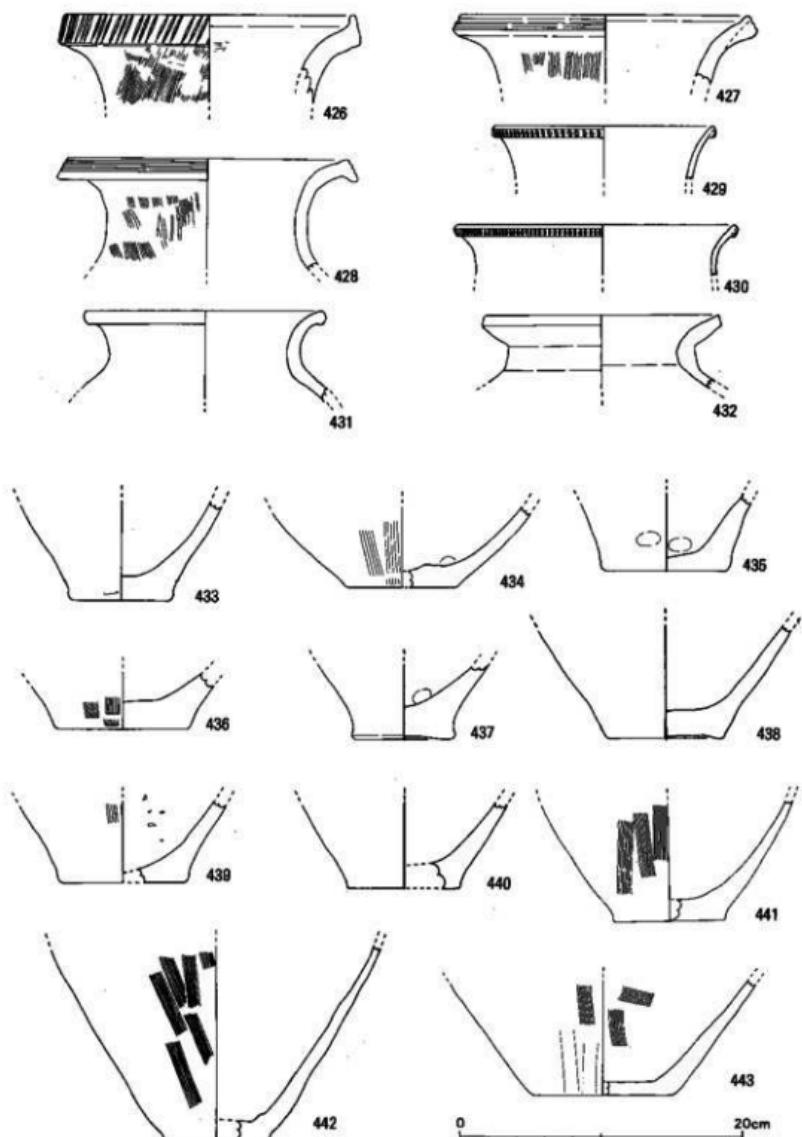
第60図 SR 2出土遺物



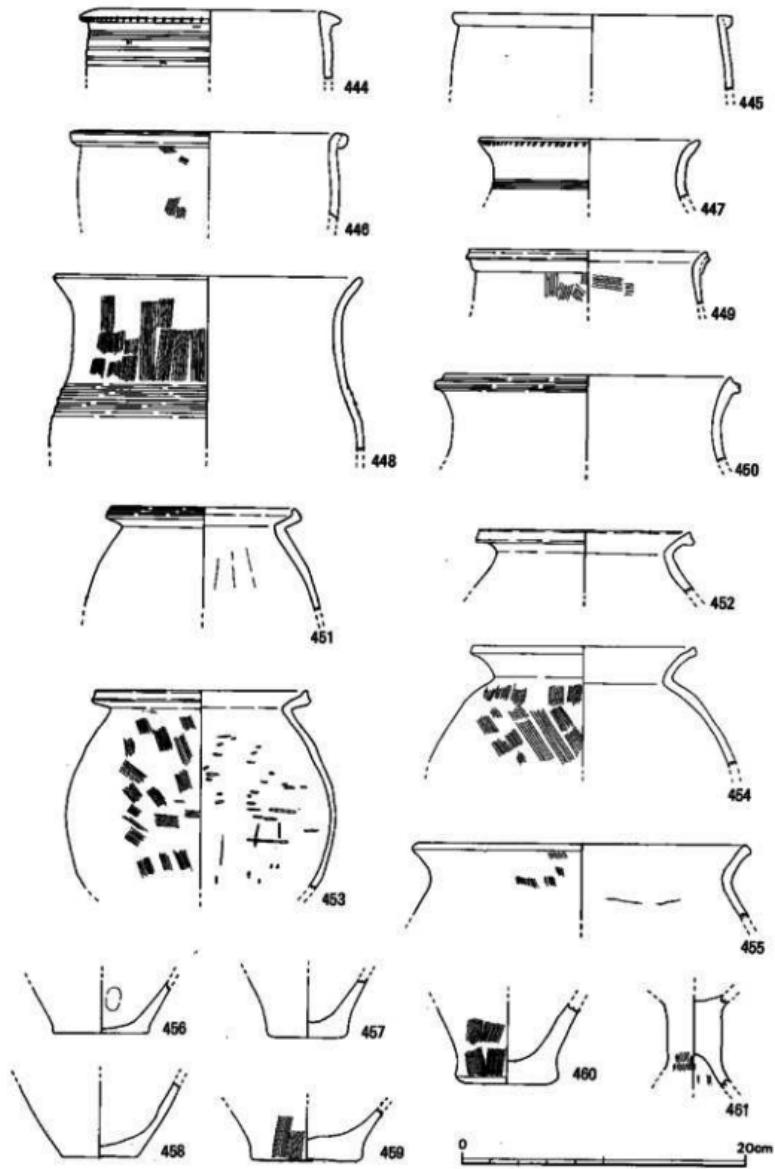
第 61 図 SR 2 出土遺物



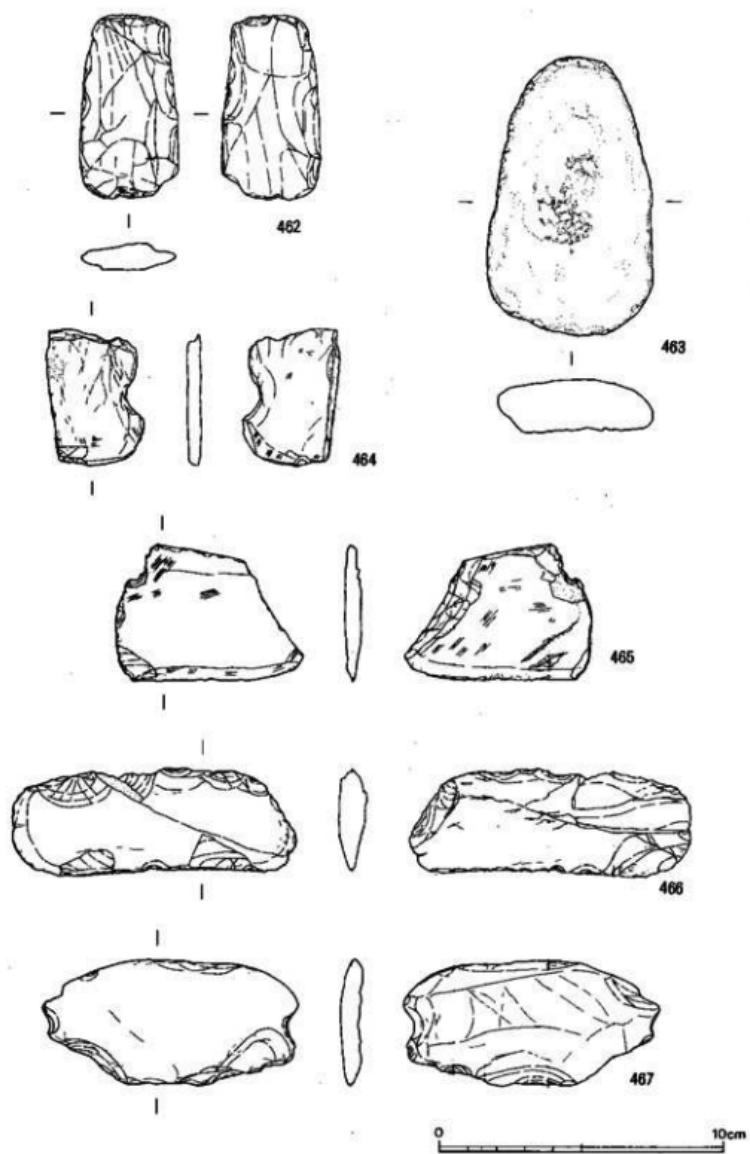
第62図 SR 2出土遺物



第63図 SR2出土遺物



第64図 SR 2 出土遺物



第65図 SR 2出土遺物

4. Loc. 36B

Loc.36B

1. 位置と調査経過

Loc.36Bは、田村遺跡群の北西部に位置し、小字横手の東南端にあたる地点である。北はLoc.36AのAトレンチに接し、西は弥生後期の集落址を検出したLoc.34に接している。

当地点は、空港拡張事業に付随した田村川暗渠化工事に伴って、まず東側（A 3-22-12-B 3-7-2以東）の田村川右岸域 175 m²の調査を緊急に行い、後に西側 675 m²の調査を行った。順序としては、最初東側の中世遺構を調査し、続いてその下層の弥生遺物包含層を発掘、次に西側の中世遺構を調査し、最後に弥生遺構の発掘を行った。

2. 調査概要

当地点の最終的な発掘面積は 850 m²に及び、多くの中世遺構と若干の弥生遺構を確認した。弥生時代に関するものは、堅穴住居址 1 棟、土塙 2 基（北部トレンチを入れると計 8 基）、それに南北方向に流れる大きな自然流路を検出した。住居址および土塙は完掘できたが、自然流路は、長大であるため西側肩部の確認後、本体部に 3 本のトレンチを入れて調査した。この自然流路は北部の Loc.35A・35B から続く SR 2 である。よって、Loc.36B 東側調査区下層の弥生包含層も、SR 2 の埋土の一部としてこれを新たに把握した。

3. 層序と出土遺物

Loc.36 の基本的な層序は、

第Ⅰ層 耕作土

第Ⅱ層 床土

第Ⅲ層 灰褐色粘質土層

第Ⅳ層 黄褐色粘質土層

である。但し、第Ⅳ層の堆積が確認できたのは SR 2 の西肩部以西であり、それより東はすべて、SR 2 の埋土上層が中世遺構の検出面となっていた。すなわち、弥生時代には当地点の大部分は自然流路が占めており、西部のみが微高地状をなしていたものと考えられる。

なお、第Ⅲ層は弥生および中世期の遺物を包含していたが、それらについては『中・近世編』で紹介する。

4. 遺構と遺物

住居址



第66図 調査区設定図

ST 1

ST 1は、調査区の西端部に位置し、第IV層上面において検出された。平面形は、ほぼ円形であるが南北にやや長く、長径5.84m、短径5.40mを測り、長軸方向はN-21° Eを指す。

壁は垂直に近く立ち上がり、壁高は0.30mを測る。床面の標高は6.86mである。床面は、ほぼ平坦であるが、北東部に若干の凹凸がみられ、小ピット状に凹をなしている箇所もあった。また、西の壁際にベット状の0.15mほどの段が設けられており、壁溝は東南部でわざかに確認されただけであった。

埋土は、黒褐色粘質土をベースとしており、第I層が灰黒褐色粘質土、第II層が茶黒褐色粘質土、そして第III層が黄黒褐色粘質土であった。なお、第I層と第II層とは酷似しており、第II層と第III層の間はど境界が明瞭でなかった。

ピットは、合計13個確認された。各ピットの形状・規模は右の表の通りである。ピットの深さから考えると、P 2・6・7・10・11が主柱穴を構成していたものと考えられる。中央ピットは、平面形が橢円形を呈しており、埋土中位までは炭化物を多く含んでいた。その下位では、一回り小さなピットが確認された。

遺物の出土は埋土全層よりみられたが、特に、第II層からの出土が顕著であった。出土土器は後期1段階のものが大半を占めている(1~10)。特に、9と10は、同一個体と判断され、搬入品と考えられる高杯である。石器類の出土も極めて多かった(177、178、183、191~196、199~203、206、210、211、218、219)。

土塙

SK 7

SK 7は、調査区の北西部に位置し、第IV層上面において検出された。平面形は、不整橢円形を呈し、長径1.74m、短径0.74m、深さ0.28mを測る。長軸方向はN-60° Wを指す。

底面はほぼ平坦であり、壁は断面U字状を呈して立ち上がる。埋土は黒褐色粘質土であり、埋土中位より弥生土器片を出土した。

SK 8

SK 8は、調査区の西部南寄りに位置し、第IV層上面において検出された。平面形は、不整橢円形を呈し、長径0.72m、短径0.36mを測り、長軸方向はN-70° Wを指す。

ST 1 ピット計測表

No	径(cm)	深さ(cm)	備考
1	13	31	
2	19	42	主柱穴
3	25	39	
4	24	7	
5	28	22	
6	22	24	主柱穴
7	25	41	"
8	96×76	42	中央ピット
9	63×52	43	
10	32	50	主柱穴
11	21	13	"
12	42	22	
13	23	10	

底面はほぼ平坦であり、壁は断面U字状を呈して立ち上がる。深さは0.18mを測り、埋土は黒褐色粘質土である。埋土中位から底面にかけて多くの弥生土器片の出土をみたが、図示できたのは11のみである。

S K 8は、S T 1より南へ4m程の所に位置しており、同住居址に付属する貯蔵穴ではないかと考えられる。

自然流路

S R 2

S R 2は、その西側の肩部の立ち上がりが調査区西部において、第Ⅲ層除去後に検出された。一方、東側の肩部は調査区東端においても検出されず、そのまま現在の田村川に至っている。少なくとも当地点においては、S R 2は幅40mを越える大きな流路であったと考えられる。

自然流路であるため埋土の堆積状況も極めて乱雑であり、粘質土層と砂層とが交錯し、また、粘質土中に砂層あるいは砾層をサンドウイッチ状に噛むところが多く、逆の場合もみられた。

ところで、S R 2の肩部調査の際、A 3-21-23~A 3-21-25ラインの下層セクション冈にみられるように、流路底面（図のXX層上面）は一度隆起して再び東に向かって落ち込んでいることが確認された。この隆起が南部のLoc.33・41において三角州状をなしていたと考えられ、Loc.36のS R 2は、その本流はLoc.41の東半部を南流し、支流はLoc.33のS R 2からLoc.32のS R 3へと注いでいたものと判断される。

S R 2からは、極めて多くの弥生遺物が出土した（12~176の土器および179~217の石器の大部分）。出土遺物は、時期的にも広範囲にわたっており、前期のものから後期のものまで多種多様である。特に、黒褐色粘質土系の埋土と砂疊を含む層からの出土が目立った。但し、前期II・III段階の遺物および後期II段階の遺物の出土は僅少であった。出土状況も、下層からも後期土器が出土し、埋土堆積の乱雑さに比例して法則的なものはみられなかった。

5.まとめ

Loc.36Bにおいて検出された弥生遺構は、S T 1とS K 7・8およびS R 2である。

S T 1は、後期I段階に属する一括資料を出土しており、Loc.34の集落の一環をなすものと考えられる。なお、S T 1の主柱穴は5個と考えられ、特異な形態である。形狀的にはP 3・7・11・13の4個を主柱穴とすることが妥当であるが、ピットの位置および深さからしてP 2・6・7・10・11を主柱穴と判断した。

S K 7・8はS T 1の付属施設として捉えられる。特に、S K 8は、遺物出土状態からしてS T 1と密接な関連をもっていたものと考えられる。

S R 2は当地点において非常に大きな規模をもっていたことが確認された。Loc.35から当地

点を経てLoc.41に流れるS R 2は、現在の田村川と重複する部分が多く、「古田村川」とも呼ぶべき存在であったと考えられる。そして、その規模は現在の田村川に数倍しており、田村弥生集落形成において重要な役割を果していたものと推定される。

第12表 堪穴住居址計測表

構図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)	主軸方向	柱穴	面積 (m ²)	施設	備考
第 67 図	S T 1	円形	5.62	N - 21° E	13	24.8		

第13表 土塙計測表

構図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長 軸	短 軸	深 さ			
第 67 図	S K 7	不整橢円形	1.74	0.74	0.28	N - 60° W	逆合形	
"	S K 8	"	0.72	0.36	0.18	N - 70° W	"	

第14表 遺構出土土器観察表

辨認番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 高さ 底径	形態・文様	手 法	備 考
1	S T 1	壺	12.7 (16.0) — —	直立する長い縦部から口縫部は斜らかに外反。口唇部は凹をなす。	口縫部内外面横方向の強いナデ調。 底部下半。上胴部内面に指痕圧痕。 肩部接合部内面にしぶり目。	肩部に内板接合線を認める。	
2	—	—	16.3 (9.6) — —	直線的に立ち上がる縦部から口縫部は短く直角。口縫部外側に3本のへラ筋状線。	肩部内面に指痕圧痕顯著。		
3	—	壺	12.1 (5.2) — —	口縫部は丸く外反。縦なつくり。	口縫部を指頭により強く折り曲げている。		外面保ててい る。脚部外壁 に風斑。
4	—	—	13.5 (7.7) — —	「く」の字状に屈曲する口縫部。 口唇部は上下にやや肥厚し、2条の細い凹線文を配す。	口唇部上下端をつまんで横方向に ナデする。		
5	—	—	13.6 (5.1) — —	口縫部は丸く外反。口唇部は外傾する面をなす。	内外面剥離が著しい。		
6	—	—	— (7.3) — 6.3		底部外面ナデ調。 内面にへラ筋りが認められる。	外面保け 、火を受けて変 色している。	
7	—	—	— (8.6) — 5.7		下脚部外側横方向のナデ調整。	外面保ててい る。	
8	—	—	— (10.8) — 5.0				脚部外壁に風 斑。
9	—	高杯	29.2 (5.2) — —	杯体部から強く屈曲して立ち上がり、口縫部は外反。口唇部は外傾する面をなす。	口縫部下端をつまみ出すようにして 横方向に強くナデする。体部外 面ハケ調整。		粘土帶接合部 を觀察できる。
10	—	—	— (9.7) — 14.0	脚部部に2条の凹線文。 脚部中、下位に小内れあり。	脚部内面下半右方向へのへラ削り。	9の脚部か。	
11	S K 8	壺	13.4 (6.8) — —	口縫部がわずかに外反。 口唇部は外傾する面をなし、割目を施す。	割目はハケ状原体による。 口縫部外側に横方向のナデ調整。		
12	S R 2	—	12.6 (8.0) — —	内側に直線的に立ち上がる縦部から、口縫部は強く外方に屈曲。	肩部外側に指痕圧痕あり。 外側に軟やかなへラ磨き。	肩部に風斑。	
13	—	—	17.2 (4.2) — —	口縫部は斜らかに外反。 縦部は丸くおぼゆる。 口縫間に1条のへラ筋状線。	内外面へラ磨き。		
14	—	—	14.1 (4.0) — —	口縫部には内側向外に向けて、小孔を貢通。 脚部外側に貼付突帯。 その上下にへラ筋状線。	口縫部外側に粘土帶貼付。		貼付は埋め込 むように行わ れている。
15	—	—	14.4 (4.4) — —	縦部が屈曲的に外方に立ち上がる。 口縫部は斜らかに外反。 口縫部は明快をなす。 脚部に目口。 底部外壁に7条のへラ筋状線。	口縫部に横方向の強いナデ調整。 割目はハケ状原体による。		

機器番号	造機番号	器種	基盤 高さ 底座 底座 cm)	口径 部高さ 底座 底座 cm)	形態・文様	手法	備考
16	S R 2	壺	14.2 (6.1) —	類部から口縫にかけて滑らかに外反。壺部は面をなす。底部にヘラ彫沈線を施し、突帯A貼付。	口縫部は横方向のナデ調整。	突帯は埋め込むように貼付されている。	
17	"	"	17.8 (7.9) —	類部から周囲にかけて滑らかに外反。壺部は面をなす。底部に10枚余のヘラ彫沈線を施し、その中で3条に突帯Bを貼付。			
18	"	"	8.5 (4.6) —	口縫部は類部から滑らかに外反。壺部にヘラ彫沈線を施す。	口縫部内外面、口縫部は横方向のナデ調整。		
19	"	"	9.4 (5.9) —	組めの類部から直線的に外方に立ち上がり。口縫部は外方に組曲。底部はよくくびきめる。類部外面に斜面及びヘラ彫沈線。口縫部内面に1条の貼付突帯。		全体的に堅軟。	
20	"	"	7.7 15.1 10.8 4.2	底部に近い肩部、口縫部は滑らかに外反。類部下部に斜面突起部。その上にヘラ彫沈線を施す。	外表面は全面にヘラ彫きがかけられていたものと考えられるが、肩部中に下端のハケ調査がみられる。	外表面に堅度。	
21	"	"	— (6.9) —	組くしまった類部に8条のヘラ彫沈線と4条の突帯を複数できる。		解り線を複数できる。	
22	"	"	— (17.0) 40.4	やや肩平気味の球形を呈する肩部の中位。3条の太い突帯を貼付。上に2条には且脱腹筋と柱筋を施す。突帯の上にはヘラ彫沈線。	肩部外表面方向のハケ調査後、ヘラ彫き。内面は横方向のヘラ彫き。	個人品か。	
23	"	"	24.0 (9.5) —	大きく外反する口縫部。口縫部は凹状をなし、上下に削目。口縫部に斜面及びヘラ彫沈線。	外表面方向、内面横方向のハケ調査。		
24	"	"	25.4 (7.0) —	類部から周囲に外反する口縫部。口縫部は厚く、上下にハケ状原体により削目。	口縫部外面に粘土帯を接合貼付。		
25	"	"	20.8 (3.8) —	大きく外反する口縫部。口縫部に削目。口縫部内面及び類部に突帯。類部大削上に彫痕跡文あり。	口縫部外面横方向のナデ調整。削目文は内面から外面へ露呈。	口縫部内面の突帯は擦状を呈す。	
26	"	"	26.4 (8.2) —	滑らかに外反する口縫部。口縫部は凹状をなし、上下にハケ状原体による削目を記す。	口縫部に粘土帯を接合貼付(貼付外表面に強い彫痕底面)。口縫部横方向のナデ調査。肩部外面、縦方向のハケ調査。		
27	"	"	27.2 (9.0) —	大きく外反する口縫部。口縫部は凹状をなし、上下に削目。内外面に彫痕跡文及び突帯を交互に配す。			
28	"	"	23.4 (4.8) —	大きく外反する口縫部。口縫部は凹状をなし、上下に削目。口縫部内面に削目文を配し、その上に6条の細い旋線を施す。	口縫部に粘土帯を接合貼付。口縫部横方向の強いナデ調査。削目及び削目文はハケ状原体による。		
29	"	"	24.8 (11.0) —	大きく外反する口縫部。口縫部上に削目。口縫部内面に2条の突帯。類部外面に彫痕跡文及び彫痕底文。	口縫部は横方向の強いナデにより削目を呈す。		
30	"	"	20.0 (8.7) —	口縫部内面に3列の削定文を配す。口縫部は凹状をなし、上下に削目を施す。	口縫部横方向の強いナデ調査。		

標本番号	追跡番号	器種	法量 (cm) 口縫部 側後 底付	形態・文様	手 法	備 考
31	S R 2	巻	17.4 (6.6) —	唇やかに外反する口縫部。端部は面をなす。端部に3条の突帯を貼付し、その間に能満直線文を配す。	尖端は肩平な粘土帶で、両端のもので刻目風におさえている。	
32	—	—	18.9 (6.0) —	直立気味の端部から外反する口縫部に至る。端部外面に7条1帯の櫛状直線文及び波状文を施す。	—	
33	—	—	37.6 (13.1) —	口縫部は南から外反。口縫部に1条、肩部に4条の細い突帯を有し、下端の突帯に接して、横円形浮文をつける。	大型巻。	
34	—	—	17.7 (19.0) 19.4 —	端部から口縫部にかけて南から外反。端部は丸くおさめ、下端に刻目を配す。肩部に3条の突帯が認められる。	—	
35	—	—	14.9 (7.0) —	端部から口縫部にかけて南から外反。端部は取り取り、下端に刻目。端部に断面五角形の突帯を貼付し、その下に棒状浮文を配す。	口縫部は粘土帶を付け足している。	
36	—	—	16.9 (11.5) —	張り出した肩部に3条の突帯がつく。口縫部は南から外反し、端部は面をなす。	LJ端部外面横方向のナゲ調整。端部内面ナゲ調整、外側には崩板を認める。	肩手式土器。
37	—	—	14.5 (7.0) —	口縫部は端部から南から外反し、端部は面をなす。	口縫部外面ハケ調整の後に、粘土帶を貼付。	
38	—	—	17.6 (4.7) —	端部から端状に開く口縫部。口縫部は面をなす。	口縫部外面に肩平な粘土帶を貼付。	
39	—	—	15.2 (5.7) —	わずかに外反気味に立ち上がる端部から。口縫部は強く外反。	口縫部外面に粘土帶貼付。	
40	—	—	14.4 (6.4) —	—	口縫部外面に粘土帶貼付。貼付部に強い捺压痕。LJ唇部横方向の強いナゲ調整。	口縫部内面に黒漆あり。
41	—	—	17.0 (8.0) —	唇やかに外反する口縫部。口縫部は凹状をなす。	口縫部外面に厚い粘土帶を貼付。外周横方向、内面横方向のハケ調整。	
42	—	—	17.6 (9.0) —	内側気味の端部から大きく外反する口縫部。上脚部に突帯を貼付。口縫部は凹状をなす。	口縫部外面に厚い粘土帶を貼付。LJ唇部横方向のナゲ調整。	
43	—	—	15.8 (7.1) —	口縫部は唇やかに外反。LJ唇部は凹状を呈し、端部はやや下垂する。	口縫部外沿に粘土帶貼付。端部をナゲで削している。LJ唇部横方向のナゲ調整。	
44	—	—	19.0 (3.3) —	唇やかに外反する口縫部。	口縫部外沿に粘土帶貼付。外周横ハケの下端の上をナゲ調整。(粘土帶貼付はハケ崩壊後)。	
45	—	—	19.0 (6.5) —	—	LJ唇部外面に転用粘土帶貼付。貼付部に指頭圧痕顕著。	

種図番号	通説番号	器種	重量 (cm)	口縁 最高 最低 範囲	形態・文様	手法	備考
46	S R 2	壺	11.6 (4.7) —	漏斗状に開く口縁部。 口唇部は外傾する面をなす。口縁部内面に繊細波状文をわずかに認める。	口縁部外面に粘土帶貼付。		
47	—	—	17.9 (9.8) —	漏斗状に開く口縁部。口唇部は丸味を帯び、下縁に鋸目を配す。縫合下端に細いヘラ削れ跡2点。	口縁部外面に粘土帶貼付。 口唇部横方向のナゲ調査。		
48	—	—	21.9 (7.0) —	直線的に外方に立ち上がる頸部から口縁部はさらに外反。	口縁部外面に粘土帶貼付。 口唇部横方向のナゲ調査。		
49	—	—	20.0 (5.5) —	直線的に外方に立ち上がる頸部から口縁部は水平に近く外反。 縫合部は外傾する面をなし、部分的に下垂。	口縁部に粘土帶を接続貼付。 内外面とも溝痕不明。		
50	—	—	16.6 (4.8) —	直線的に外方に立ち上がる口縁部。	口縁部外面に粘土帶貼付。 縫合部外面に擦痕。	外面焼けている。	
51	—	—	19.2 (6.3) —	直立気味の頸部に短く外反した口縁部が付く。口唇部は斜状をなす。	口縁部外面に粘土帶貼付。 貼付部外面に強い擦痕注意。 口唇部横方向の強いナゲ調査。		
52	—	—	25.4 (9.4) —	直線的に外方に立ち上がる頸部に漸らかに外反した口縁部が付く。 口唇部は凹状をなす。	口縁部外面に厚い粘土帶貼付。		
53	—	—	22.4 (8.6) —	頸部から漸らかに外反して口縁部にまる。口唇部は斜状をなす。	口縁部外面に粘土帶貼付。 口唇部横方向のナゲ調査。		
54	—	—	18.0 (6.1) —	わずかに外反気味の頸部から、口縁部は短く外反。縫合部は面をなし、下端に鋸目。頸部に繊細波状文。	鋸目はヘラ状原体によって右方向から施文。波状文は左から右へ施文。	外面焼けている。	
55	—	—	18.6 (7.0) —	内傾気味の頸部に外方に屈曲した口縁部が付く。口唇部は面をなし、鋸目を配す。	口縁部外面に渾厚な粘土帶を貼付。 鋸目はハケ状原体によって左方向から施文。		
56	—	—	14.8 (5.8) —	漸らかに外反する口縁部。 口唇部には右上がりの鋸目を配す。	口縁部外面に粘土帶貼付。 貼付部外面に擦痕注意。		
57	—	—	11.9 (7.0) —	直立気味の頸部から外反する口縁部。 口唇部に穿孔孔。頸部下端に繊細波状文、上縫合部に直線文及び波状文。	口縁部内外面横方向へのヘラ磨き。 縫合部内面横方向、外曲横方向へのヘラ磨き。	口縁部の小孔は、焼成前に内から外へ貫通。	
58	—	—	14.1 (4.0) —	口縁部は頸部から漸らかに外反。 口唇部は面をなし、ハケ状原体による鋸目を配す。			
59	—	—	16.0 (5.7) —	やや外方に立ち上がる頸部から口縁部は水平に近く外反。口唇部は凹状をなし、ハケ状原体による鋸目を配す。	口縁部に粘土帶を接続（ハケ調整後）。 口唇部横方向のナゲ調査。		
60	—	—	17.4 (5.5) —	漸らかに外反する口縁部。 厚い口縫合部にはハケ状原体による右上がりの鋸目を配す。	外面縫合方向のハケ割合後、縫合方向のハケ調整。		

標因番号	造機番号	西種	法量 (cm)	口縁 部高 度及 び底	形態・文様	手 法	備 考
61	S R 2	卷	13.2 (5.3) —	口縁部滑らかに外反。 口縁部に直角目突起 2 条貼付。小孔を有す。 縫部内面にも刺目突起 2 条貼付。	小孔は内側から外面へ貫通。		
62	—	—	17.8 (6.9) —	底立気味の縫部から、口縁部に向かってやかに外反。 口唇部にハケ状原体による刺目。 口縁部面に同原体による羽伏庄	口縁部外面に粘土帶貼付。貼付部ナダ調整。(ハケ調整後に貼付しているが、貼付後も一部ハケ調整)。		
63	—	—	22.0 (9.0) —	縫部から滑らかに外反する口縁部。 口唇部は厚く、ハケ状原体による刺目。 口縁部面に同原体による羽伏庄	口縁部外面に粘土帶貼付。		
64	—	—	20.4 (8.0) —	底立気味の縫部から僅く外反する口縁部。 口唇部は経部に小孔。口唇部は幅広く凹状をなす。縫部に穴状を有す。	口縁部外面に粘土帶貼付。小孔は内側から外面へ貫通。		
65	—	—	20.1 (5.6) —	厚めの貼付口縁。 口唇部前面をなし、ハケ状原体による刺目を配す。	口縁部外面に粘土帶貼付。 口縁部内面横方向のナダ調整。		
66	—	—	19.2 (6.8) —	"			
67	—	—	18.4 (5.3) —	滑らかに外反する口縁部。縫部は同状をなし、下端に深い刺目を有す。外面裏方向に沈線を数条ずつ配す。	外転横方向のナダ調整。		
68	—	—	19.2 (6.4) —	口縁部滑らかに鋸く外反。 縫部は外傾する面をなす。	口縁部外面に粘土帶貼付。 内外面全体的にナダ調整。		
69	—	—	18.0 (6.1) —	口縁部は鋸く外反気味に立ち上がる。U 線部の内外に太い刺目。縫部に刺突文を有す。			
70	—	—	21.6 (6.3) —	口縁部は大きく外反。 口唇部は下方に肥厚。	口縁部外面に粘土帶貼付。 口唇部後方向のナダ調整。		
71	—	—	11.0 (2.5) —	口縁部は滑らかに外反し、口唇部下端に刺目。口縁部外面に微痕起等。		薄手式土器。	
72	—	—	17.2 (2.4) —	大きく外反する口縁部。 口唇部下端に刺目。 口縁部外面に断面三角形の細い突等。	刺目は右方向から施す。		
73	—	—	21.8 (4.6) —	直線的に外反する口縁部。 外面に文帯貼付。			
74	—	—	23.3 (3.8) —	大きく外反する口縁部。縫部は下方に肥厚。 口縁部下端に刺目。 縫部外面に縫方向のヘラ補足縫。		薄手式土器。	
75	—	—	20.0 (2.6) —	大きく外反する口縁部。縫部は下方に肥厚。 口縁部下端に刺目突起貼付。 その下に勝種直紋文と縫方向のヘラ補足縫を配す。			

標図番号	速病番号	器種	口縫 法量 (cm) 頭頂 底径	形態・文様	手 法	備 考
76	S R 2	壺	26.7 (4.5) —	口縫部は強く外反。 口縫部は面をなし、下端に斜面。 口縫部外縁に2条の凹線。	剥むは右方向から施す。	筒子式土器。
77	"	"	18.2 (7.2) —	滑らかに大きく外反する口縫部。 口縫部下端にハゲ状突起による筋目。	口縫部外面に粘土等貼付。 器表の荒れがひどく、調査不明。	頸部に櫛溝直線文を有する可能性あり。
78	"	"	17.6 (7.9) —	滑らかに外反する口縫部。 口縫部は若干上方に膨張され、2条の凹線文。	頸部内面に指痕圧痕。 口縫部内面横方向のナメ調整。	
79	"	"	23.6 (9.4) —	口縫部が大きく外反している。	口縫部外面に粘土等貼付。 口縫部内面横方向のナメ調整。	
80	"	"	15.2 (6.5) —	口縫部を下方に拡張し、2条の凹線文を施す。		
81	"	"	9.2 17.2 11.4 4.4	わずかに両の傾った上腹部から口縫部は滑らかに外反。	口縫部外面に粘土等貼付。 上腹部及び底部内面に指痕圧痕。	外面上腹部と下腹部に黒漆が対称的についている。
82	"	"	12.4 (4.6) —	滑らかに外反する口縫部。 口縫部は丸くおさめる。	口縫部外面に粘土等貼付。 外面に指痕圧痕。	
83	"	"	10.2 (3.0) —	わずかに内縫気味に立ち上がる頸部から短く外反する口縫部に至る。	口縫部は後方向のナメ調整。	
84	"	"	5.5 8.8 8.6 4.3	頸部中位に最大径を有し、口縫部が短く直線的に外反する小型土器。	外面に指痕圧痕。	
85	"	"	8.9 (5.0) —	直立気味の頸部から外反する口縫部にある。	口縫部ナメ調整。	
86	"	"	15.2 (4.6) —	内縫気味の頸部から口縫部は強く屈曲。口縫部に凹線。	胸窓外面に木口による擦痕。	外面は塗装している。
87	"	"	19.0 (5.2) —	弓状に外反する口縫部。 端部は丸くおさめる。		
88	"	"	15.8 (4.5) —	外方に直線的に立ち上がる頸部から短く外方に屈曲する口縫部に至る。 端部はやや下方に肥厚。	口縫部横方向のナメ調整。	
89	"	"	15.6 (4.5) —	口縫部は幅広くやや外方に拡張。 球形の体形が付くものと考えられる。		
90	"	"	14.6 (7.6) —	球形に近い体形から、口縫部は外反気味に立ち上がる。 口縫部は弓状をなす。	口縫部横方向のナメ調整。	

標記番号	造構番号	基種	法量 (cm)	口縁 器高 綫径 底径	想 想・文 程	手 法	備 考
91	SR 2	卷	13.9 (5.2) —	直立気味の開部から、短く屈曲する口縁部に至る。	LJ縁部外面に粘土帶貼付。 貼付側に唇頭丘痕跡。		
92	—	—	12.2 (8.5) —	わずかに外反気味に立ち上がる長い開部から、LJ縁部は短く外方に屈曲。	脣頭面に唇頭丘痕が残る。 外面ハケ調整。		
93	—	—	10.9 (5.0) —	内側して立ち上がる上唇部から口縁部は短く外反。	粘土を折り返して口縁部をつくる。口縁部及び口縁部内外面横方向のナゲ調整。 上唇部外側に右下がりのハケ調整。	脣部は焼けている。	
94	—	—	— (5.0) 9.2	厚めの底部。			
95	—	—	— (6.9) 7.4	異常に厚い底部で、上げ底症状を呈す。			
96	—	—	— (5.5) 7.4		底部内面ナゲ調整。		
97	—	—	— (6.2) 9.2		"		
98	—	—	— (5.1) 8.2	やや上げ底気味。			
99	—	—	— (4.4) 7.1		脣口縁部で欠損している。		
100	—	—	— (4.3) 8.5	異常に厚い底部。	"		
101	—	—	— (9.5) 18.8	大型唇の底部。			
102	—	—	— (6.4) 9.8	上げ底気味の底部を有し、下唇部は大きく外方に張り出す。			
103	—	—	— (4.2) 9.0			外面火を受けて変色（焼の底悪か？）。	
104	—	—	— (9.0) 8.4		脣部外面ハケ調整。		
105	—	—	— (6.9) 8.0		底部の粘土帶貼付部が剥落している。		

標図番号	通稱番号	岩種	口標 基準 深度 (cm.)	形態・文様	手法	備考
106	SR 2	巖	(4.9) 8.2	やや上げ底気味の底部。		
107	*	*	(3.4) 5.7			
108	*	*	(7.0) 9.8	前期の巖の底部か。		下洞部から底外面にかけて黒斑。
109	*	*	(3.4) 4.8	上げ底気味の底部。		外面保げている。
110	*	*	(4.4) 10.9		剥離外面及び底外面にへら磨き。	
111	*	*	(5.0) 9.8	下洞部は大きく外方に張り出す。		
112	*	*	(4.2) 4.2	底延が小さい。		
113	*	*	(10.0) 8.2	やや上げ底気味の底部から、長めの頭部に至る。		
114	*	*	(7.3) 4.0	"	内面に指領圧痕が顯著。	外面下洞から底部にかけて黒斑。
115	*	*	(6.2) 6.0		外面にハケ調査の痕が若干残る。	
116	*	*	(19.3) 8.6	厚めの底部から頭部に至る。		下洞部外面に黒斑。
117	*	*	(4.3) 7.4	前面舌形状を呈する底部。		
118	*	*	(5.6) 6.0	異常に厚い底部を有す。		
119	*	巖	19.0 (20.4) 20.7	上頭部に最大深さを有し、頭部は内傾して立ち上がり、口縫部は傍らに外反。口縫部上下に刻目。上頭部にへら磨光線。その下に刻点文。	刻点文はハケ状原体による。 頭部外面板方向の細いハケ調査。 頭部外面に擦痕(その後にナデ調査)。	
120	*	*	19.4 (7.6)	口縫部は頭部からわずかに外反。端部は丸くおさめる。頭部に削り出しがた穴を有し、へら磨光線3条を確認できる。	口縫部内外面ナデ調査。 頭部外面ハケ調査。	

検査番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口縁 高さ 調査 底辺	形態・文様	手 法	備 考
121	S R 2	壺	14.4 (3.3) —	14.4 (3.3) —	逆し字状口縁を呈す。縁部に右方側から約1目を配し、その直下にヘラ彫り2条を施す。	口縁底部外側に粘土帶貼付。 口縁部内側に指痕圧痕。 外側のハケ調査は火痕貼付後。	粘土に墨跡を含む。
122	—	—	17.4 (4.3) —	—	逆し字状口縁を呈す。縁部に右方側から約1目を配し、その直下にヘラ彫り2条を施す。	口縁底部外側に断面三角形の粘土帶貼付。	—
123	—	—	20.6 (2.1) —	—	口縁下に横状の突起を有し、先端に凹部を有す。突起下にヘラ彫り2条まで切める。	U縁下に肩平な粘土帶を貼付。	—
124	—	—	15.2 (17.0) 17.7 —	—	上縁部やや盛り出す。直立気味の縁部から口縁部は強く外反。口縁部外側に1条、上部部に3条の火痕を有す。	縁部内外面ハケ調査。 縁部外側下半に華表を認める。	外面全面が焼けている。
125	—	—	19.4 (6.0) —	—	肩らかに外反する口縁部を有し、縁部は面をなす。	口縁部内外面横方向のナゲ調整。	—
126	—	—	17.0 (4.4) —	—	口縁部は肩部から肩らかに外反。縁部は面をなし、外側に突起を貼付。	内外面ハケ調査。	—
127	—	—	15.6 (12.7) —	—	直立気味の長い縁部から、口縁部はやや外反。縁部は面をなし、下方にやや泥足。	外面ハケ調査。	外面全面が焼けている。
128	—	—	15.8 (9.2) —	—	肩部から直立的に外傾して立ち上がり、口縁部は短く外反。口縁部は面をなす。	肩部内面下半に左方向へのヘラ削り。 外面縦方向のハケ調査がわずかに残る。	外面全面が焼けている。 外面火を受け変色。
129	—	—	— (11.3) 11.5 4.6	—	やや肩の張った縁部を有する小型の壺。	内面に粘土帶接合部が確認できる (4带で成形)。 内外面に指痕圧痕が顕著。	—
130	—	—	26.0 (9.5) —	—	上縁部で屈曲するタイプの大形壺を呈す。口縁部は水平な幅広い面をなす。	口縁部に断面三角形の粘土帶貼付。	—
131	—	—	13.6 (10.4) 16.4 —	—	球形に近い圓筒から、U縁部は強く外反。口縁部に2条の凹線を有す。	内面木理の粗いハケ調査。 内縫接合部あり。	—
132	—	—	15.8 (7.5) —	—	最大径を縁部に有し、口縁部は外方に強く屈曲。口縁部は内側した面をなし、1条のヘラ彫りを施す。	口縫部上端をつまんで横方向に強くナゲる。	—
133	—	—	9.0 (5.9) —	—	大きさ張った圓筒から、細く尖った縁部へ繋ぎ、口縁部は強く外反。口縁部に2条の凹線を有す。	口縫部上端をつまんで横方向に強くナゲる。 内面上縁部に右方向へのヘラ削り。	—
134	—	—	16.4 (20.2) 21.8 —	—	上縫部に最大径を有し、縁部はY字状に強く屈曲。口縫部は肩部をなす。	口縫部及び口縁部内外面横方向の強いナゲ調査。	外面は焼けている。
135	—	—	10.7 10.2 10.2 4.0 —	—	上縫部が張り出して、外方に強く屈曲した口縫部に生る。並部は厚い。	外面に指痕圧痕を残す。	—

補図番号	造機番号	基 標	口端 法量 (cm) 底端 法量 (cm)	形 症・文 索	手 法	備 考
136	S R 2	要	— (9.2) — 4.8	しゃくれた底部から頭部上方へ至る。	外面ハケ調整。	頭部外面が焼けている。
137	"	"	— (5.1) — 6.5	上げ底気味で断面台形状の底部。		下脚部内面から底部にかけて黒斑。
138	"	"	— (3.9) — 5.4			
139	"	"	— (6.3) — 5.9		外面ハケ調整。	
140	"	"	— (8.7) — 7.0	比較的薄い底部から直線的に外方にのびる。	"	
141	"	"	— (4.2) — 6.2	断面台形状の厚い底部。		
142	"	"	— (4.4) — 5.9			
143	"	"	— (5.3) — 7.4	上げ底気味の底部。	内面横方向のヘラ削り。	外面が焼けており、内面は火を受けて変色。
144	"	"	— (19.2) — 9.0	比較的薄い底部から球形に近い頭部に至る。		
145	"	"	— (5.7) — 6.2	上げ底状の厚い底部。		
146	"	"	— (4.2) — 7.2		外面ハケ調整。 内面ナデ調整。	下脚部から頭部外面にかけて黒斑。
147	"	"	— (6.0) — 6.2		外面ハケ調整。	外面焼けている。 内面に黒斑。
148	"	"	— (4.0) — 6.9			
149	"	"	— (4.0) — 5.2			
150	"	"	— (3.5) — 5.8		内外面に指蹠圧痕が残る。	下脚部外面に黒斑。

標記番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口端 器高 測定 結果	形態・文様	手 法	備 考
151	8 R 2	瓶	(4.1) 3.5				下部から底部外縁に黒斑。
152	*	"	(9.8) 9.1	底部が異常に薄い。	内面へラözき。 底部の粘土板を貼付する以前の段階のもの。		
153	*	瓶	(15.6) 7.4			外表面にハケ黒斑痕が若干認められるものの、裏表の丸みがひどく、他は調査不明。	下部から底部外縁に黒斑。
154	*	高杯	(7.3) —	杯部と脚部の間に断面三角形の突起を貼付している。			
155	*	"	17.6 (2.4) —	口縁部外縁の凹線は垂直。 口唇部は凹状を呈す。	口縁部内外面及び口唇部ナゲ調査。 体部外縁にハケ黒斑をわずかに認める。		
156	*	"	(12.4) 13.6	腹部に2列の網状文、その下に3点の印文文、縫隙は表面に立ち上がり、外縁が凹状を呈す。	内面右上方へのヘラ削り。		
157	*	"	(8.2) —		杯底部は円板充填による。 外縁部方向へラözき。 脚部内面にはヘラ削りの痕が認められる。		丸型の脚についたと考えられる爪の圧痕あり。
158	*	"	(7.8) —	杯部は輪状を呈し、脚部は細い。	口縁部は盤口絞で判別している。		
159	*	"	(11.9) 11.8	直立気味の脚部。端部外面は凹状を呈す。	脚上部にしばり目、下半に指頭圧痕あり、脚端部外周横方向の強いナゲ調査。		
160	*	"	(10.8) 8.9	直線的に開く脚部とやや内高気味に立ち上がる杯部を有す。			
161	*	"	(4.7) 12.4		脚部下端横方向の強いナゲ調査。		
162	*	"	15.8 (3.7) —	口縁部が凹状をなし、外縁にハケ状原体によって切れ目を記す。			器形不明。
163	*	鉢	15.8 (3.7) —	中央外反気味に内傾して立ち上がる。側部で折合する繩文系縁鉢の延長線上に位置する土盛か。端部は内傾してやや肥厚。	外縁縦方向のハケ調査。		
164	*	"	(3.4) 3.6	断面台形状の厚くて小さい底部。			裏の可能性あり。
165	*	"	(3.1) 6.2	断面台形状の底部。			外表面が保てている。

標図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 側壁 底径	形態・文様	手法	備考
166	S R 2	鉢	— (3.5) 6.4	底部は高台状に外方に踏ん張っている。 端部に小孔あり。	小孔は微成曲穿孔。	
167	"	"	— (7.6) 5.8	高台状に踏ん張った底部。		鉢底部か。
168	"	"	— (3.8) 6.6	"		
169	"	"	— (2.9) 4.5	上げ底状の底部。	底部を外方につまみ出している。	
170	"	蓋	— (9.2) 5.8	若干凹状をなす頂部から直線的に下垂外反。 端部に向外で開く。	天井部ナゲ調整。 笠部外面ハケ調整。	笠部外面上方に黒斑。
171	"	"	— (6.3) 6.2	"		内面に黒斑。
172	"	"	— (4.8) 2.3	細くしまった天井部から外反して下降。	内外面ハケ調整。	
173	"	"	— (6.6) 4.4	"	天井部ナゲ調整。 笠部外面ハケ調整。	笠部内外面上方に黒斑。
174	"	"	— (3.6) 2.3	"		器形不明。
175	"	"	— (3.2) 2.4	"		"
176	"	土鉢	全長 6.4 直径 3.4 重積(g)72.5	円筒形を呈す。		土鉢質。

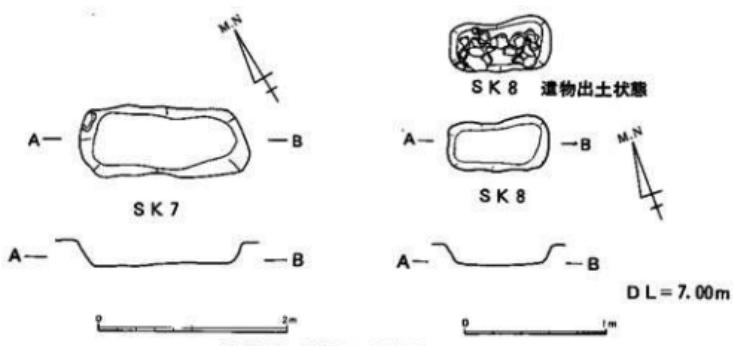
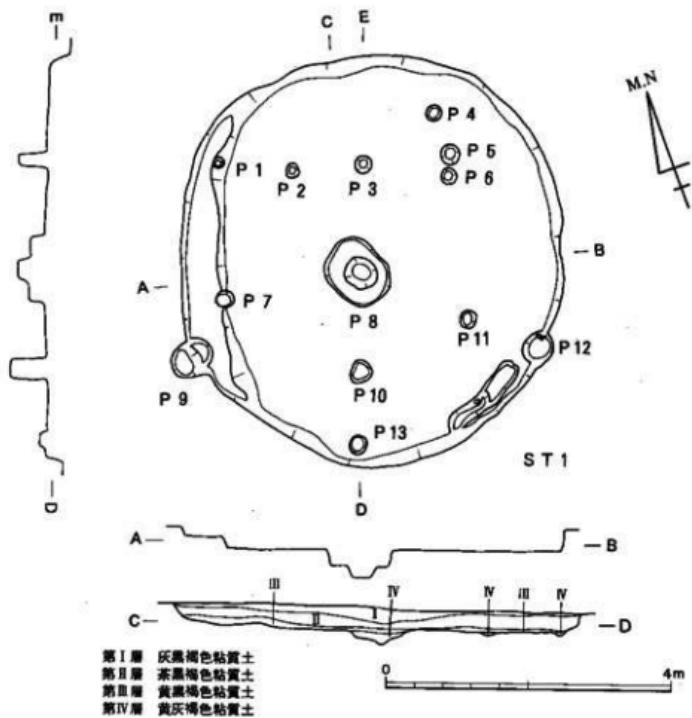
第15表 遺構出土石器観察表

標図番号	遺構番号	器種	最大長 計測値 (cm, g) 最大幅 最大厚 重積	材質	特徴	備考
177	S T 1	石斧	14.9 7.0 4.7 820.0	綠色片岩	いわゆる大型槍刃石斧であるが、刃部欠損。 後叩石として転用されたものと思われる。基 礎部にも新しく敲打痕がついている。	磨製。
178	"	"	12.3 5.9 2.8 320.0	砂岩(砂質片岩)	全面を研磨によって整形しているが、基 礎部を欠損している。刃部には磨打痕が残っ ておらず、叩石として転用された可能性が大 である。	

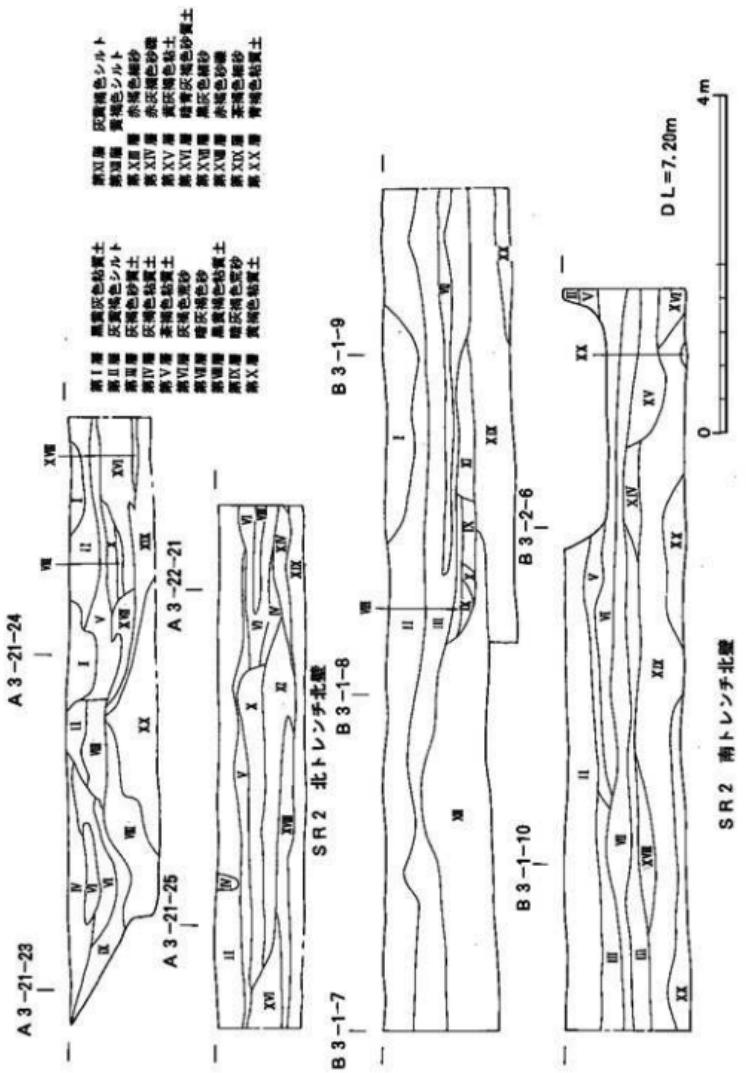
特徴番号	遺構番号	器種	計測値 最大幅 最大厚 (cm, g)	材質	特徴	備考
179	S R 2	石斧	12.8 6.2 3.7 510.0	綠色片岩	基部から刃部にかけて斜めに欠損している。 欠損後印石で修理されており、基端部及び刃部に敲打痕がある。	解説。
180	-	-	(16.5) 8.6 5.6 1195.0	-	大型地刃石斧の未整品。素形發掘で基部を 欠損したものと考えられ、表面には敲打痕 が顕著に残っている。	
181	-	-	5.6 2.6 0.9 25.0	砂岩	小型地刃石斧である。 前面が刃面であり、後正面及び側縫部 が側縫面である。	
182	-	-	(3.1) 3.6 0.7 13.0	瓦岩	表面と側縫部を研磨している。 小笠風呂である可能性もある。	
183	S T 1	低石	(5.4) 4.7 1.1 40.0	蛇紋岩	主として表裏2面を使用している。 また、側縫部2面にも擦痕が残る。	
184	S R 2	石斧	7.2 4.2 1.4 85.0	粘板岩	刃部を若干欠損しているが、刃部に最大幅 を有する縦状片刃石斧である。 よく使い込まれており、墨傷も目立つが、 残存面はよく研磨されている。	
185	-	-	5.1 3.4 1.0 30.0	蛇紋岩	刃部に最大幅を有する縦片刃石斧である。 基部に欠損が見られるものの、全面が研磨 によって丁寧に仕上げられている。	
186	-	-	14.0 3.5 2.1 145.0	頁岩	形状的には神狀の叩石であるが、表裏両面 を研磨しており、石斧を転用したもののか、 短削頭部に、擦痕を有している。長削頭部 部に敲打痕を残す。	
187	-	石斧	11.8 4.6 1.6 115.0	千枚岩	基部の右側刃が缺けており、下平面の刃 部削痕が広くなっている打製石斧である。 刃部に敲打痕が著しい。	
188	-	叩石	(11.5) 5.5 3.2 350.0	砂岩	河原石を利用して棒状の叩石である。 主に短削頭部に敲打痕が見られる。	
189	-	-	14.6 5.5 2.3 386.0	綠色片岩	主として短削頭部及び片側の長削頭部に 敲打痕が残る。	
190	-	-	12.3 4.1 2.1 160.0	頁岩	棒状の叩石で、両削頭部に打痕が著しい。 また、長削頭部の一端にも、敲打痕が見られ る。	
191	S T 1	-	13.2 5.8 2.5 304.0	砂岩	両削頭部に、繊細な擦痕が残られ、また、 裏面下方に若干の敲打痕が見られる。	
192	-	-	13.5 4.8 3.0 318.0	-	河原石を利用して棒状の叩石で、両削頭部 に小刻みな敲打痕が見られる。	
193	-	-	9.2 2.8 1.7 73.0	-	長削頭部は、自然面を残す面と剝離面とか らなる。 両削頭部に敲打痕が見られる。	

標記番号	造機番号	器種	最大量 計測値 最大幅 最大厚 (cm, g) 重量	材質	特徴	備考
194	S T 1	叩石	19.0 8.6 3.2 525.0	砂岩	上端の一部を欠損しており、敲打痕がわずかに残る。また、下方の短側縫部には、3条の小さい研磨痕が残る。	
195	"	"	8.0 6.0 1.7 155.0	"	河原石を利用したもので、両短側縫部に敲打痕が見られる。	
196	"	"	11.1 9.6 5.2 905.0	"	表面面に敲打痕が見られるが、表面には数条の長裂が残る。	
197	S R 2	"	7.9 6.9 3.1 265.0	"	河原石をそのまま利用したものであるが、よく使い込まれており、周縁部に敲打痕が残る。	
198	"	"	10.4 (6.7) 4.6 435.0	"	河原石を利用したものであるが、中央部の使用部位を中心にして、部分が欠損している。側縫部にも敲打痕が残る。	
199	S T 1	"	11.8 8.1 2.1 330.0	"	長円形の扁平な河原石を利用したもので、周縁部に若干の敲打痕が確認できる。	
200	"	磨石	11.6 9.3 4.0 805.0	"	長円形の河原石をそのまま利用したものである。	
201	"	"	11.2 10.2 3.5 580.0	"	円形の河原石をそのまま利用したものである。	
202	"	"	9.2 8.9 2.8 276.0	"	自然面と剥離面とからなり、周縁部に敲打痕が見られる。	
203	"	叩石	11.6 8.1 1.9 190.0	"	自然面と剥離面とからなり長円形を呈す。周縁部に敲打痕が見られる。	
204	S R 2	"	10.4 7.4 2.3 230.0	"	河原石を利用したもので、自然面と剥離面とからなる。周縁部に敲打痕が見られる。	
205	"	"	8.3 5.3 8.5 75.0	"	河原石を利用したもので、自然面と剥離面とからなる。両短側縫部に敲打痕が見られる。	
206	S T 1	"	10.3 7.2 1.7 130.0	"	自然面を残す面と剥離面とからなる。周縁部に敲打痕が認められる。	
207	S R 2	"	8.3 6.9 1.7 105.0	"	自然面と剥離面とからなる扁平な叩石である。周縁部に若干の敲打痕が残る。	
208	"	砥石	10.8 8.5 2.7 295.0	"	表面と上側縫部とは砥石として使用されている。後に叩石として転用されたものか、表面面中央部に敲打痕が残る。	

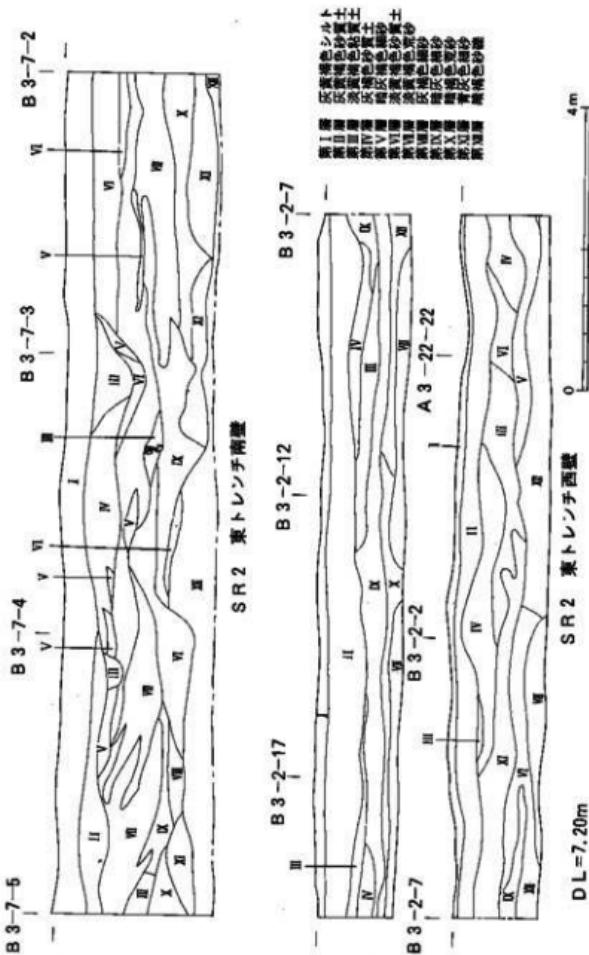
標因番号	遺構番号	器種	計測値 (cm. g) 最大長 最大幅 最大厚	材質	特徴	備考
209	S R 2	砥石	(7.1) 6.6 4.2 235.0	砂岩	2面を使用している。 表正面は、細長い凹状の縦が数本縱方向に走っている。	
210	S T 1	"	14.9 13.4 3.5 1365.0	"	表裏2面と側面2面とを使用している。 側面の1面は使用部位は狭いが、凹状になっている。	
211	"	"	(10.7) 11.4 7.1 995.0	砂岩(粗粒砂岩)	欠損が著しく、使用面の残存状態は悪いが、3面の使用面が確認できる。	
212	S R 2	石包丁	(8.7) 5.0 0.7 32.0	千枚岩	双孔を持つ磨製石包丁の欠損品である。 双孔は両側より穿たれており、刃部は残存部の状況では両方であると考えられる。	
213	"	"	(8.5) 5.0 0.8 55.0	"	双孔を持つ直刃型石包丁である。双孔は両面より穿たれており、両孔の位置は、刃部に沿って平行ではない。刃部は直刃であり、表裏両面に研磨による擦痕がある。背部もよく研磨されており、断面三角形を呈す。	
214	"	"	11.8 4.8 0.7 62.0	綠片岩	双孔を持つ直刃型石包丁である。 双孔は両面より穿たれている。 刃部は直刃であり、擦耗が激しい。 また、背部の一帯を欠損している。	
215	"	"	(9.6) 4.0 0.9 50.0	石英片岩(尾岩)	双孔を持つ直刃型石包丁である。 背部まで研磨されているが、よく使い込まれており、右端を欠損している。 また、刃部もシャープさに欠ける。	
216	"	"	(7.4) 4.0 6.0 27.0	千枚岩	双孔を持つ直刃型石包丁の欠損品である。 刃部は片刃であり、表裏両面とも研磨されている。	
217	"	"	(8.2) (5.2) 0.8 47.5	"	双孔を持つ磨製石包丁である。両孔は両側より穿かれている。欠損が激しく、刃部及び背部の状況は不明であるが、表裏両面とも残存面は研磨されている。	
218	S T 1	不規	5.5 4.0 2.9 103.0	砂岩	小形の小円錐で、用途は特定できないが、住居址より出土した。	
219	"	"	3.9 3.2 2.3 42.0	"	"	



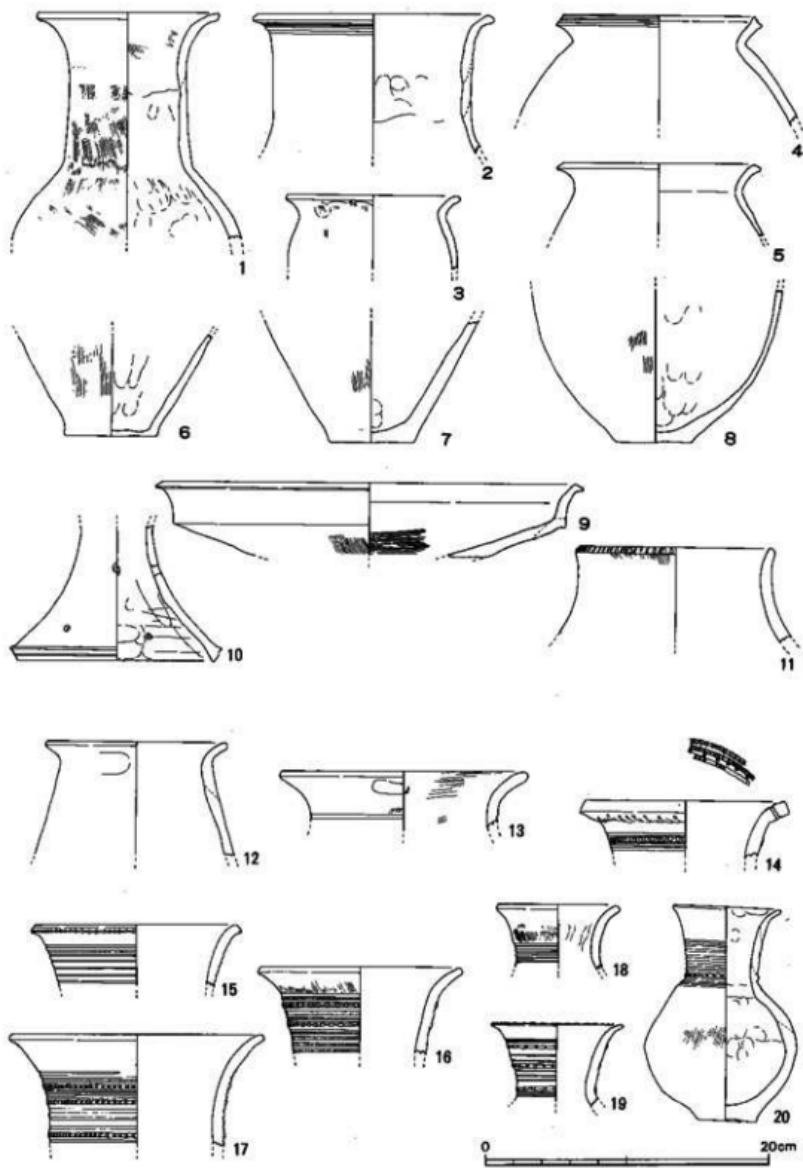
第67図 ST 1, SK 7・8



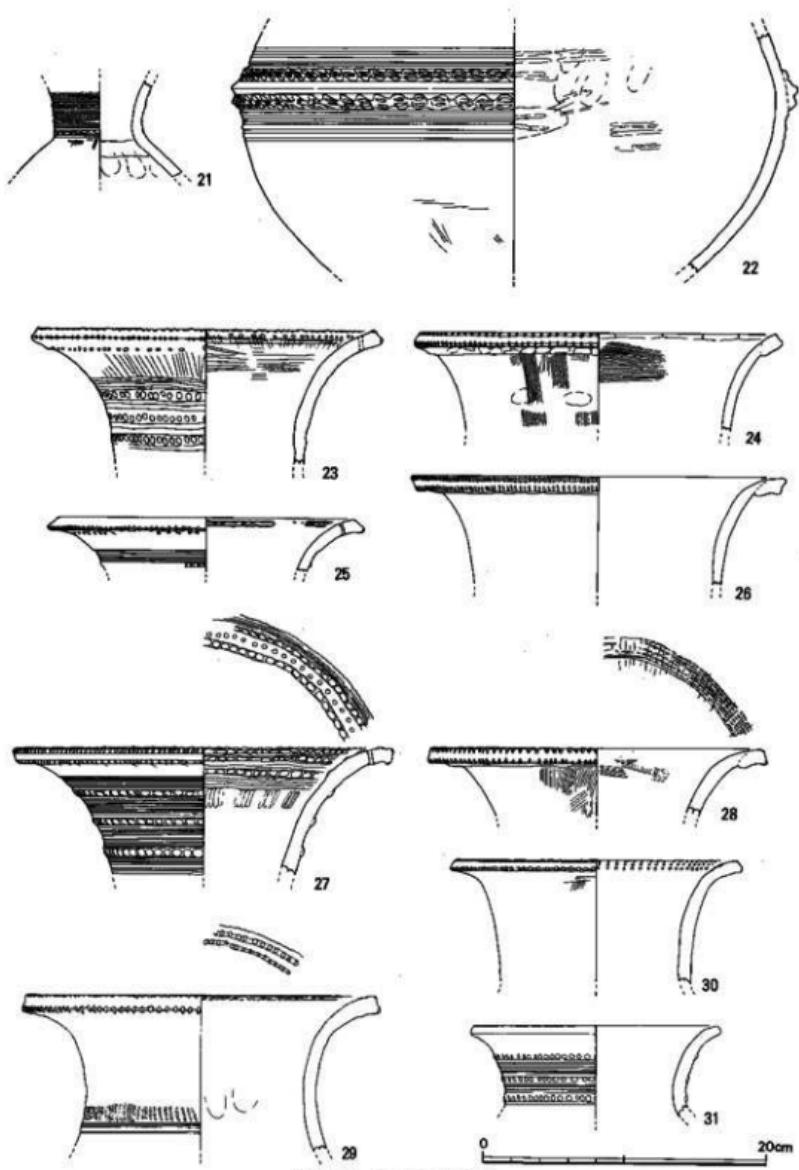
第88図 SR 2南北トレンチセクション



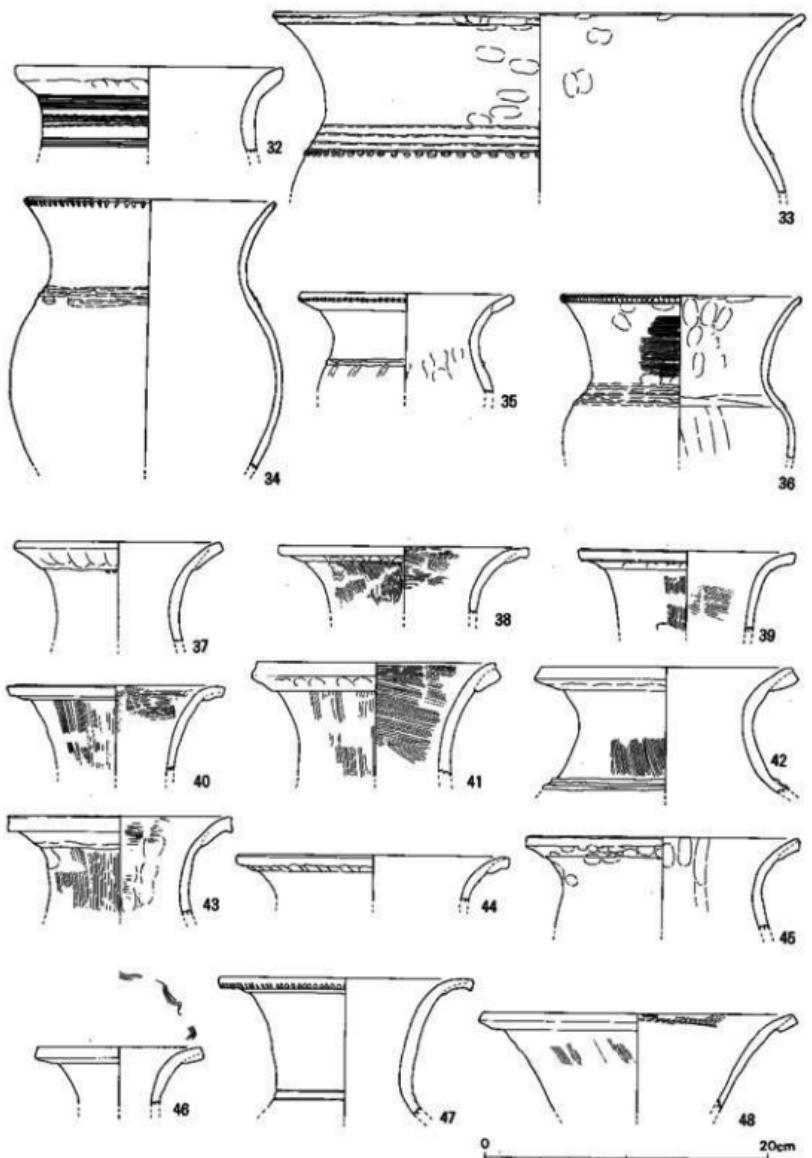
第69図 SR 2 東トレントセクション



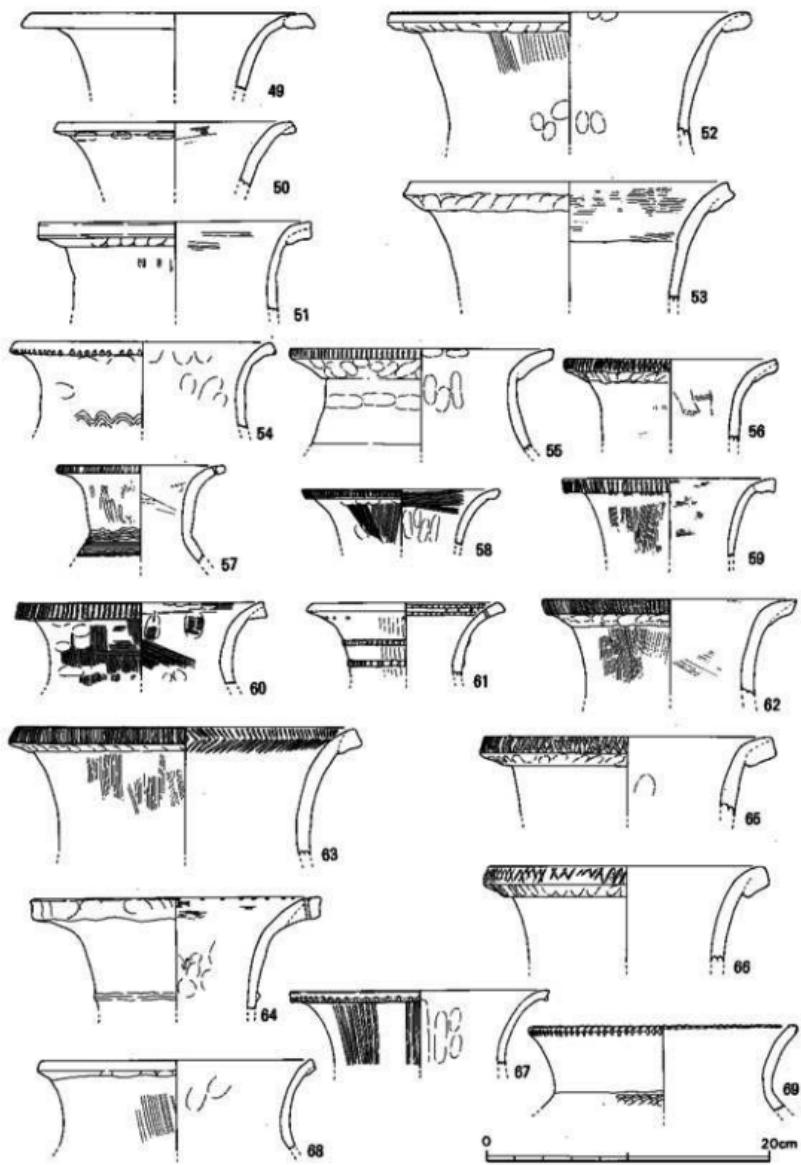
第70図 ST 1、SK 8、SR 2出土遺物



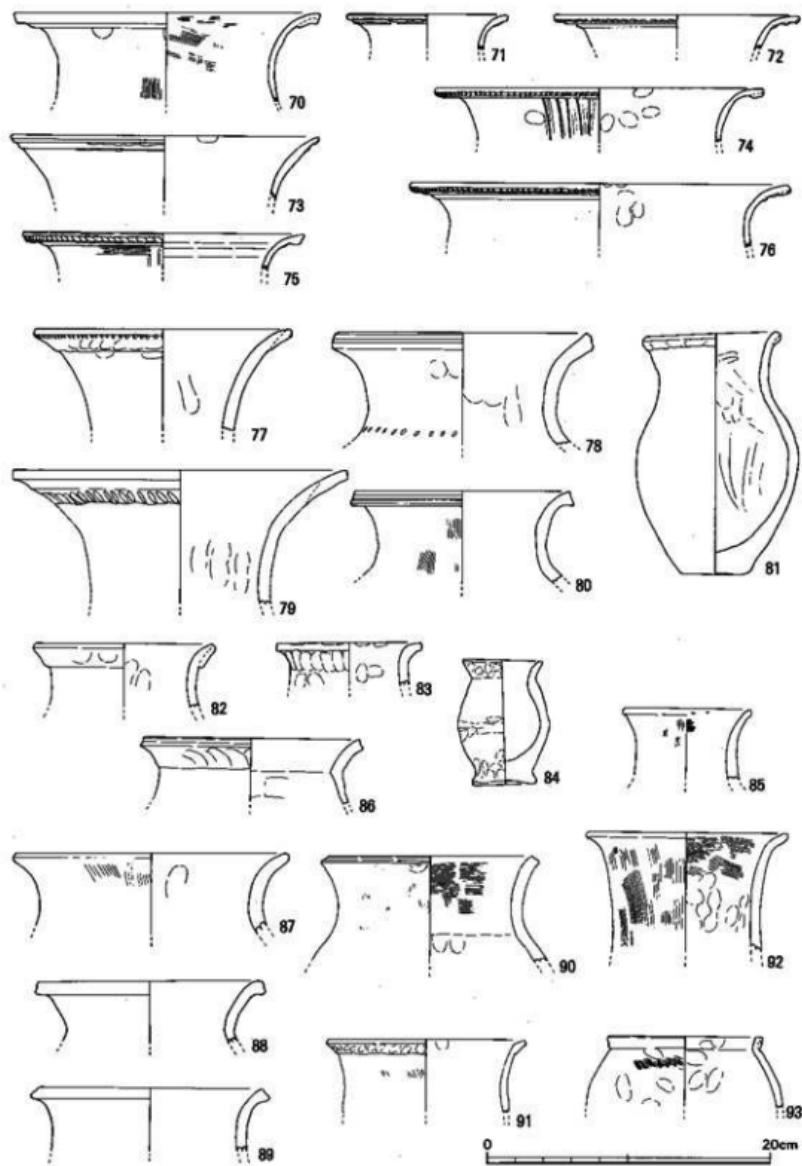
第71図 SR 2出土遺物



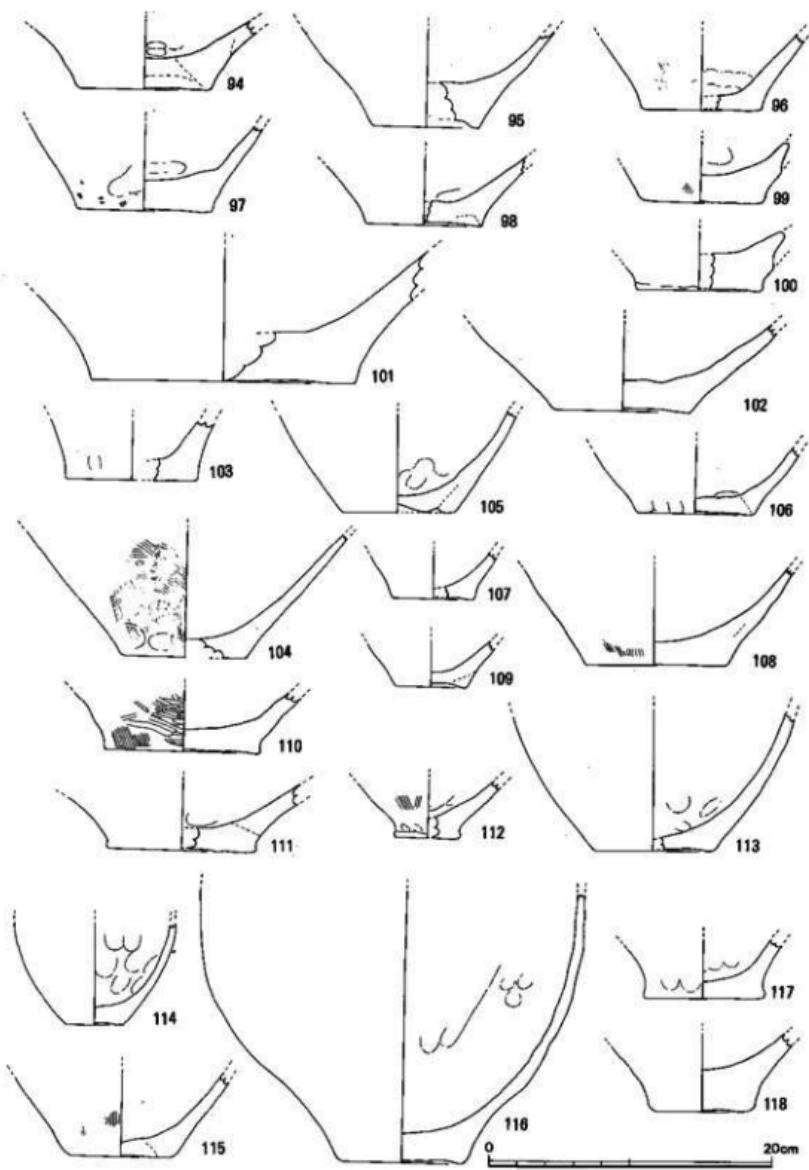
第72図 SR 2出土遺物



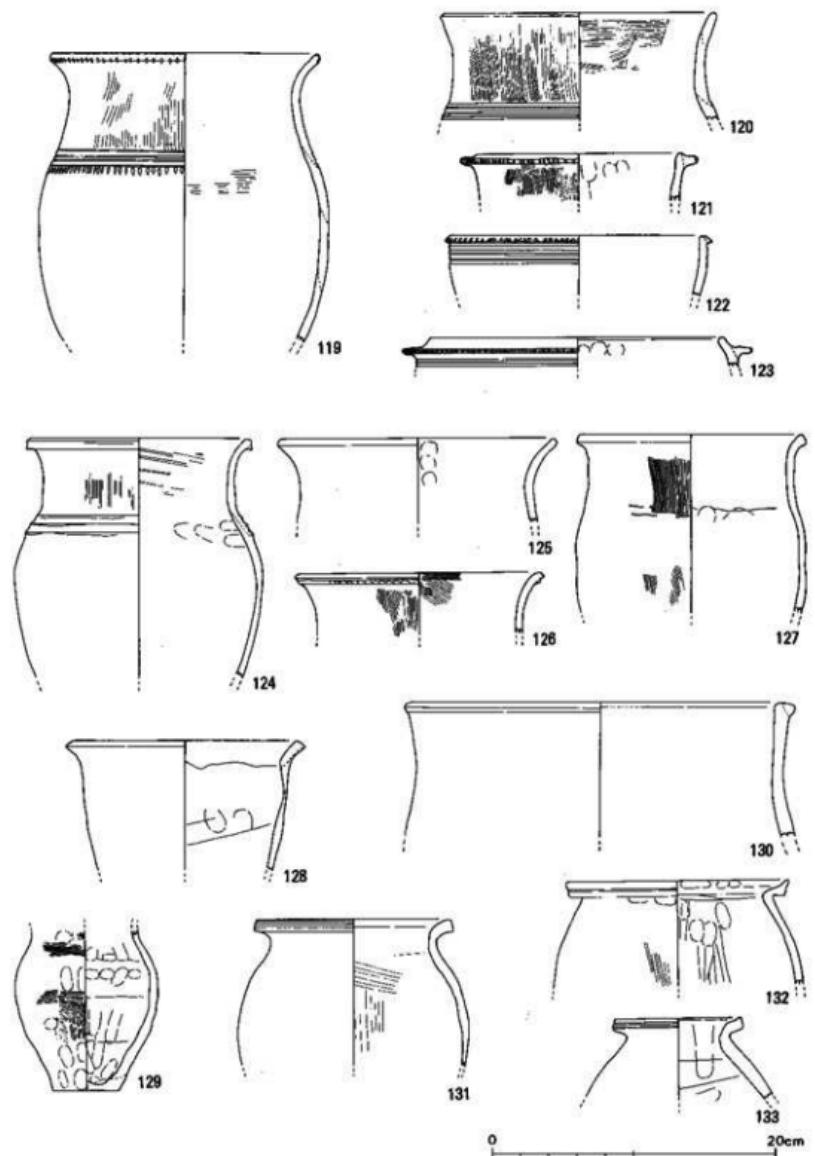
第73図 SR2出土遺物



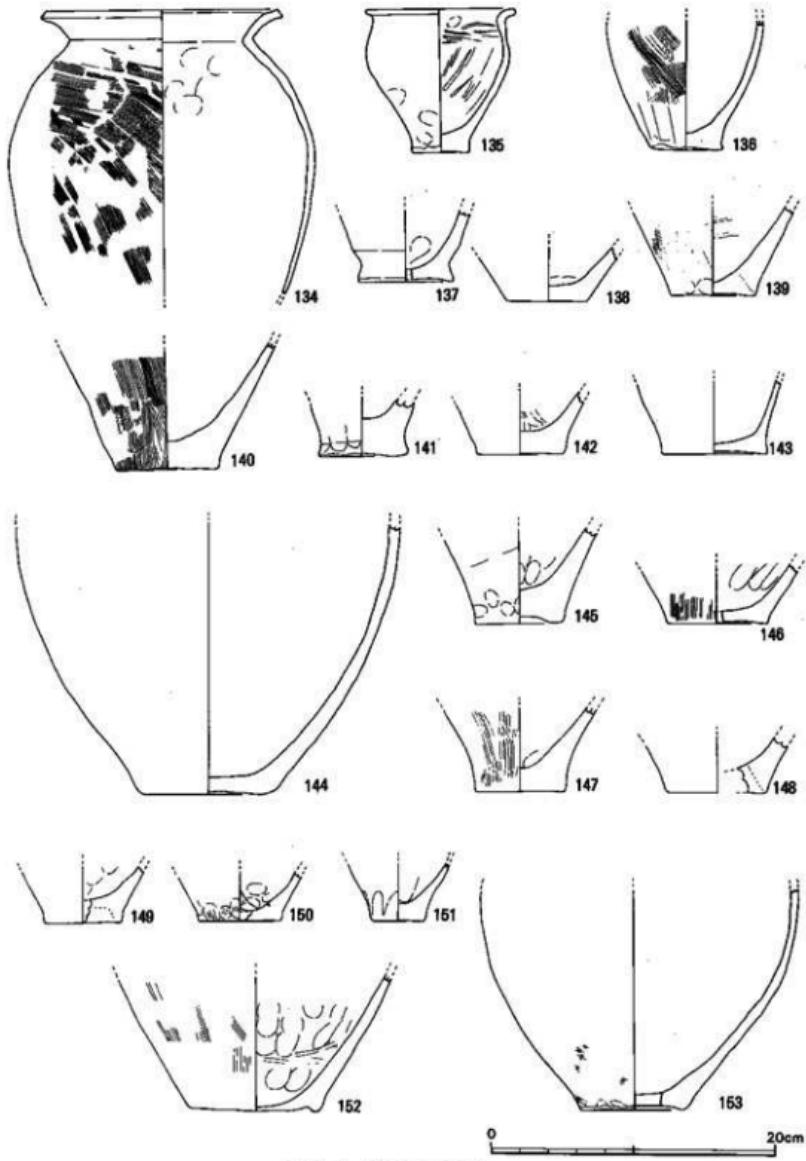
第74図 SR 2 出土遺物



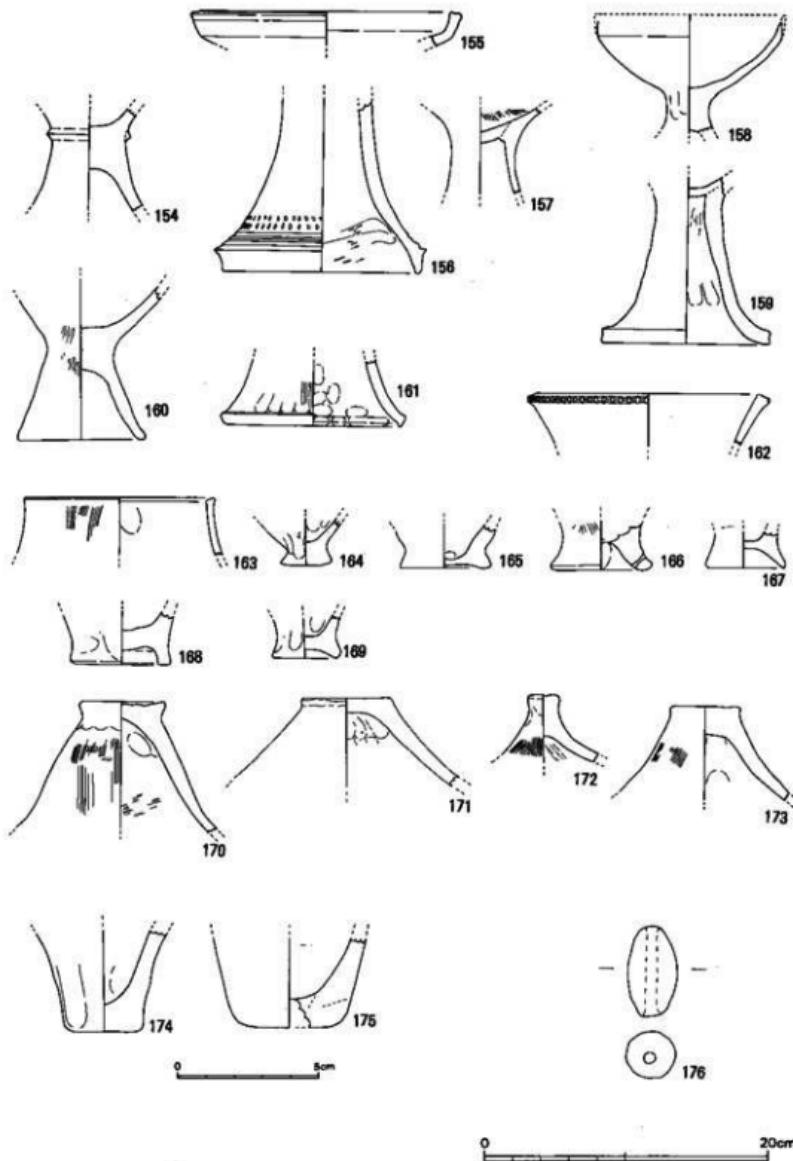
第75図 SR 2出土遺物



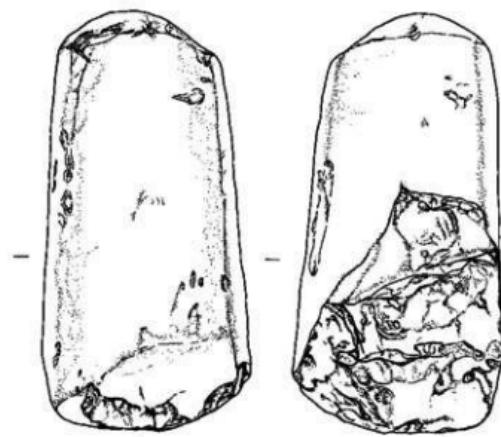
第76図 SR2出土遺物



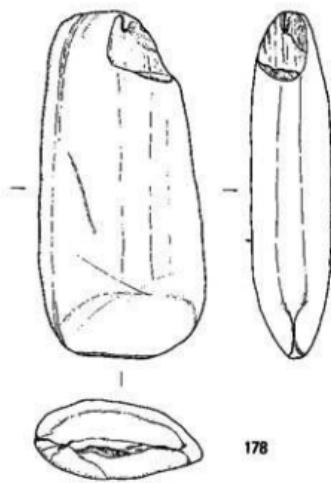
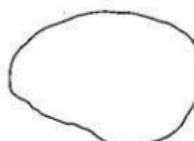
第77図 SR 2出土遺物



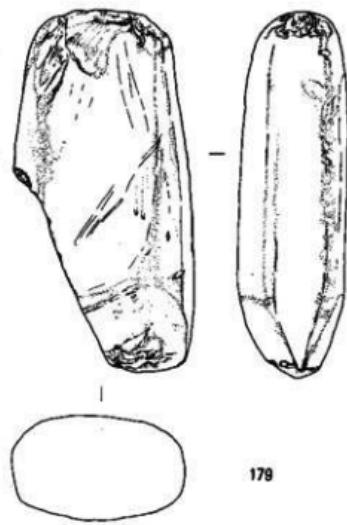
第78図 SR 2 出土遺物



177



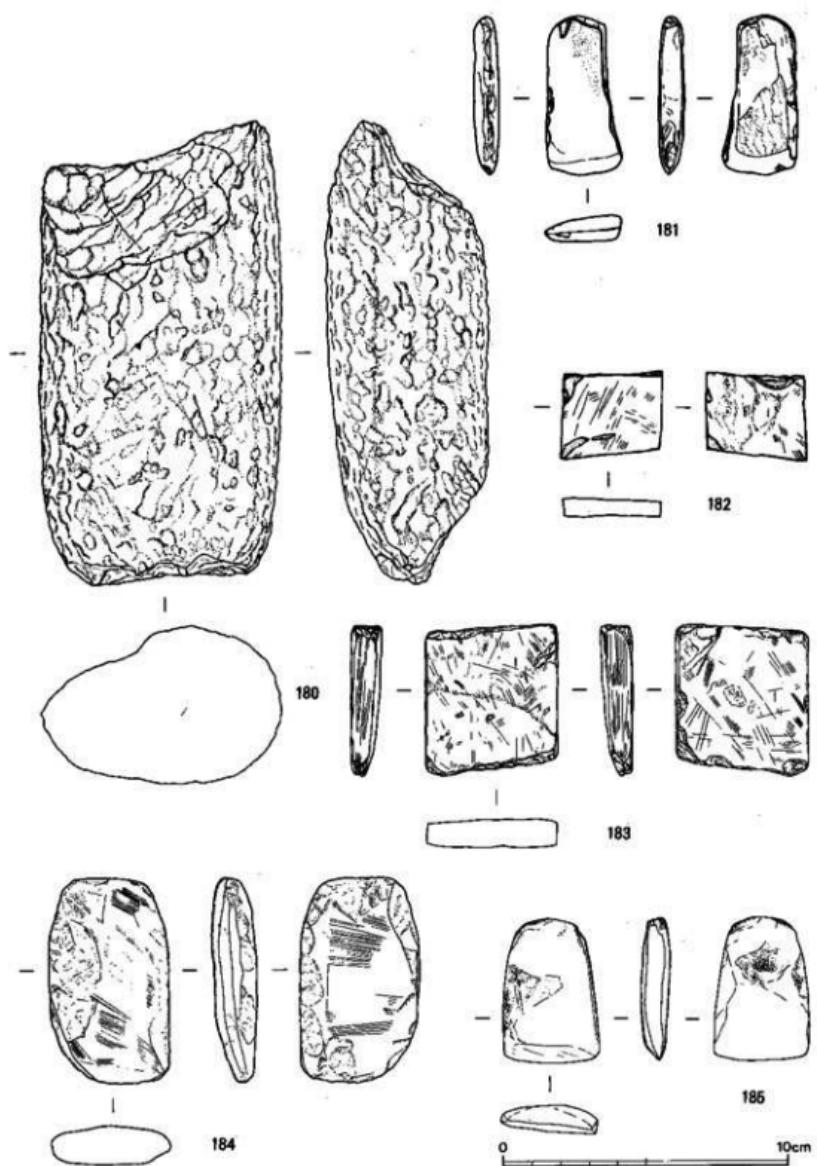
178



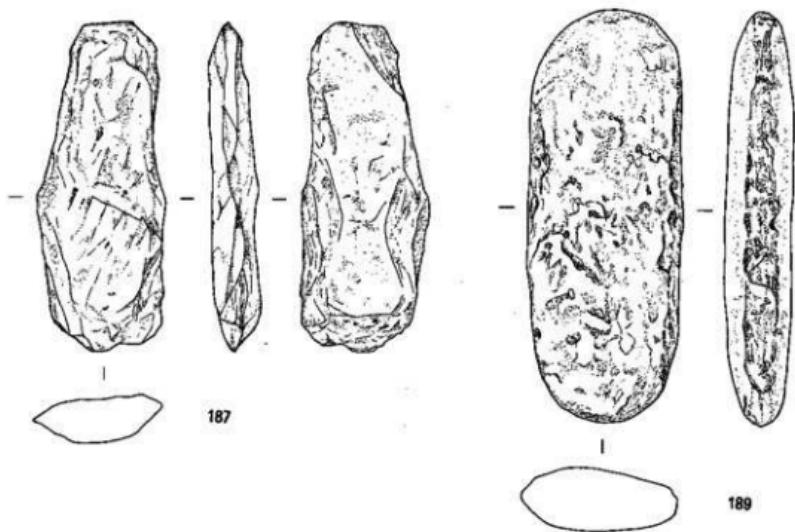
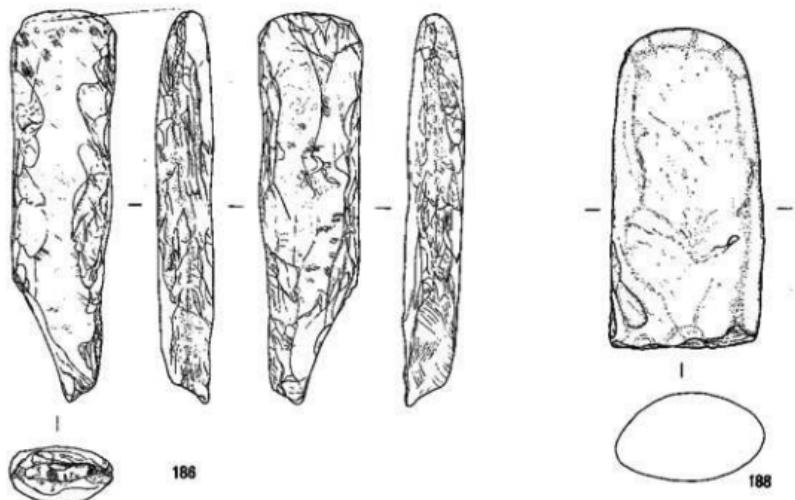
179

0 10cm

第79図 ST1、SR2出土遺物

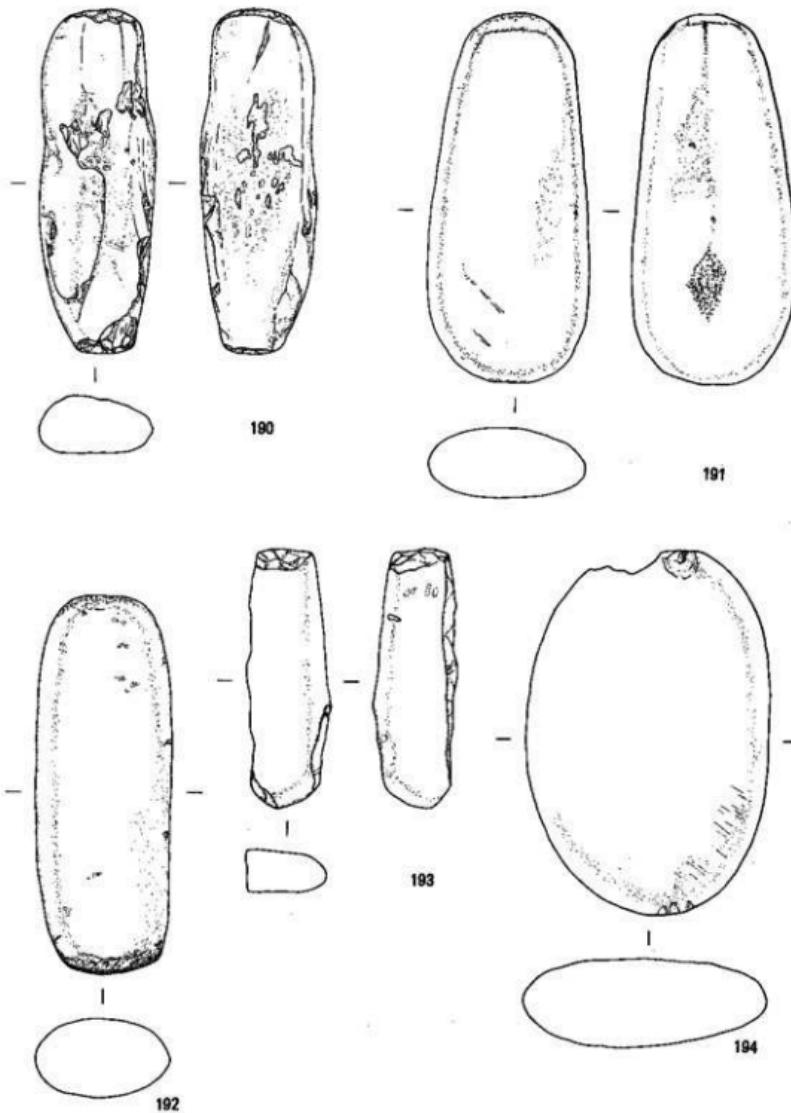


第80図 ST 1、SR 2出土遺物

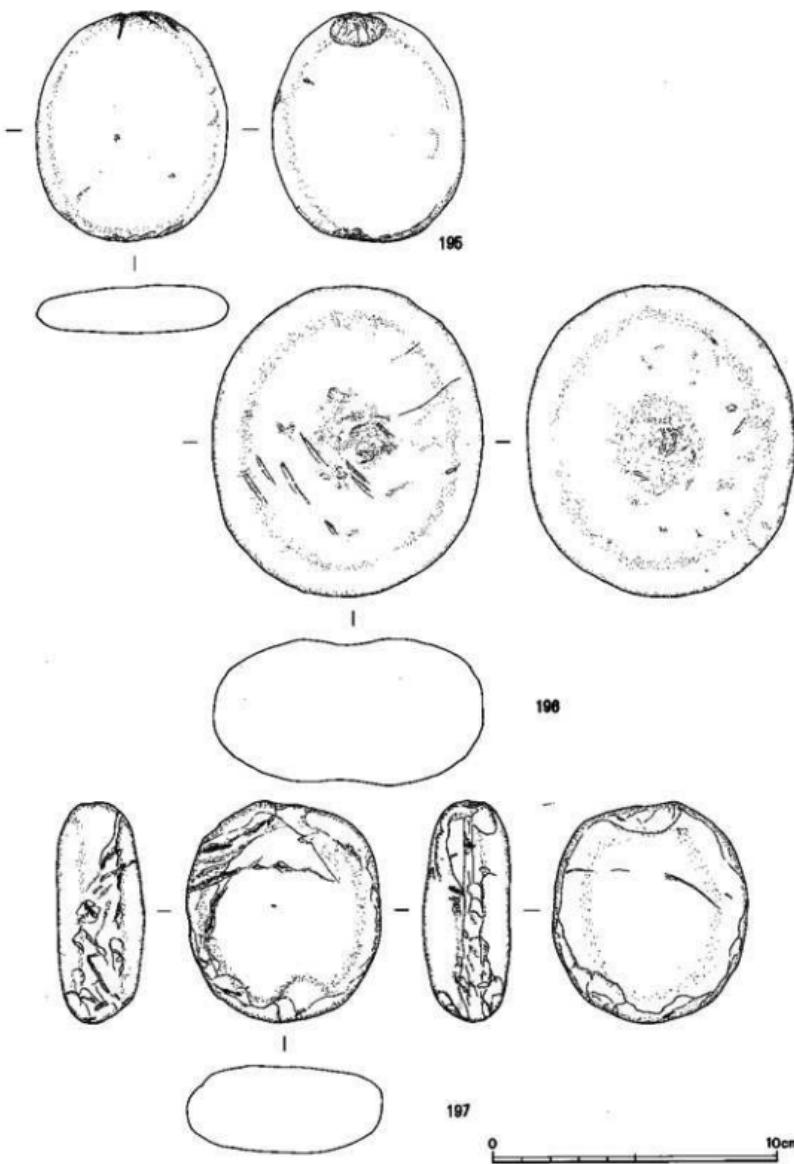


0 10cm

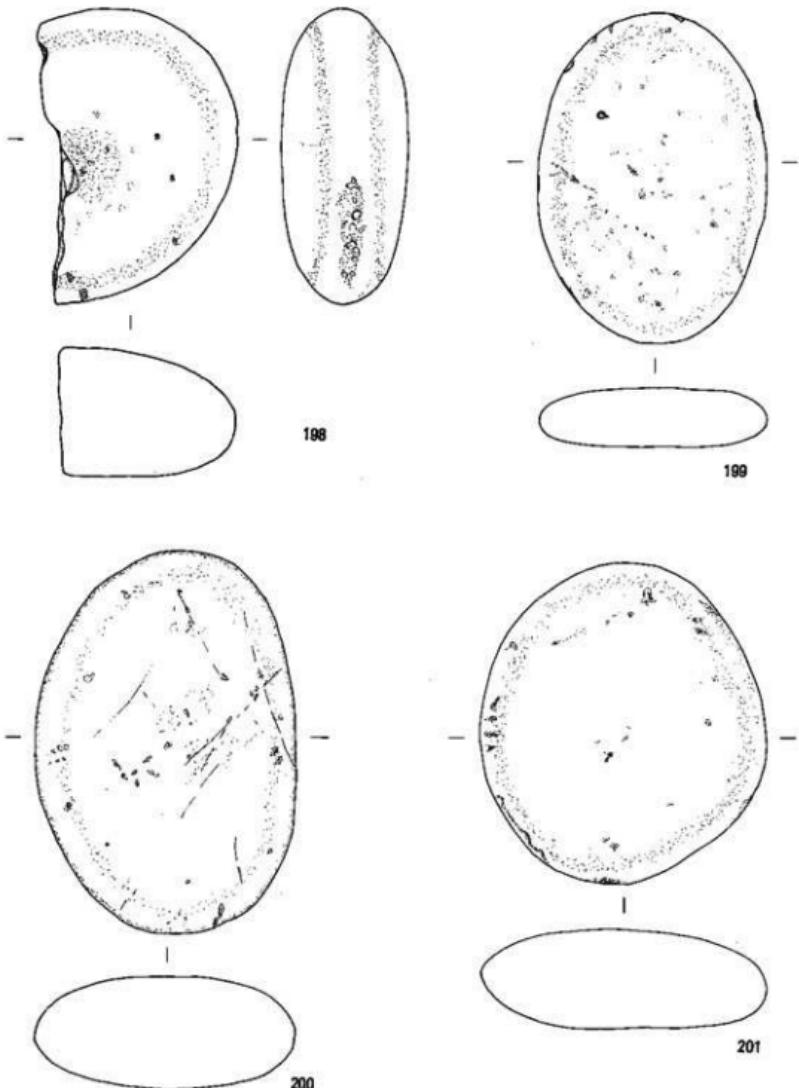
第81図 SR 2出土遺物



第82図 ST 1、SR 2出土遺物

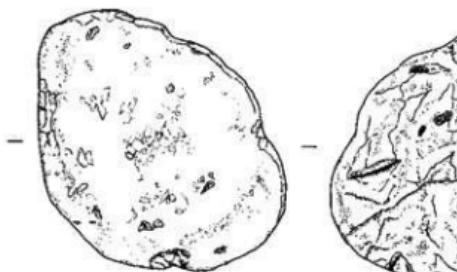


第83図 ST 1、SR 2 出土遺物

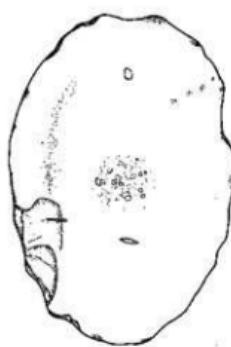


0 10cm

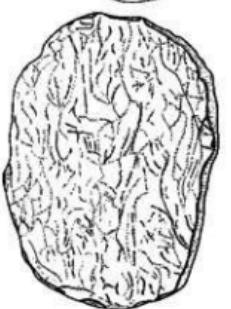
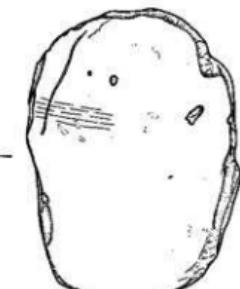
第84図 ST1、SR2出土遺物



202



203



205

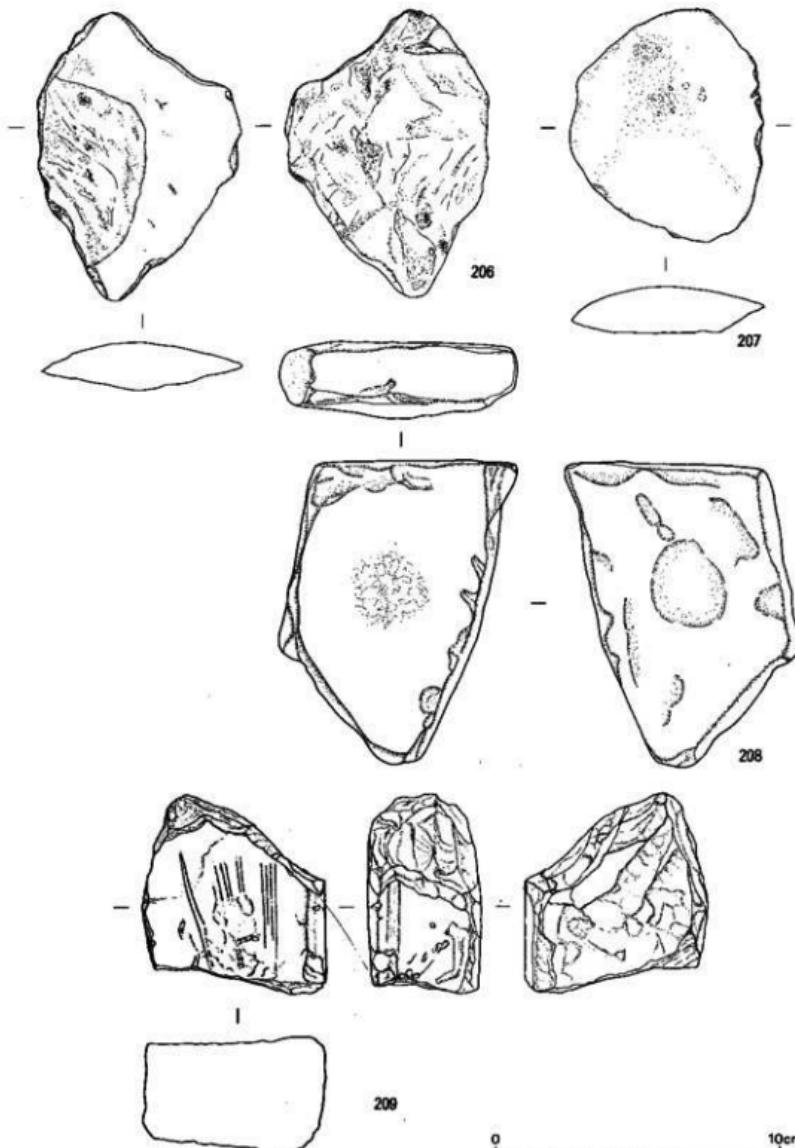


204

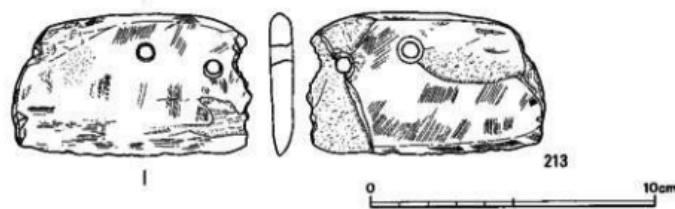
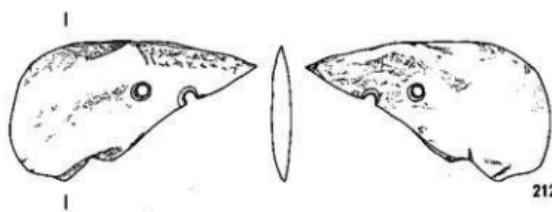
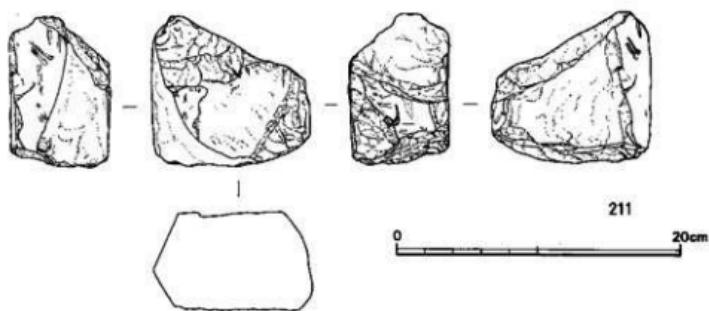
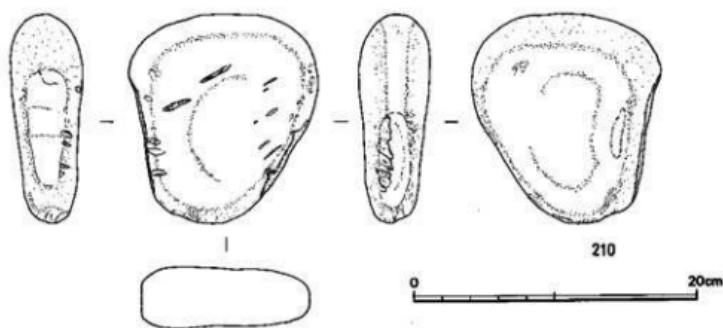


10cm

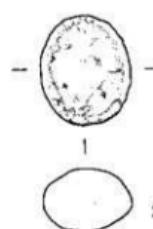
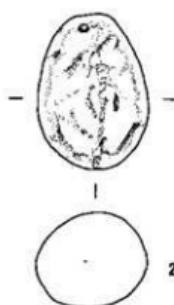
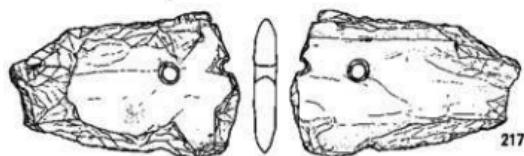
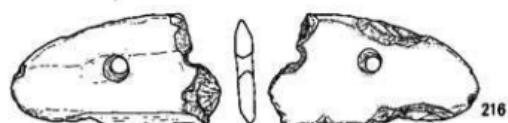
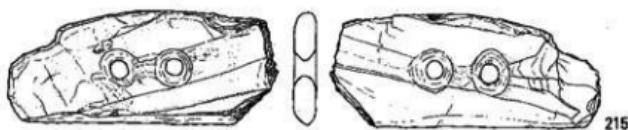
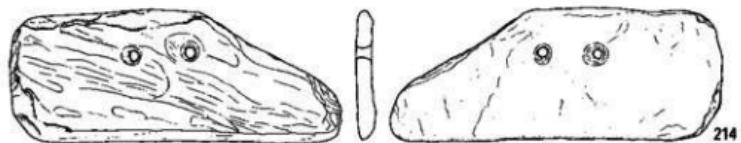
第85図 ST1、SR2出土遺物



第88図 ST 1、SR 2出土遺物



第87図 ST1、SR2出土遺物



0 10cm

第88図 ST1、SR2出土遺物

5. Loc. 41

Loc.41

1. 位置と調査経過

Loc.41は、田村遺跡群の西部に位置し、小字名は柿の本である。当地点は空港拡張事業に付随した田村川暗渠化工事に伴い、まず、東半部の田村川右岸域 2,275m²の調査を緊急に行い、後に、西半部 2,268m²の調査を行った。弥生遺構を確認できたのは東側の調査区であった。

2. 調査概要

当地点の最終的な発掘面積は 4,543m²に及び、ピット群、土塹、溝などを検出した。うち、弥生時代のものは溝状遺構 1 条のみであったが、その下層トレンチ発掘によって自然流路 SR 2 の一部も確認することができた。

3. 層序と出土遺物

Loc.41の基本的な層序は、西部調査区で次の如く確認できた。

- 第Ⅰ層 耕作土
- 第Ⅱ層 黄灰色粘質土層
- 第Ⅲ層 黄褐色粘質土層
- 第Ⅳ層 淡青灰褐色土層
- 第Ⅴ層 淡黒褐色粘質土層
- 第Ⅵ層 淡黄褐色粘質土層

それに対し、弥生時代の溝状遺構を検出した東部調査区においては、第Ⅳ層以下の堆積はみられず、SR 2 の埋土と考えられる砂質を含んだ土層が広範囲に拡がっていた。結局のところ、Loc.41の東半部は SR 2 が存し、その上部を溝状遺構が継続していたと考えざるを得ない。

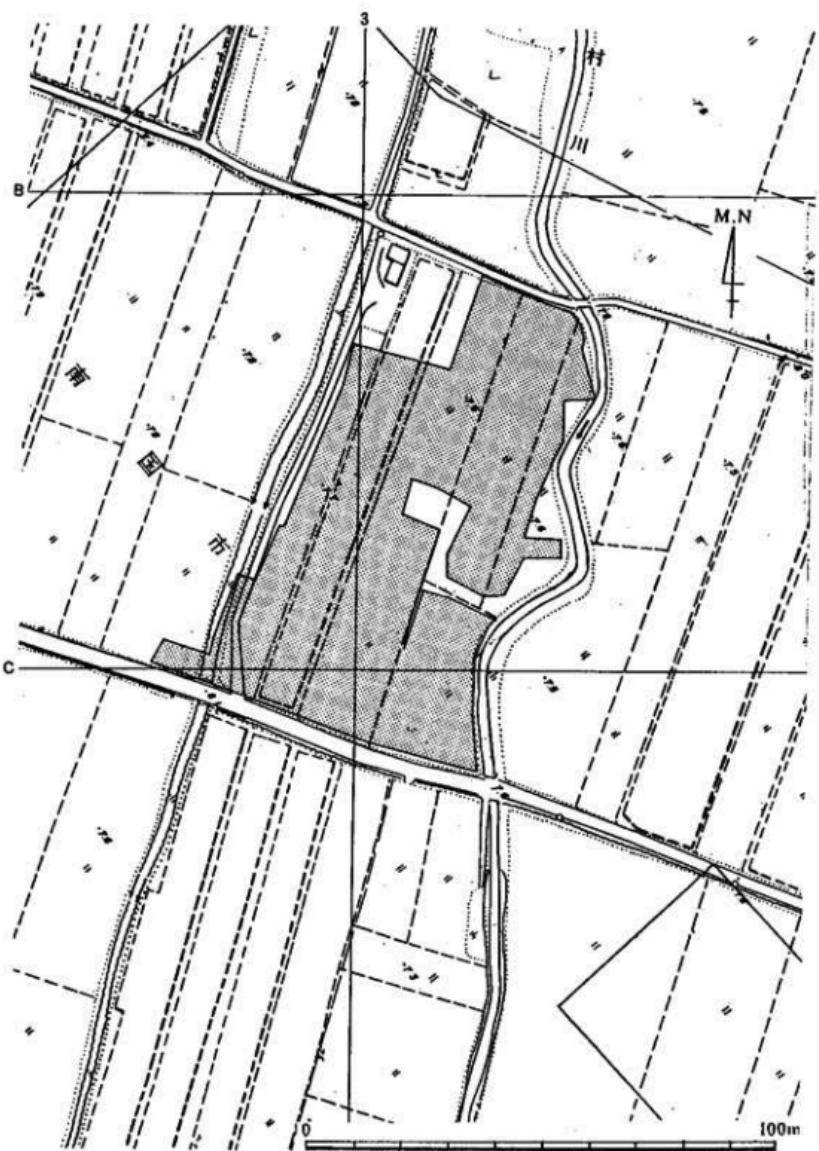
4. 遺構と遺物

溝

SD 1

SD 1は、調査区の東端において、第Ⅱ層除去後に検出された。幅4.00m、深さ0.82mの南北に走る溝である。但し、SD 1は、南部では確かに溝としての形状を呈してはいるが、北部では底面の起伏も激しく自然流路的な様相を濃くしている。

埋土も、砂層や粘質土が交錯しており、自然流路的な堆積状況である。出土土器は図1～4であり、弥生中・後期の土器が多く発見されている。また、石器の出土も若干みられ、ほぼ完形の磨製石包丁(46)も埋土第Ⅴ層の暗灰褐色細砂層より出土した。



第 88 図 調査区設定図

S D 1は、中世の溝やピットによって切られ、一方、S R 2を切っている。それがゆえ、S D 1は、S R 2が廃絶または流路を変更した後に、なお溝状に残っていた遺構であると考えた方が妥当と思われる。しかし、下層のS R 2よりも後期土器の出土量が多く、その点で、あるいはS D 1はS R 2の一部であった可能性も考えられる。

SR2

当地点におけるS R 2の調査は、3本のトレンチ調査のみで、これを完了した。すなわち、B 3-1-25、B 3-6-5、B 3-6-10グリッドにわたる南北のトレンチと、B 3-7-11-15およびB 3-17-21-24における東西のトレンチ2本を、深さ1.6mまで掘り下げている。

その結果、いずれのトレンチにおいても、S R 2の埋土とみられる砂層あるいは粘質土層が複雑に交錯した状態で検出され、褐色系砂層を中心に多くの弥生遺物の出土をみた。

出土遺物は、時期的にみてもLoc.36のS R 2とはほぼ同様であるが、詳細にみるとLoc.36BのS R 2において出土の少なかった前期II・IIIの土器が多くみられた（5～35および37～45）。

5. まとめ

当地点のS R 2は、水田址を検出したLoc.23・37の西側を北から南へ縱走する流路であり、水田用水の供給源的機能を有していた可能性も多分に存する。しかし、その東端は現在の用水路（田村川）が存し、この地点の発掘はなされなかつたので、その具体的な様相は不明である。とは言え、S R 2が周辺の弥生集落形成あるいは水田經營のための1つの重要な前提となっていたであろうことは、十分に予想されるところである。なお、S R 2はLoc.41の西半部の2本の東西トレンチ（B 2-20-13～B 3-16-12とC 2-4-9～C 2-5-9）では検出されておらず、その範囲は当調査区の東半部に限定される。

第16表 遺構出土土器観察表

検出番号	遺構番号	器種	重量 (cm)	口径 基部 側面 底面	形態・文様	手法	備考
1	S D 1	壺	13.4 (6.3) —	直線的に立ち上がる頸部から、口縁部は大きく外反。口唇部は外輪側面にヒダを配す。 頸部には複数波状文及び幾何文を配す。			
2	"	"	(13.5) 13.4 6.8	下胸部に最大径を有する壺形土器。	断面に接合部を観察できる(外側接合)。 内面はナデ剥離。		
3	"	壺	(12.4) — 8.2	壺形土器底部。	外表面方向のハケ調整。	外側剥いている(底部はドーナツ状に剥げている)。	
4	"	高杯	(4.9) —	杯部と脚部の接合部。			
5	S R 2	壺	16.6 29.0 28.1 9.0	口縁部及び頸部間に段を有す。 上胸部に有輪形文状。文様部分を上下2つの状態によって区別しており、その辺縁と段の間に波状線を施す。	口縁部の段をヘラでナデしており、化粧のごとくみえる。金剛ヘラ磨きを施していたと思われるが、呑吸の充れがひどく鏡面不能。		
6	"	"	16.0 (8.2) —	口縁部にしっかりした段を有す。 口縁部は両らかに外反。 口唇部は面をなす。	全面模方向のヘラ磨き。		
7	"	"	(11.3) 10.6 4.6	上胸部に最大径を有する壺形の壺。 頸部間に1条のヘラ磨化線あり。	外表面全面模方向のヘラ磨き。	頸部外側の一部に丹焼りが認められる。	
8	"	"	15.1 (4.6) —	直線的に立ち上がる頸部から、口縁部は大きく外反。口唇部は丸く盛る。	口縁部内外模方向のナデ調整。		
9	"	"	14.6 (12.1) —	直線的に立ち上がる頸部から、口縁部は大きく外反。口縁部に実際には有りません。その上に1条のヘラ磨化線を配す。 上胸部に段を有す。	内外模方向のヘラ磨き。 頸部内面以下木理の細いハケ調整。		
10	"	"	(5.7) — 9.0		内外面ヘラ磨き。	下胸部に黒斑。	
11	"	"	15.0 (6.6) —	滑らかに外反する口縁部。口縁部外側に接合部を記し、かつ波状の粘土帶付。内側に波状線を有す。 頸部には複数横筋直線文を配し、3条の付加状況線を認める。	口縁部外側粘土帶貼付。		
12	"	"	17.2 (9.1) —	内側側面に立ち上がる頸部から、口縁部は強く屈曲外反。 口唇部は面をなす。	"		
13	"	"	19.5 (4.9) —	口縁部は崩斗状に外反し、口唇部は波状を呈す。	口縁部内面模方向のハケ調整。外側にはヒダ状の圧痕がつく。 口縁部は模方向のナデ調整。		
14	"	"	18.0 (19.3) —	滑らかに外反する口縁部。 口縁部は面をなし、幅広い刃口を配す。 頸部下端に波状工具による列点文を認める。	口縁部外側に断面三角形の粘土帶を貼付。		
15	"	"	22.6 (2.2) —	大きめ外反する口縁部。 口縁部は内側する幅広い面をなし、斜格子文を配す。	口縁部外側に粘土帶貼付。 外側に指印状痕跡。		

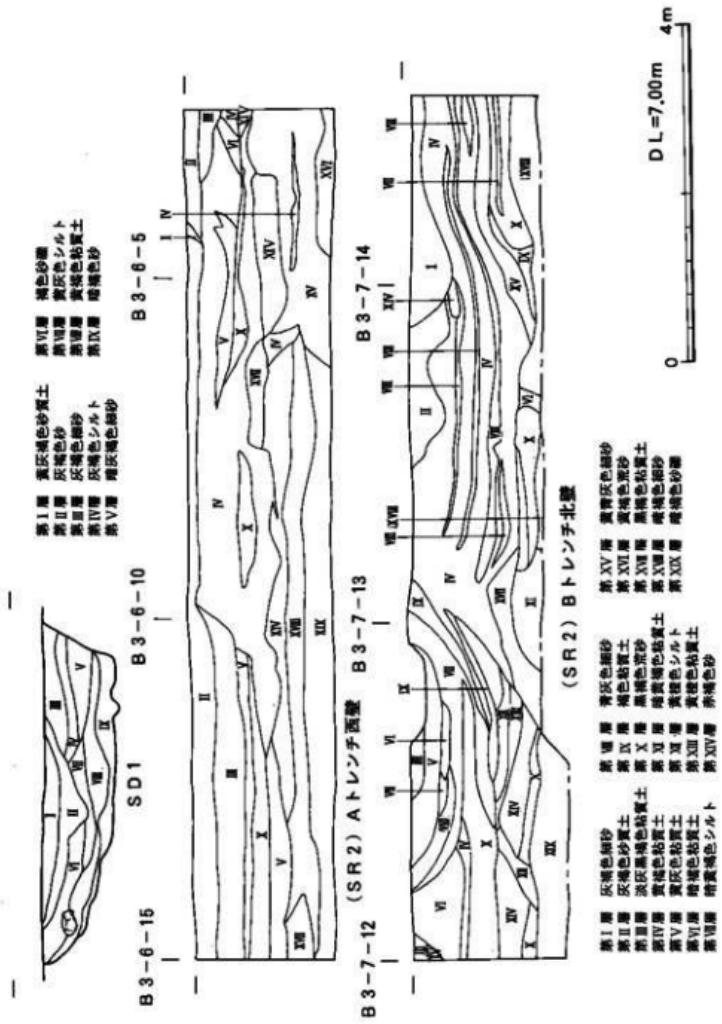
鉢器番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 器高 器径 厚壁	形態・文様	手 法	備 考
16	S R 2	壺	14.8 (5.8) —	口縁部は角からに外反。 口唇部は圓状をなし、下端に割目を配す。	口縁部外面に粘土帶貼付。 口唇部横方向のナデ調整。	頸部内面に黒斑。
17	—	—	16.2 (4.9) —	口縁部は強く外反。 口唇部は面をなし、下端に割目。外面には1~2条の複雑起唇を貼付。頸部外面には部分的に傾方向の双縫を施す。	—	薄手式土器。
18	—	—	21.2 (6.6) —	口縁部は強く外反。 口唇部は面をなし、下端にハケ状原体による割目を配す。	口縁部外面に粘土帶貼付。 頸部外面は傾方向のハケ調整。	—
19	—	—	15.3 (6.1) —	内傾して立ち上がる頸部から、口縁部は強く外反。	口縁部外面横方向のナデ調整。 頸部外面ハケ調整、内面には指頭压痕あり。	頸部内面に黒斑。
20	—	壺	9.8 (14.5) 15.0	最大径を腹部中央位に有し、口縁部は強く外反。口縁部は厚厚し、口唇部は広い面をなす。	口縁部外面に断面三角形の粘土帶貼付。 頸部内面に粘土帶接合部を留める。 頸部内面に指頭压痕あり。	外面は全面焼けている。
21	—	—	24.6 (17.9) 23.5	口縁部は如意形に外反。口唇部は面をなし、割目を配す。頸部外面に1条のヘラ括縫を配す。	—	下脚部は火を受けて変色。
22	—	—	20.5 (10.2) —	口縁部は如意形に外反。口唇部は面をなし（部分的に下側）、全面に割目。 頸部外面に1条のヘラ括縫を配す。	頸部外面ハケ調整。口唇部外面ハケ調査後、傾方向のナデ調整。 口唇部内面ハケ調整。	—
23	—	—	20.0 25.2 21.3 —	口縁部は如意形に外反。口唇部は丸くおさめ、全面に割目。 頸部は削り出し突堤状で、段部をつくり出し、3条のヘラ括縫を施す。	口縁部内外面ハケ調整後傾方向のナデ調整。 頸部内面ハケ調整。	頸部外表面は火を受けた変色し、全面が焼けている。
24	—	—	20.5 (9.1) 19.0	口縁部は如意形に外反。 口唇部は丸くおさめ、割目を施す。 頸部外面に1条のヘラ括縫。	頸部外面右下がりの木堀の細いハケ調整。	外面は焼けている。
25	—	—	26.3 (24.6) 26.5 —	口縁部は如意形に外反。 口唇部は丸くおさめ、右上がりの割目を強く施す。頸部に2条のヘラ括縫。	口縁部内外面横方向の強いナデ調整。 外面ハケ調整。 頸部内面粘土帶接合部に指頭压痕が立ぶ。	—
26	—	—	(6.5) — 5.7	壺形土器底部。	外面縦方向のハケ調整。	—
27	—	—	17.6 (7.7) 15.0 —	口縁部は強く外反。器部下端に割目。 頸部外面に傾方向のヘラ括縫。 上部に複雑起唇を施し、その上に倒円形浮文貼付。	口縁部外面にも複雑起唇貼付。	頸部のヘラ括縫は3条1單位。
28	—	—	20.0 (6.9) 20.7 —	口縁部は「く」の字形に外反。 口唇部は上下に拡張され、わずかに凹状をなす。	口縁部内外面横方向のナデ調整。 頸部内面左方向へのヘラ割り。	—
29	—	—	17.0 (4.8) —	丸く立ち上がる頸部から、口縁部は水平に近く屈曲（内面に棱をなす）。頸部は上下に拡張し、口唇部に3条の割縫。	口縁部内外面横方向の強いナデ調整。 頸部外表面縦方向のハケ調整後、ナデ調整。	—
30	—	—	17.1 (4.2) —	口縁部は「く」の字形に屈曲。 口唇部は面をなす。	口縁部内外面及び口唇部横方向の弱いナデ調整。 頸部外表面縦方向のハケ調整。	—

標印番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口縁 基部 底面	形態・文様	手 法	備考
31	S R 2	高杯	(14.2) 18.5	縁部は「ハ」の字状に開く。杯底との接合部に断面三角形の粘突部を有するも、ほとんど剥落している。	脚部外表面方向、内面横方向への磨き。	内外面に丹波りあり。
32	〃	〃	15.2 (3.0)	盤状の杯部で、端部を上方に拡張し、口縁部は直角である。	内面右上がりのハケ調整。	
33	〃	甌	29.4 (7.0)	上縁部に段を有し、口縁部は如意型に外反。口縁部は直角である。底部にも割目を有す。	外面右下がりのハケ調整。 口縁部外表面はハケ削ぎの後、横方向のナダ調整。	
34	〃	小型土器	6.2 5.6 6.9	内面底輪に立ち上がり、口縁部は内傾。直角。	底部はつまみ出しによって上げ底状に形成。 内外面ナダ調整。	

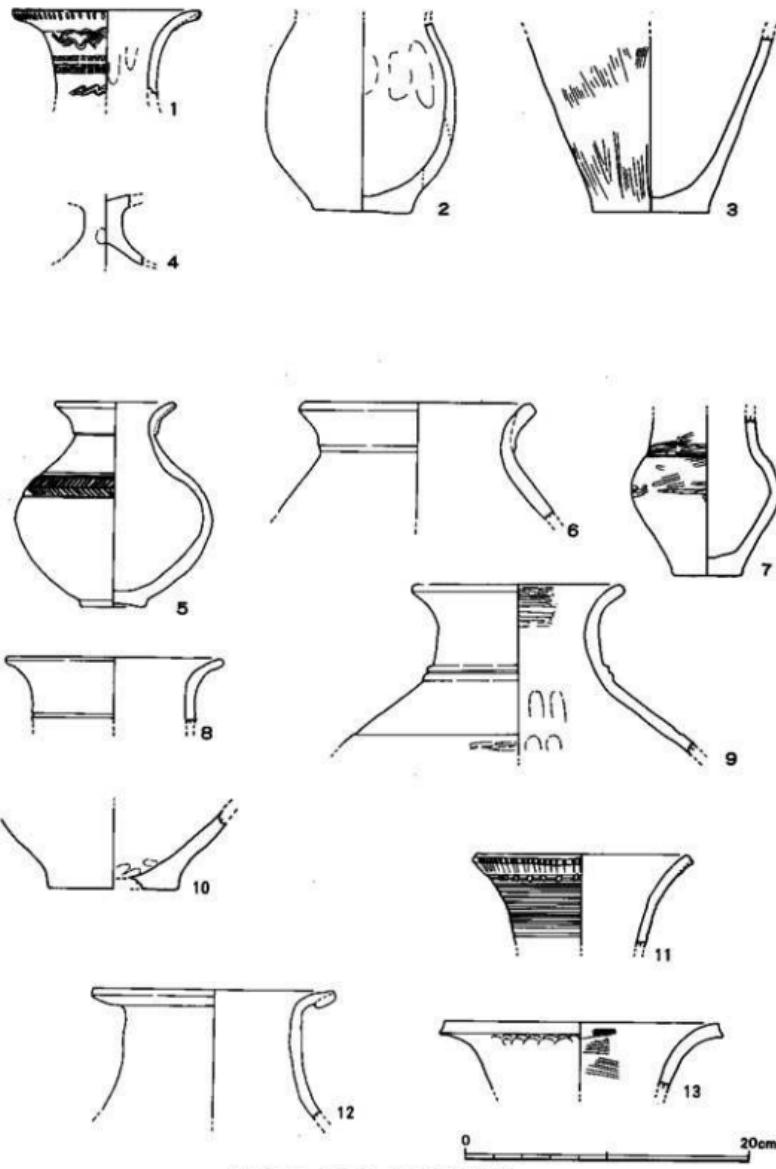
第17表 遺構出土石器観察表

標印番号	遺構番号	器種	計測値 (cm. g) 最大幅 最大厚 基部 底面	材 质	特 徵	備 考
35	S R 2	石斧	(9.9) 7.1 4.8 640.0	綠色片岩	大型結合石斧の下半部欠損品である。全面が研磨されているが、基部には敲打痕を残す。	
36	S D 1	〃	(4.2) 3.7 9.5 35.0	砂質片岩	扁平片刃石斧の刃部と基部とを欠損したものである。残存部全面に研磨痕が有る。	
37	S R 2	〃	6.4 3.9 1.1 47.0	〃	刃部附近に最大幅を有する扁平片刃石斧であり、刃部の一部を欠損している。 ほぼ全面に研磨によって仕上げている。	
38	〃	〃	7.0 1.3 0.5 7.7	粘板岩	表面下端部を研磨して、刃部を作り出した複長い時間磨耗石斧である。	
39	〃	〃	5.2 1.5 0.5 6.0	〃	局部磨製によって、両刃の刃部を作り出した小型石斧である。 刃部を中心に擦耗が残る。	
40	〃	叩石	10.1 11.4 5.0 820.0	砂 岩	河原石をそのまま利用した叩石で、主面と側面部に敲打痕が残る。	
41	〃	〃	6.6 6.4 1.6 110.0	〃	形状的には磨石として考えられるが、周縁部に若干の敲打痕が見られるため、叩石とした。	
42	〃	〃	1.1 0.5 0.5 68.0	〃	自然面と剝離面とからなる。周縁部に敲打痕が残る。	
43	〃	甌 石	8.7 2.2 3.7 120.0	砂質片岩	2面を使用している。 よく使い込まれており、下部を欠損している。	

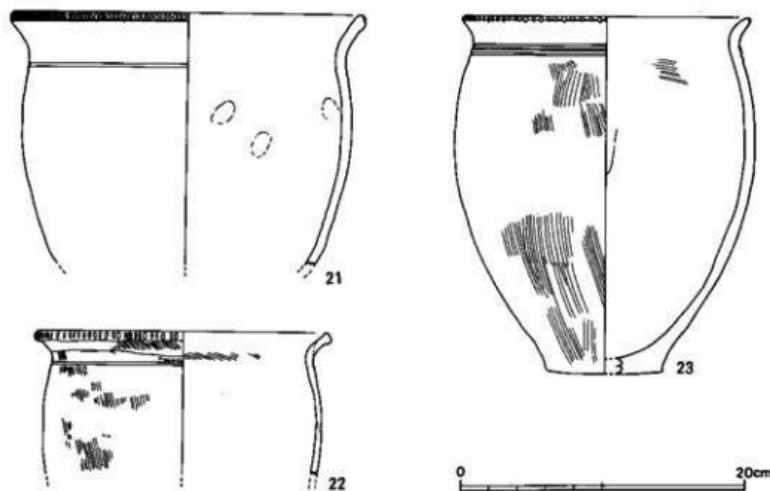
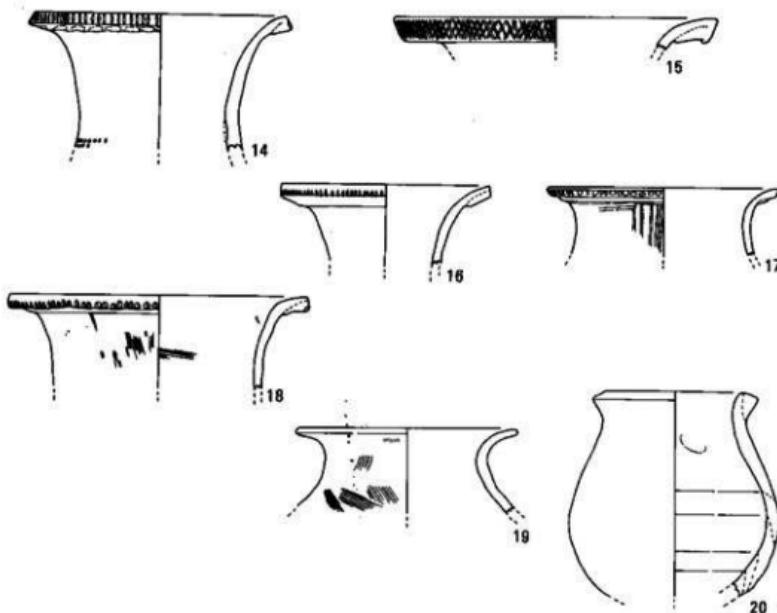
辨認番号	遺構番号	器種	計測値 (cm. g) 最大幅 最大厚	材質	特徴	備考
44	S R 2	叩石 敲石	(14.5) 5.0 4.0 510.0	砂岩	両面側縁部に穿打痕を有し、叩石と考えられるが、一方の長軸近部は砥石として利用された形跡がある。	
45	"	叩石	(10.0) (5.3) (0.8) 52.5	"	自然面と斜面面とからなる。両端に抉りを有し、刃部はやや外傾角度である。背部も外傾しており、断面が丸味を帯びるよう調整されている。	
46	S D 1	石包丁	15.0 5.9 0.7 101.0	粘板岩	丁寧に仕上げられた櫛製石包丁である。刃部は平行で外傾する。両面から穿たれた穿孔を有す。表面両面に微痕を残す。	
47	S R 2	碧玉	0.8 0.3 0.3 0.2	碧玉	比較的小型の碧玉である。穿孔・仕上げとともに精巧である。	



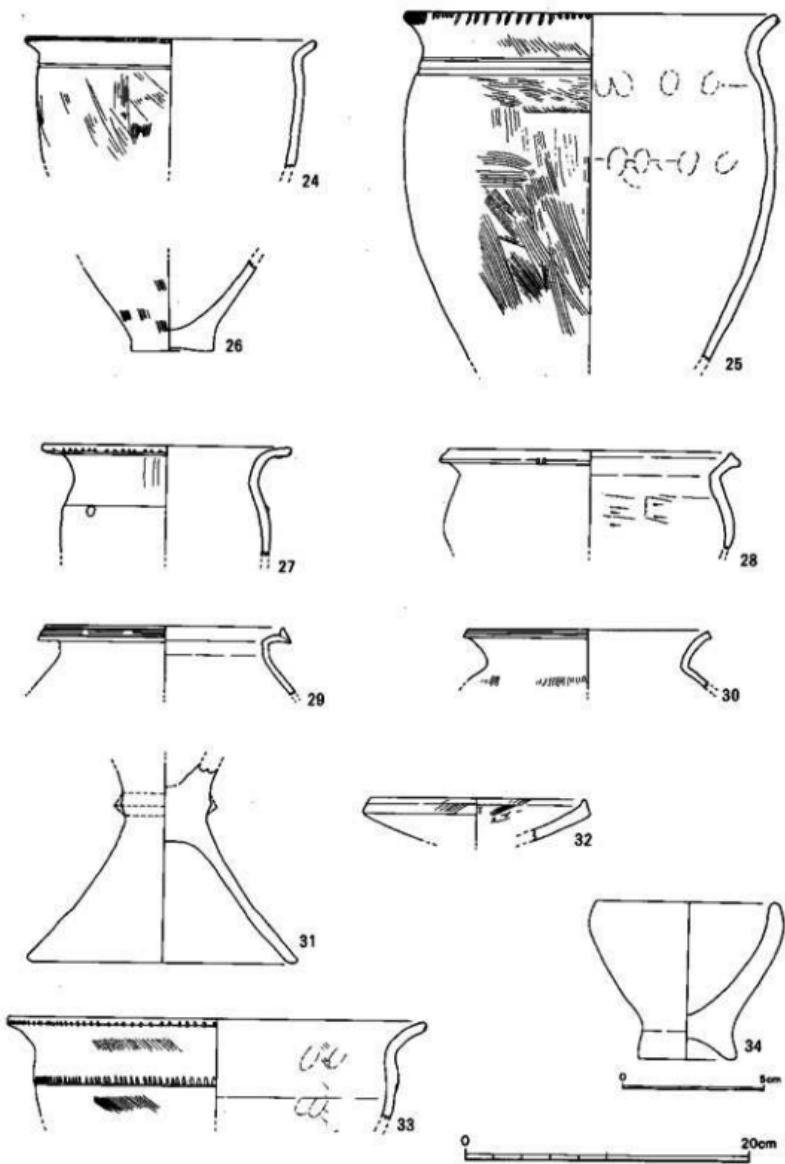
第90図 SD1、SR2セクション



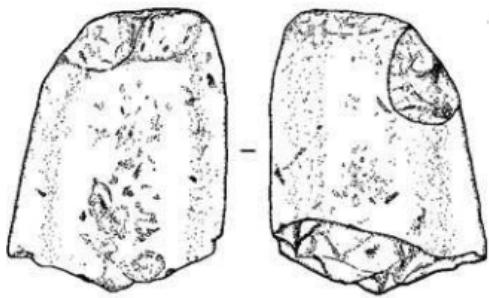
第91図 SD 2、SR 2出土遺物



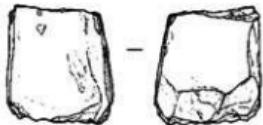
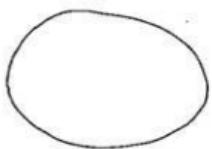
第92図 SR2出土遺物



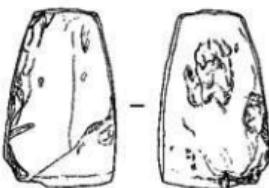
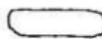
第93図 SR 2出土遺物



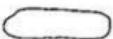
35



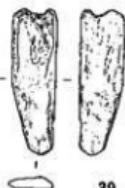
36



37



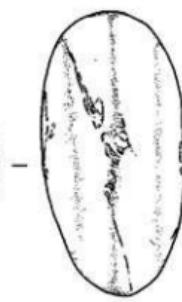
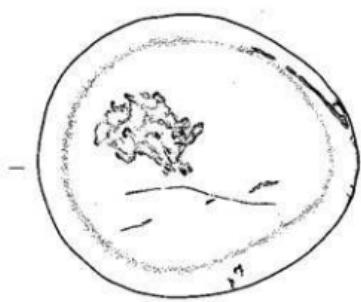
38



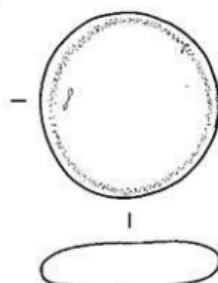
39



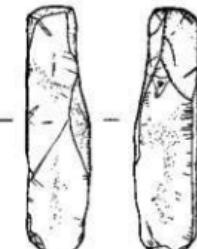
第94図 SD1、SR2出土遺物



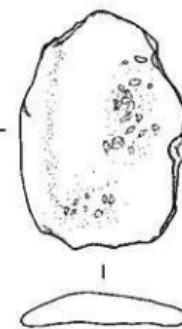
40



41



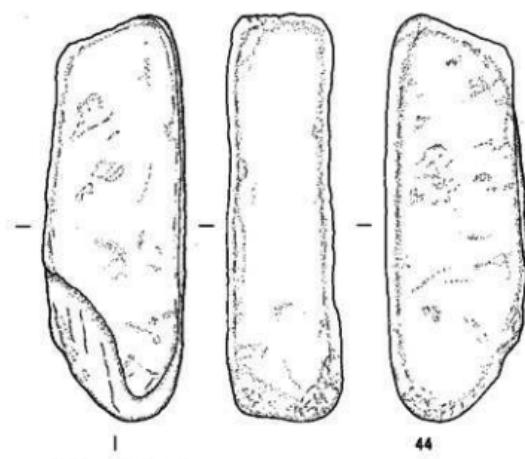
43



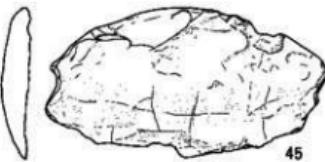
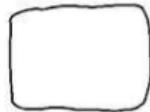
42



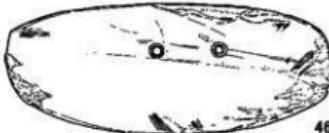
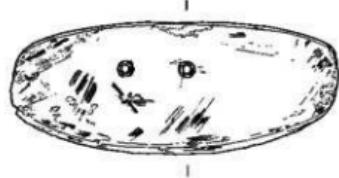
第95図 SR2出土遺物



44



45



46



47



第96図 SD 1、SR 2出土遺物

6. Loc. 45

Loc. 45

1. 位置と調査経過

Loc.45は調査区の西端に位置し、字名を田中と称す。1-2号場周道路改修に伴う調査であり、道路下と西側の拡張部分、幅8m、長さ100mを測る。その面積は約800m²を測る。地形は調査区北端で海拔8.0m、南端で7.3mを測り、南に向ってわずかに降下している。調査は前半に西半分を実施し、後半は道路下の東側半分を実施した。

2. 調査概要

調査区のはば全面から遺構が検出された。現地形は上述のように南に向って緩傾斜しているが、旧地形は勾配が現地形より顕著である。したがって調査区南部においては比較的良好な遺物包含層が形成されているが、北半分は厚さ15~20cmの耕作土を除くと弥生時代の遺構検出面であり、包含層の存在する部分はほとんどなく遺構の残存状況も南に比べて悪い。また東側半分の道路下においては相当激しい近・現代の攪乱を受けている。また調査区のはば中央部は近代の溝が走っており多くの遺構が切られている。

検出遺構は竪穴住居址、土塁、溝などである。住居址は中期が7棟、後期が3棟の計10棟を検出した。中でも北端で検出した後期後半のS T 1からは、舶載の方格規矩四神鏡の鏡片が出土地している。土塁は計16基検出したが、S K 7・14のように溝状をなしているものが注意を引く。溝は北半部のS D 1・2をあげることができる。中でもS D 2は中期II段階の一括資料として把握することができるものである。

3. 層序と遺物

第I層 耕作土

第II層 宋土

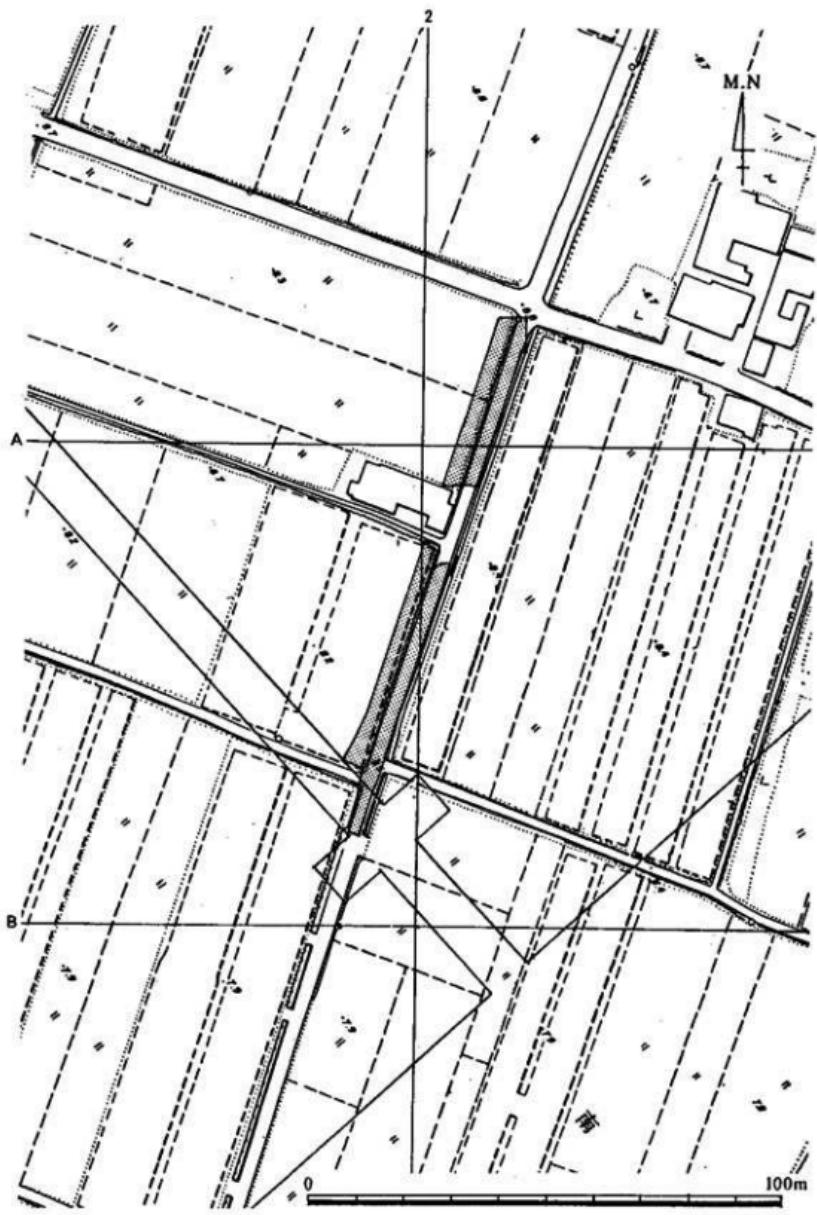
第III層 黄灰色粘質土層

第IV層 黄茶色粘質土層

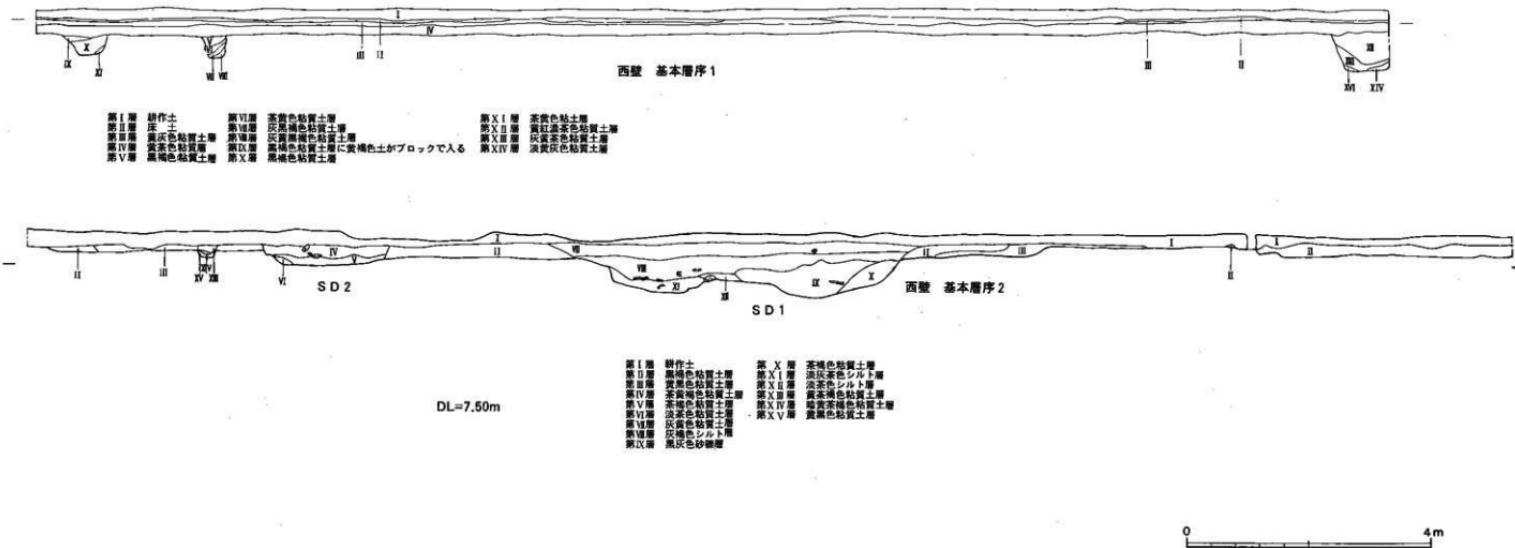
基本層序は調査区の南部と北部においては異なる。南部は西壁基本層序Ⅰのように弥生時代中・後期の遺構検出面である黄褐色シルトの地山の上に弥生の包含層(IV層)と中世の包含層(III層)が堆積しているが、北部では中世の遺物包含層が削平されており、耕作土の下はすぐ弥生時代の遺物包含層で、しかもII・III層が堆積しているのはS D 1あたりまでで、それ以北は耕作土を除けば遺構検出面となっている。包含層出土の遺物は弥生、中世ともに少數でしかも細片が多い。

4. 遺構と遺物

竪穴住居址



第97図 調査区設定図



第98図 調査区セクション

ST 1

調査区の最北端に位置し、ST 2を切っている。道路下で検出したために、近・現代の攪乱をかなり受けている。円形住居址で、径6.2m、深さは最も残りの良いところで約0.2mを測り、面積は約31m²を測る。床面には幅30~90cm、高さ10cm前後のベット状遺構を有する。床面南西部はST 2との切り合いのために不明であるが、ベット状遺構は全体に向っていたものと考えられる。中央ピットは不定形を呈し、長軸方向をN-30°Eに取り、長径1.00m、短径0.64m、深さ0.20mを測り、2段に掘り込んでいる。主柱穴はP 1~4でそれぞれの規模はP 1が28×24cm、深さ18cm、P 2は32×24cm、深さ38cm、P 3は40×24cm、深さ12cm、P 4は32×24cm、深さ40cmを測る。

埋土は基本的にはⅢ層灰黒色粘質土、Ⅱ層淡茶褐色粘質土、Ⅰ層黄茶褐色粘質土の順に堆積しているが、北半分は複雑な堆積を示している。すなわちⅢ層の堆積がほとんど見られず、Ⅳ・VI層の炭化物の層があり、また地山のⅦ層や灰茶色粘質土が薄く重なり合っている。中央ピットには多くの炭化物が埋っているが壁は焼けていない。

遺物はⅠ・Ⅱ層から多数の土器と4点の石器が出土し、特に床面より方格規矩四神鏡の鏡片が出土している。Ⅰ層出土の土器は(1~7, 9~11, 13, 14)で長頸壺(1~3)の存在が目立っている。Ⅱ層からは高杯(7, 8, 12)が出土している。石器はⅠ層より叩石(277)、Ⅱ層より打製石包丁(292, 295)が出土している。P 4からは後期末に位置づけられる叩目のある土器片が出土している。鏡片は床面のほぼ中央部で出土し、縁辺部を上に鋸削を下にして床面に垂直に突き刺されたような状態で出土している。

ST 1出土の遺物は中期Ⅲ(9)から後期後半までのものを含んでおり、遺物からST 1の時期を明確にすることは困難であるが、Ⅰ層出土の甕(5)、高杯脚部(9)を混入と考えれば、ほぼ後期Ⅲと考えができるのではないか。

ST 2

ST 2はST 1に切られており、半分が調査区外に出ている。径9.40m、深さは南で0.24m、北で0.2m前後、面積は約69m²と推定することができる。隨所に近・現代の攪乱跡がみられる。床面は平坦であるが、わずかに南に傾斜している。中央ピットは全形を掘り得ないが、隅丸長方形の平面形を有し、長軸はN-17°Eに取るものと考えられる。長径1.36m、短径0.48m、深さ0.5mを測る。床面には大小ピットが10個あるが、主柱穴はP 4・7・8・10を考えることができる。また壁際には幅20cm、

ST 2 ピット計測表

%	径(長×短)(cm)	深さ(cm)	備考
1	20	6	
2	*	44	
3	28×20	46	
4	20	22	主柱穴
5	38×30	12	
6	20	13	
7	28×24	39	主柱穴
8	18	7	*
9	20	40	
10	36×30	70	セ柱穴

深さ15cm前後の壁溝がめぐっており、北半分はST 1によって切られている。

埋土は中央ピットより南ではII・III層からなり、壁際では炭化物(IV層)がやや厚く堆積している。北半分はII層のみである。中央ピット内は南側から炭化物がやや厚く流れ込んでおり、中央ピット付近にも炭化物が広がっているが、中央ピットの壁は焼けていない。遺物はI層より壺(17)、甕(18, 21)、高杯(20)が出土し、II層からは壺(15, 16)、甕(19)が出土している。(17)は古式土師器であり、混入と考えられる。ST 2はII層の土器を中心と考えて、後期Iとみてよかろう。

ST 3

東側の大半を水路によって切られ、西側も近代の溝によって切られている。その他旧道路下で検出したために随所に攪乱が見られる。北側の角部分から円形住居址としたが、規模は不明である。北の角部分には幅10cm、深さ6cmの壁溝が見られる。埋土は濃茶褐色粘質土である。床面の北部には1.00×0.80m、深さ4cm程度の窪みがあり、床面中央部とその南には焼土と炭化物が見られる。遺物は少なく、長頸甕(22)が埋土中より出土している。後期Iの住居址である。

ST 4

ST 2の南に位置し、ST 3に切られている。径5.60~5.80m、深さ約0.30mを測る。ほぼ円形の平面形を有し、床面積は約24m²である。ST 1・2と異なり、10cm内外の遺物包含層の下で検出したために残存状況は比較的良好である。しかし東側半分は近代の溝、野ツボ、道路によってかなり攪乱されている。中央ピットの南北の床も抉り取られている。埋土はI・II層からなり、II層の下部にはほぼ全面に炭化物が薄く堆積している。床面東部には炭化した建築材の一部と考えられる棒状のものが中央に向って倒れている。また壁には板材が壁に立っていたような状態で焼けており、床、壁は部分的に紅く変色している。これらの点を総合して、ST 4は焼失住居とみてよかろう。床面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。周縁部には幅15cm、深さ5cmの壁溝がめぐっているが、南東部と西端の土塚付近には存在しない。北端において壁溝の一部が二重になっており、床面が著しく踏み固められているが、これは出入口の可能性もある。さらにその付近に4個の小ピットが存在しているのは、出入口の施設と関係する可能性もある。

ST 4の構造上の特徴として屋内貯蔵穴の存在を挙げることができる。西端に位置し、1.04×1.44mの長方形を呈し、深さは床面から0.40~0.50mを測る。立ち上がりは壁側は急で、内側は緩かに立ち上がる。中央ピットは東西に長軸を有する橢円

ST 4ピット計測表

No.	径(長×短)(cm)	深さ(cm)	備考
1	24	18	主柱穴
2	36	21	*
3	48×32	17	*
4	36×24	24	*

形の平面形を有し、長径80cm、短径68cm、深さ14cmを測る。内部には炭化物が多量に入っているが、壁及び周辺には焼土はみられない。またピット底面より数cm程浮いて30cm大の礫がのっている。主柱穴はP 1～4が確認できる。柱穴間からP 3とP 4の間にもう1個柱穴があったことが考えられるが、攪乱堆によって欠損している。

遺物はI層より壺(24)、鉢(26)、II層より壺(23)、甕(27)、床面より壺底部(25)、甕(28、29)が出土している。(29)は西壁際の屋内土塀床面に押しつぶされたような状態で出土している。石器は砥石(288)がII層より出土している。ST 4は中期III段階の住居址である。

ST 5

東側の大部分が調査区外に存し、西側はST 6に大きく切られている。径約7.00m、深さ0.20m、推定面積約38m²を測る円形住居址である。床は平坦面をなす。主柱穴はP 10・11がその一部に該当すると考えられるが、他は検出できなかった。P 10は径28cm、深さ7cm、P 11は径16cm、深さ6cmを測る。P 9は中央ピットで隅丸長方形の平面形を有し、長軸を東西方向に取る。長径70cm、短径38cm、深さ40cmを測り、断面形は逆台形をなす。壁溝は住居址の南側のみに存し、幅20cm、深さ6cm内外を測る。埋土は濃茶褐色粘質土単純一層である。また床面の一部(破線によって示す)が火をうけて赤く変色している。遺物は埋土より壺(30～33)、甕(34)が出土し、石器は床面より(301、302)が出土した。ST 5の時期は床面出土の良好な遺物がないために決定し難いが、中期IIIの時期と考えられよう。

ST 6 ピット計測表

ST 6

西側の大部分が調査区外に在り、ST 5と切り合っている。また南でSK 6と接している。径5.60m、深さ0.40m、推定面積約24m²を測る円形住居址である。ST 6は水山下で検出したために残存状態は比較的良好である。埋土はI～IV層からなり、II層が最も厚く堆積している。床面はほぼ平坦であるが、中央部分がわずかに深くなっている。また部分的に焼土がみられる。主柱穴は明確には把握し難いが、P 2・3がその一部をなすものと考えられる。中央ピットは不定形の平面形をなし、長軸方向はN-15°-Wを取り、長径66cm、短径55cm、深さ41cmを測る。中央ピット内II層からは多量の炭化物が出土しているが、壁及びその周辺は全く焼けていない。

遺物はI・II層、床面から多量に出土しているが、II層が最も多い。土器はI層より壺(43、44、48)、II層から壺(35、37、41、42、45～47)、甕(51～53、55)、床面からは壺(36、38～40)、甕(50)が出土している。壺(40)はII層出土のものと接合している。他に中央ビ

No	径(長×短)(cm)	深さ(cm)	圖考
1	66×55	41	中央P
2	34×28	70	主柱穴
3	33	33	*
4	16×12	6	
5	20×16	31	
6	38×36	50	
7	60×50	65	
8	24	35	

ットから完形に近い鉢（49）、甕（54）が出土している。中央ピット及びP 7からは図示し得ない多量の細片が出土している。石器はI層より磨石（303）、II層より叩石（270、278）、砥石（288）、床面より叩石（268）、縦長の局部磨製石器（264）が出土している。

S T 6 の時期は以上の出土遺物から中期IIIに該当する。

S T 7

調査区にわずかにかかっている円形住居址で、深さ0.25m、推定径約7.00~8.00mを測る。S T 8 及びS D 3 を切っていることを平面形で把握することができる。埋土はII・III層からなり、III層を除くと全面に2~3cmの厚さで炭化物が堆積している。これらの炭化物は、屋根に使用していたと考えられる草屋根の焼けたものである。東壁は火を受けており、部分的に赤く変色している。壁溝は存在しない。遺物は埋土より壺（56、57）、高杯（58、59）、そして石器として叩石（280）が出土している。S T 7 は中期IIIに該当する。

S T 8

西側が調査区外に在り、北半はS T 7 に切られている。なお東部はS T 9 と切り合っている。S T 9 との切り合いは、平面形、断面形とともに精査したが充分に把握することができなかった。径6.00m、深さ0.15m、推定面積28m²を測る円形住居址である。埋土は主としてI・II層からなる。床はほぼ平坦面をなし、壁は斜めに立ち上がり、壁溝は存在しない。主柱穴はP 2~4、が該当すると考えられる。中央ピットは橢円形を呈し、長軸を南北に取る。長径100cm、短径70cm、深さ50cmを測り、南壁側に炭化物が厚く堆積している。遺物はI・II層より壺（60~68）、甕（69~72）、石包丁（296）、打製石斧（263）、また一部に丹塗のみられる（スクリーントーンで示す）磨石（304）がII層より出土している。一応中期IIの時期と考えてよからう。

S T 8 ピット計測表

No	径(長×短)(cm)	深さ(cm)	備考
1	100×70	50	中央ピット
2	32×26	8	主柱穴
3	24	21	*
4	*	5	*
5	21	9	

S T 9

東半分は調査区外に在り、西側は近代の溝に切られ、北側はS D 4 を切っている。径7.80m、深さ0.30m、推定面積約47m²を測る円形住居址である。埋土は濃茶褐色粘質土單純一層で西壁寄りを近代の溝に切られているが、床面は破壊されていない。床は平坦面をなし、大小のピットが多数存在する。主柱穴はP 1・5・8等が考えられる。P 11は中央ピットで不定形の平面形を有し、長軸方向をN-71°-Wに取る。長径100cm、短径76cm、深さ46cmを測り、ピット内には10cm大の河原石が4個入っていた。壁溝は幅15~32cm、深さ2~10cmを測り一定しないが、總

して北側が深く南側が浅い。

遺物は埋土及び床面より多量に出土している。土器は壺(73~87)、甕(88~97)、高杯(98~101)で、叩目のある甕(96)が床面で、その他はすべて埋土中より出土している。組成を見ると壺15、甕10、高杯4である。石器は床面より叩石(273)、磨石(305)が、埋土より打製石包丁(291)、勾玉状を呈す用途不明石器(300)、および叩石が8個出土している。石器の出土状況で注目すべきことは、いま一つの用途不明の棒状石器(306)が壁溝内に4cm突き刺さって出土していることである。

S T 9 の時期は中期Ⅲに該当すると考えられる。

S T 10

調査区の南端に位置し、住居址の3分の2以上が調査区外にある。全形を推定すると、径7.00m、深さ0.12~0.15m、推定面積は約38m²を測る円形住居址である。北西においてS D 7 を切っている。床はほぼ平坦面をなし、大小ピットが多く存在するが、P2が柱穴をなしているものと考えられる。周縁部には壁溝がめぐっているが、一部二重になっている。これは埋土の堆積状況から判断して住居址の拡張に起因するものと考えられる。大部分の埋土は濃茶褐色粘質土であるが、二重の溝がめぐるところは濃茶褐色粘質土の間にセクションE-Fに見られるような地山の黄茶褐色粘質土が1cmぐらいの厚さで堆積している。これは内側の壁溝の埋土は拡張された段階で埋められ、その上に黄茶褐色粘質土が敷かれたものと考えられる。また、拡張区の床面は旧床面よりも高くなっている。壁溝の規模は場所によって幅、深さと共に差異がみられるが、外溝は平均して幅10cm前後、深さ3cmを測り、連結していないところがある。内側の溝は外溝よりも幅広く25cm前後を測り、深さは外溝と同じである。

遺物は少なく、甕(102)が床面より出土し、石包丁(290)が壁に密着した状態で出土している。S T 10は中期Ⅲの段階である。

土塙

S K I

一辺が3.20mほどの方形の土塙である。北ではS D 2を切っているが、南は近代の溝に切られており、東壁も攪乱のために切られている。長軸方向をN-80°-Wに取る。深さは0.20~0.25mを測る。埋土はおおむねII層の黄淡茶褐色粘質土であるが、西壁際の一部にIII層の茶褐色粘質土が堆積している。底面はほぼ平坦であるが、西南隅に径44×36cm、深さ20cmのピットがある。

遺物は甕(103)、高杯(104、105)が出土している。(105)は底面より出土しており他は埋土からである。他に弥生中・後期の土器及び須恵器の細片が見られるが、須恵器は攪乱塙からの混入であろう。弥生後期の土塙と考えておかしくない。

S K 2

溝状の土塙で長軸方向をN-75°Eに取る。長径1.42m、短径0.26m、深さ0.20mを測る。埋土は黄茶褐色單純一層である。底は平坦面をなすが、東端で斜めに上がっている。遺物は東端より壺底部(106)が1点出土した。

S K 3

S K 2の南西に位置し、長軸方向をN-65°Eに取る溝状の土塙で、一部が調査区外に在る。長径2.54m、短径1.00m、深さ0.35mを測る。底は東西両端から2段に掘り込まれておらず、埋土は黒褐色粘質土と黄褐色粘質土からなる。遺物は埋土より壺(107~110)が出土しており、すべて中期のものである。他に170点の細片が出土しているが、その中で22点が薄手の土器である。石器は蛤刃石斧の刃部1点が出土している。中期II段階の土塙である。

S K 4

楕円形の土塙から溝状の細長い土塙が北に伸びる。2つの遺構の切り合いも考えられるが、精査の結果、平面形、断面ともに切り合ひはつかめない。遺構の南半分は長軸方向をN-45°Eに取り、長径0.88m、短径0.66m、深さ約0.30mを測る。北半部は長径2.40m、短径0.40m、深さ0.14mを測る。埋土は黒褐色粘質土に黄褐色の地山がブロックで入っている。遺物は中期IIの壺(111)が出土している他、少量の細片が見られる。

S K 5

S T 4とS T 5に近接する溝状の土塙であり、長軸方向をN-65°Eに取る。長径2.96m、短径0.40m、深さ0.2mを測る。底面はほぼ平坦であり、壁は斜めに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。埋土はI~III層からなり、遺物は各層に見られるが、II・III層は中期の土器のみで、I層は中・後期の土器が混在している。I層より高杯(112)、石器はII層より砥石(287)が出土している。S K 5の時期決定は難しいが、中期II~III段階の土塙と考えられる。またS K 2・3・5はほぼ同時期であり、長軸方向も大体同一である。

S K 6

S T 4の南に接している。楕円形の平面形を有し、長軸方向をN-40°Wに取る。規模は長径1.00m、短径0.48m、深さは最も深いところで0.56mを測る。底は西から階段状に掘り込んでいる。埋土はI~III層が堆積している。遺物は全く出土していない。

S K 7

S T 8の南に位置し、大部分が調査区外に在る。また、北壁側は攪乱により崩されており、

南壁側はP2に切られている。溝状をなす土塙で、長軸方向をN-61°-Wに取る。残存規模は、長径2.40m、短径1.22m、深さ0.57mを測る。長軸断面はなめらかに斜めに下降し、階段状をなして底面に至る。埋土はI-VII層で、粘質土が堆積している。

遺物は壺(113、114、117)、甕(115)、高杯(116)の他に200余点の細片が出土している。(117)は無頸壺で、明らかに搬入品である。SK7は中期Ⅲに該当する。

SK8

SK7の南に位置し、一部が調査区外に在る。不定形の平面形を有し、長軸方向をN-21°-Wに取る。長径1.40m、短径1.20m、深さ0.52mを測る。またSK8をはさむように南北に小ピットがあるが、SK8に付属するものと考えられる。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形をなす。埋土は下からII層黄褐色粘質土とI層灰黄濃茶色粘質土が堆積している。

遺物は壺(118)の他50点余りの細片が出土している。中期Ⅱの土塙とみられる。

SK9

ST9の南に位置する。橢円形の平面形を有し、長軸方向をN-59°-Eに取る。規模は長径0.68m、短径0.56m、深さ0.10mを測る。底面は平坦で断面形は逆台形をなすが、部分的に段状に掘り込んでいる。埋土は濃茶褐色粘質土で、遺物は細片を含めて約100点が出土している。遺物は壺(119~122)があり、中期Ⅲに該当する。

SK10

SK9の南に位置し、東は調査区外に在り、西隅は中・近世の溝に切られている。方形の平面形を有し、長軸方向はN-65°-Eを取る。規模は長径1.30m、短径1.20m、深さ0.34mを測る。底面形は平坦で、断面形は逆台形を呈す。埋土は濃茶褐色粘質土単純一層である。

遺物は壺(123、124)、鉢(125)が見られるが、その他の埋土下層より中期の細片100点が出土している。SK10は中期Ⅱに該当する。

SK11

細長い溝状の土塙で、南部を中・近世の溝によって切られている。長軸を南北に取り、長径3.26m、短径0.54m、深さ0.28mを測る。底面は平坦で、長軸断面形は台形状、短軸断面形は半球状を呈す。埋土は濃茶褐色粘質土であるが、一部に壁が崩れ、そのための地山土が混入する。また北端にはP20があるが、SK11との新旧関係は不明である。

遺物は壺(126)、高杯(127)の他約100点近い中期土器の細片が出土している。石器は環状石斧未製品(265)が底面より4cm浮いて出土している。

SK12

SK17の北に位置し、平行四辺形の平面形を有する。長軸方向はN-61°-Wに取り、規模は1辺約0.90mで深さ0.14mを測る。底は平坦面をなすが東側は段状に掘り込んでいる。また、底面北端に径10cm、深さ3cmの小ピットがある。埋土は黄茶色粘質土単純一層で、遺物は弥生中期土器細片が8点出土しているが、図示できるものはない。

SK13・14

SK13は一部が調査区外に在り、SK20を切っている。橢円形の平面形を有し、長軸方向をN-70°-Eに取っている。規模は長径0.72cm、短径0.32m、深さ0.35mを測り、長軸断面形は階段状をなし、短軸断面は逆台形をなす。埋土はI～IV層の粘質土が堆積している。遺物は弥生土器片が11点出土しているが、図示できるものはない。

SK14は、残存長径0.76m、深さ6cmを測り、長軸方向をN-76°-Eに取る。底面は平坦で、埋土は茶褐色粘質土単純一層である。遺物は認められない。

SK15

細長い溝状の土塙で、長軸方向をN-27°-Wに取る。規模は長径3.00m、短径0.50m、深さ0.24mを測る。底は北から南に向かって緩傾斜しており、南の3分の1ほどが深く落ち込んでおり、断面形は逆台形を呈す。またP24はSK15を切っている。埋土は黒褐色粘質土単純一層である。

遺物は壺(128～130)、甕(131～135)、高杯(136、137)で、壺(130)は南端の底上から出土している。その他は遺構の中央部から集中して出土した。図示したもの以外に弥生土器細片が200点近く出土している。石器は打製石鎌(297)が出土している。SK15は中期IIIの土塙である。

SK16

調査区の南西隅に位置し、長方形の平面形を有する土塙であるが、南側にきわめて不定形の浅い土塙が存在する。SK16との切り合ひが考えられるが、平面、断面ともに切り合ひはつかめない。長軸方向をN-77°-Wに取り、残存長径1.76m、短径0.50m、深さ0.34mを測る。断面形はU字形をなす。埋土は黒褐色粘質土に地山の黄褐色シルト層がブロックで入った土層と、黒褐色粘質土からなるII層が堆積している。

遺物は甕底部(138)がII層より出土した他、弥生土器細片がI層より54点、II層より3点出土しているが、I・II層で出土土器の時期差は見られない。

SK16の時期は弥生中期か後期か決め難い。

SK17

調査区の南端に位置する。遺構の半分以上を近代の溝に切られており、平面形をつかむこと

はできない。残存長2.80m、短径1.20m、深さ0.18mを測る。底は西に向って傾斜している。埋土は黒褐色粘質土單純一層で、出土遺物は見られない。

SK18・19

SK15に並行している。溝状のSK18と方形に近いSK19は切り合っていると考えられるが、平面形、断面形ともに精査したが先後関係はつかめない。

SK18は、長軸方向をN-23°Wに取り、規模は長径2.20m、短径0.60m、深さ0.24mを測る。P25はSK18を切っている。底面にはかなり凹凸が見られる。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は壺(140)、甕(139、141)が出土している。これらの弥生土器は中期IIIである。

SK19は平行四辺形の平面形を有し、長軸方向をN-15°Eに取る。規模は長径1.28m、短径0.96m、深さ0.12mを測る。またP23に切られている。底面及び北壁側に小ピットが4個存在するが、SK19との関係は不明である。埋土は黒褐色粘質土で遺物は出土していない。

溝

SD1

ST4の南3mに位置し、調査区を東西に横断する幅の広い溝である。長さ6.60m、幅4.70m、深さ0.50-0.70mを測る。中央部は大きな擾乱を受けており、一部底面も破壊されている。底面は一部が凸状をなしている。埋土は南・北壁側にIV-VI層の粘質土が堆積しており、その内側にシルトと砂砾が交互に堆積している。IV-VI層はSD1の第1次堆積であり、I-III・V層は、第1次堆積を抉るような形で流れ込んだ第二次堆積土層であると考えられる。

遺物は、I-a・I-b・II-V-b層からコンテナケース10箱分の弥生土器が出土したが、全出土量の80%がII層から出土している。また底面からの出土は極めて少ない。(142-146、148、149、151-155)は中期II~IIIの壺、(156-163)は中期II~IIIの甕、(147、150、164-183)は後期Iの壺、(184-194、196)は後期Iの甕、(197-202、206)は後期Iの高杯、(193、195)は後期IIの甕、(203-205)は後期の鉢と考えられる。この他、土鐘(207)が出土している。以上のうち、(157、197、198、200)は明らかに搬入品である。石器は叩石(269)が出土している。SD1は出土遺物から層位的に先後関係をつかむことはできないが、中期III及び後期Iの遺物が圧倒的に多い。

SD2

SD2は、SD1の南に位置し、調査区を東西に横切る溝である。長さ7.00m、幅0.90-1.90m、深さ0.20-0.35mを測る。南側をSK1に切られ、東は旧道路下であるためにかなり擾乱を受けている。耕作土を除くと検出面であり、夥しい量の土器がその上半部を削りとばされたような形で見られるところから全体的に相当削平されていることがわかる。埋土はI・II層の粘質土

が堆積しており、遺物はⅠ～Ⅱ層にまたがるものもあるが、大半がⅡ層に集中しており、完形に近い土器が散きつめられたような状態で多量に出土している。これらの土器は底面へばりつきの状態ではなく、底より3cm内外浮いている。これらの土器は、SD 2が機能している時期に多量に、しかも短時間内に廃棄されたものと考えられる。

遺物は壺(208～238、241)、高杯(239)、鉢(240)で、すべて中期Ⅱの段階のものである。(225、226)は比較的初現期の凹縞文を有する土器であり、出土遺物中に内面ヘラ削りの見られるものはない。今一つの注目すべきこととして、壺の出土が皆無に近い状態である。石器として石錘(299)の他、砥石、叩石が出土しており、石器加工具に使う軽石も出土している。

以上のことからSD 2は中期Ⅱの段階に機能し、同時期のうちに埋没したと考えられる。

SD 3

SD 3は、ST 5・6の南に位置し、調査区をほぼ東西に走る溝で、西端でST 7に切られている。規模は長さ6.00m、幅0.30m、深さ0.18mを測り、断面形は箱形を呈す。埋土は濃茶褐色粘質土単純一層である。SD 4と切り合っているが、クロス部分が近代の溝によって切られている。出土遺物は見られない。

SD 4

調査区を北西方向から南東方向に走る溝で、ST 9及びST 5に切られている。残存長3.00m、幅0.40m、深さ0.18～0.30mを測り、底面は南に緩傾斜している。断面形は概ね箱形を呈すが、部分的に段状に掘り込んでいる。埋土は濃茶褐色粘質土単純一層で、埋土中より弥生中期土器細片が10点出土している。

SD 5

北端を近代の溝に切られているが、長さ3.30m、幅0.50m、深さ0.20m内外を測り、北に向って下降している。長軸方向はN-48°-Eを取る。北端底に小ピットが2つ存在する。埋土は濃茶褐色粘質土単純一層で、遺物は見られない。

SD 6

SD 5の南に位置し、長軸方向はN-25°-Wを取り、北端は極端に細く浅くなっている。長さ5.00m、幅0.80～1.00m、深さは最も深いところで0.32mを測る。底は中央部よりやや北寄りのところで凸状をなし、底面を二分している。断面形は逆台形をなす。埋土は概ねⅠ層の黒褐色粘質土であるが、南部ではⅠ層の下に地山の黄褐色シルトがブロックで入るⅡ層が薄く堆積している。南端底面には小ピットが1つ存在する。

遺物は壺(242～244)の他110点の細片が出土しているが、すべて中期のもので、内面ヘラ削り

凹線文を有するものは全くない。また薄手の土器は2点入っている。石器は石包丁(293)が出土している。SD6は中期IIの時期である。

SD7

SD7は中央部を近代の溝に切られ、南側を中・近世の溝及びST10に切られている。長さ5.00m、幅0.70m~1.00m、深さ0.30~0.50mを測り、底面は北に行くほど深くなり、南端と北端とでは20cmの高低差がある。幅も北に行くほど広くなっている。断面形は南半分は逆台形をなすが、北半分は北壁が比較的緩傾斜であるのに対し、南壁は急傾斜をなす。埋土は南部はI・III層で、北部はI~IV層が堆積している。

遺物は多量の弥生土器及び石器が出土しているが、すべてII層に集中しており、I・III・IV層には全く見られない。したがって、III層が堆積した段階で短い期間に放棄されたものと考えられる。壺(245~250)、甕(251~255)、高杯(256)、小型土器(257、258)である。これらはすべて中期IIIのものである。石器は石包丁(294)が出土している。

SD7は中期IIIの時期のものである。

ピット

P1

ST5の北側で検出した。径26cm、深さ10cmを測り、底に径8cmを測る柱根跡が残る。埋土は茶褐色粘質土で弥生土器細片が1点出土している。

P2

SK7を南壁側で切っている。径24cm、深さ14cmを測り、埋土は黒褐色粘質土である。甕(259)が出土している。弥生後期Iのものである。

P3

SK7の東端に近接し、橢円形の平面形を有する。長径44cm、短径36cm、深さ16cmを測る。埋土は黄茶褐色粘質土で、弥生土器細片1点が出土している。

P4

径35cm、深さ18cmを測り、埋土は黄土褐色粘質土で、弥生土器細片3点が出土している。

P5

橢円形の平面形を有し、長径42cm、短径36cm、深さ26cmを測る。埋土は淡茶褐色粘質土で、遺物は甕(260)が出土している。弥生中期IIIのピットである。

P 6

楕円形の平面形を有し、長径28cm、短径22cm、深さ30cmを測り、底面に径14cmの柱根跡を認め。掘り方より弥生後期の土器細片5点、柱根跡より弥生土器細片5点が出土した。

P 7

隅丸方形の平面形を有する。長径44cm、短径30cm、深さ26cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、弥生中期の土器細片が1点出土している。

P 8

楕円形の平面形を有し、長径25cm、短径22cm、深さ18cmを測る。埋土は濃茶褐色粘質土で、弥生中期の土器細片2点が出土している。

P 9・10

P 9がP10を切っている。P 9は楕円形の平面形を有し、長径70cm、短径42cm、深さ34cmを測る。埋土は茶褐色粘質土で、弥生土器細片3点が出土している。

P10も楕円形を呈すると考えられ、長径30cm、短径24cm、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、弥生土器細片1点が出土している。

P 13

楕円形の平面形を有し、長径44cm、短径34cm、深さ22cmを測る。埋土は濃茶褐色粘質土で、弥生土器細片1点が出土している。

P 14

楕円形の平面形を有し、北端に瘤状の小ピットがつく。長径60cm、短径54cm、深さ26cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、弥生土器細片13点が出土している。

P 18

S K18を切っている。径32cm、深さ36cmを測り、埋土は黒褐色粘質土で、弥生土器細片6点が出土している。

P 19

S K15を切っている。径23cm、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、弥生土器細片1点が出土している。

P 20

S K 18を切っている。橢円形の平面形を有し、長径32cm、短径24cm、深さ12cmを測る。弥生土器細片3点が出土している。

P 22

径28cm、深さ15cmを測り、埋土は黄茶色粘質土である。弥生土器細片7点が出土している。

小結

以上検出遺構について詳細に述べた。検出遺構を時期的に見れば、住居址は中期IIが1棟(ST 8)、中期IIIが6棟(ST 4~7・9・10)、後期Iが2棟(ST 2・3)、後期IIIが1棟(ST 1)である。土塙は中期IIが4基(SK 3・4・8・10)、中期IIIが4基(SK 7・9・15・18)、後期Iが1基(SK 1)、時期不明のものが6基(SK 2・6・11・13・16・17)である。溝については、中期IIが2条(S D 2・6)、中期IIIが1条(S D 7)、中期に属するものが1条(S D 4)、後期に属するものが1条(S D 1)、時期不明のものが2条(S D 3・5)である。Loc.45は時期不明の遺構を含むが、住居址、土塙、溝とともに中期IIの段階に始まり、後期に終わる集落遺跡として把握することができる。以下各遺構別に若干の分析を試みたい。

(1) 穫穴住居址

量的な制限はあるが、時期別に特徴を見ると先ず第一に、壁溝の有無を挙げることができる。すなわち中期IIのST 8には見られないが、中期IIIになるとST 6・7以外の4棟には壁溝が存在している。しかしながらST 9・10のように全体にめぐらしているものと、ST 4・5のように部分的に欠如するものがある。後期のST 2とST 3は全周しているものと考えられるが、後期後半(ST 1)になってベッド状遺構を有するようになると壁溝は再び見られなくなる。前期においては、壁溝の存在するものは1例もないところから、当地方においては、中期IIIの頃にその初現を見ることがきよう。また壁溝内のビットについては、確認することができなかった。

次に注目すべきこととして、ST 4の屋内貯蔵穴を挙げなければならない。北部九州地方においては、中期初頭以降の竪穴住居内に小型の屋内貯蔵穴を持つ例が知られているが、当地方においては、ST 4の例が初現である。もっとも柱穴大の規模の貯蔵穴が前期以降存在しているのは周知のとおりである。屋内貯蔵穴については、後述の土塙と統一的に把握しなければならない問題である。

中央ビットについては、確認できた6例中ST 5以外はすべて多量の炭化物が入っているが、中央ビットの壁、底、周縁部には、火を受けて変色をしているような例は全くない。これとは別に、床面の一部が火を受けて紅く変色しているのが、ST 2・3・5に見られることは一考

を要するものであろう。

また、これらの住居址の廃絶の在り方であるが、ST 4とST 7については、火災による焼失が考えられる。

(2) 土塙

土塙は、その形態から2つに分けることができる。すなわち平面形が方形に近いものと溝状をなすものとある。前者はSK 1・8~10・12~14・17・19が該当し、後者は、SK 2~4・5~7・11・15・16が該当する。両者に見られる形態の差違は、その性格の差違に帰因するものである。

前者は、大型であるSK 1以外に、ほとんど遺物が見られず、これらの遺構の性格を決めることは難しい。しかし、SK 8・10・12・19は、方形の平面形を呈しているところから、前期以降の貯蔵用小豎穴を想定することは可能であろう。

前期の貯蔵用小豎穴群に対して、中・後期の貯蔵用小豎穴は散在的であり、住居址の数に比較してもその量は少ない。中期以降普遍的に見られるこのような現象について、その帰因するところは、一般的に高床式倉庫の出現、普及によると考えられている。果してそうであろうか。当然この時期の貯蔵形態としては、高床式倉庫の存在が考えられるが、高床式倉庫が前期以降存在することが明らかになっている以上、貯蔵用小豎穴に見られる上述のごとき変化の原因を高床式倉庫の出現に求める積極的な根拠はないものと考えられる。中期以降の貯蔵用小豎穴の量的僅少と散在性、及び先述の室内貯蔵穴の出現という諸現象は、共同体における経済的、社会的変化として統一的に把握すべきものである。貯蔵用小豎穴を生産手段の脈管系統としてとらえる以上、共同体と住居址、及び貯蔵穴との間に現われた変化は、共同体における生産関係の変化として把握することが自然であろう。

次に後者について見ると、先述のように短径に対して、長径が非常に長いことを特徴として挙げることができる。したがって溝として扱ったSD 5~7は、SK 7やSK 15と同様の性格を有するものと考えられるので、ここで一緒に述べる。よって対象となる遺構はSK 2~7・11・15・16、及びSD 5~7である。これらは長軸の方向によって④-SK 11・15・18、SD 6・7、⑤-SK 2・3・5、⑥-SK 7、⑦-SK 16、SD 5に分類することができる。④は、SD 7、SK 15・18が中期III、SD 6が中期II、SK 11は中期のものであり中期IIIに属する可能性もある。また⑦のSK 2・3・5は、中期IIとして把握できる可能性もある。長軸方向と時期とには、矛盾もあるが、何らかの規則性を有していることは、首肯することができる。この規則性を出自の違いに求めることもできよう。

遺構の規模について見れば、長径の長さが1.42~5.00mと大小さまざまであるが、遺物の出土状況を見れば、總じて大きな遺構からは多くの遺物が出土しており、小さな遺構からは、出土量が少ないか、皆無である。またSD 7からは、供獻用と考えられる小型土器(257、258)

も出土している。以上のように、筆者が指摘した後者の土器は、いくつかの群をなし、併せて出自による方向性も示し、さらに供獻用土器とも取れる土器群の出土から、これらを土器墓として把握したい。

(3) 土器

当地方の弥生中期土器は、遺構に伴った一括資料に乏しかったが、Loc.45のSD 2によって、中期II段階の一括資料を得ることができた。SD 2出土土器は、甕を欠くが、壺、高杯、鉢など各種が揃っているので、今後の土器編年の一つの指標となると考えられる。先ず壺に見られる特徴を挙げると、①頸部が長いもの(211、212、215、218、222、223)が多いこと。②頸部や上胴部に断面三角形の小突帯がつけられていること(薄手の土器に見られる微隆起帯と区別するために小突帯とした)。③櫛状原体による直線文、波状文もかなり見られる(218、220、221、223)が、櫛描縦状文は見られない。④口縁部内面及び調部外面に櫛描扇形文が少数ではあるが見られる。⑤この時期に出現する手法として凹線文が挙げられる。この時期の凹線文は、これ以降のものと異なり、凹線に挟まれた部分が、突帯状をなしている(225、226、228)。⑥中期土器の伝統的手法である粘土帶貼付口縁は盛行するが、口縁部内面の刻目降帯は中期III以降姿を消す。

甕は、その出土例が壺に比較して少ない。これは、中期I以降に見られる1つの現象である。高杯においても同様で、この僅少さは前期以降見られる現象である。そして中期III段階以降、甕、高杯が急増する現象が見られることと好対称をなす。次に叩き技法について見なければならない。中期III段階のST 9出土土器(96)に叩目が見られる。従来の調査では、南四国における叩き技法の出現は、後期後半とされていたが、その点で興味ある土器である。

最後の搬入品の問題を挙げなければならない。ST 1出土土器(13)、SK 7出土土器(117)、SD 1出土土器(157、182、197、198、200、201、205)がそれである。時期的に見れば(157)が中期IIIに、(117、197、198)は後期Iに、(200、201、205)は、後期II以降に属するこのうち(117、157、197、198、205)は全く同一の茶褐色の胎土で、中に角閃石を含んでいる。(197)のごときは山陽地方の上東I式土器そのものであり、これらの搬出地は、中部瀬戸内のどこかに求めることができよう。中期III段階から後期にかけて見られるこのような現象と、前述した甕、高杯の急増現象とは、大きな文化変容の諸侧面をなしているものと考えられる。今後追求していくべき大きな課題である。

(4) 鏡片(307)

鏡片は、後期IIIの住居址であるST 1から出土した。鏡片の縁辺部を上に鋸側を下にして、床面に突き刺さっていたような状態で出土している。出土位置は床面のほぼ中央部である。

鏡片は、方格規矩四神鏡である。添緑色の色調を呈し、鏡面は光沢を保っている。鏡面、背面、断面とともに著しい磨滅、研磨が見られるが、穿孔はされていない。復原直径は約16.5cm、厚さは内区で1.5mm、外区で3mmを測る。外区の端部は平縁をなし、2重の外向陽鉈齒文、その

間に複線波文、内側に櫛齒文と続き、内区との境に銘帯がある。銘文は「竟真大」の文字を読みとることができ、おそらく「尚方作竟真大」と続くものであろう。内区はT・L・VのV字形と爪形文1個と鳥像かと思われる一部を確認することができる。

第18表 竪穴住居址計測表

探査番号	遺構番号	平面形	規模 (m)	主軸方向	柱穴 (個)	面積 (m ²)	施設	備考
第99図	S T 1	円形	6.2	—	4	31		
"	S T 2	"	9.4	—	4	(69)		
第101図	S T 3	"	—	—	—	—		
"	S T 4	"	5.6	—	—	24		
第100図	S T 5	"	7.0	—	2	(38)		
"	S T 6	"	5.6	—	2	—		
第102図	S T 7	"	7.0~8.0	—	—	—		
"	S T 8	"	6.0	—	3	(28)		
第103図	S T 9	"	7.8	—	3	(47)		
"	S T 10	"	7.0	—	1	38		

第19表 土塁計測表

探査番号	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長 庄	短 庄	深 さ			
第104図	S K 1	方形	3.20	3.20	0.25	N-80°-W	逆台形	
"	S K 2	溝状	1.42	0.26	0.20	N-75°-E	箱形	
"	S K 3	"	2.54	1.00	0.35	N-65°-E	階段状	
"	S K 4	椭円形	0.88	0.66	0.30	N-45°-E	逆台形	
第105図	S K 5	溝状	2.96	0.40	0.20	N-65°-E	"	
"	S K 6	椭円形	1.00	0.48	0.56	N-40°-W	階段状	
"	S K 7	溝状	(2.40)	(1.22)	0.57	N-61°-W	"	
"	S K 8	不定形	1.40	1.20	0.52	N-21°-W	逆台形	
第106図	S K 9	椭円形	0.68	0.56	0.10	N-59°-E	"	
"	S K 10	方形	1.30	1.20	0.34	N-65°-E	"	
"	S K 11	溝状	3.26	0.54	0.28	N	"	
"	S K 12	平行四辺形	0.90	0.90	0.14	N-61°-W	段状	
"	S K 13	椭円形	0.72	0.32	0.35	N-70°-E	逆台形	
"	S K 14	不定形	(0.76)	—	0.06	N-76°-E	"	
"	S K 15	溝状	3.00	0.50	0.24	N-27°-W	"	

特因番号	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向	断面形	備 考
			長 軸	短 軸	深 さ			
第107図	SK 16	長方形	(1.76)	0.50	0.34	N - 77° - W	U字形	
"	SK 17	不定形	(2.80)	1.20	0.18	—	皿形	
"	SK 18	梯 状	2.20	0.60	0.24	N - 23° - W	逆台形	
"	SK 19	平行四辺形	1.28	0.96	0.12	N - 15° - W	"	

第20表 造構出土土器観察表

特因番号	遺構番号	器種	柱量 (cm)	口縁 器底 脚部 底盤	形態・文様	手 法	備 考
1	ST 1	甌	9.5 (5.5) —	長頸甌である。直立気味の長い頸部は下にまみ出し、口縁部は丸くおさめる。			
2	"	"	13.0 (11.4) —	長頸甌である。直立気味の長い頸部は下にまみ出し、口縁部は回状をなす。	口縁部内面は横方向のハケ調整。口縁部及び口縁部外周は横方向のナデ調整。頸部外周は縦方向のハケ調整。		
3	"	"	13.8 (7.0) —	長頸甌である。口縁部は頸部からなめらかに外反する。口縁部は丸模をおびる。	頸部外周は部分的に縦方向のハケ調整を認める。		
4	"	甌	18.4 (3.3) —	口縁部は丸味をおびて、「く」の字状に外反する。頸部は上方に拡張し、口縁部は筋状をなす。	口縁部外周は横方向のナデ調整。	外面は全面がスッキっている。	
5	"	"	15.0 (6.0) —	口縁部は「く」の字状に外反。口縁部は上下に肥厚し、2条の回轉文を配す。早いつくりである。	上側部内面以下横方向のヘラ削り(右→左)。口縁部内外横方向のナデ調整。脚部外周縦方向のハケ調整。	"	
6	"	"	(2.5) 4.6	小さい底部である。底部に近い大きな脚部がつくものと考えられる。			"
7	"	高杯	21.5 (3.0) —	口縁部は縫をなして直線的に外反し、底部は下方にわずかに肥厚する。	口縁部は横方向に強くナデする。		
8	"	"	26.0 (2.8) —	口縁部は杯部から縫をなして強く外反する。 口縁部は縫をなす。	口縁部をつまみ上げて横方向にナデしている。	外面はスッキっている。	
9	"	"	(4.5) 13.5	「ハ」の字をなす脚部で、底部は上下に外反し、2条の回轉文を配す。 底部外周に2条のヘラ削り縫を配す。	脚部内外横方向のナデ調整。 内面はヘラ削り。		
10	"	"	(8.5) —	「ハ」の字をなす脚部で、底部は円錐尖端であると思われる。	外側は縦方向、内面は横方向のハケ調整を施す。		
11	"	"	(6.0) 21.4	「ハ」の字をなす脚部で、底部は両状をなし、上縫をつまみ上げてある。円孔あり。	内外面ナデ調整。		

種別番号	造形番号	器種	法量 基準 部位 底面 (cm)	口縁 基準 部位 底面 (cm)	形態・文様	手 法	備考
12	ST 1	高杯	14.8 (6.2) 9.0	17.0 (7.0) —	脚付鉢といった方が良いかも知れない。唇部はなだらかなカーブを描いて外方に伸びる。端部は丸くおさめる。		
13	"	鉢	14.8 (3.0) —	17.0 (7.0) —	内房気味に立ち上がり、口縁部は近く外反する。	口縁部外面は横方向の強いナデ調整。	嵌入品である。
14	"	"	16.0 (5.0) —	17.0 (7.0) —	わずかに内房気味に立ち上がりの唇部から、口縁部は直線的に外反。口唇部は面をなす。	外面部は横方向のハケ調整。内面は横方向のハケ調整。口縁部は、つまみ出でて横方向にナデする。	唇部外面はスッキリしている。
15	ST 2	盃	17.5 (9.0) —	16.0 (5.0) —	なめらかに外反する口縁部で、口唇部は面をなす。		
16	"	"	28.3 1.0	23.0 (2.5) —	球形に近い底部から、なめらかに外反する口縁部を有す。上唇部は1条、脣部に2条のヘラ削痕を配す。	全体に厚いつくりである。外面部は、口縁部が横方向、脣部が横方向のハケ調整。口縁部内面は不定方向のハケ調整。	
17	"	"	23.0 (2.5) —	23.0 (2.5) —	水平に大きく開く口縁部で、わずかに肥厚する脣部には2条の粗線文を配す。	外面部にハケ調整あり。	
18	"	盤	15.3 (7.5) —	15.3 (7.5) —	直線的に外反する口縁部である。脣部はわずかに上下に凹むし、1条の化粧を配す。		
19	"	"	21.1 (3.0) —	21.1 (3.0) —	球形に近い底部から、口縁部は「く」の字に外反する。脣部は上下に肥厚させ、口唇部に2条の凹輪文を配す。	脣部外面に横位の叩きを施すが、ほとんどナデ消す。内面は横方向(右→左)のヘラ削り。	
20	"	高杯	19.0 (6.0) —	19.0 (6.0) —	口縁部は一旦直線的に立ち上がり、近く外反する。口唇部は面をなす。厚いつくりである。	内外面ナデ調整。	
21	"	盤	19.0 (6.0) —	19.0 (6.0) —	下唇部は直線的に立ち上がる。	底部側面は横方向のナデ調整。内面に指頭圧痕あり。	
22	ST 3	盃	15.3 (13.5) —	15.3 (13.5) —	長頸盤である。わずかに外反気味に立ち上がる脣部から、口縁部はなめらかに外反。口唇部は面をなす。	脣部外面は横方向、内面は右下りのハケ調整。口縁部内面は、横方向のナデ調整。脇部は厚いつくりで内面に指頭圧痕あり。	
23	ST 4	"	19.0 (6.0) —	19.0 (6.0) —	なめらかに外反する口縁部。口唇部は凹状をなし。下唇に刻目を配す。外面上に1条の複雑起摺を貼付する。	内外面共にナデ調整。	
24	"	"	19.0 (9.0) 16.0 —	19.0 (9.0) 16.0 —	あまり唇の殺らない脣部にわずかに外反する脣部がつく。	脣部内面は下→上のヘラ削りあり。	脣部外面はスッキリしている。
25	"	"	19.0 (5.4) 12.0 —	19.0 (5.4) 12.0 —	安室した厚手の底鉢。		
26	"	鉢	19.0 (6.0) 16.8 —	19.0 (6.0) 16.8 —	口縁部はなめらかに外反し、脣部はわずかに下垂気味で、口唇部は面をなす。	口唇部は横方向の強いナデ調整。	

標図番号	遺構番号	器種	底面 法量 (cm)	U型 底面 鉢底 鉢壁	形態・文様	手法	備考
27	S T 4	壺	22.0 (1.5) —	口縁部は内面気味に外反する。口唇部は扁状をなす。	内外面は横方向のナゲ調査。		
28	—	—	16.7 (11.6) 22.0	口縁部は、丸味をもって「く」の字に外反する。口唇部は上方に膨張され、口唇部に2条の回線文を配す。	口縁部内外面は横方向のナゲ調査、内部はヘラ削り(下→上及び右→左)	内外面共にスッケている。	
29	—	—	15.2 25.1 17.7 5.2	瓶部中央に最大径を有す。口縁部は「く」の字形に外反する。口縁部を厚くつくり、口縁部に2条の回線文を配す。上脚部の口唇部に5箇所づ2列に網文状を有す。	内面下半にト→トのヘラ削りを施す。	外側は全面スッケしている。	
30	S T 5	壺	— (2.5) —	口縁部を上下に払張し、3条の回線文を配す。			
31	—	—	14.3 (3.0) —	直線的に外方に立ち上がる環頸から、口縁部を強く外反し、口唇部は上方に払張し、2条の回線文を配す。			
32	—	—	12.5 (10.0) 11.3	直線的に外反する口縁部で、外面に1.1cm幅の粘土帯を貼付。	口縁部外面は指頭による圧痕が観察。	外面は全面スッケしている。	
33	—	—	(3.0) — 6.0			内外面とも磨耗のため調整不良。	
34	—	壺	24.7 (3.0) —	口縁部は強く外反し、縫部は上方に払張し、3条の回線文を配す。瓶底内面は縫をなす。	内外面は横方向のナゲ調査。縫部の粘土帶は粘土帯の貼付による。		
35	S T 6	壺	15.4 (5.5) —	なめらかに外反する口縁部で口縁部外面には、粘土帯を貼付する。口唇部は縫をなす。	貼付部外面には、指頭圧痕あり。瓶部外面は横方向、内面は横方向のハケ調査。		
36	—	—	17.5 (7.0) —	なめらかに外反する口縁部で口縁部外面には、粘土帯を貼付する。口唇部に円形浮文を貼付する。	外面にわずかに縦方向のハケ調査。		
37	—	—	16.4 (4.4) —	なめらかに外反する口縁部で、口縁部外面に1.5cm幅の粘土帯を貼付する。	口縁部外面に指頭圧痕あり。		
38	—	—	16.0 (7.0) —	縫の張らない側面部から、なめらかに外反する口縁部で、口縁部外面に1.5cm幅の粘土帯を貼付する。	口縁部外面に、ヒダ状の指頭圧痕あり。外面は横方向、口縁部内面は横方向のハケ調査あり。		
39	—	—	16.0 (2.5) —	口縁部は強く外反し、外面に2.5cm幅の粘土帯を貼付する。口縁部には3条の回線文を配す。縫部に2箇所づ1列の回線文を貼付する。内面にも2箇所づ1列の回線文を剥離する。			
40	—	—	— (11.0) —	口縁部をつけていない未完成品である。大きく張った側面部から縫部は垂直に立ち上がる。	内面に指頭圧痕あり。縫口縁部下の無い突部は上方に積む粘土帯を受けるものと思われる。	何らかの事情のものに未完成のまま焼いたものと思われる。	
41	—	—	18.7 (2.5) —	口縁部は大きく外反し、口唇部は縫をなす。	内面は横方向のハケ調査。		

種図番号	造模番号	器種	法量 器具 底径 (cm)	口縁 器具 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
42	S T 6	壺	32.9 (5.0) —	32.9 (5.0) —	口縁部はなめらかに外反する。口縁部外面には幅2cmの粘土帯を貼付し、口縁部は円状をなす。	口縁部及び口縁部内外面は横方向のナデ調整。	
43	"	"	15.2 (6.0) —	15.2 (6.0) —	口縁部は直線的に外反する。口縁部には3条の回線文を配す。	口縁部内外面は横方向の強いナデ調整。 器部外面は縦方向のハケ調整。	
44	"	"	18.5 (2.0) —	18.5 (2.0) —	口縁部は強く外反する。外面に2.5cm幅の粘土帯を貼付し、口縁部に3条の回線文を配す。内面には、竹筋による筋文文を配す。		30と同一個体の可能性あり。
45	"	"	25.0 1.7 —	25.0 1.7 —	下方に強く肥厚した口縁端部で、下端に深い凹部を有す。	内外面及び口縁部は横方向のナデ調整。	
46	"	"	— (6.0) 9.0	— (6.0) 9.0	安定した厚手の底部。		
47	"	"	— (8.5) 8.2	— (8.5) 8.2	安定した底部で、わずかに上げ底状を有す。	外面はヘラ削り(下→上)の上をナデしている。	
48	"	"	— (8.0) 13.0	— (8.0) 13.0	厚手の底部で、中央部は上げ底になる。	下脚部内面は、指添て右下から左上にかけ上げている。	
49	"	鉢	20.5 13.8 18.5 8.5	20.5 13.8 18.5 8.5	一見前脚の鉢を思わせる。半球形の底部から、口縁部は2段に外反する。口縁部は丸くおさめる。	口縁部内面は、横方向のハケ調整。	
50	"	壺	24.8 (12.1) 35.0	24.8 (12.1) 35.0	口縁部は「く」の字に外反し、底部は上下に強張させ、口唇部に3条の回線文を配す。	内面の脚部中位以下はヘラ削り。(右→左上)	器人品。
51	"	"	15.5 (11.0) 19.2	15.5 (11.0) 19.2	丸く肩の張った脚部から、口縁部は2段に外反する。底部は下方に張られ、口縁部に2条の回線文を配す。脚部外面にヘラ状工具によって、左上りの刻文文を配す。	口縁部外面は横方向のナデ調整。 器部外面は縦方向のハケ調整。内脚部中位以下横方向(右→左)のヘラ削り。	
52	"	"	16.0 (19.0) 22.8	16.0 (19.0) 22.8	丸く肩の張った脚部から、口縁部は2段に外反する。端部は上方に張られ、口縁部に2条の回線文を配す。	外曲は縦方向のハケ調整。内面は、指添て(右→左)のヘラ削り。上脚部及び口縁部内外面は横方向のナデ調整。	外面は全面スケティング。
53	"	"	— (6.0) 5.5	— (6.0) 5.5	高台状に強く張り出した底部である。	底部外面及び脚部内面に指添圧痕あり。 底部回転には横方向のナデ調整。	
54	"	"	— (17.0) 9.3	— (17.0) 9.3	台形状の底部をなし、わずかに上げ底である。	内面はヘラ削り(下→上)の後ナデしている。	下脚部外面がスケティング。
55	"	"	41.0 (8.0) 37.4	41.0 (8.0) 37.4	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。	外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整。	
56	S T 7	壺	18.5 (1.9) —	18.5 (1.9) —	強く外反する口縁部で、口唇部は凹状をなす。	口唇部及び口縁部内外面は横方向のナデ調整。	

標印番号	通査番号	器種	法量 (cm)	口縁部高さ と底面 凹凸	形態・文様	手 法	備考
57	S T 7	壺	7.7 (4.0) — —	直線的に外方に立ち上がる口縁部で、壠部は丸くおさめる。			
58	—	高杯	25.0 (3.5) — —	口縁部は垂直に立ち上がり、口唇部は面をなす。外面に4条の回転文を配す。	内外面ナゲ調整。		
59	—	—	28.2 (5.2) — —	口縁部は垂直に立ち上がり、口唇部は面をなす。外面は2条の回転文を配す。	杯部外面横方向へのハケ削き。		
60	S T 8	壺	— (1.8) — —	口唇部は丸くおさめ、下端に凹凸を配し、その下に微細記号を貼付する。			両手式土器。
61	—	—	— (1.6) — —	口縁部外面に幅1cmの粘土帯を貼付する。口唇部は底をなし、下端に凹凸を配す。その下には微細溝線文を配す。			—
62	—	—	13.4 (3.5) — —	ラッパ状に外反する口縁部で、口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯を貼付する。口唇部は凸状をなす。	口唇部及び口縁部外面は横方向のナゲ調整。 外面は縱方向のハケ調整。		
63	—	—	16.7 (5.0) — —	口縁部はなめらかに外反し、外端に幅2.8cmの粘土帯を貼付し、指端でヒダ状の正腹を施す。	口縁部外面は横方向のハケ調整。 壠部外面は縱方向のハケ調整。		
64	—	—	15.0 (2.8) — —	口縁部は近く外反し、壠部は厚くつくられる。	口縁部内外面横方向のナゲ調整。		
65	—	—	21.8 (3.5) — —	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面横方向、外面は縱方向のハケ調整を施す。		
66	—	—	16.5 (11.5) — —	肩の張らない肩部に、直立気味の壠部がつき、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は面をなす。			
67	—	—	— (5.5) 21.2	肩部外面に柳筋縞文と柳筋波状文を認める。			
68	—	—	18.4 (3.5) — —	直線的に外反する口縁部で、壠部外面は上下に肥厚させ、3条の回転文を配す。	口縁部内外面は横方向の強いナゲ調整。		
69	—	壺	16.0 (2.0) — —	口縁部は、丸さをひびて強く外反し、口唇部は凸状をなす。	口唇部は横方向のナゲ調整。		外面はススけている。
70	—	—	— (3.8) 4.2		内面にヘラ状工具による圧痕あり。		
71	—	—	15.3 (6.0) 15.4	口縁部は直線的に外反し、口唇部は丸くおさめる。	内面は壠部底ドより右→左のヘラ削り。		

辨認番号	造機器号	器種	法量 (cm) 鉢底 直径	口縁 器高 鉢底 距離	形態・文様	手法	備考
72	ST 8	壺	12.0 (4.5) — —	— — — —	壺の脚部から、口縁部はゆるく外反する。	口縁部内外面に指頭圧痕がつき、口唇部は丸くおさめる。	外面はススけている。
73	ST 9	壺	— — (7.0) — —	— — — —	脚部上端に列点文あり。	外面は縱方向のハケ調整。内面に指頭圧痕あり。	
74	—	—	20.5 (2.5) — —	— — — —	大きく外反する口縁部で、脚部は上方に弧曲され、口唇部に3条の回線文を配す。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	
75	—	—	19.0 (3.5) — —	— — — —	口縁部は大きく外反し、外面に幅2.3cmの粘土帯を貼付し、背面にさるヒダ状の压痕を残す。口唇部下端に凹凸を配す。		
76	—	—	8.0 (9.6) — —	— — — —	口縁部は直線的に立ち上がる長脚である。 口唇部は丸くおさめる。		
77	—	—	17.0 (29.0) 27.8 — —	— — — —	長脚の体部で、口縁部は直線的に外反する。端部は上面に肥厚し、口唇部には2条の回線文を配す。	口縁部内外面及び脚部外面は横方向の強いナデ調整。脚部外面はナデ調整。	脚部外面の一辺にススが付着する。
78	—	—	27.0 (7.6) — —	— — — —	2.5cmから外反すると同時に、外壁に幅2.5cm、厚さ1.2cmの粘土帯を貼付する。脚部は丸く下垂する。口唇部には3条外文の回線文を配す。その内側に横筋波状文を配す。	脚部外面は縱方向のハケ調整。	
79	—	—	9.8 (3.7) — —	— — — —	口縁部は大きく外反し、口唇部は丸くおさめる。	外面は縱方向、内面は横方向のハケ調整。	
80	—	—	17.4 (4.0) — —	— — — —	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなす。外面に幅1.4cmの粘土帯を貼付する。	口縁部内面は横方向のナデ調整。 脚部外面は縱方向のハケ調整。	
81	—	—	29.3 (3.4) — —	— — — —	口縁部は直線的に外反し、端部は上下にだなさき2条の回線文を配す。	内面は横方向のハケ調整を施す。	
82	—	—	14.2 (6.5) — —	— — — —	口縁部は脚部から大きく外反する。 口唇部は面をなす。	外面は縱方向のハケ調整。	
83	—	—	— (7.5) — 11.5 — —	— — — — — —	底部から直線的に立ち上がる脚部である。	内面は指捺でナデ上げている。	
84	—	—	15.0 (5.0) — —	— — — —	口縁部はなめらかに外反する。端部は厚くづられ、面をなす。	口縁部内面は横方向のハケ調整。 外面はヒダ状の压痕がつく。	
85	—	—	— (5.0) — 10.0 — —	— — — — — —	内側気味に立ち上がる。		
86	—	—	— (7.5) — 5.3 — —	— — — — — —	安定した上げ底氣味の底部で、内側気味に立ち上がる。		外面はススけている。

種別番号	造形番号	器種	法量 (cm)	U径 最高 幅径 低径	形態・文様	手法	備考
87	S T 9	盃	— (4.5) — 8.8	安定した上げ底気味の底部で、内周丸味に立ち上がる。	底部内外面は横方向のナデ調整。底部外面に縱方向のハケ調整あり。		
88	"	甌	15.5 (3.5) —	口縁部は「く」の字に外反する。縁部は上方に膨張され、口唇部には3条の回線文を配す。	口縁部内外面は横方向の強いナデ調整。縁部内面は左→右のヘラ削り。外面は縱方向のハケ調整。	瓶外部がススける。	
89	"	"	14.2 (3.5) —	口縁部は「く」の字に外反し、縁部は上下に膨張され、口唇部には棒状工具による沈線を1条配す。			
90	"	"	20.2 (5.5) —	口縁部は強く外反し、口唇部は筒状をなす。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。底部内面は縱方向の指ナデ。		
91	"	"	15.4 (6.0) —	口縁部はなめらかに外反し、縁部をわざかに上・下に肥厚させ、口唇部は筒状をなす。	口縁部内面はナデ調整。底部内面は縦方向のハケ調整。		
92	"	"	20.0 (3.0) —	口縁部は直線的に外反し、縁部は下方に肥厚する。口唇部は面をなす。	口縁部内外面横方向のナデ調整。		
93	"	"	15.5 (5.5) —	真の張った縁部に、わずかに外反。縁部の裏面がつき、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は上方に膨張され、2条の回線文を配す。	口縁部はつまみ上げて、横方向に強くなる。縁部内面は横方向、上唇部外面は縦方向のハケ調整。		
94	"	"	17.0 (4.4) —	口縁部は丸味をおびて「く」の字に外反する。口唇部は面をなし、外面に1条の回線文を配す。			
95	"	"	20.0 (2.6) —	口縁部は「く」の字に外反。縁部は下方に肥厚し、口唇部には3条の回線文を配す。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。		
96	"	"	— (15.3) 22.5 8.7	しっかりした底盤を有し、上開脚で「く」の字状に留置する。	外面は横方向の叩きを施す。内面は窓型中央に横方向のハケ調整。上位は脚頭圧痕がみられる。	外面は全体がススけている。	
97	"	"	— (8.0) — 7.0	上げ底状の底部から、直線的に立ち上がる脚部である。	内面は左上りのヘラ削り。		
98	"	高杯	22.8 (3.0) —	口縁部は底立気味に立ち上がる。外面上に2条の回線文を配し、口唇部は丸味をおびた面をなす。	内外面共にナデ調整。		
99	"	"	— (4.5) — 9.5	なめらかに外反して聞く脚部である。縁部は下方に膨張される。			
100	"	"	— (4.8) — 9.5	なめらかに外反して聞く脚部である。内面は削りによって段をなす。	内面は右→左にヘラ削り。		
101	"	"	— (2.7) — 14.0	なめらかに外反して聞く脚部で縁部は丸くおさめる。	底部内外面は横方向のナデ調整。内面は横方向のハケ調整。		

特許番号	構成番号	基 種	法量 器高 度接 触接	口徑 部高 度接 触接	形態・文様	手 法	備 考
102	ST 10	壺	24.8 (7.2) —	—	口縫部は内面に縫をなして強く外方に倒曲する。縫部は上・下に凹原さを、口縫部に2条の回線文を配す。	縫部内外面は左上りのハケ調整。	外面にススが付着する。
103	SK 1	〃	11.6 (9.0) 12.6	—	上縫部で「く」の字状にカーブし、口縫部は直線的に伸びる。口縫部は丸くおさめる。	縫部内外面に明瞭な粘土帶接合部を認める。 口縫部内面は、横方向のナデ調整。	
104	〃	高 杯	— (5.0) —	—	一旦「ハ」の字状に開き、強く外反する縫部である。	外面は横方向のナデ調整。	
105	〃	〃	— (4.5) — 6.8	—	なめらかに外反する縫部である。	外面は縦方向のヘラ削きを施し、縫部は横方向のナデ調整。	
106	SK 2	壺	— (7.5) — 6.7	—	わずかにIC上げ底状の底部から、内側気味に立ち上がる。	外面は縦方向のハケ調整。内面には指滅圧痕あり。	
107	SK 3	〃	27.7 (1.2) —	—	大きく外反する口縫部で、口縫部は直状をなし、下端に向かう。外縫部には2条の後座起等を貼付する。		両手式土器。
108	〃	〃	26.0 (5.7) —	—	口縫部はなめらかに外反し、口縫部は直線状をなす。 外縫部には幅2cmの粘土帶を貼付する。	縫部外面はナデ調整。	
109	〃	〃	9.0 (9.5) —	—	片手の底部でわずかに上げ底である。		
110	〃	〃	— (8.7) 23.0	—	肩部に微後起部を貼付し、その上に横円形文を配す。またその上位に回線文を配す。		
111	SK 4	〃	19.0 (3.2) —	—	口縫部はなめらかに外反し、縫部は上方に肥厚する。口縫部は曲をなす。 外面には幅2cmの粘土帶を貼付する。	口縫部はナデ調整。	
112	SK 5	高 杯	10.5 (4.5) —	—	「ハ」の字に開く脚部で、縫部は上方に肥厚し、3条の回線文を配す。	内面は下半が右→左、上半が不定方向のヘラ削り。	
113	SK 7	壺	17.8 (4.0) —	—	口縫部は大きく外反する。 縫部は上方に肥厚し、口縫部に2条の切線文を配す。	口縫部内外面は横方向のナデ調整。 縫部外面は縦方向のハケ調整あり。	
114	〃	〃	17.4 (4.5) —	—	口縫部はなめらかに外反し、縫部は上下に抵張。口縫部は凹状をなす。	口縫部内外面は横方向のナデ調整。	
115	〃	壺	— (4.5) —	—	口縫部はなめらかに外反し、縫部はわずかに肥厚気味である。	縫部内外面に明瞭な接合痕を認める。	
116	〃	高 杯	19.0 (2.5) —	—	口縫部は直角に屈曲してわずかに外反気味に立ち上がり、口縫部は内側に肥厚する。 外縫部に4条の斜向接着、口縫部には2条の回線文を配す。		

構造番号	構造番号	器種	法量 (cm)	L1径 器高 頭径 底径	形態・文様	手法	備考
117	SK 7	皿	19.0 (8.0) 16.5	—	輪郭曲である。輪郭中位に最大径を有するもので、口縁部は近く直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに凹状をなす。口縁部に径0.6cmの円孔を穿つ。	外側は横方向のヘラ削り。内面は中位以下右→左のヘラ削り。	
118	SK 8	—	26.5 (2.5)	—	L14部は近く外反し、端部をばくづくる。口縁部は沿をなしひヶ状原体で密な仕度を施す。		内面はススけている。
119	SK 9	—	34.0 (6.5)	—	口縁部はなめらかに外反し、口縁部に2条の回輪文を配す。輪郭上端に列点文を配す。	口縁部外側は横方向のナダ調整。	
120	—	—	(17.5) 21.6	—	輪郭はなめらかに外反し、長い輪郭上端に列点文を配す。	内外面共にナダ調整。	
121	—	—	19.5 (6.0)	—	口縁部はなめらかに外反し、口縁部には細い回輪文を2条配す。外側に列点文を配す。	口縁部内側面に横方向のナダ調整。内面は横方向、外側は縦方向のヘカ調整。	
122	—	—	4.0 (6.0)	—	やや厚手のつくりである。		外側はススけている。
123	SK 10	—	18.6 (10.0)	—	口縁部は大きく外反し、外側に2.2cm程の軽土帶を貼付し、口縁部に筋目を施す。上端部に断面三角形の突起を貼付する。		
124	—	—	(5.0)	—	大きな底部から、内側して立ち上がる輪郭である。	内面に指摘正直を認める。	
125	—	鉢	10.0 9.5 5.5	—	薄い底盤から直線的に立ち上がり、口縁部は内側にやや肥厚する。	内外面ナダ調整。	
126	SK 11	壺	11.5 (8.0)	—	口縁部は輪郭からなめらかに外反する。口縁部は歪をなす。外側に1条のヘラ削り痕を配し、その下に竹管文を2周配す。	輪郭外側は縦方向のハカ調整。内面は横方向のナダ調整。	
127	—	高杯	(5.0)	—	輪めて厚いつくりで、「ハ」の字状に開く脚部である。		
128	SK 15	瓶	16.0 (4.0)	—	口縁部は大きく外反する。口縁部は凸状をなす。	口縁部は横方向の強いナダ調整。	
129	—	—	28.8 (3.5)	—	大きく外反する口縁部で、輪郭は下方に肥厚させ、筋目を施す。	口縁部内外面は横方向の強いナダ調整。	
130	—	—	7.0 16.8 10.0 6.2	—	細長い瓶で、上輪郭に筋を有す。口縁部はなめらかに外反し、輪郭部はわずかに内側に貼付する。口縁部は丸くおさめる。	外側は縦方向のハカ調整。内面はナダ調整。	
131	—	瓶	14.0 (9.5) 16.0	—	直線的に内側して立ち上がる脚部から、口縁部が「ト」の字状に外反する。口縁部は筋目を施す。	口縁部内面縦方向のナダ調整。内面輪郭下半分は右→左及び下→上のヘラ削り。	外側はススけている。

検査番号	造形番号	器種	法量 (cm)	口径 最高 胸深 底径	形態・文様	手 法	備考
132	SK 15	壺	16.0 (19.0) 21.4		腹部中位に最大径を有す。 口縁部は丸く外反し、口唇部は凹状をなす。		
133	"	"	14.5 (5.0) 14.5		内傾して立ち上がる上肩部から口 底部は強く外反する。底部は外 方に肥厚させ、口唇部は凸状をなす。	口縁部外面は横方向のナデ調整を 特に強く施す。 腹部は厚いつくりである。	
134	"	"	22.0 (5.5)		口縁部は「く」の字に外反し、口 唇部は凹状をなす。 腹部の張りはない。	内面上肩部以下は、右→左のヘラ 削り。	
135	"	"	20.1 (17.5) 23.0		口縁部はあまり腰の張らない体部 から「く」の字に内曲しややく伸びる。端部は凸状をなす。	外面は輪方向のハケ調整。 口唇部及び口底部内面は横方向のナデ調 整。	
136	"	高杯	— (5.0) —		「ハ」の字状に開く脚部である。	杯底部は円錐充満による。	
137	"	"	22.6 (4.5)		口縁部は外方に立ち上がり、端部 はわずかに内外に肥厚する。 口縁部外面に2条の回線文を配す。		
138	SK 16	壺	— (4.0) 7.0		やや外方に張り出す底部である。		内面は先端より少 しおかれたところ からスッペている。 外側は全面入スけ ていま。
139	SK 18	"	12.0 (4.0)		あまり張らない腹部から口縁部は 丸く外反する。 口唇部は強くおさめる。	口縁部外面は縦方向、内面は横方 向のハケ調整。	
140	"	壺	— (3.5) 4.0		円錐状の底部である。		外側はスッペ ている。
141	"	壺	20.7 (9.0) 26.8		口縁部は「く」の字に外反し、端 部は下方に肥厚させ、口唇部は凸 状をなす。	口縁部内面は横方向のハケ調整。 脚部外側は縦方向のハケ調整。	
142	SD 1	壺	11.0 (4.0)		口縁部は直線的に外反し、口唇部 は丸く内さめる。口縁部外面に円 形浮文を配し、脚部外側は横方向 浮文を配す。		
143	"	"	15.0 (4.0)		口縁部は大きく外反し、端部は上 方に内張される。 口唇部は凹状をなす。 口縁部外面に粘土帶を付ける。	口縁部外面及び口唇部は後方向 のナデ調整。 口底部内面は横方向のハケ調整。	
144	"	"	14.2 (6.5)		口縁部は大きく外反し、外面向 に軽く外斜する。口唇部は広い面を なし、脚目を施す。 底部下端に列点文を配す。	薄手のつくりである。 脚部外側は縦方向のハケ調整。	
145	"	"	19.5 (9.5)		口縁部は大きく外反し、端部はや やくつくる。口唇部は広い面を なし、脚目を施す。 脚部下端に列点文を配す。	脚部内面にしほり目あり。	
146	"	"	21.8 (7.5)		腹部からやや内側に凹むする口縁部で、外 面向に軽く外斜する。口唇部は丸く内張り、底端でも アーチの底を施す。底部は下方に肥厚する。 口唇部にはしづりこじがけを施し、更に 右上りのヘラ錐充満を配す。		

検査番号	構造番号	器種	法量 (cm)	口縁部高さ 部位 部位	形態・文様	手 法	備考
147	S D 1	壺	— (5.0) — —	丸く落とした肩部に直立する縦部が つく。肩部に2条の回文を貼付し、 その下に列点文を配す。	外面は横方向のナデ調整。		
148	"	"	26.8 (4.0) — —	口縁部は大きく外反する。口唇部 は斜状をなし、肩部波状文を配す。 口縁部は斜面三脚形の粘土層を貼 付し、外面には指輪でヒゲ状の序 文を配す。	口縁部内面は横方向のナデ調整。		
149	"	"	15.0 (2.0) — —	大きく外反する口縁部で、縦部は 上下に肥厚させ、口唇部には2条 の回文を配す。	内外面横方向のナデ調整。		
150	"	"	— (7.0) — —	大きく張った肩部に直立する縦部 がつく。肩部に斜面三脚形の突 起を貼付する。	外面は横方向のハケ調整。内面は 右上りのハケ調整。突起の上下は 横方向のナデ調整。		
151	"	"	16.5 (1.8) — —	大きく外反する口縁部である。 結合部に剥離している。 縦部はトドに外反し、口唇部には 3条の回文を配す。	内外面横方向のナデ調整。		
152	"	"	17.3 (1.4) — —	口縁部は大きく外反し、縦部は上 下に肥厚させ、口縁部には3条の 回文を配し、更に竹突による斜 突文を配す。	"		
153	"	"	16.6 (4.0) — —	ラッパ状に外反する口縁部を有し、 口唇部は斜状をなす。	口縁部内面は横方向のナデ調 整。縦部内面横方向、外面は横方 向のナデ調整を施す。		
154	"	"	12.0 (7.0) — —	直線的に立ち上がる肩部になめら かに外反する口縁部がつく。縦部 はわずかに内外に肥厚し、口唇部 には2条の回文を配す。	口縁部内外面横方向のナデ調整。 肩部外面は横方向のハケ調整を施 す。		
155	"	"	9.0 (9.5) — —	直線的に伸びる細長い肩部から、 口縁部はなめらかに外反する。口 唇部は面をなす。	口縁部内外面及び口唇部は横方向 のナデ調整。肩部外面は横方向の ハケ調整。		
156	"	壺	15.9 (4.0) — —	口縁部は大きく外反し、口唇部は斜 状をなす。上斜面に堆積瓦段文 を2条で確認することができる。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。 肩部外面は横方向のハケ調整。		
157	"	"	14.4 (5.5) — —	口縁部は側面に外反し、口唇部は上 下に拡張し、3条の回文を配す。	外面は右上りの肩部の上を横方向 のハケ調整。内面肩部は横方向の 指ナデ。それ以下は下→上のヘ リ削りを施す。	嵌入品。	
158	"	"	13.2 (4.0) — —	最大径を上肩部に有す。口縁部 は水平に外反し、縦部を上下に肥 厚させる。口唇部には2条の回文 を配す。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。 肩部外面には左上りのハケ調 整を施す。		
159	"	"	17.0 (6.0) — —	最大径を上肩部に有す。口縁部 は水平に外反し、縦部を上下に肥 厚させる。口唇部には2条の回文 を配す。	口縁部内外面横方向のナデ調整。 肩部内面指頭による横方向のナデ 調整。		
160	"	"	15.1 (6.0) — —	最大径を上肩部に有す。口縁部 は水平に外反し、縦部を上下に肥 厚させる。口唇部に2条の回文 を配す。	口縁部内外面及び肩部外面は横 方向のナデ調整。		
161	"	"	16.3 (3.0) — —	"	口縁部内外面は横方向の丁寧なナ デ調整。		

神田番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口縁 器身 脚跡 底径	形態・文様	手 累	備考
162	S D I	壺	18.2 (4.5) — —	口縁部はなめらかに外反し、口唇部に2条の凹縞文を配す。	口縁部内面及び口縁部外面は横方向のナデ調整。外面は、下地に横方向のハケ調整。		
163	"	"	24.3 (3.0) — —	口縁部はなめらかに外反し、端部を上方に厚めます。口唇部に3条の細縞文を配す。	内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整後、横方向のナデ調整を施す。		
164	"	壺	13.2 (4.0) — —	なめらかに外反する口縁部で、口唇部は直をなす。	外面は縦方向のハケ調整。		
165	"	"	13.2 (4.5) — —	直立気味の頸部から口縁部はなめらかに外反する。口唇部は直をなす。	口縁部内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整を施す。		
166	"	"	16.0 (4.0) — —	ラッパ状に外反する口縁部で、口唇部は直をなす。	内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整を施す。 口唇部及び口縁部内面は横方向のナデ調整。		
167	"	"	14.8 (5.5) — —	口縁部は頸部からなめらかに外反する。口唇部は直をなす。	口縁部内面は横方向のナデ調整。 頸部内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整。		
168	"	"	13.2 (5.0) — —	なめらかに外反する口縁部である。口唇部は丸くおさめる。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。		
169	"	"	15.0 (5.0) — —	直線的に立ち上がる頸部から口縁部は、直線的に短く外反する。口唇部は直をなす。	口縁部をつまみ上げて横方向のナデ調整。頸部外面は横方向、内面は縦方向のハケ調整を施す。		
170	"	"	10.8 (6.0) — —	直線的に外方に立ち上がる頸部から、口縁部はわずかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面及び頸部内面上半は横方向のナデ調整。 頸部外面は縦方向のハケ調整。		
171	"	"	11.0 (9.0) — —	長頸壺である。直立気味の頸部から口縁部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面は横方向のナデ調整。		
172	"	"	14.5 (6.0) — —	長頸壺である。直線的に立ち上がる頸部から、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は直をなす。	口縁部外面は横方向のナデ調整を施す。		
173	"	"	13.2 (5.0) — —	長頸壺である。直線的に立ち上がる頸部から、口縁部は強く外反し、端部は下垂気味で、口唇部は直をなす。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。		
174	"	"	15.2 (6.0) — —	なめらかに外反する口縁部で口唇部は直をなす。	口縁部下端をつまみ出して横方向に強くナデする。 頸部外面は横方向、内面上位は横方向、中位以下は縦方向のハケ調整。		
175	"	"	18.5 (6.5) — —	丸く盛った上腹部から、口縁部は強く外反する。口唇部は直をなす。	厚手のつくりである。		
176	"	"	15.5 (9.5) — —	長頸壺である。わずかに外反気味に立ち上がる頸部から口縁部は強く外反する。	口縁部は内外面ナデ調整。		

掉図番号	道構番号	器種	法量 (cm)	UJ延 留底 調査 底深	形態・文様	手 法	備 考
177	S D 1	壺	14.5 (6.0) — —	肩の張った上肩部に、直立気味の 短い縦溝がついた口縫部はなめら かに外反する。肩部は下に肥厚 し、口縫部には3条の三編文を配す。	口縫部内外面に横方向のナゲ調整 を施す。		
178	—	—	15.5 (5.0) — —	直線的に外方に伸びる頸部から、 口縫部は近く外れる。 口唇部には1条の回紋文を配す。	口縫部内外面及び頸部外面は横方 向のナゲ調整。頸部内面は横方向 のハケ調整。		
179	—	—	— (2.5) — 5.5	連合形の底底で、環状の頸部が つくものと考えられる。	内面は横方向のナゲ調整。		
180	—	—	— (6.0) — 7.8	—	外面は縦及び左上りのハケ調整。		
181	—	—	— (12.0) — 8.8	内尚気味に立ち上がる下肩部であ る。	外面中位は縦方向のハケ調整。下 位は縦方向のヘラ削きを施す。内 面は、中位は縦方向のハケ調整、 下位は縦方向のヘラ削り(下→上)。	外面は全面ス スけている。	
182	—	—	— (6.0) — 4.6	小さい底部からなめらかに内尚し ながら立ち上がる大型壺の下肩部 である。	外面は縦方向のヘラ削きを施す。		
183	—	—	— (9.5) — 10.2	大型壺の下肩部である。	外面は縦方向のヘケ調整を施し、 内面は左上りヘケ調整を丁寧に施 す。		
184	—	壺	20.2 (4.0) — —	口縫部は「く」の字に外反し、口 唇部は向状をなす。	口縫部及びUJ縫部外面は、横方 向のナゲ調整。頸部外面は縦方 向のナゲ調整。内面は横及び右上りのハケ調整。		
185	—	—	21.6 (5.5) — —	—	頸部外面に横方向のハケ調整。	外面はススけ ている。	
186	—	—	20.2 (4.5) — —	—	口縫部内外面及び口肩部は、横方 向のナゲを施す。頸部外面は左上 りのハケ調整。内面は右上りのハ ケ調整。	外面は全面に ススが付着す る。	
187	—	—	19.0 (2.0) — —	UJ縫部は「く」の字に強く屈曲し、 端部付近は下方に肥厚する。口肩 部は向状をなす。	UJ縫部内面は横方向のハケ調整を 行った後、横方向ナゲ調整を施す。 口縫部及びUJ縫部外面は横方向の ナゲ調整。		
188	—	—	19.0 (4.5) — —	口縫部は「く」の字に外反し、口 肩部は向状をなす。	口縫部下端をつまみ出し横方向に ナゲする。 上肩部外面は縦方向及び左上りの ハケ調整。		
189	—	—	21.0 (5.0) — —	口縫部は丸く外反させ、口唇部は 向状をなす。	頸部及び上肩部外面は縦方向のハ ケ調整を施す。内面は横方向のハ ケ調整。口縫部及び口肩部は横方 向のナゲ調整。		
190	—	—	17.8 (7.4) — —	肩の張った上肩部から口縫部は強 く外反する。口縫部はわずかに開 状をなす。	口縫部内外面及び口肩部は横方 向のナゲ調整を施す。頸部外面は縦 方向のハケ調整。		
191	—	—	18.3 (6.5) — —	あまり肩の張らない上肩部から、 口縫部はなめらかに外反する。口 肩部はわずかに開状をなす。	口縫部内面は横方向のハケ調整。 外面は左上りのハケ調整。口肩部 は横方向のナゲ調整。		

辨別番号	遺構番号	器種	法算 高さ 横幅 底径	形態・文様	手 法	備考
192	SD 1	壺	19.0 (3.5) — —	短く外反する口縁部で、口部は面をなす。	口縁部内面は横方向のハケ調査を行い、脚部外向は左上りのハケ調整を施す。	
193	"	"	— (13.0) — —	上脚部に最大径を有す壺である。	内面は水平の叩きを施し、その上面的に縱方向のハケ調査施す。内面の指標による縱方向のナゲ調査を施す。	
194	"	"	18.0 (7.5) — —	口縁部はなめらかに外反し、端部を上下に肥厚させる。口部に2条の回線文を配す。	口縁部内外面は横方向のナゲ調査を行う。内面底部下に右上りのヘラ削りを施す。	
195	"	"	— (4.5) — —	あまり肩の張らない長脚の壺の上脚部である。	外走脚部及び脚部上端は縱方向のハケ調査を施す。それ以下は、水平方向の叩きを施す。表面艶密により粘土色の凹凸感が明顯に見られる。	
196	"	"	— (10.5) 12.0 2.3	小さな底部から内腹側傾に立ち上がり、底部で外方に屈曲する。やや肩が張っている。	外底下脚部は縦方向のハケ調査を施す。内面は縦方向のヘラ削りを施す。	
197	"	高杯	33.6 (9.0) — —	杯部は直線的に外方に長くのび、口縁部に2段を有して屈曲。縁部は内外に肥厚する。口部には2条の回線文を配す。	杯部内外面とともに丁寧なヘラ削きを行う。杯底部は円板充填による。	個人品である。
198	"	"	— (4.5) 15.0	「ハ」の字状に開く脚部である。脚部は左上に肥厚し、2条の回線文を配す。	下半は右一芯のヘラ削りを施し、中芯は左上りのヘラ削りを施す。	個人品であり、197の脚部であると思われる。
199	"	"	24.0 (3.3) — —	浅い杯部で口縁部の立ち上がりは、極めてゆるい。脚部を上下に肥厚させ、口部には2条の回線文を施す。	口縁部内外面は横方向ナゲ調査。杯部の内面は縦方向のハケ調査を施す。	
200	"	"	23.6 (3.5) — —	口縁部は縦をなして屈曲し、外方に立ち上がる。縁部は丸く無理である。	口縁部外面は上下に2段にわたって横方向の浅いナゲ調査を施す。杯部内面は丁寧なヘラ削きを施す。	個人品である。
201	"	"	12.5 (3.0) — —	口縁部に強く屈曲し、縁部近くでなめらかに外反する。口縁部外面に複数直線文と縱筋状文を配す。底面外面上には一条のヘラ削り線を配す。		
202	"	"	25.8 (4.0) — —	口縁部は強く外反して立ち上がり、口部に一条の沈線を配す。	口縁部外面は丁寧なナゲ調査を施す。杯部内面はヘラ削きを施す。口縁部の接合手法を断面観察することができる。	
203	"	鉢	— (3.0) — 5.0	上げ底状の底部を有す。	底部は指標でつまみ出す。内面に指痕押圧を認める。	
204	"	"	— (3.3) — 6.3	凸形状の底部を有す。	底部は指標によって外方に強くつまみ出している。外底右上りのハケ調査を施す。内面に指痕押圧を認める。	
205	"	"	— (4.0) — 5.3	トゲ底の底部である。	全体に磨手のつくりである。外底は縦方向のヘラ削きを施す。内面に指痕押圧を認める。	
206	"	高杯	— (7.0) — —	「ハ」の字状に開き下手で大きく外反する。	外底は縦方向のヘラ削きを施す。内面にしづり目を認める。	

標記番号	過橋番号	器種	法量 (cm)	口縫部 側面 距離 距離	形態・文様	手 法	備 考
207	SD 1	土鱈	全長 (3.3) 尾 3.6 重積(g) 44	0.8cmの円孔を穿つ。			
208	SD 2	▲	11.0 (3.5) —	なめらかに外反する口縫部である。口縫部外面に1.1cm幅の粘土帯を貼付する。口縫部は丸くおさめる。	口縫部外面に横方向のナデ調整を施す。		
209	—	—	15.0 (2.0) —	口縫部外面に2.6cm幅の粘土帯を貼付し、口縫部は面をなし、糸目を施す。	口縫部外面にヒダ状の指頭押正を認める。		
210	—	—	16.4 (5.0) —	ラッパ状に外反する口縫部である。外面に2.1cm幅の粘土帯を貼付し、口縫部は面をなす。			
211	—	—	15.9 (12.0) —	直立気味の頭部から大きく外反する口縫部を有す。口縫部外面に1.4cm幅の粘土帯を貼付し、口縫部はさすがに凹状を呈す。頭部上面に2条の微弱起脊を認める。	外面は縦方向のハケ彫後、ナデ調整によって仕上げたと思われる。頭部内面は指頭による横方向のナデ調整を施す。口縫部は横方向の強いナデ調整を施す。		
212	—	—	12.3 (6.0) —	直立気味の頭部から大きく外反する口縫部を有す。口縫部外面に1cm幅の粘土帯を貼付し、口縫部は丸くおさめる。頭部に微弱底板文を配す。			
213	—	—	16.5 (2.5) —	口縫部は丸く外反し、外面に2cm幅の粘土帯を貼付する。口縫部は凹状をなす。	口縫部は横方向の強いナデを施す。		
214	—	—	17.2 (6.0) —	口縫部はなめらかに外反し、外面に1.6cm幅の粘土帯を貼付し、口縫部は丸くおさめる。			
215	—	—	17.3 (29.5) 29.4 —	長い頭部に直立気味の頭部がつき、口縫部はなめらかに外反する。口縫部外面には2.1cm幅の粘土帯を貼付する。	頭部内面は横方向のハケ調整、外面は縦方向のハケ調整、頭部外面は横及び縦方向のハケ調整。		
216	—	—	22.0 (7.2) —	口縫部はなめらかに外反し、外面に2cm幅の粘土帯を貼付し、口縫部は面をなす。			
217	—	—	20.0 (24.0) 31.6 —	最大径を頭部中位に有す。内傾して立ち上がる頭部から口縫部はなめらかに外反する。頭部外面には2.1cm幅の粘土帯を貼付する。頭部及び上顎骨には複数底板文と底板文を配す。口縫部内面に底板文を配す。	口縫部は厚いつくりである。頭部外表面は横方向のハケ調整を施し、上顎骨外面は左上りのハケ調整がさすがに認められる。頭部内面に底板文を配す。		
218	—	—	14.0 (26.0) 20.5 —	細長い頭部からなめらかに外反する口縫部を有す。断面三角形の変形を2条貼付する。頭部及び上顎骨には複数底板文と底板文を配す。口縫部内面に底板文を配す。	底板文の一帯は複数底板文をなす。		
219	—	—	19.0 (23.0) 19.0 —	長い頭部から大きく外反する口縫部を有す。口縫部外面に1.9cmの粘土帯を貼付する。頭部内面は横方向の凹溝を有し、右下の頭部内面に横方向の凹溝を有し、右下の頭部内面に横方向の凹溝を有す。頭部内面に底板文を配す。その後に複数底板文を貼付し、頭部内面に底板文を配す。	複数底板文を有する。		
220	—	—	(10.0) 14.0 —	最大径を頭部中位に有す。上顎骨から頭部にかけて、複数底板文を配すが、消耗したため十分に複数することができない。	頭部及び頭部内面に複数底板文を認める。		
221	—	—	(17.0) 22.6 8.0 —	最大径を頭部中位に有す。上顎骨から頭部にかけて、複数底板文を配す。	外面制御下年に縦方向のヘア刷毛を施す。		

録画番号	連続番号	器種	法量 (cm)	口徑 留置 底深	形態・文様	手 症	備 考
222	SD 2	毒	— (12.0) —	内弯して立ち上がる上唇部に直立 気味の長い歯部を有す。腹部外 面に7条の断面三角形の突起部を有 し、先端部に列点文を配す。	全体にナゲ調整がなされており、 上唇部内面には指頭圧痕が認めら れる。		
223	〃	〃	— (36.0) 22.6	長い脚部に直立する瘤部がつく。 上脚部に複数直線文と波状文を施し、 更に断面三角形の粘土帶を貼付。	脚部外表面ハケ調整。		
224	〃	〃	— (23.0) 32.0	最大径を脚部中位に有す。脚部上 端に幾重粘土帯を貼付する。その下 に円形文を施し、径0.3cmの内 孔を刺穴とする。	瘤部外表面は横方向のハケ調整、脚 部外表面は横方向及び斜めのハケ調 整を施す。		
225	〃	〃	21.0 (13.0) —	直線的に外反する口唇部で、U縫 隙部は上位に大きく張張している。 U縫隙部外表面に4条の回線文を施し、 その間に波状文に列点文を配す。	口唇間に厚い粘土帯を貼付し、 指間によってヒダ状の仕立てをつ ける。		
226	〃	〃	16.6 (11.0) —	横くしまった瘤部からなめらかに 内側にU縫隙部を有す。口唇部は は上下に張張され、口唇部には2 条の回線文を配す。	口縫部内外表面は横方向の強いナゲ 調整を施す。脚部外表面は左上がり のハケ調整を施し、内面には指頭 圧痕が認められる。		
227	〃	〃	15.6 (6.0) —	口縫部はなめらかに外反し、口唇 部に3条の回線文を配す。	やや厚手のつくりである。		
228	〃	〃	17.2 (6.2) —	瘤部は近いハの字形に開き、口縫 部は直線的に外反する。外表面には 2.5cm幅の横方向の粘土帯を貼付する。口 縫部は上方に貼りさせ、U縫隙 部には2条の回線文を配す。	口縫部上端をつまみ上げて、横方 向に強くナゲ調整を施す。 外表面は全面横方向の強いナゲ調整 を施す。		
229	〃	〃	— (6.0) 4.6	厚手の底座から内弯気味に立ち上 がる下脚部である。	外表面は横方向のヘラ巻き、内面に は指頭圧痕を認める。		
230	〃	〃	— (6.0) 6.0	厚手の底座から内弯気味に立ち上 がる。	内外面ナゲ調整。	外面はスッキ ている。	
231	〃	〃	— (5.4) 8.4	わずかに上げ底状の底部。			
232	〃	〃	— (6.6) 6.4	内弯気味に立ち上がる。			
233	〃	〃	— (13.4) 14.0 5.0	最大径を脚部中位に有す。	内外面はナゲ調整。		
234	〃	〃	— (6.0) 9.0	しっかりした底座から、直線的に 外方に伸びる下脚部である。	内面にしづり目あり。 外表面は横方向のヘラ巻き。		
235	〃	〃	— (29.0) 12.1		内面に指頭圧痕あり。 脚部外表面は横方向、下脚部は横方 向のヘラ巻きを施す。		
236	〃	〃	— (12.0) 20.4	わずかに内弯気味に立ち上がる大 型の盤である。	外表面は横方向のハケ調整。		

排図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口延 西高 脚部 底径	形態・文様	手法	備考
237	SD 2	壺	— (22.0) — 9.0		比較的小さな底部から内高気味に外方に立ち上がる下脚部である。	外面にわずかに右上がりのハケ調整を認める。	
238	—	—	— (22.8) 22.0 9.6		外方への張りの弱い脚部である。	下脚部外側に横方向へのう磨きを施す。内面底部近辺に指頭圧痕を認めることがある。内面底部により粘土等の接着を認めることがある。	
239	—	高杯	— (12.0) 13.0		脚部下半で「へ」の字形に開く。端部はわずかに内外面に肥厚させている。	端部は丸くおさめ、内外面は横方向のナデ調整。外面上半にへう磨きあり。	
240	—	鉢	17.0 (7.0) —		口縁部は直角気味であり、口唇部は面をなす。	外面は横方向のハケ調整。	
241	—	—	15.0 (4.6) —		直線的に外方に立ち上がり、端部は外方にわずかに肥厚させ、口唇部は面をなす。	外面は横方向のハケ調整を施す。口縁部及び口唇部外面は、横方向のナデ調整を施す。	
242	SD 6	壺	17.0 (5.4) —		口縁部は大きく外反する。口唇部は面をなし、下脚に糊目を施す。口縁部外側に腰型起帯を貼付する。	内外面ナデ調整である。	調子式土器である。
243	—	—	— (6.6) —		長い脚部で、外面には櫛状溝跡を2条配す。	外面は横方向のハケ調整。	
244	—	—	— (5.6) — 8.0		わずかに上げ底状を呈す。		
245	SD 7	—	— 15.8 (5.0) —		口縁部はわずかに外反する。外面に1.2cm幅の粘土帶を貼付する。	内面は横方向のハケ調整。	
246	—	—	31.0 (11.0) —		左めらかに外反する口縁部で、外面に3cm幅の粘土帶を貼付。	口縁部内外面は横方向のハケ調整。外側は横方向のハケ調整。口縁部外面に指頭圧痕。	
247	—	—	— (15.0) — 8.5		上げ底状の底部を有し、直線的に外方に立ち上がる下脚部である。	外面はハケ調整後、ナデたものと思われる。	
248	—	—	— (5.5) — 6.8		内高気味に立ち上がる。	底部の円錐が剥離している。	
249	—	—	— (12.0) — 10.0		直線的に外方に立ち上がる下脚部である。	内面に指頭圧痕を認める。	
250	—	—	— (2.2) — 11.0		わずかに上げ底状の底部から大きく外方に張り下脚部である。		
251	—	壺	— 12.6 (5.0) —		長い脚部に短く外反する口縁部を有す。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面は横方向のナデ調整を施す。脚部外面は横方向のハケ調整を認める。内面底部近辺は右一左のペラ削り。製部は下ー上のペラ削りを行う。	脚部外面は火を受けて變色調節している。

標図番号	遺構番号	器種	計測値 (cm) 基盤 底面 底量	形態・文様	手法	備考
252	S D 7	壺	15.0 (16.0) — —	口縁部は「く」の字に外反し、口唇部は面をなす。	口縁部及び口縁部内面は横方向のナゲ調整。胴部中位以下左→右のヘラ削りあり。	胴部外面はススけている。
253	"	"	17.0 (7.0) — —	口縁部は直線的に外反し、縫部は厚い。口唇部は面をなす。	縫部内面は右→左のヘラ削りを施す。	縫の可塑性あり。
254	"	"	12.2 (9.4) 15.0 —	丸く張った上脣部から口縁部は「く」の字に外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面にヒゲ状の凹凸が残る。口縁部内外面は横方向の薄いナゲ調整。縫部内面に指輪圧痕あり。	
255	"	"	12.6 (15.0) 16.0 —	最大径を胴部中位に有す。口縁部は水平に屈曲し、縫部は上方に拡張する。口唇部は面をなす。	口縁部内外面及び口縁部は横方向の薄いナゲ調整を施す。下脣部内面は下→上のヘラ削りを施す。	胴部内面中位がススけている。
256	"	高杯	24.0 (5.0) — —	口縁部外面には4条の回紋文を配す。縫部は上方に肥厚す。口唇部は面をなす。	全面横方向のナゲ調整。	
257	"	小型土器	3.5 3.0 — 2.0	上げ底の底部で、直線的に立ち上がり、縫部は丸くおさめる。	内面はナゲ調整。外側はハケ調整後にナゲ調整。	手捏ね土器。
258	"	"	4.1 4.6 — 3.0	コップ状を呈す。	外側は横方向のハケ調整。内面はナゲ調整。	"
259	P 2	壺	13.7 (12.0) 15.2 —	あまり胸の張らない体形から、なめらかに外反する口縁部である。口唇部は丸くおさめる。	縫部内面は下→上のヘラ削りあり。外側は右下がりのハケ調整を施す。	外側は火を受けて赤く変色。
260	P 5	"	21.4 (22.5) 19.7 —	上脣部は直立気味で、口縁部はなめらかに外反する。口縁部外面には2.1cm幅の粘土帯を貼付。口縁部は面をなす。	口縁部及び上脣部内面は横方向のハケ調整を施す。口縁部外面は、指輪圧痕あり。	
標図番号	遺構番号	器種	計測値 (cm) 基盤 底面 底量	形態	文様・手法	備考
261	P 12	小皿	8.6 1.7 — 4.7	口縁部は一度屈曲して外方に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。	内面横方向のナゲ調整。底部未切りあり。	

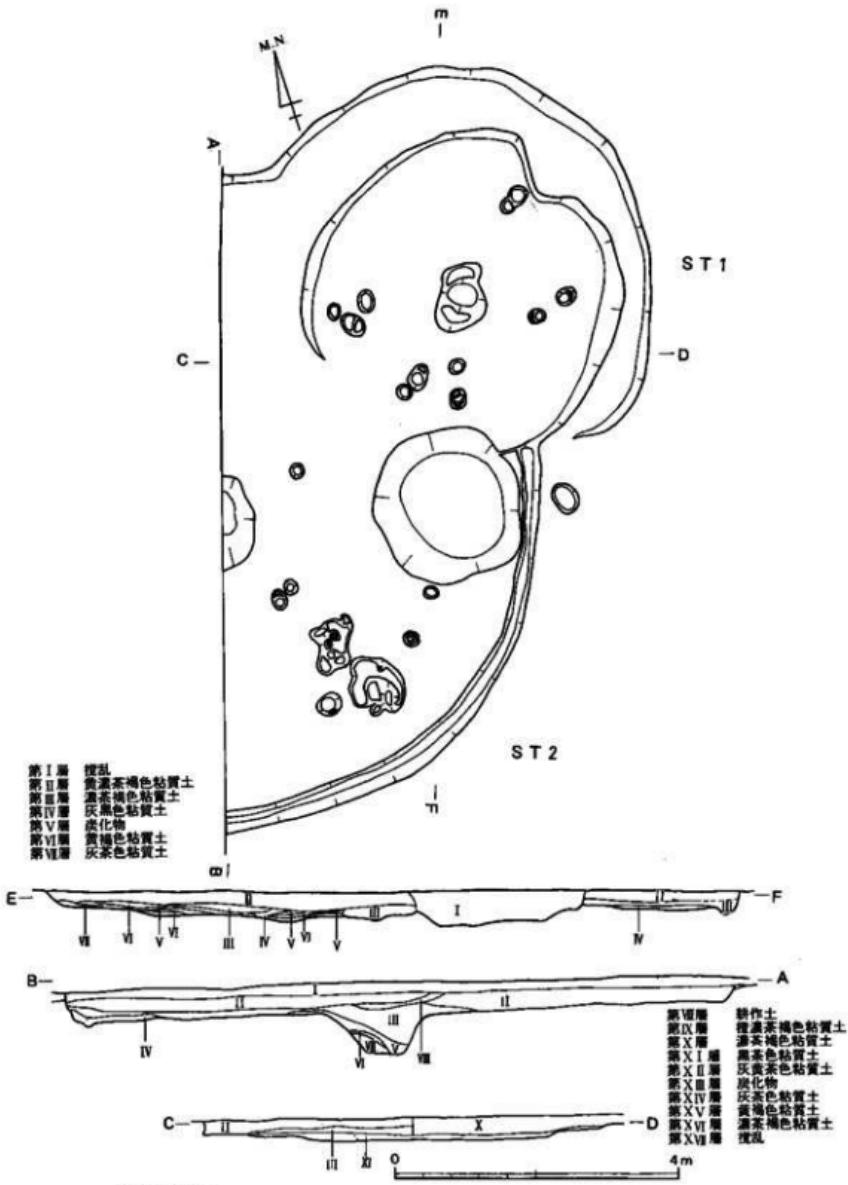
第21表 遺構出土石器観察表

標図番号	遺構番号	器種	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 底量	材質	特徴	備考
262	S T 9	石斧	(7.6) 4.2 2.0 105.0	真岩	柱状片刃石斧の基部である。刃部及び基礎部は欠損している。両正面及び一方の側縁は丁寧に研磨されている。	
263	S T 8	"	(8.7) 5.2 1.3 80.0	"	扁平な打製石斧である。基礎部は欠損している。基部から刃部に向ってわずかに幅が広くなっている。刃部は直線的で、使用による滑溜みがみられる。	

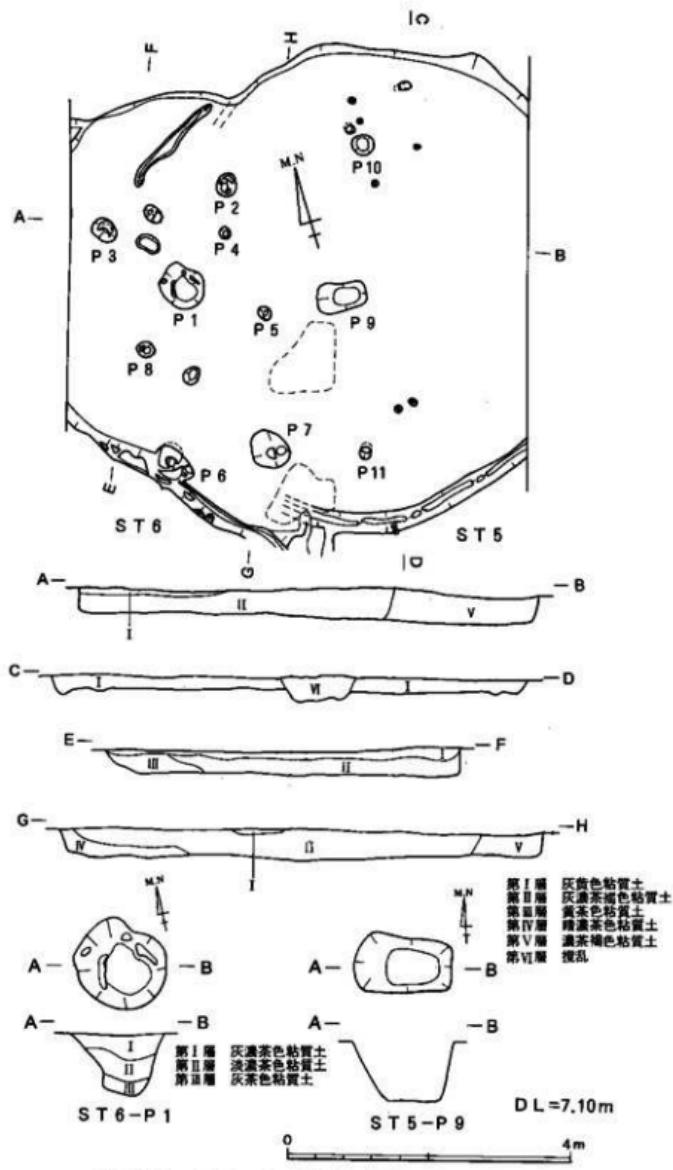
構造番号	造機番号	基 種	計測組 最大長 最大幅 (cm. g) 最大厚 (cm. g) 重 量	材 質	特 徴	備 考
264	S T 6	石 砂	(13.7) 3.7 1.2 80.0	千枚岩	扁平に長い打抜石斧である。一方の正面は丁寧に研磨されている。裏面部は欠損しているが、丸くなるものと考えられる。	
265	S K 11	"	9.5 厚 2.0 130.0	みかぶ緑色岩	磨打石斧である。中央の円孔が貫通する前半分に破壊したものと考えられる。縁部には特に使用痕は認められない。	
266	S T 3	砂 石	8.5 7.2 2.2 210.0	砂 岩	扁平円の河原石をそのまま利用している。縁部に使用痕を認める。	
267	S D 3	"	10.0 9.8 3.5 600.0	みかぶ緑色岩	河原石をそのまま利用している。縁部に使用痕が認められ、一部が大きく欠損している。	
268	S T 6	"	9.0 8.2 3.3 360.0	砂 岩	河原石をそのまま利用している。全面が磨かれている。	
269	S D 1	"	11.6 10.0 3.1 645.0	"	河原石をそのまま利用している。縁部は全面に使用痕が認められ、正面面中央部が使用によりくぼむ。	
270	S T 6	"	6.5 6.0 1.7 60.0	"	河原石を打ち欠いたものであり、自然面と正面面にかかるが、自然面にも一部の磨痕が見られる。縁部に使用痕あり。	
271	S T 9	"	10.2 9.0 4.7 620.0	"	河原石をそのまま利用したものである。縁部及び正面中央部に使用痕がある。	
272	"	"	10.1 8.0 3.9 470.0	"	河原石をそのまま利用したものである。縁部の一端と、正面の中央部に使用痕がある。	
273	"	"	11.3 4.5 1.8 145.0	千枚岩	扁平長楕円形で、両側縁部に使用痕がある。一方の長楕円は研磨されている。底石として利用されたものであろう。	
274	S T 6	"	8.0 4.8 1.8 100.0	砂 岩	河原石をそのまま利用したものである。縁部の一部に使用痕が見られる。他の面は磨かれている。	磨石の可能性あり。
275	"	"	10.5 9.0 3.2 450.0	"	河原石をそのまま利用したものである。全縁部と正面の中央部に使用痕が見られる。	
276	"	"	12.0 6.5 2.6 320.0	"	扁平長楕円形の河原石を利用している。両側縁部に使用痕が見られる。	
277	S T 1	"	13.0 8.0 3.2 495.0	"	河原石をそのまま利用したもので、縁部の一部に使用痕が見られる。	
278	S T 6	"	10.3 9.7 3.5 500.0	"	河原石をそのまま利用している。正面面の中央部にわずかに使用痕が見られる。	

種類番号	遺構番号	器種	計測値 最大長 最大幅 (cm. g) 重 量	材 質	特 徴	備 考
279	S T 9	叩 石	9.8 8.8 3.2 420.0	砂 岩	河原石をそのまま利用している。 縁部及び両面中央部に使用痕が見られる。	
280	S T 7	~	9.5 8.3 3.3 390.0	~	河原石をそのまま利用している。 縁部及び両面中央部に使用痕が見られる。	
281	S T 9	~	9.6 8.5 3.2 370.0	~	河原石をそのまま利用している。 縁部と一方の面の中央部に使用痕が見られる。	
282	~	~	(7.2) 8.2 3.5 310.0	~	河原石を利用したものであるが、全体の3分の1ほどが欠損している。 縁部の一部に使用痕が見られる。	
283	S D 2	~	8.5 8.5 2.3 235.0	~	河原石を破に割ったもので、自然面と剥離面とかなる。 縁部に使用痕が見られる。	
284	S K 9	~	10.4 8.8 1.7 210.0	~	~	
285	S D 2	砥 石	(7.8) 5.6 3.2 255.0	~	3面を使用しており、各使用面は凹状をなしている。	
286	S T 4	~	(9.3) 5.9 4.3 296.0	~	1面を使用しており、使用面は凹状をなす。	
287	S K 5	~	(11.5) 9.8 5.1 690.0	~	2面を使用している。	
288	S T 4	~	(15.1) 15.4 4.3 1915.0	~	2面を使用しており、使用面は凹状をなす。	
289	~	~	(29.5) 11.0 4.2 2500.0	~	3面を使用しており、使用面は凹状をなす。 使用面の一帯に敲打痕が見られる。	
290	S T 10	石包丁	13.3 4.3 0.8 85.0	千枚岩	直線刃片刃の磨製石包丁である。 全面を刃方に研磨している。中央部に両面から穿つ。片面の円孔付近に3ヶ所穿孔痕が見られる。	
291	S T 9	~	14.0 7.3 0.8 150.0	結晶片岩	扁平な長方形をなす。 本盤山と考えられる。	
292	S T 1	~	7.7 4.4 0.5 30.0	千枚岩	直線刃片刃の磨製石包丁である。元はもっと大型であったと考えられるが、両穿孔部から切断している。	
293	S D 6	~	(6.0) 5.0 0.8 40.0	頁 岩	直線刃片刃の磨製石包丁である。全面丁寧に研磨している。背面近くに2孔を両面から穿つ。円孔の位置が片寄っている。半分が欠損している。	

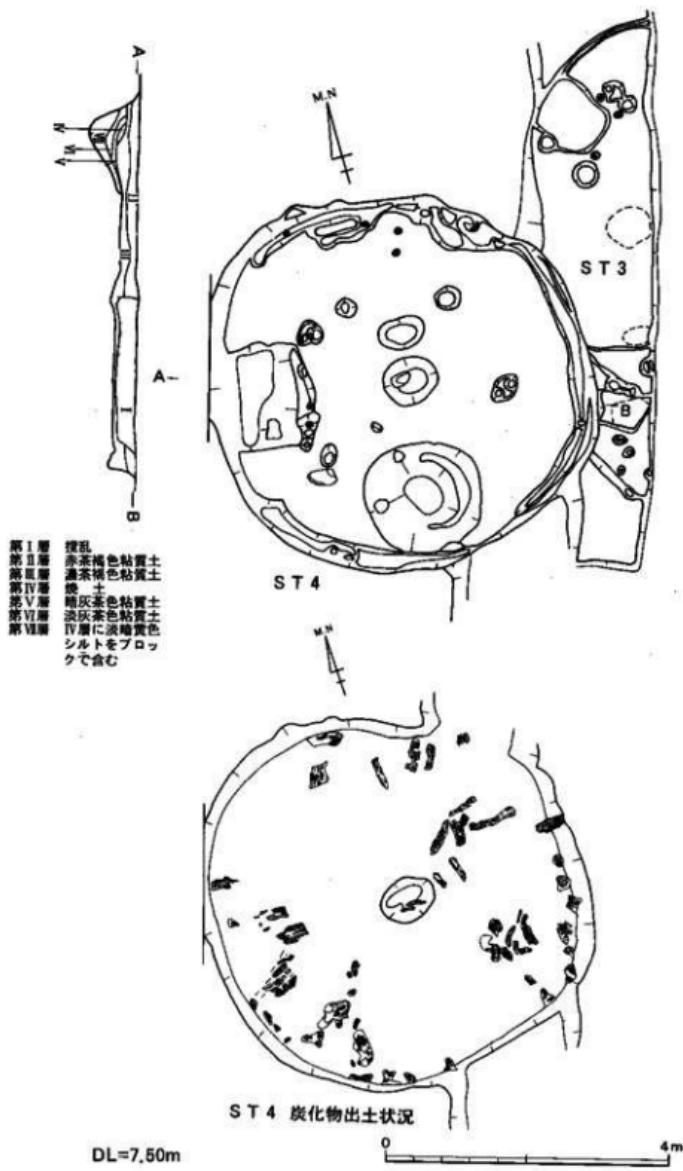
標記番号	遺構番号	器種	計測値 (cm. a) 最大長 最大幅 最大厚 度)	材質	特徴	備考
294	S D 7	石包丁	(6.9) 6.5 1.8 61.0	みかお緑色岩	未製品である。穿孔の途中で破損したものと考えられる。研磨は全く施されていない。	石包丁製作過程を知る上で良好な資料である。
295	S T 1	"	9.7 4.4 1.0 55.0	頁岩	打製石包丁であり、両端は凹状をなす。	
296	S T 8	"	7.6 5.0 0.7 30.0	チャート	自然面を残す扁平なフレークを素材とし、研磨して刃部をつくり出す。両側縁は表面に大きな削離がみられ、背部には裏面削に少刺離による調整がみられる。	
297	S K 15	石鎌	(2.0) 1.9 0.5	サスカイト		
298	S K 1	"	2.9 2.0 0.5	"		
299	S D 2	石鎌	7.5 5.5 2.5 154.0	砂岩	河原石を利用したもので、種かけ用の溝を切り込んでいる。	
300	S T 9	ノミ状 石器	(5.7) 1.6 1.0 140.0	千枚岩	磨製石器の一部と思われる。一面に研磨痕が残っている。	
301	S T 5	勾玉状 石器	4.9 2.2 2.2 50.0	砂岩	カゲ状になった石器で、全面が研磨されている。	302と近接して、床面より出土。
302	"	磨石	3.5 2.9 2.4 30.0	"	梢円形の石玉で少し研磨されている。	
303	S T 6	"	4.8 3.6 2.4 55.0	"	"	
304	S T 8	"	(6.2) 6.6 3.6 200.0	"	欠損しているが、全面を研磨。先端に月缺り。	
305	S T 9	"	12.1 6.0 3.3 420.0	"	全面を丁寧に研磨している。 両長軸端が、わずかに凹んでおり、紐を掛けた環飾の可能性がある。	ツチノコとして使用されたものか。
306	"	棒状石器	13.1 3.6 2.9 124.0	千枚岩	柱状に削離しており、一面は自然面である。 特に、加工痕は認められない。	壁面に突き刺さっていたものである。



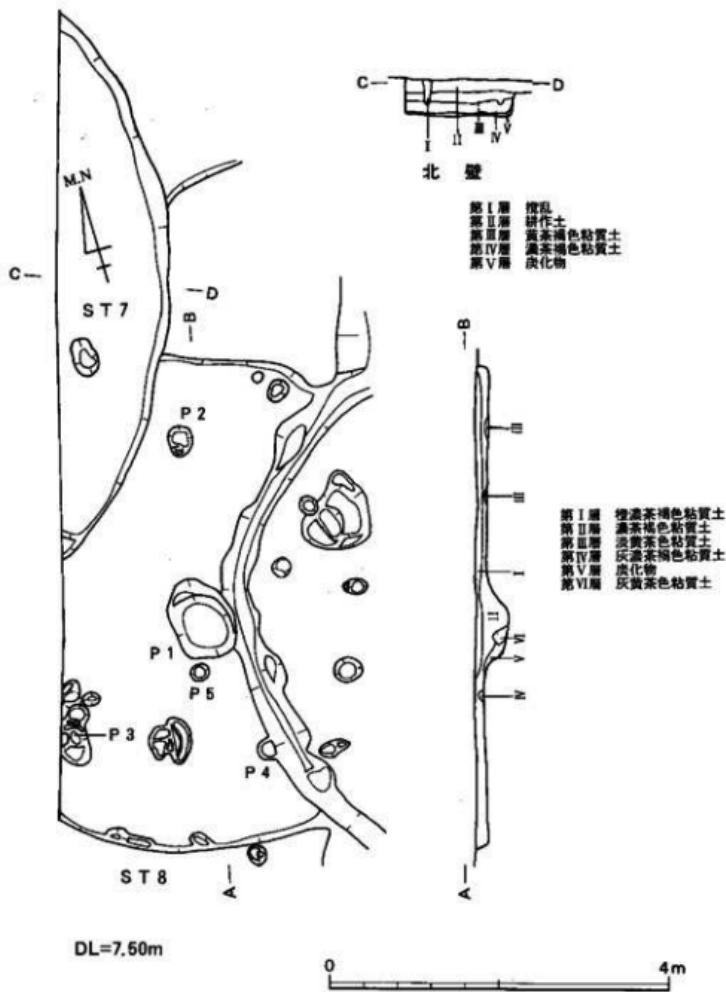
第99図 ST 1・2



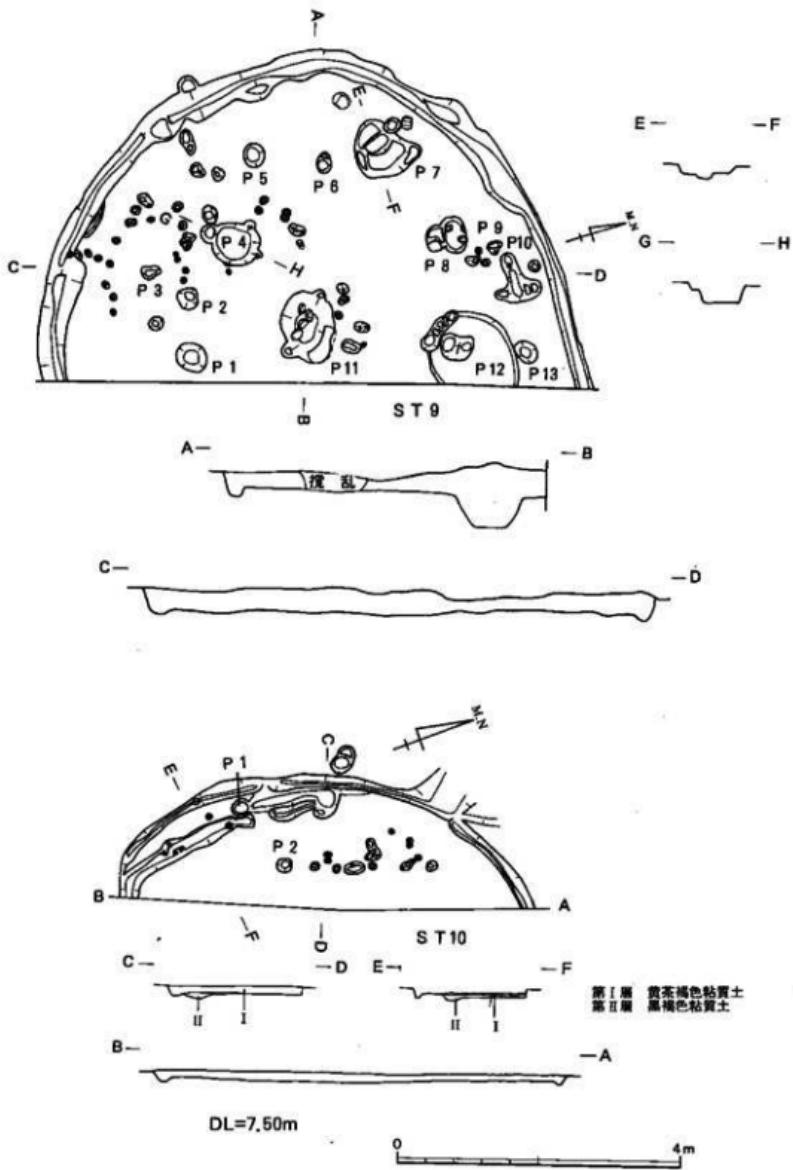
第100図 ST 5・6, ST 6-P1, ST 5-P9



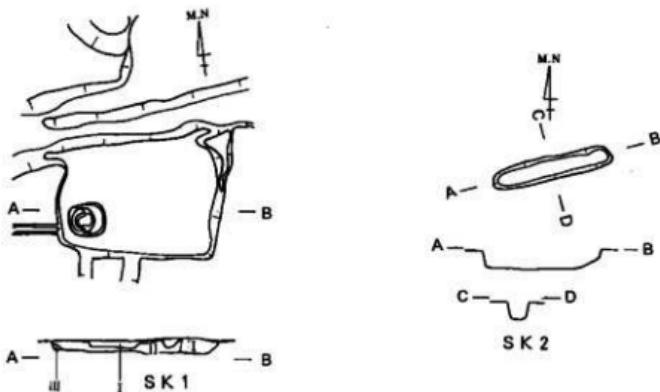
第101図 ST 3・4, ST 4炭化物出土状況



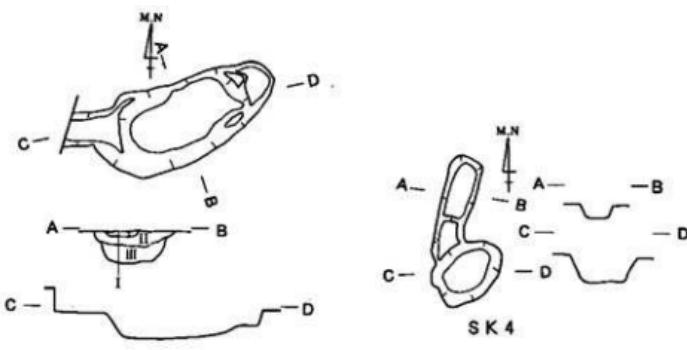
第102図 ST 7 + 8



第103図 ST 9 + 10



第Ⅰ層 裸地
第Ⅱ層 黄淡茶褐色粘質土
第Ⅲ層 茶褐色粘質土

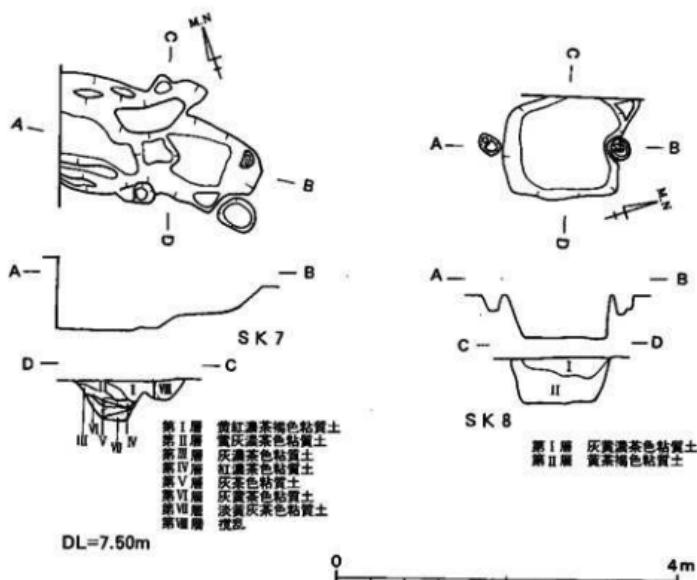
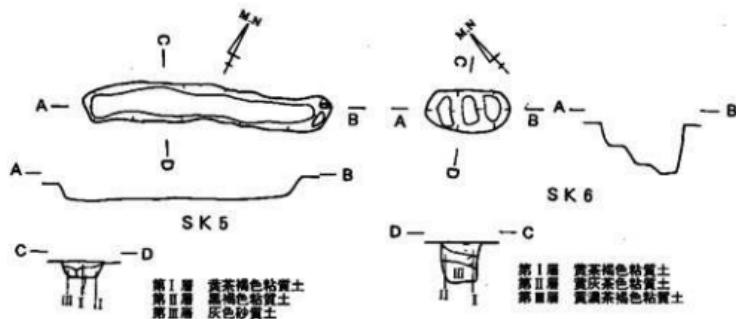


第Ⅰ層 裸地
第Ⅱ層 黄褐褐色粘質土
第Ⅲ層 黑褐色粘質土

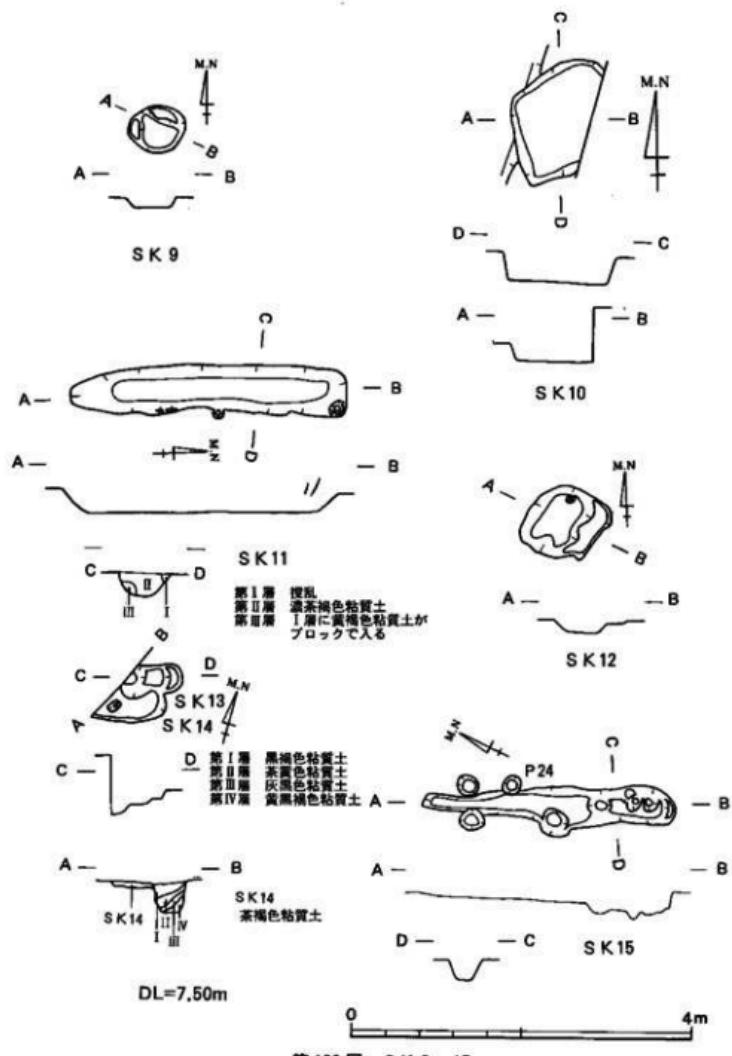
DL=7.50m

0 4m

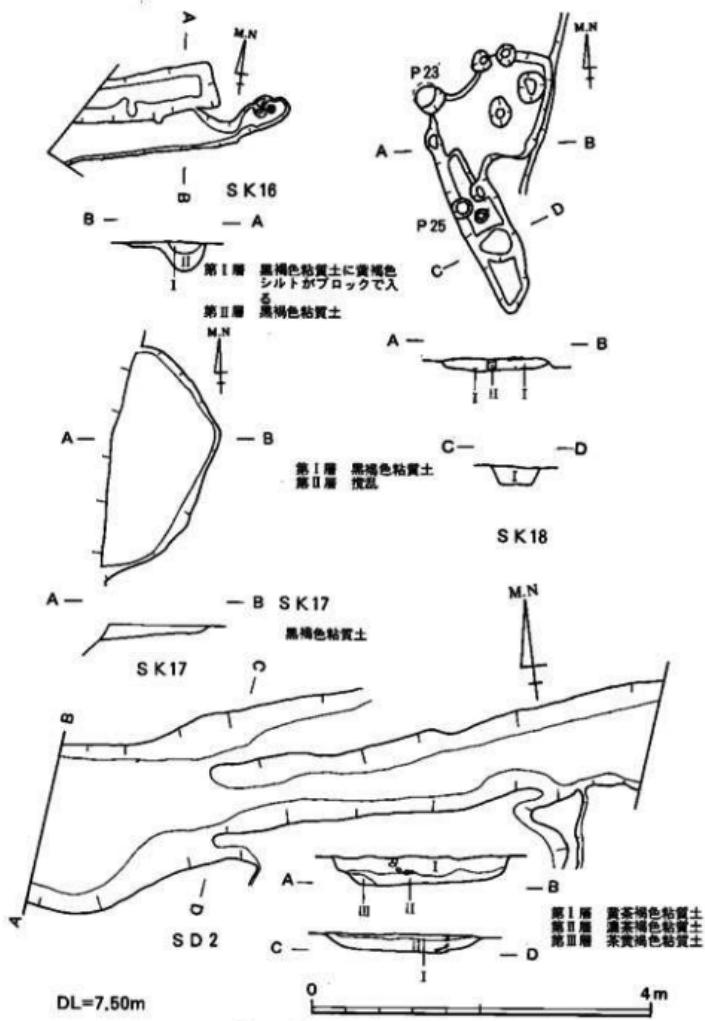
第104図 SK 1~4



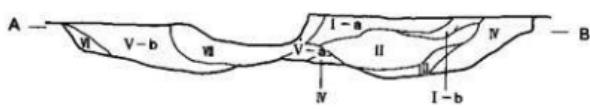
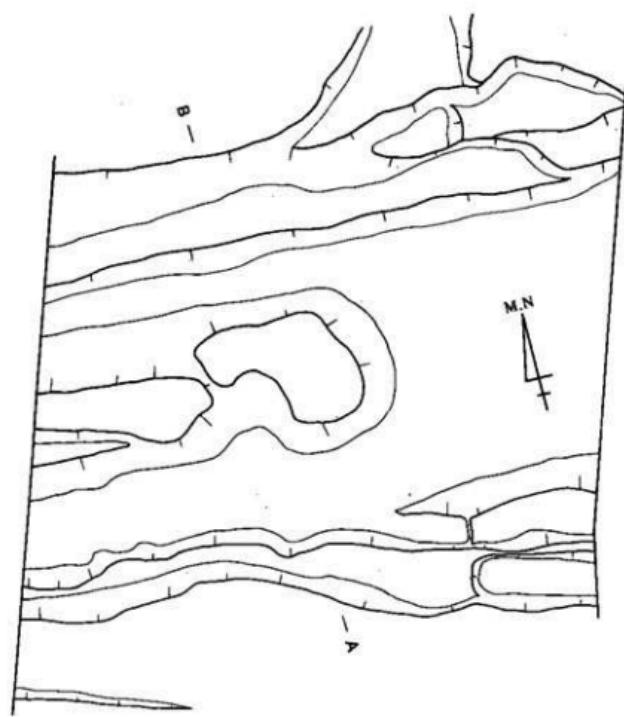
第105図 SK 5~8



第106図 SK 9~15



第107図 SK16~18, SD2

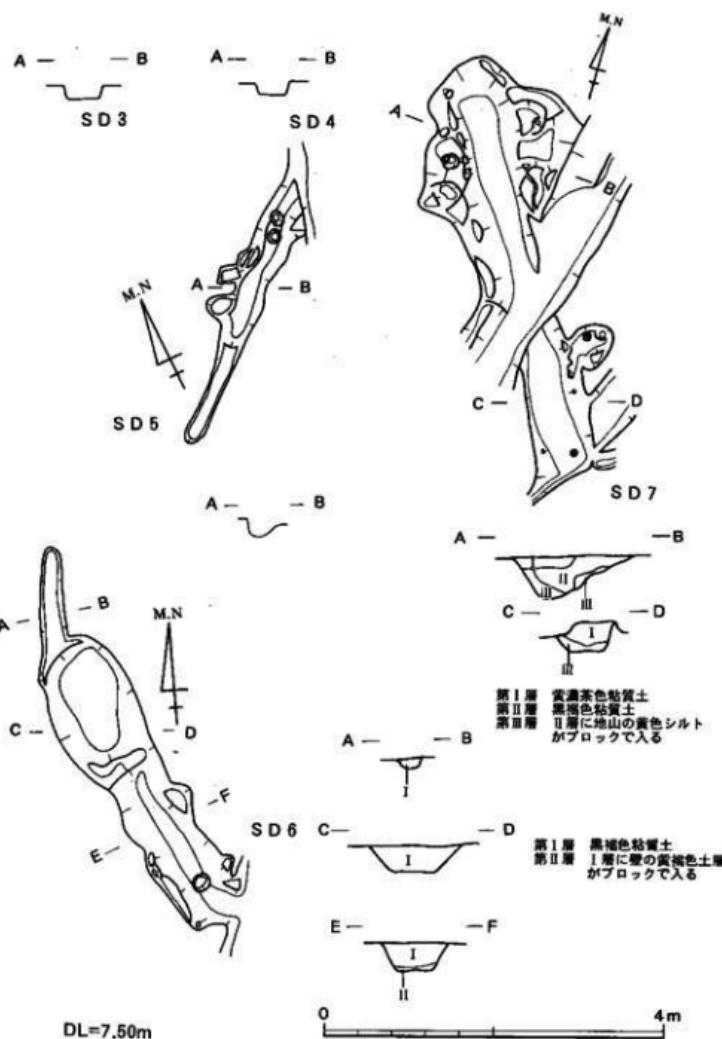


DL=7.50m

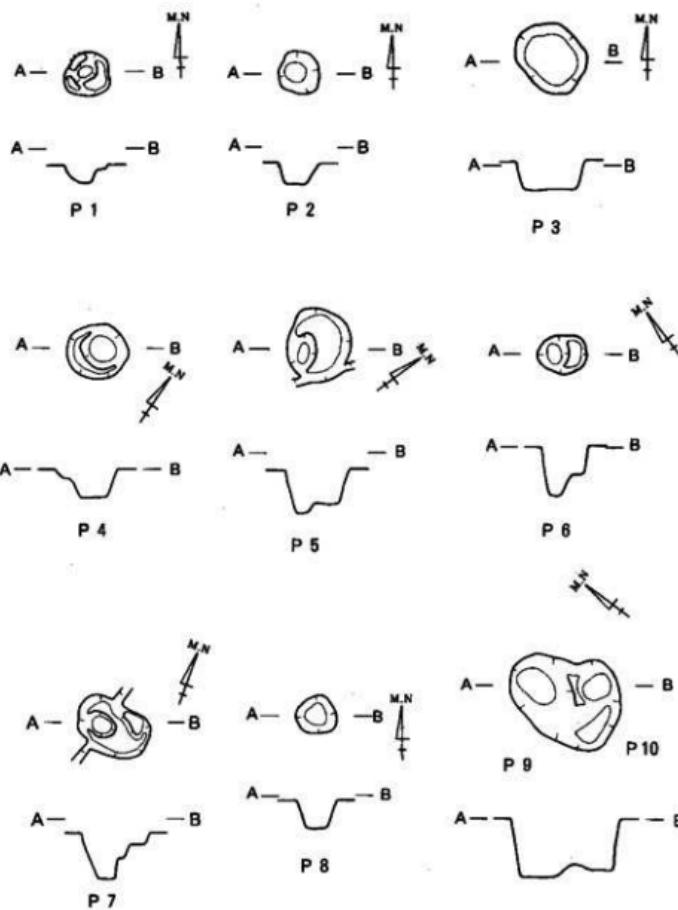
0 4m

I-a	淡茶褐色シルト
I-b	灰茶色シルト
II	茶褐色砂體
III	茶褐色シルト～粘質土
IV	茶褐色粘質土
V-a	黃褐色シルト
V-b	青灰色シルト
VI	灰茶色粘質土
第七	泥炭

第 108 図 SD 1



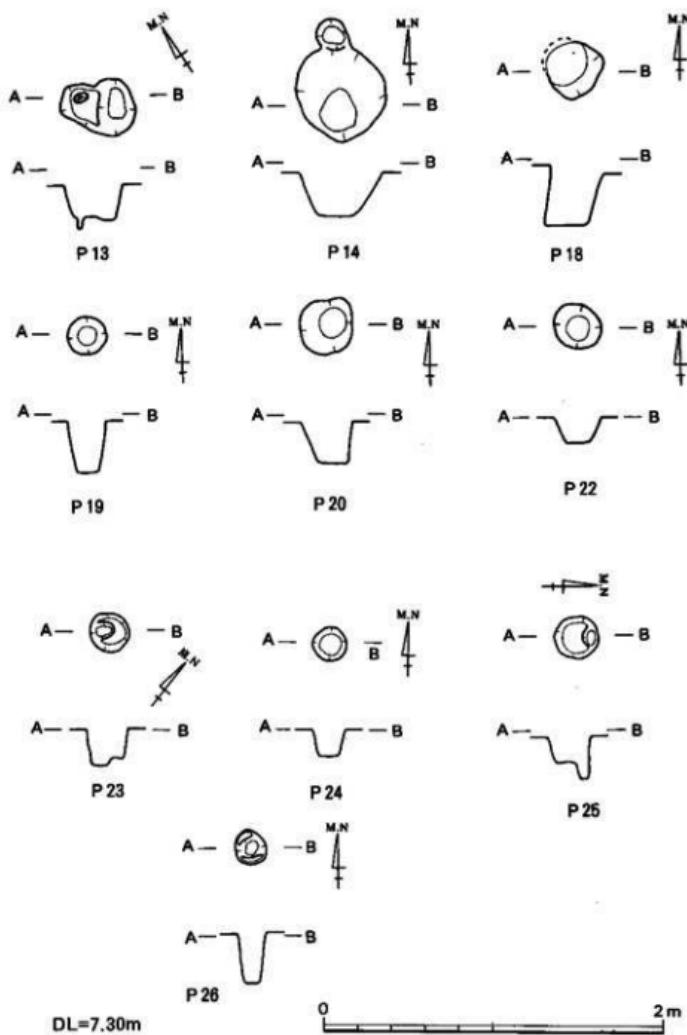
第109図 SD 3 ~ 7



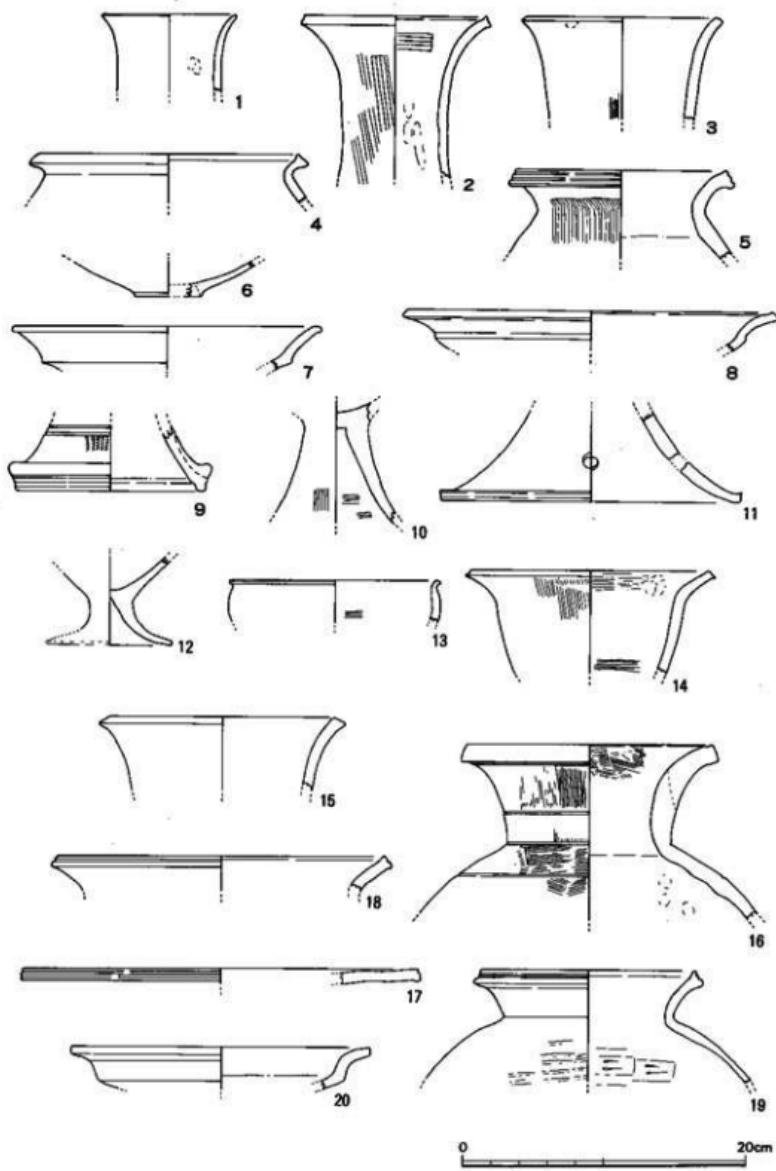
DL=7.30m

0 2m

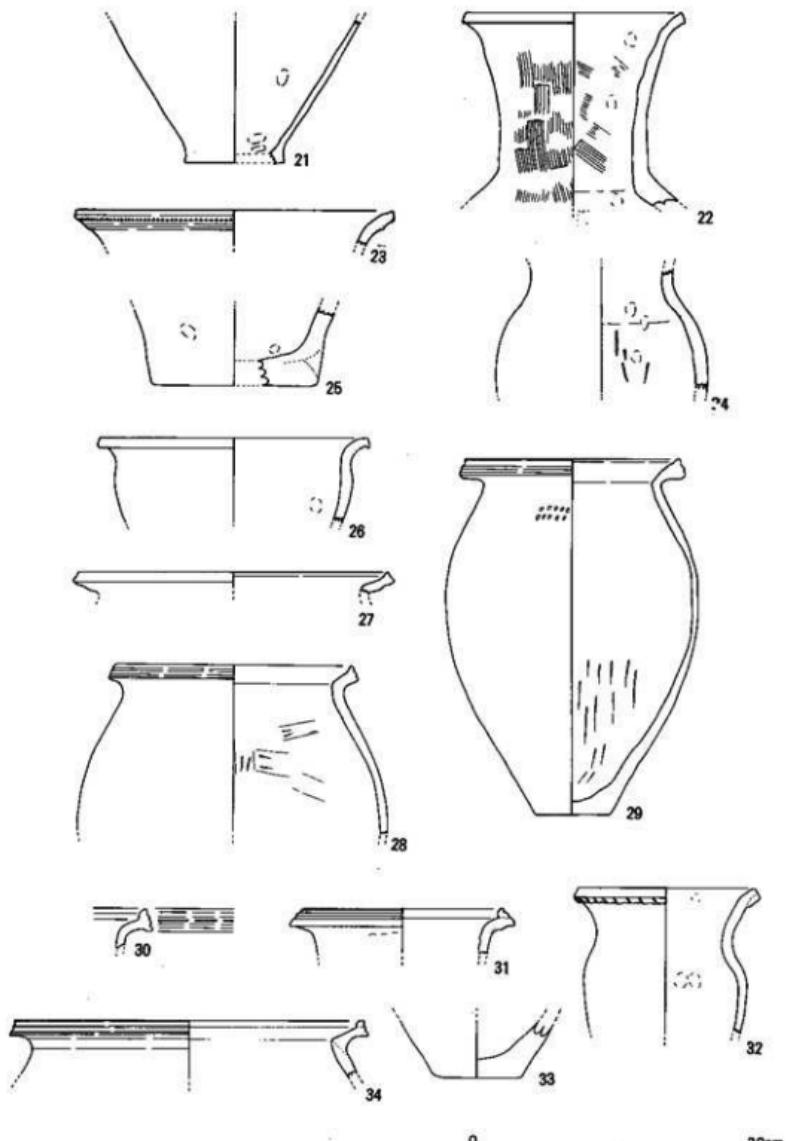
第110図 P 1~10



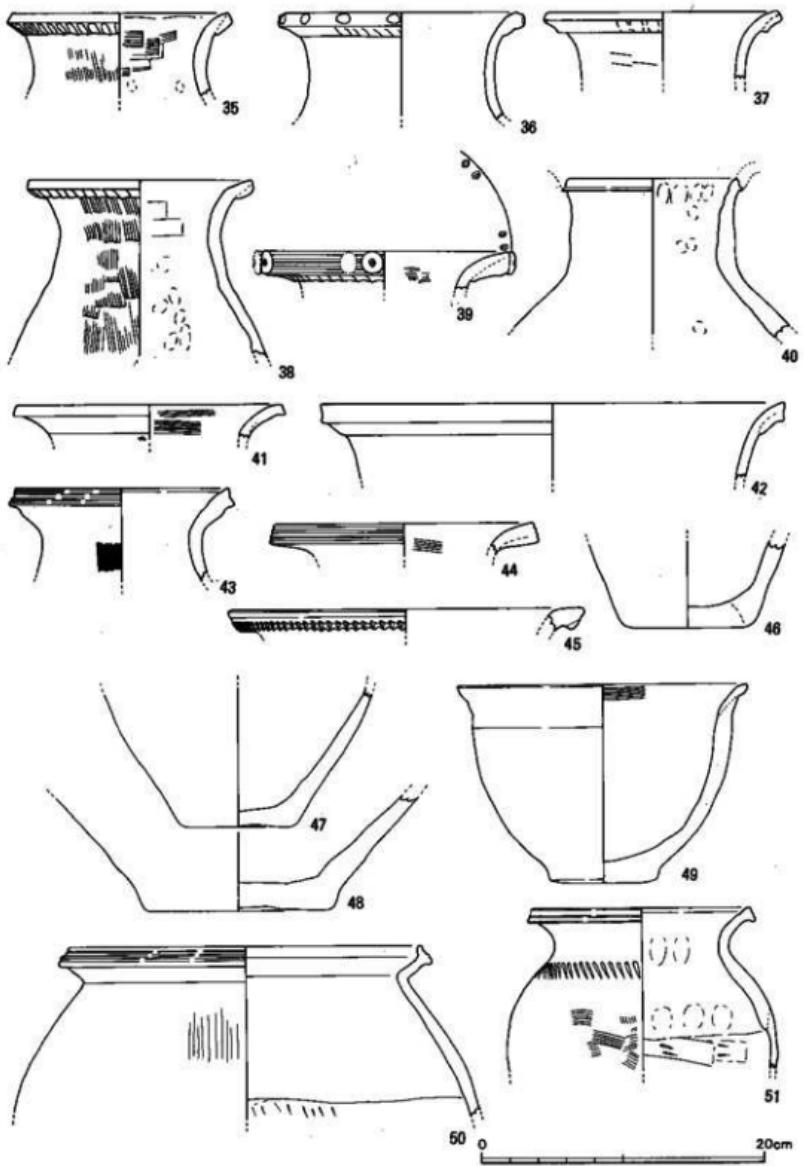
第111図 P13・14、18~20、22~26



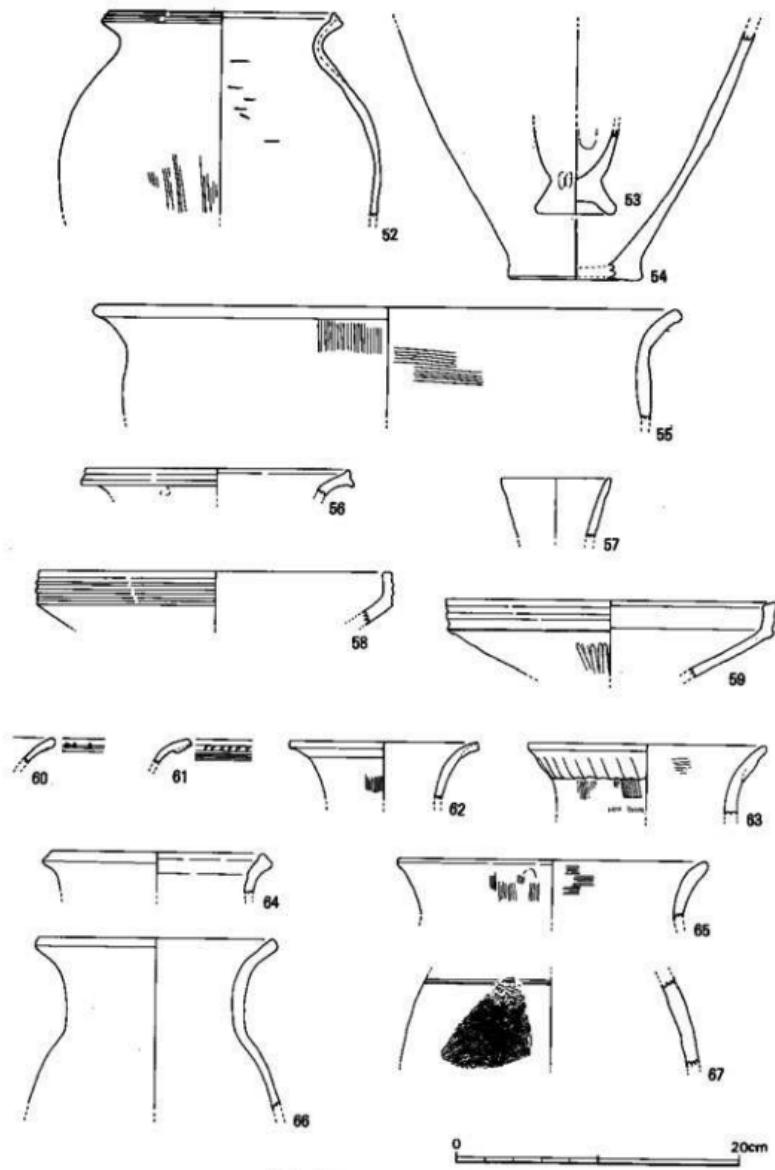
第112図 ST 1・2出土遺物



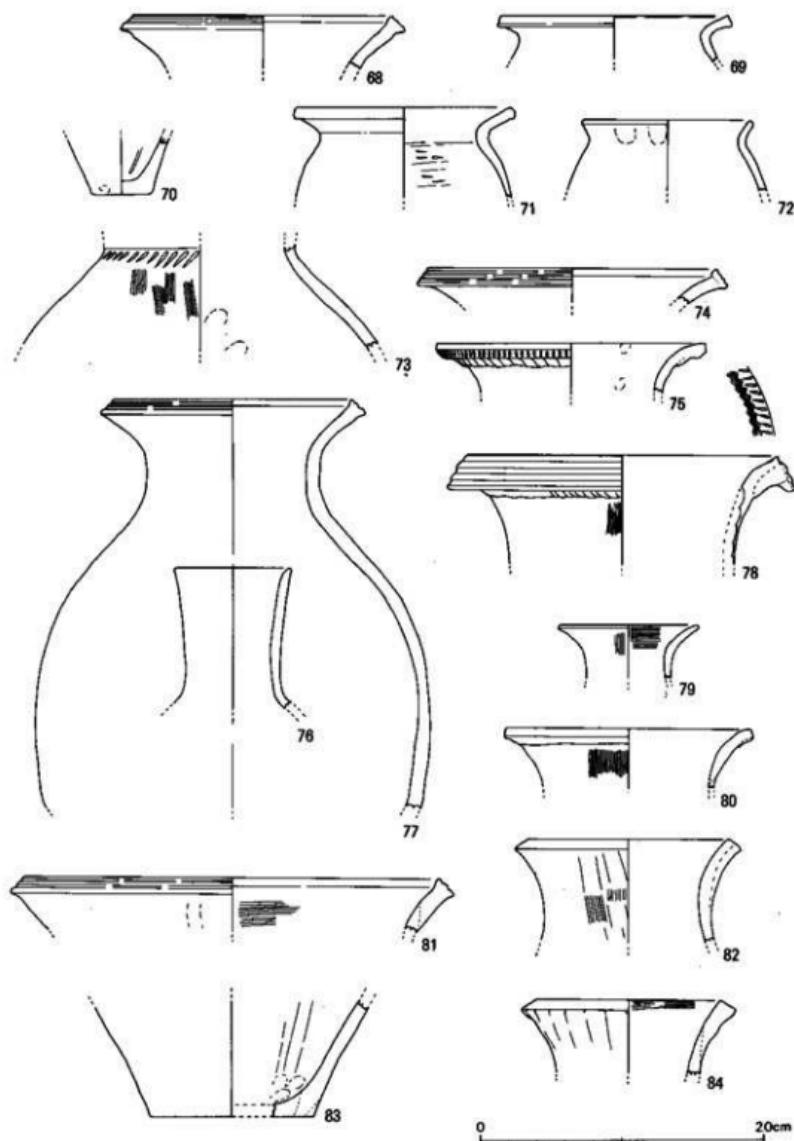
第113図 ST 2~5 出土遺物



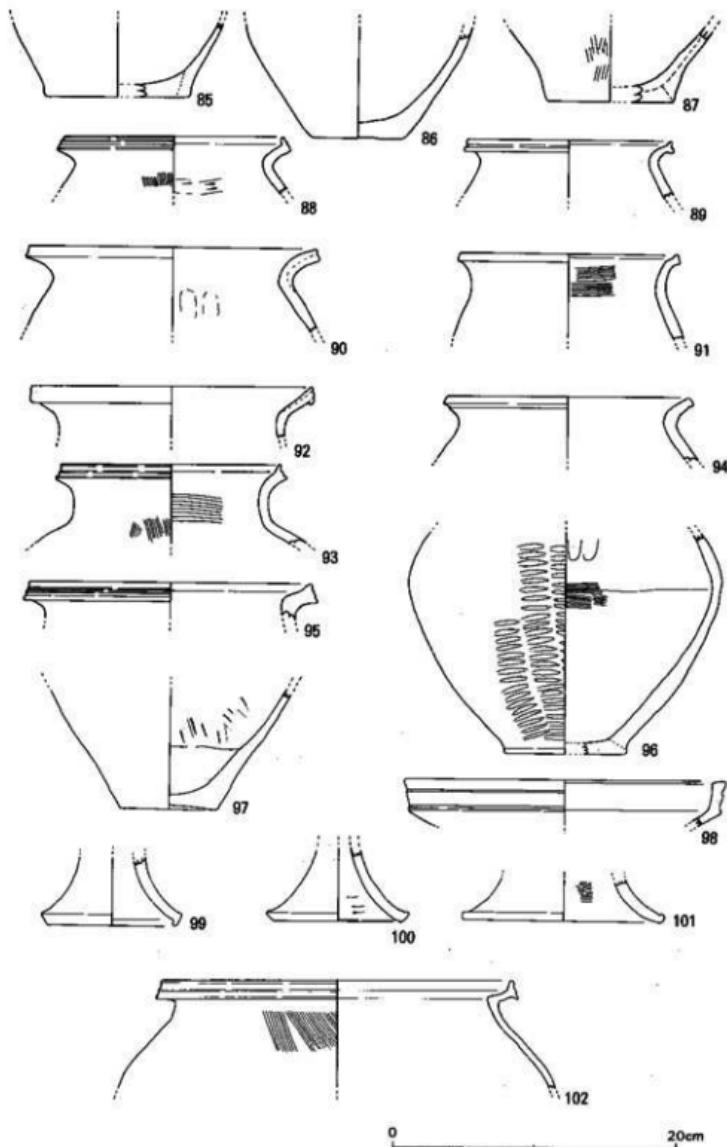
第114図 ST 6出土遺物



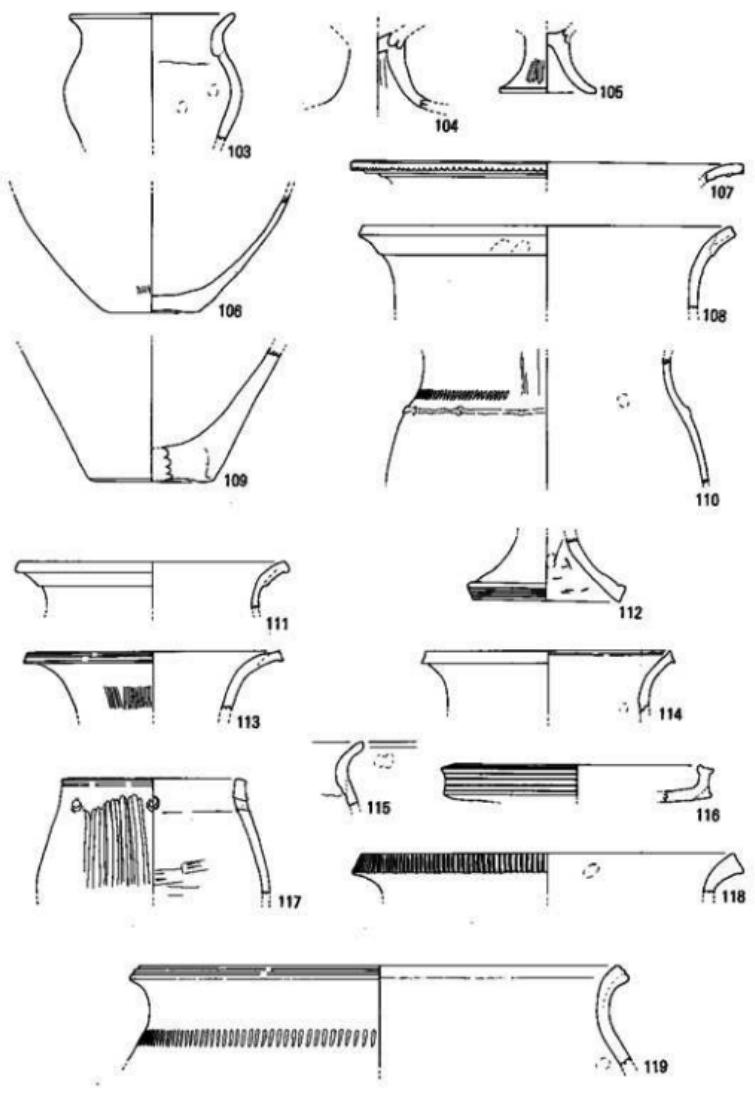
第115図 ST 6~8出土遺物



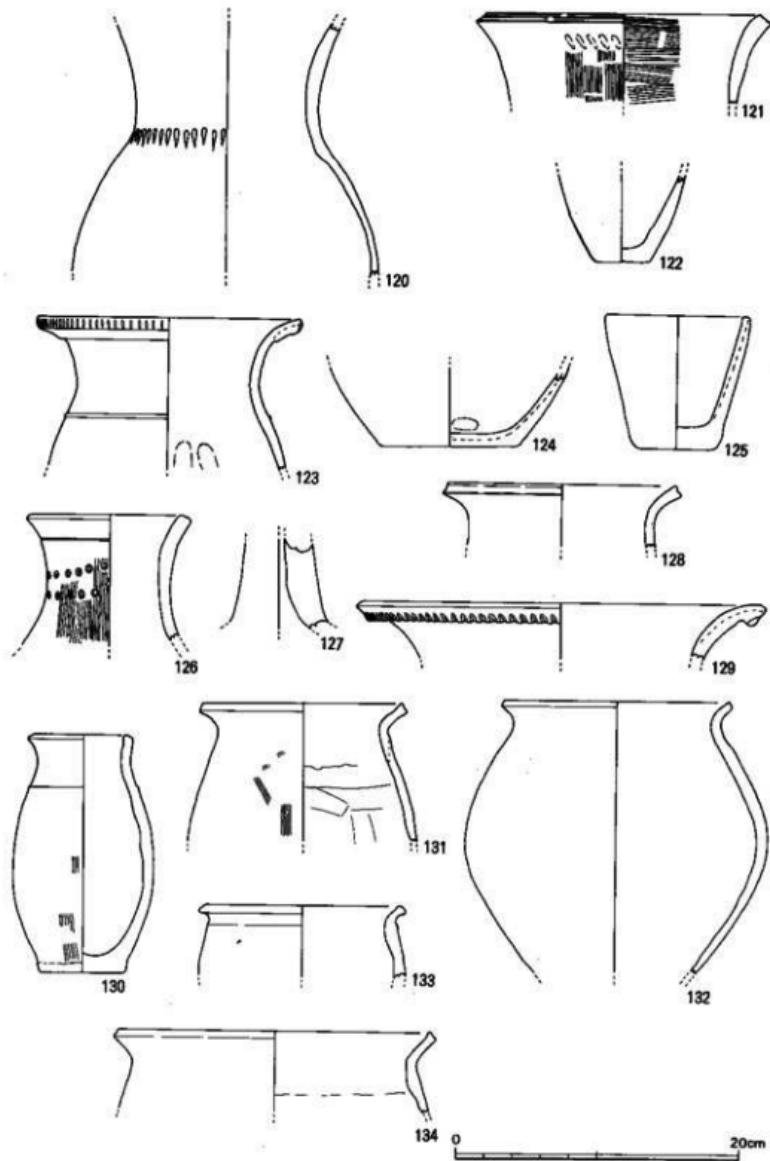
第116図 ST8・9出土遺物



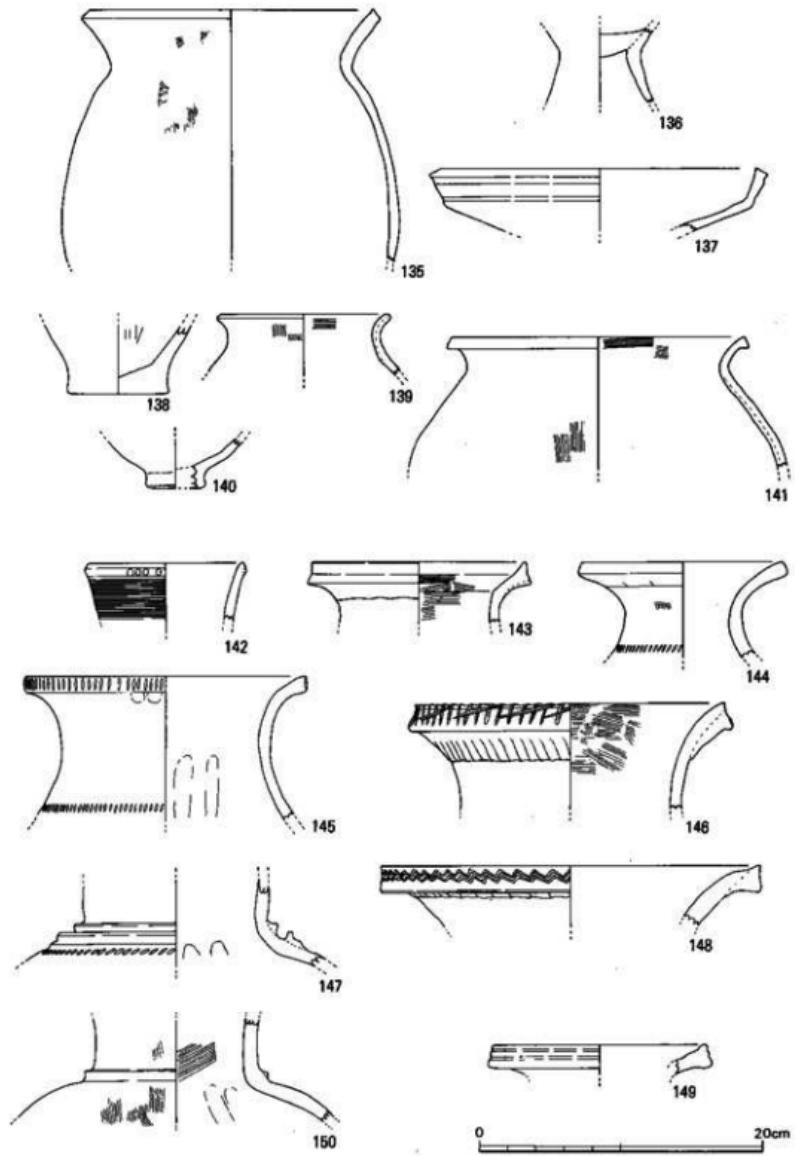
第117図 S T 9・10出土遺物



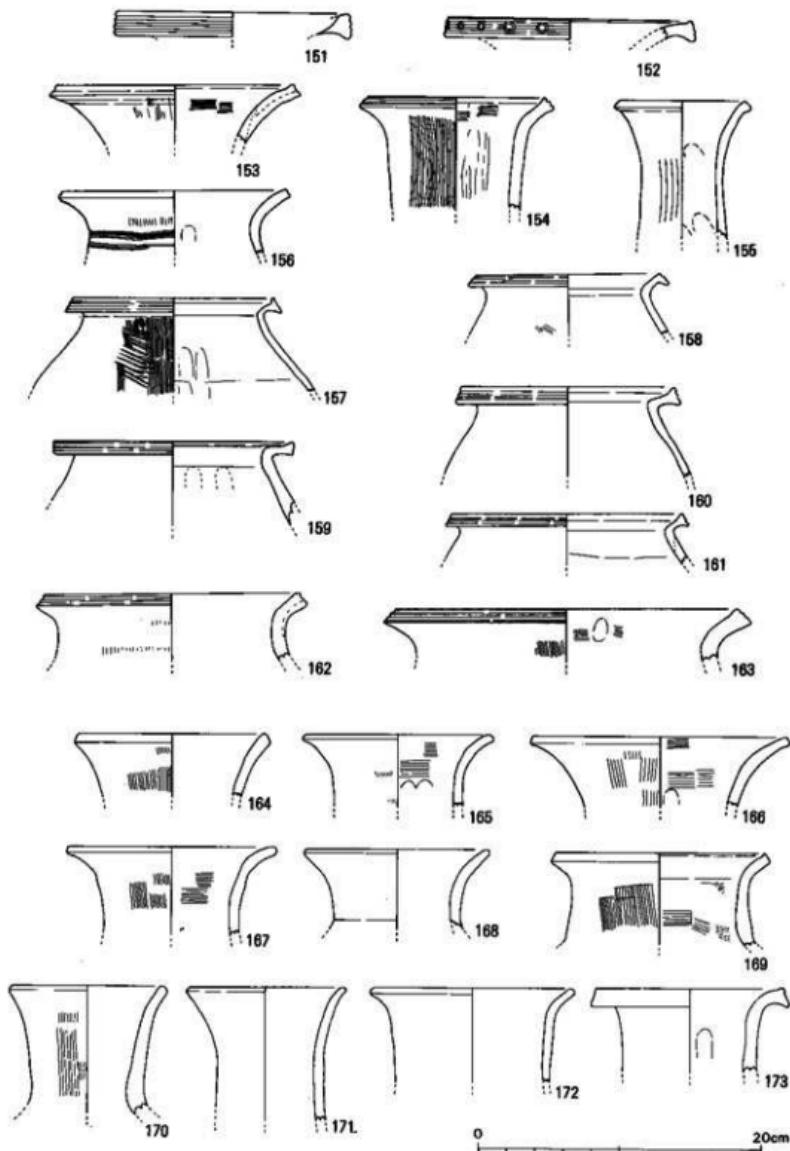
第118図 SK 1~5、9~11出土遺物



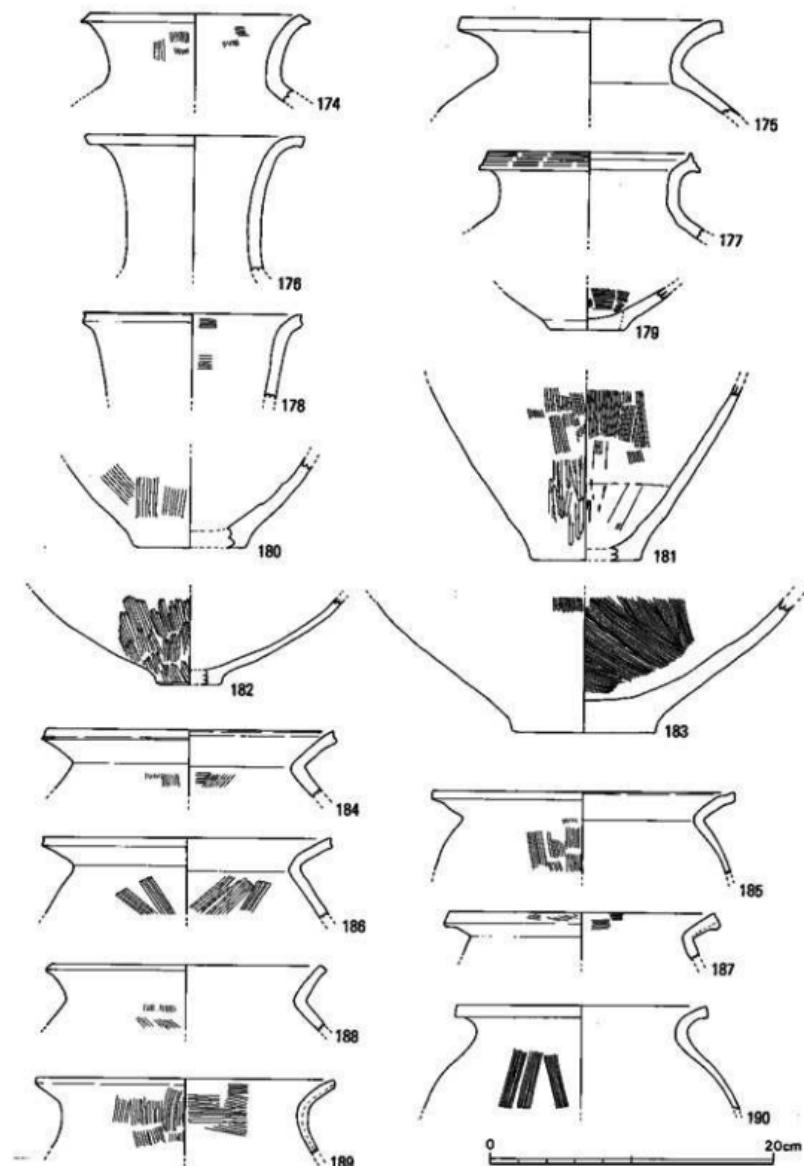
第119図 SK 11~16出土遺物



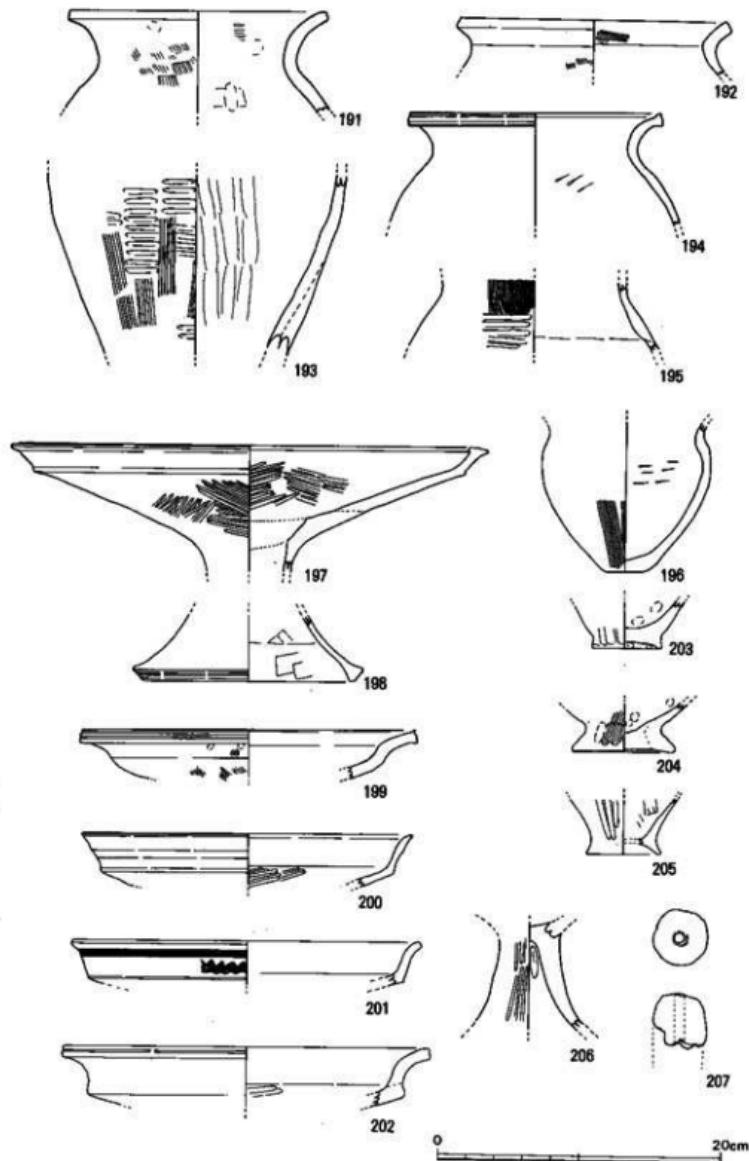
第120図 SK16~19, SD1出土遺物



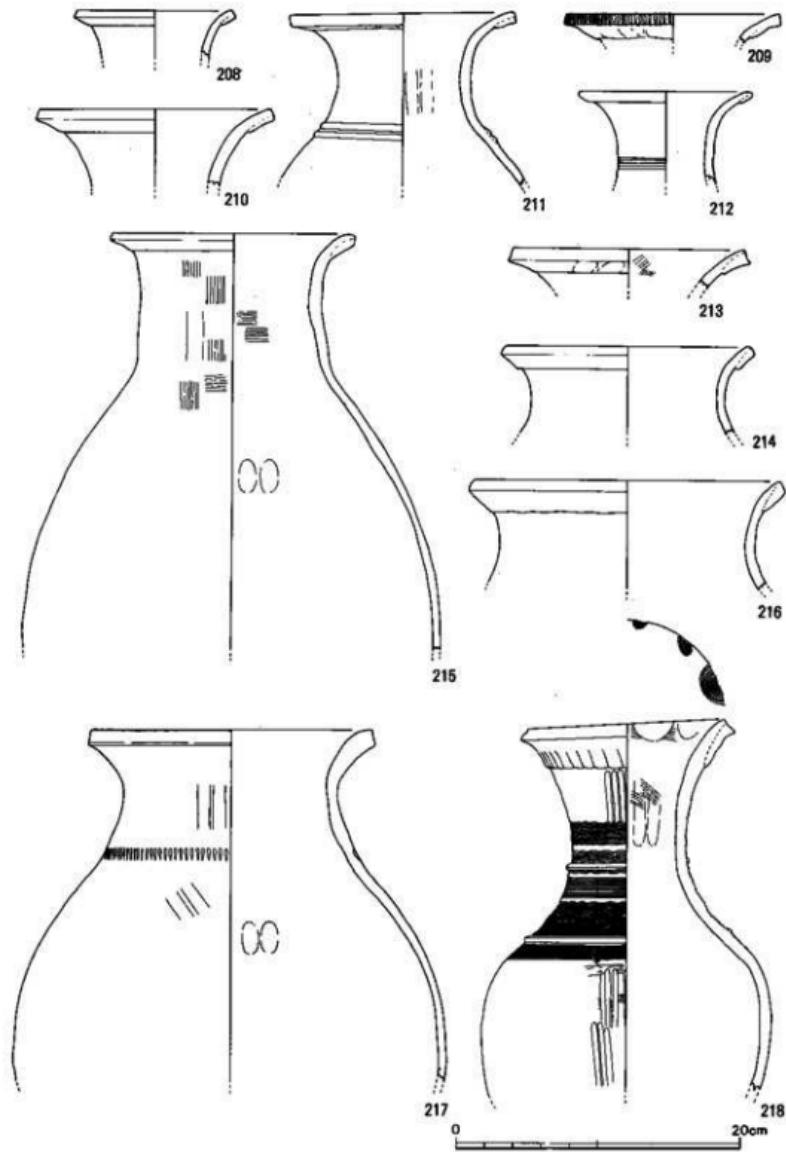
第121図 SD 1出土遺物



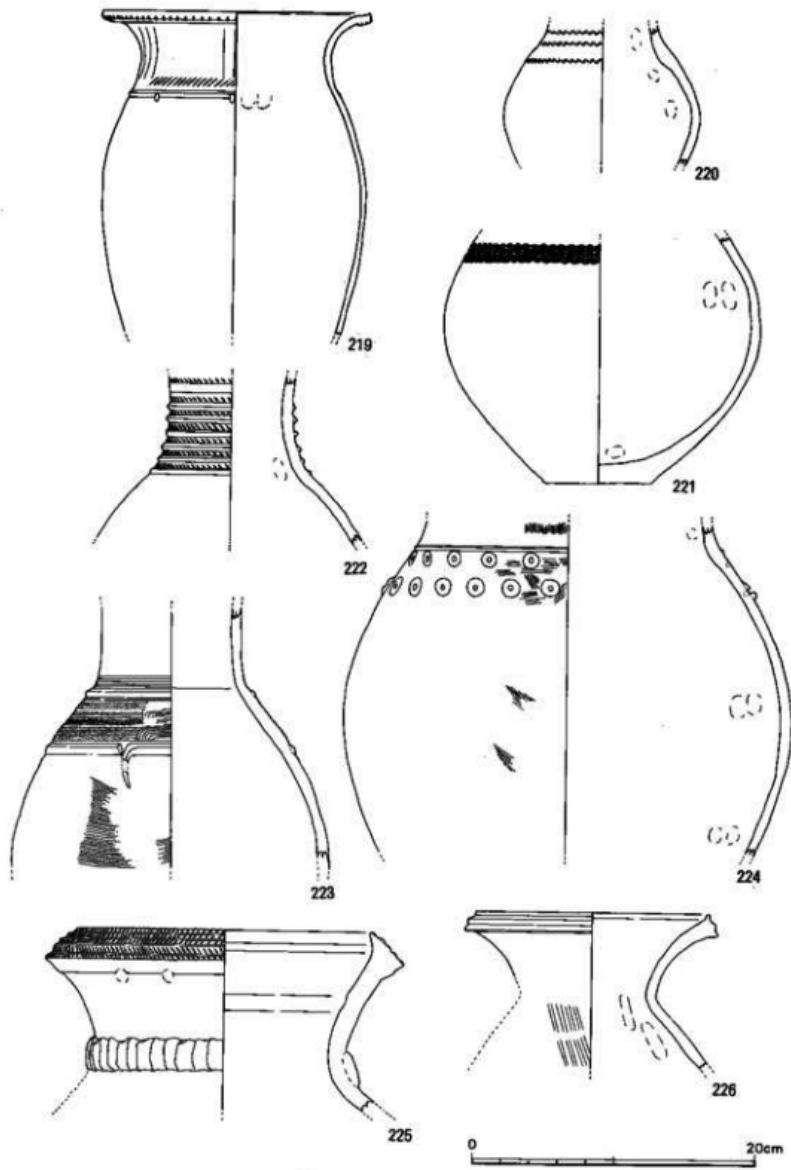
第 122 図 SD 1 出土遺物



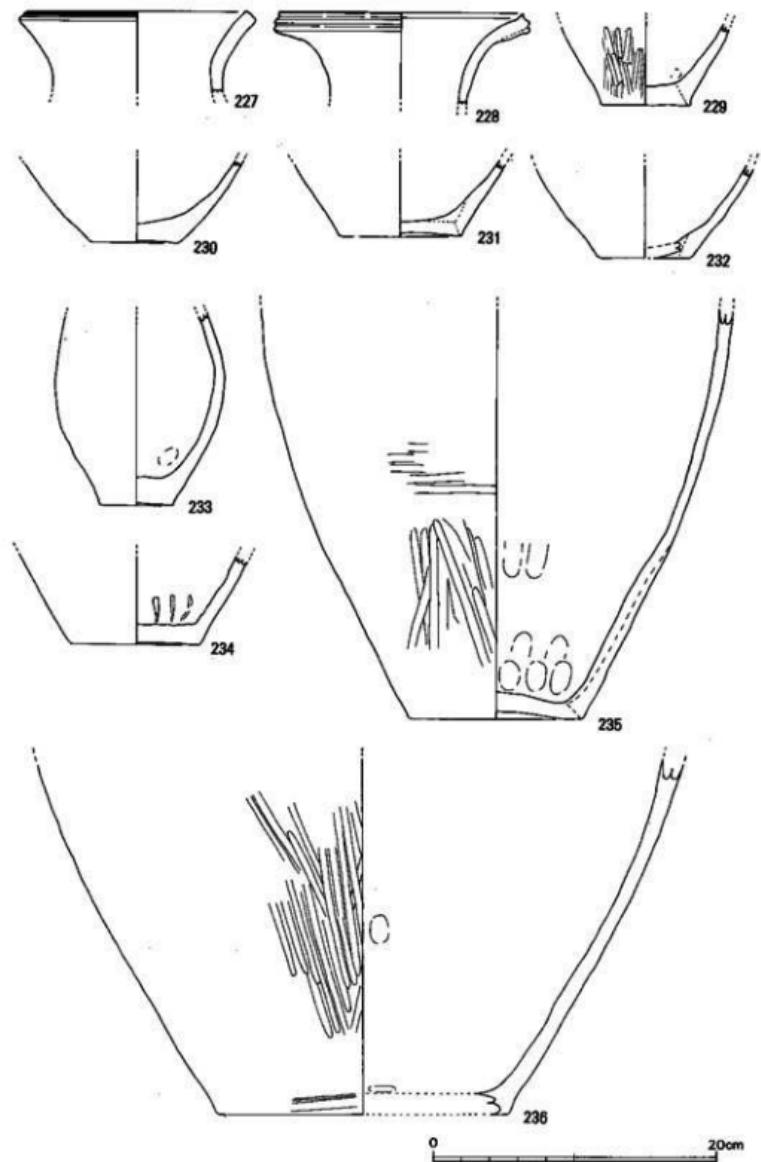
第123図 SD 1出土遺物



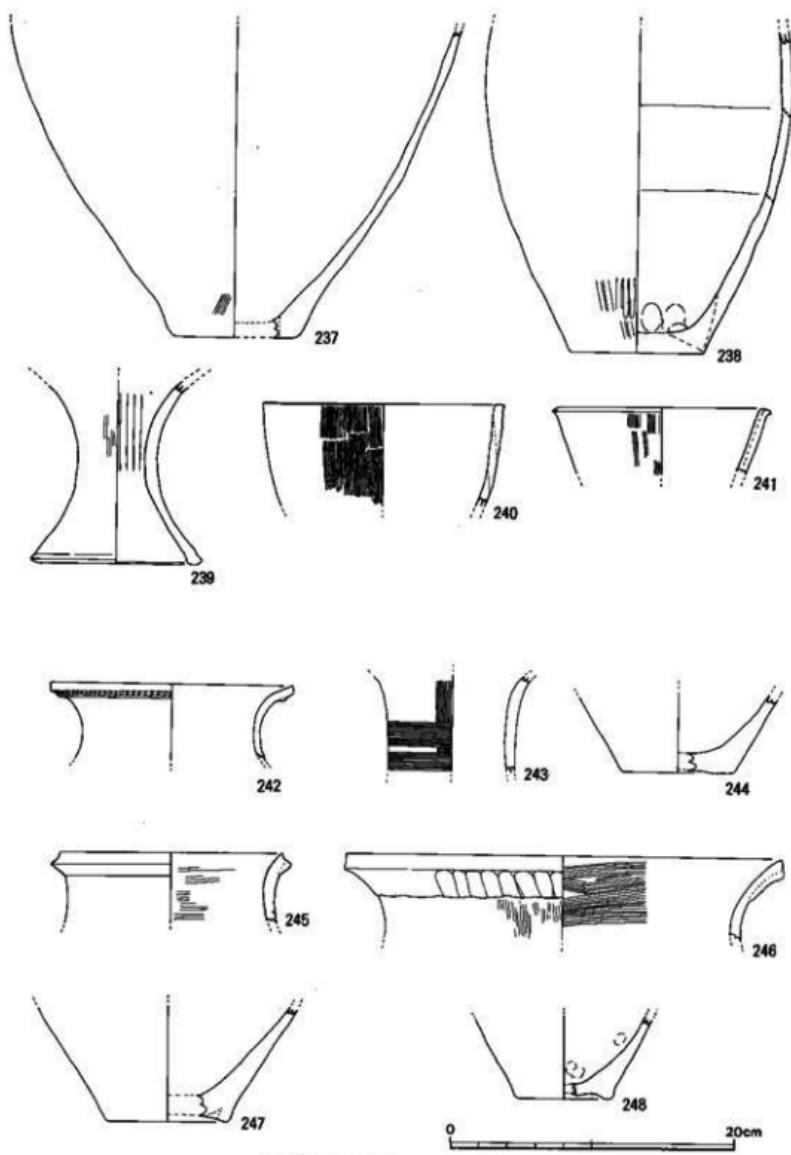
第124図 SD 2出土遺物



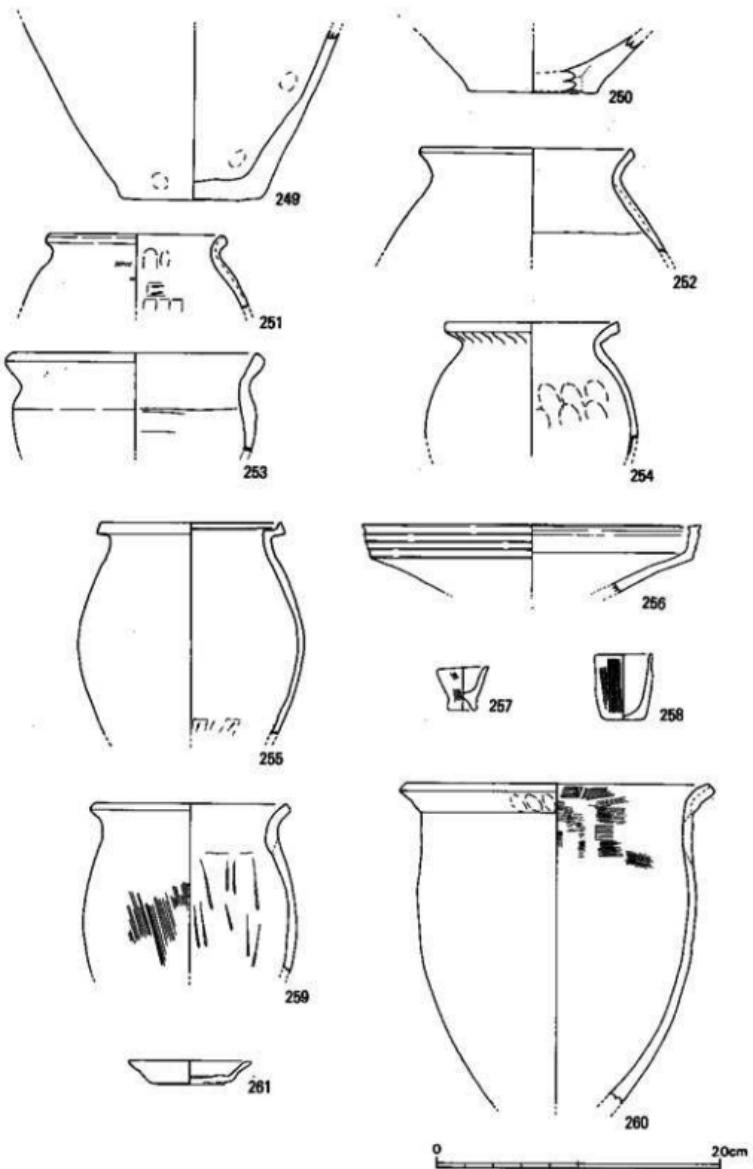
第125図 SD 2 出土遺物



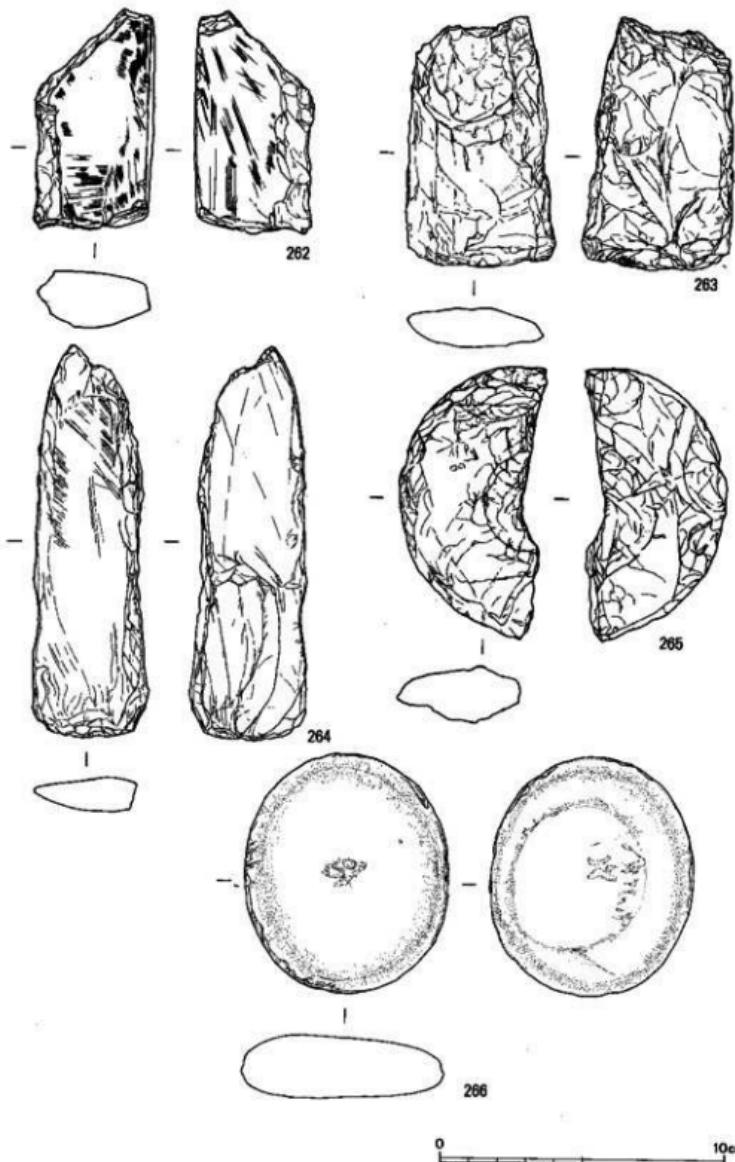
第126図 SD2出土遺物



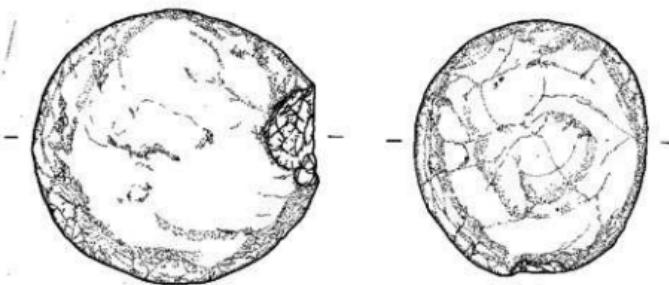
第127図 SD 2・6・7出土遺物



第128図 SD 7, P 2・7・12出土遺物



第129図 ST 3+6+8+9, SK 13出土遺物



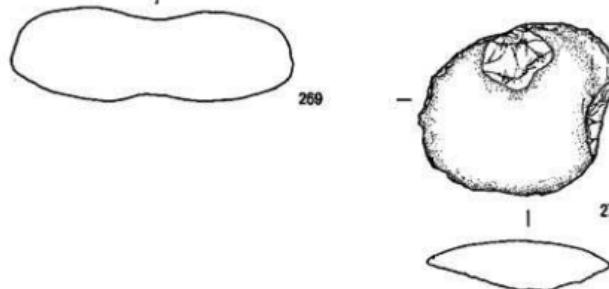
267

268

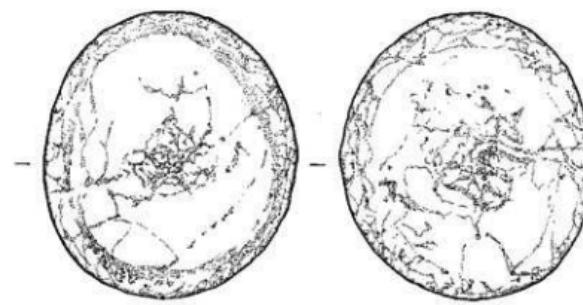


269

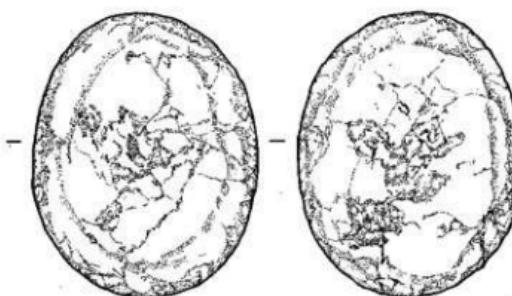
270



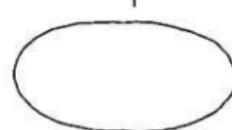
第130図 SD1・3, ST6出土遺物



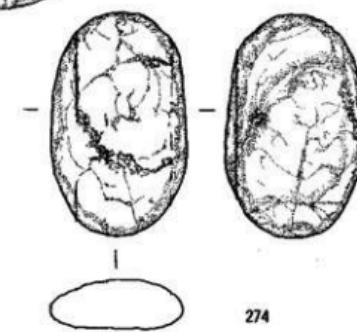
271



272



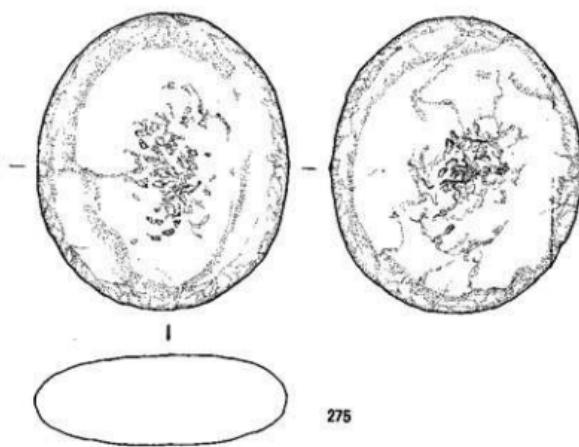
273



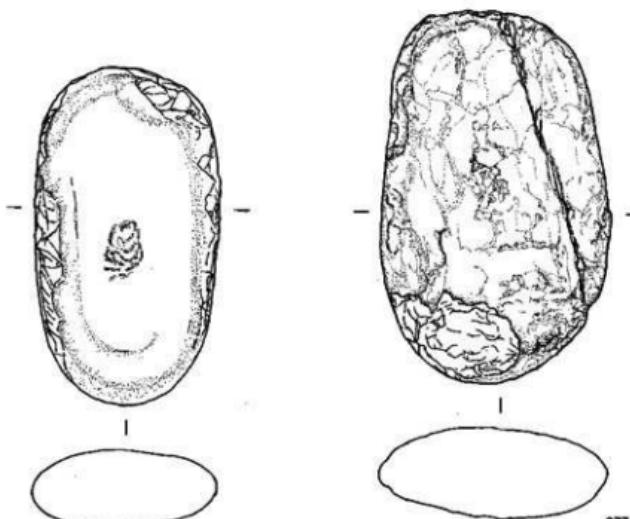
274



第131図 ST 6・9出土遺物



275

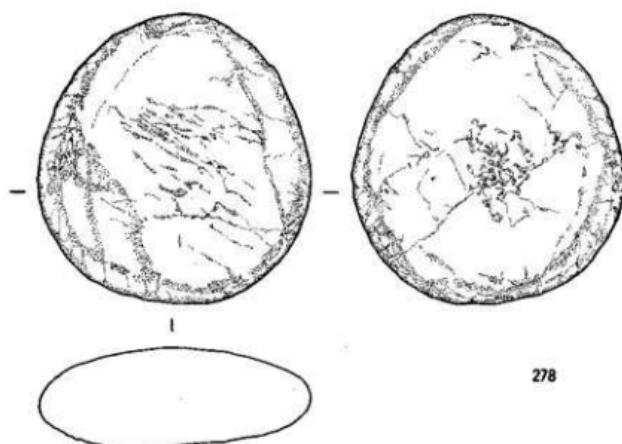


276

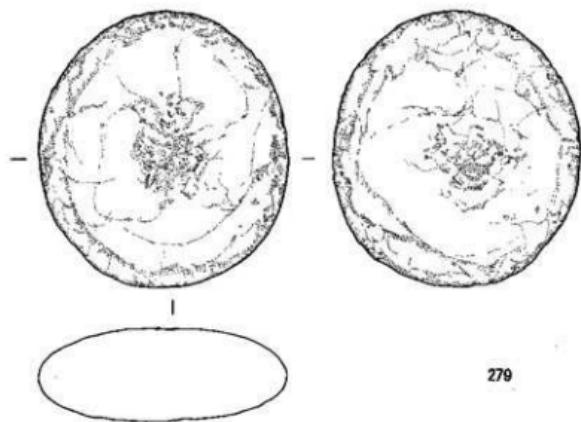
277



第132図 ST1・6出土遺物



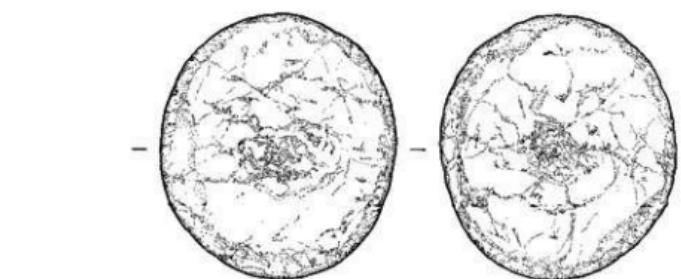
278



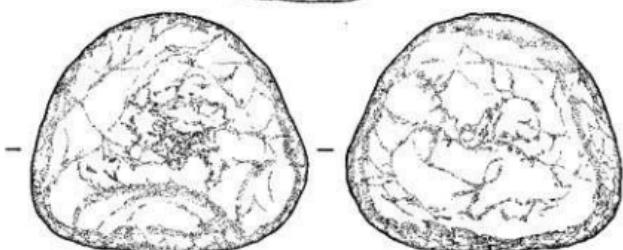
279



第133図 ST 6・9出土遺物



280



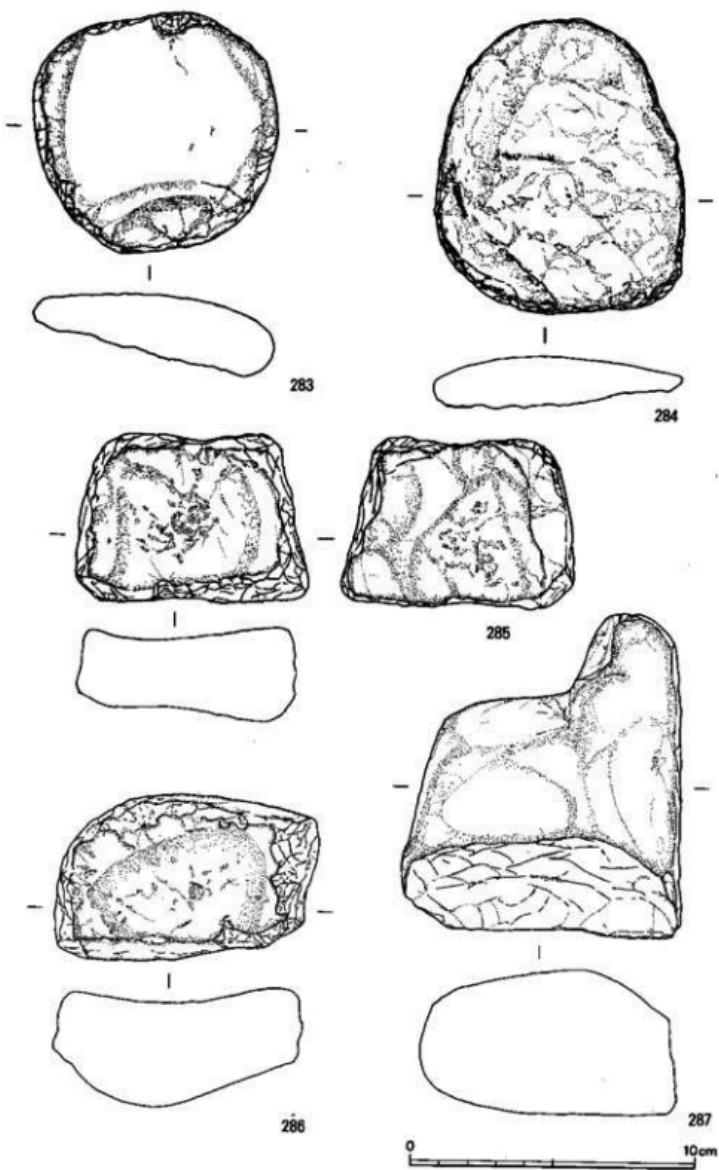
281



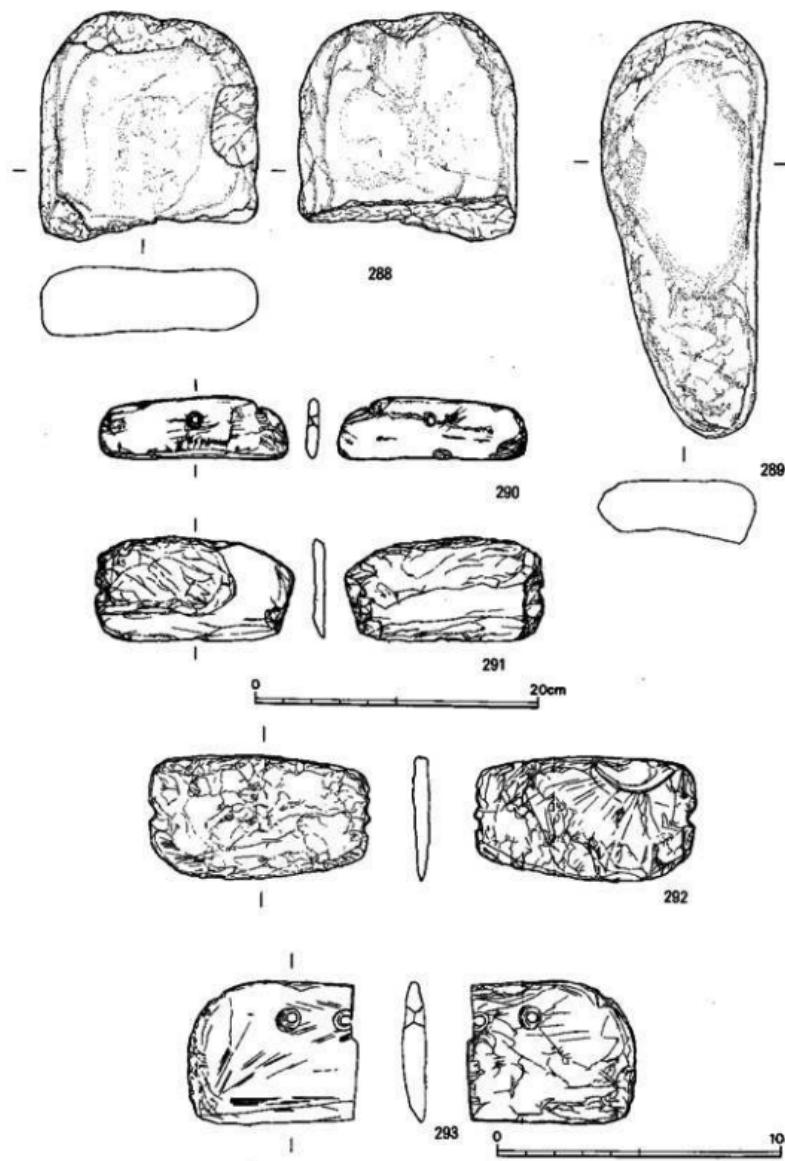
282



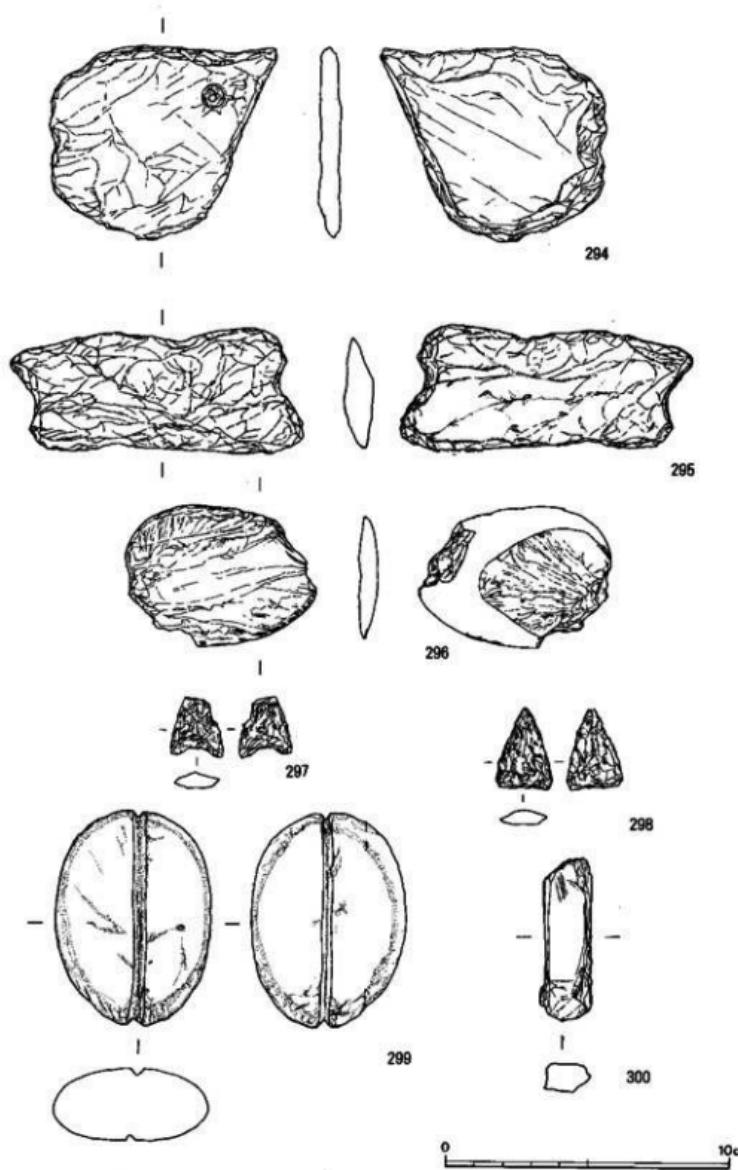
第134図 ST 7・9出土遺物



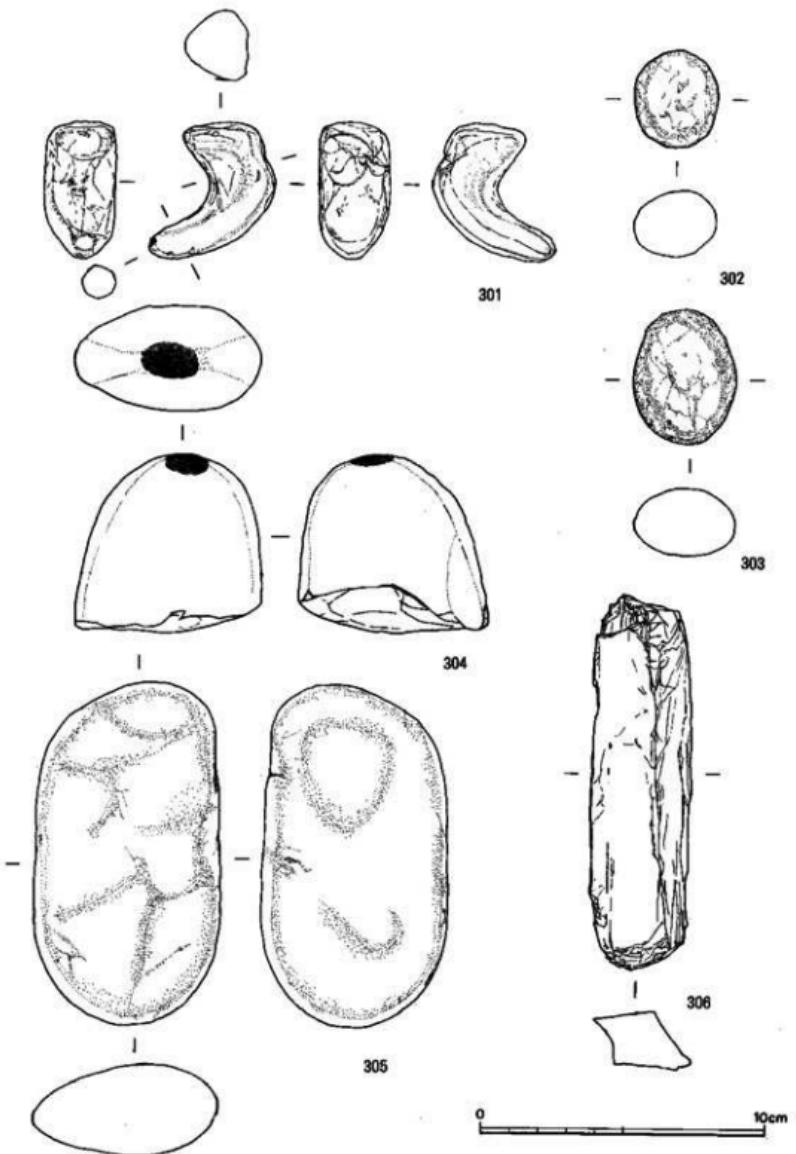
第135圖 ST 4, SK 5・9, SD 2出土遺物



第136図 ST 1・4・6・9, SD 6出土遺物



第137図 ST 1・8・9, SK 1・16, SD 2・7出土遺物



第138図 ST 1・5・6・9出土遺物



307



第139圖 ST 1出土鏡片

7. Loc. 46

Loc.46

1. 位置と調査経過

Loc.46は、空港拡張範囲の西端部を南北に走る1—2号場外周道路と第5号用水路の改修工事に伴う調査区である。改修工事範囲は、南北約300mであり、北にLoc.45(田中)、南にLoc.47(シマイテン)が存在し、字名は未通しと呼ばれている。改修計画は、現存する幅2.5mの市道を西へ移動し、幅8mに拡張するものであった。調査は、道路の移設拡張範囲を調査区として、10m間隔を基準とし4×8mの試掘グリッドを、8グリッド設定した。試掘グリッドは南からA～Hグリッドとし、南より順次調査を行った。その結果、G・Hグリッドにおいて、自然流路を1条検出したので拡張し、完掘した。他のA～Fグリッドでは、Fグリッドに溝を1条検出したのみであり、他に遺構はみられず、遺物もほとんど出土しなかった。調査期間は、昭和57年7～8月の約1ヶ月間であり、調査面積は試掘も含め347m²である。

2. 調査概要

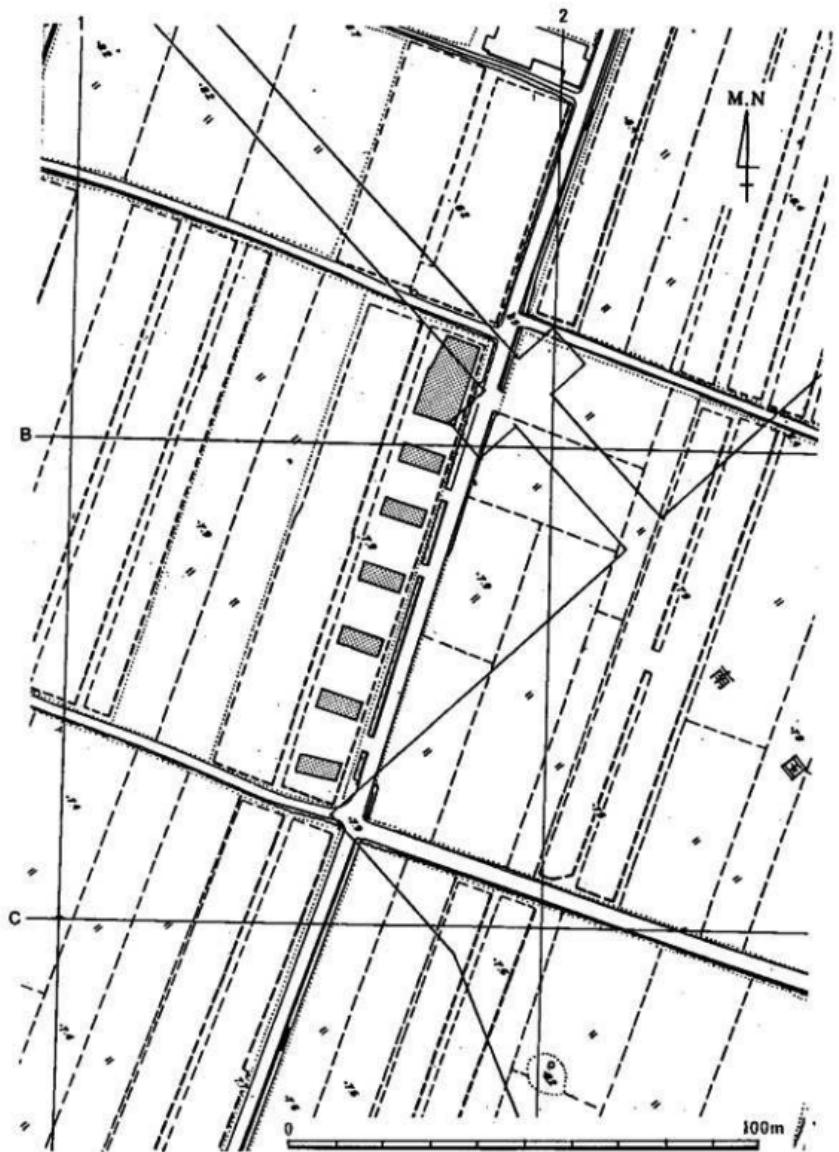
試掘グリッドの中で、A～Eグリッドまでは、遺構はまったく発見されず、遺物もほとんど出土しなかった。Fグリッドでは、小さな溝が1条検出されたが、出土遺物もなく、時期、性格ともに不明である。Gグリッドの北部とHグリッドの南部にかけて、砂層を埋土とする北東から南西へ延びるプランが検出され、自然流路の肩の部分と考えられたので、G・Hグリッドの間を拡張し、9×17mの範囲を調査区とした。調査の結果、幅3.84m、深さ0.8mを測る北東から、南北方向の自然流路(SR1)を検出し、埋土中より多量の遺物が出土した。自然流路は床面で小さく4～5条に分かれており、セクションからも一部切り合っていたが、埋土中判明しがたく、遺物も自然流路として一括り上げた。

3. 層序と出土遺物

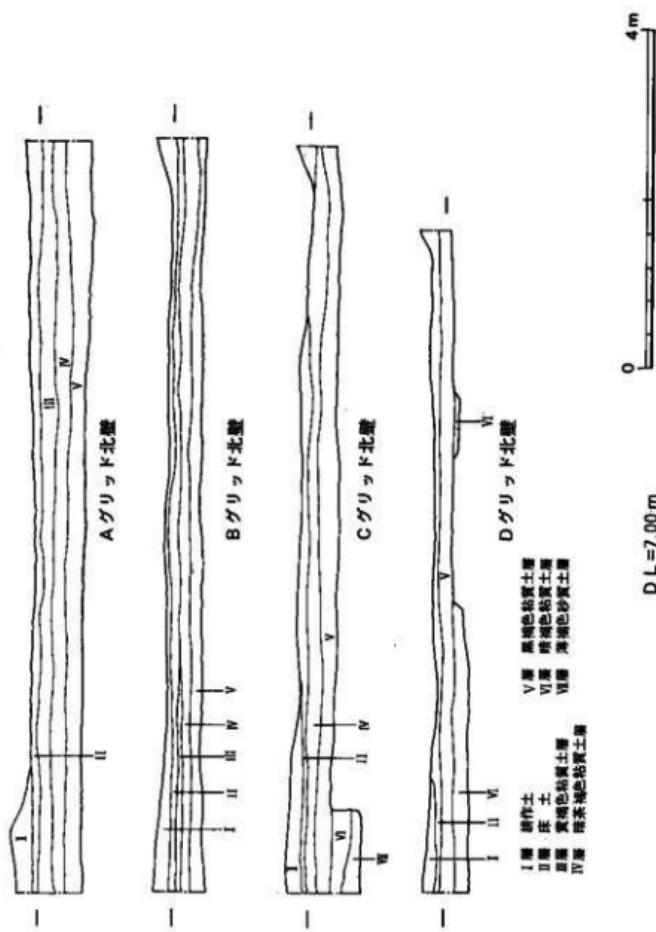
試掘グリッドも含めた基本層序は次の通りである。

- 第Ⅰ層 耕作土
- 第Ⅱ層 床土
- 第Ⅲ層 黄褐色粘質土層
- 第Ⅳ層 暗茶褐色粘質土層
- 第Ⅴ層 黑褐色粘質土層
- 第Ⅵ層 暗褐色粘質土層
- 第Ⅶ層 薄褐色砂質土層
- 第Ⅷ層 青褐色砂質土層

試掘グリッドの層序からみれば、基盤となる第Ⅶ層薄褐色砂質土層、第Ⅷ層青褐色砂質土層



第140図 調査区設定図



第141図 調査区セクション

が、南へと低く傾斜しており、第III～V層は途中から出現し、南へと厚くなっている。G～Hグリッドでは、第II層床土下に第VI層暗褐色粘質土層がみられ、Eグリッドで、第V層黒褐色粘質土層が新たに出現し、第VI・VII層は傾斜を増し低くなる。Cグリッドでは、第IV層暗茶褐色粘質土層が出現し、Bグリッドでは、第III層黄褐色粘質土層が出現している。Aグリッドでは、地表下83cmで第VI層暗褐色粘質土層が検出されている。

いずれの層位からも、出土遺物はほとんどなく、わずかに第I～II層中に土師質土器の細片を出土したのみである。

4. 遺構と遺物

Loc.46で検出された遺構は、Fグリッド検出の溝とG・Hグリッド検出の自然流路だけである。

溝

S D I

S D 1は、Fグリッドの第VI層暗褐色粘質土層上面に検出されて、方向は北東から南西へ延びており、N-58°-Eを測る。規模は、検出長10.8m、幅1m、深さ9cmを測り、断面形は非常に浅いU字形である。底面は平坦であり、埋土は第V層と同じ黒褐色粘質土層の単一層である。

出土遺物は皆無であり、時期、性格についてはまったく不明であるが、検出面、埋土からみれば、中世以前の溝と考えられる。

自然流路

S R I

S R 1は、G・Hグリッドにおいて検出され、その間を拡張し完掘した。検出面は浅く、第I層耕作土直下である。

規模は、検出長11.2m、幅7.0m、深さは最深部で0.56mを測る。方向は、北東から南西へ延びており、N-68°-Eを測る。床面は4条ほどに分かれており、またセクションをみれば、一度に埋没したものではなく、数回にわたり埋没したと考えられる。埋土は、砂層が大半を占めるが、細砂から粗砂まで混在しており、色調も赤褐色から青灰色まで分かれている。また、上面には粘質土もみられる。

出土遺物は、弥生時代前期から後期に至るまで含んでいるが、前期の遺物は少なく、中期から後期の遺物を中心にコンテナケース約10箱ほど出土している。

出土遺物の中で、前期の壺は（1～5）のみであり、中期の壺は（6～40）、後期の壺は

(41~62) である。壺は、中期から後期にかけて出土しており、中期は(63~123)、後期は(126~143)である。底部は(144~166)であるが、明らかに後期とされる底部は(164~166)である。その他に、高杯は(167~184)が出土しており、(185)は器台の脚部と考えられる。鉢は、(186、187)の2点が出土しており、(187)は、後期の小形鉢である。(188)は小形壺の蓋と思われ、(189)は把手と考えられる。

石器は、非常に少なく、無茎平基式のサヌカイト製の石鏃(193、194)2点に、石包丁未成品(190)、叩石(191)、砥石(192)が各1点出土している。

5.まとめ

Loc.46では、溝と自然流路を各1条検出し、調査した。SD1は出土遺物もなく、中世以前と推定されるのみであり、性格などについてはまったく不明である。SR1は、検出長11.2mと短いが、多量の遺物を出土した。時期的には、前期の遺物も若干出土しているが、中心は中~後期であり、特に、中期IIIから後期Iの遺物が多い。埋没時期については、後期IIの遺物も少數ながら含んでいるので、後期IIの段階で数回にわたり埋没したものである。また、SR1の方向などからみれば、北東の調査区、Loc.35・36付近の自然流路から分離した一支流と考えられる。

第22表 遺構出土土器観察表

標因番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 高さ 底径	形態・文様	手 法	備考
1	S R 1	壺	11.5 (5.4) — —	直立しわずかに開く口縁部。 口部は丸く、おさま口頂間に1条のヘラ彫沈縫を施す。	口縁部ヨコナデ。沈縫下にタテハケを施す。		
2	〃	〃	14.9 (3.4) — —	やや強く屈曲し、外反する口縁部。 口縁部は丸くおさま、口頂間に接合により有筋部を形成する。	内外面ともにヘラ彫きを施すが剥落する。		
3	〃	〃	18.4 (4.4) — —	口縁部は大きく屈曲し外反する。 口縁部は丸くおさま、口頂間に2条のヘラ彫沈縫を施す。			
4	〃	〃	14.8 (4.5) — —	直線的に小さく外反する。口縁部は丸くおさま、口頂間に3条のヘラ彫沈縫を施す。			
5	〃	〃	12.0 (4.2) — —	大きく屈やかに外反し開く。兩部に実帶を貼付、割目を施し、3条のヘラ彫沈縫を配す。 口縁部内面に倒伏文あり。	内外面ともにナデ調整。		
6	〃	〃	23.2 (2.9) — —	強く外反する口縁部の内面に3条の実帶を貼付、割目を施し、実帶間に倒伏文を配す。	口縁下外面に指擦圧痕を残し、上面に爪跡がみられる。		
7	〃	〃	17.4 (3.1) — —	緩やかに外反する貼付口縁であり、外面に継続の割目を強く施す。	内外面ともにナデ調整。		断面に後合板あり。
8	〃	〃	24.6 (1.8) — —	大きく開き外反する貼付口縁であり、下端部に割目を施す。			
9	〃	〃	17.6 (2.8) — —	直線的に開き外反する貼付口縁であり、口縁部は丸くおさまる面をなし、下端部に割目を施す。			
10	〃	〃	27.2 (5.6) — —	強く外反する貼付口縁であり、口縁部は面をなじ、端部に斜めの割目を施す。			
11	〃	〃	17.0 (3.9) — —	直立する頸部から外反する口縁部、口縁部は貼付により圧迫し、外反する面をなし、斜めの割目を施す。	内外面ともに磨耗のため不明。		
12	〃	〃	17.6 (6.9) — —	大きく外反し直口縁部。口縁部は強張し、表面に凹凸をなし、4条のヘラ彫削行文様がみられる。	頸部外面にタテハケを施す。		
13	〃	〃	18.8 (4.4) — —	強く外反する口縁部。口縁部は肥厚し、面をなす。割目を施す。	内外面ともにナデ調整。		
14	〃	〃	14.4 (2.1) — —	大きく外反する貼付口縁である。	頸部にタテハケを施す。		
15	〃	〃	16.8 (2.6) — —	直線的に開く頸部上り、やや外反する口縁部。口縁部は貼付により下方に圧迫し、内側する面をなす。	口唇部はヨコナデ。		全体に磨耗する。

擇因番号	造構番号	西種	法量 (cm) 口縁高 横幅 底径	形態・文様	手法	備考
16	S R 1	垂	19.4 (4.0) —	直立する頭部により、なめらかに外反する貼付口縁。口縁部内面はナデによりわずかに内側する。	口唇部はヨコナデ。	消耗が激しい。
17	"	"	13.2 (5.6) —	張りの少ない頭部より、穂やかに外反する貼付口縁である。口唇部はほぼ垂直な面をなす。	口縁部外面貼付帯に指頭圧痕を残し、以トナデ調整。	
18	"	"	21.1 (5.1) —	大きく穂やかに外反する貼付口縁であり、口唇部は下方へ、さらに拡張し、外傾する面をなす。	内外面ともにナデ調整。	全体に消耗する。
19	"	"	18.5 (5.5) —	穂やかに小さく外反する貼付口縁であり、口唇部はナデによりわずかに、下方へ拡張する。	外面は口縁下にわずかのタテハケを残し、内面は穂から右下がりのハケ調整を施した後にナデ調整。	口縁部外面の消耗が激しい。
20	"	"	27.4 (3.5) —	直立する頭部より強く外反する厚い貼付口縁。口縁部はやや丸味をもつた面をなし、わずかに下方へ彎曲する。	外面は口唇部にヨコハケ、頭部にタテハケを残し、内面にヨコハケを施す。貼付帯には指頭圧痕を残す。	
21	"	"	15.4 (2.5) —	直立する頭部より強く外反する。口縁下に丁度に微隆起部をもち、下部に2つの凹凸部を1本配す。口唇部外側に前突を施す。	内外面ともにナデ調整。口唇部はやや肥厚する。	思惑は弱い。
22	"	"	19.4 (2.6) —	強く外反する口縁部であり、口縁下に丁度に微隆起部をもち、頭部に2つの凹凸部を1本配す。よくおさめた口唇部下端に前突を施す。	"	"
23	"	"	18.3 (2.8) —	大きく外反する口縁部であり、口縁下に丁度に微隆起部をもち、下部に3つの凹凸部を1本配す。よくおさめた口唇部下端に前突を施す。	"	"
24	"	"	18.4 (1.9) —	大きく外反する口縁部であり、口縁下に丁度に微隆起部をもち、下部に3つの凹凸部を1本配す。よくおさめた口唇部下端に前突を施す。	"	"
25	"	"	17.2 (4.0) —	直立する頭部より強く外反する。口縁下に丁度に微隆起部をもち、下部に3つの凹凸部を1本配す。口唇部下端には刻印を施す。	"	"
26	"	"	12.0 (1.9) —	直線的に開く口縁部。口唇部は上方に拡張し、外傾する面をなし、4条の横筋状文を施す。	内外面ともに丁寧なナデ調整。	
27	"	"	10.0 (5.3) —	直立する頭部よりなめらかに外反する貼付口縁。貼付帯に穂のヘラ筋の横筋文がみられる。	内外面ともにナデ調整。	外面に黒斑あり。
28	"	"	9.2 (4.0) —	直線的に開く貼付口縁。貼付帯に穂のヘラ筋の横筋文を施し、下部には小さな貼付文がみられる。さらに下部には1条のヘラ筋化横筋文を施す。	内外面ともに消耗のため不明。	
29	"	"	17.2 (2.3) —	直線的に開き、頭部は強く屈曲し、小半径に伸びる。上面は圓む面をなし、外面は直線的な面となる。	外面にタテハケを残し、内外面ともにナデ調整。	
30	"	"	15.5 (1.8) —	大きく、直線的に開く口縁部。口唇部はやや下方に拡張し凹む面をなす。	口唇部はヨコナデ。以下ナデ調整。	

標図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 脣部 脣底 底径	形態・文様	手 法	備 考
31	BR 1	壺		15.2 (4.2) —	底やかに外反する口縁部。口唇部にはほぼ垂直な面をなし、小さな網状文を施す。	口縁部はヨコナデ。以下外表面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。	頸部にかけて薄くなる。
32	"	"		20.9 (2.9) —	大きく外反する口縁部。口唇部にはほぼ垂直な面をなす。	口縁部はヨコナデ。口縁下外表面に指頭圧痕を残す。	
33	"	"		29.3 (5.5) —	強く外反し開く口縁部。口唇部はやや肥厚し、凹む面をなす。	口縁部はヨコナデ。以下外表面とともにナデ調整。	
34	"	"		16.3 (6.5) —	底やかに外反し開く口縁部。口唇部表面をなし、羽目を施す。口縁下にハケ付工具による羽状文。底部には浅い凹部がみられる。	口縁部はヨコナデ。以下内表面にヨコハケを施す。	
35	"	"		12.6 (3.6) —	底やかに外反する口縁部。口唇部は上下に拡張し、3条の回線文を施す。	内外面ともにナデ調整。	
36	"	"		15.4 (2.8) —	直立気味の頸部より外反する口縁部。口唇部は記述し、下に拡張し、2条の回線文を施す。	外表面にハケ目を残しナデ調整。	
37	"	"		11.3 (8.2) —	直立する頸部より小さく外反する口縁部。口唇部は上下に拡張し、2条の回線文を施す。	頸部外表面にタテハケを施し、内面には指頭圧痕を残す。	
38	"	"		13.0 (7.6) —	直立気味の頸部より僅やかに外反する口縁部。口唇部は上下に拡張し、ナデにより偽凹部をもつ。	口縁部ヨコナデ。以下外表面ともにナデ調整。	
39	"	"		13.6 (3.9) —	くの字状に屈曲する口縁部。口唇部はわずかに記述し、2条の回線文を施す。	内外面ともにナデ調整。	
40	"	"		13.1 (4.0) —	大きく外反する口縁部。口唇部は丸味をあげる面をなす。	外表面にわずかにハケ目を残し、磨耗する。	
41	"	"		13.6 (10.7) 17.0	最も深く脣部上方にもち、強く底の上につけた形の字状に張り外反する口縁部。口唇部は上方に拡張し2条の回線文を施す。	口縁部はヨコナデ。外表面は肩部部の上にタテハケを残し、以下、底と底面部のへラ巻きを施す。内面は底面部のやや下より左方側、底部は上へのへラ割り。	脚の可動性大。
42	"	"		14.0 (7.7) —	より張りをもつ脣部より、底やかに外反する口縁部。口唇部は下方に拡張し、外傾する面をなす。	口縁部はヨコナデ。以下外表面はタテハケを施し、内面は指頭圧痕を残す。	
43	"	"		17.8 (5.0) —	強く外反する口縁部。口唇部は垂直な面をなす。	口縁部はヨコナデ。頸部外表面は斜めのへラ巻きを施し、内面はヨコハケ。	
44	"	"		13.7 (4.0) —	直立気味の頸部より底やかに外反する口縁部。口唇部は丸味をあげた面をなし、下方にやや拡張する。	口縁部はヨコナデ。頸部外表面は一部ヨコハケの下にタテハケを施し、内面はヨコハケを施す。	
45	"	"		13.0 (3.6) —	直立気味の頸部より底やかに外反する口縁部。口唇部は小さな面をなす。	頸部外表面にタテハケを施す。	全体に磨耗する。

辨別番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 基部 厚さ	形態・文様	手法	備考
46	SR 1	壺	16.8 (6.0) —	縦やかに外反し開く口縁部。口唇部は上下に膨張し、外傾する面をなす。	口縁部はヨコナデ。	全体に磨耗する。
47	〃	〃	15.8 (8.8) —	よく張った頬部から、緩やかに外反する口縁部。口唇部はやや凹む垂直な面をなす。	口縁部はヨコナデ。内外面に指頭圧痕を残す。	
48	〃	〃	15.6 (10.2) —	直立気味の頬部より緩やかに外反する口縁部。口唇部はやや膨張し、外傾する面をなす。	口縁部はヨコナデ。以下内外面ともに磨耗する。内面に指頭圧痕を残す。	
49	〃	〃	16.0 (3.2) —	直立する頬部より直線的に開く。口唇部は下にやや膨張し、外傾する面をなす。	口縁部はヨコナデ。	
50	〃	〃	13.8 (5.5) —	直立する頬部より緩やかに外反する口縁部。口唇部はやや凹む面をなす。	—	
51	〃	〃	12.5 (8.2) —	縦やかに外反し直立する口縁部。口唇部は外傾する面をなす。	内外面ともに磨耗のため不明。	断面および内面に接合痕を残す。
52	〃	〃	15.3 (12.9) —	縦やかに開く頬部より直立し、わずかに外反する口縁部。口唇部は面をなし上端をナデ上げる。	口縁部はヨコナデ。宛側はタテハケを施し、内面に指頭圧痕を残す。	上端部内面に直線あり。
53	〃	〃	10.1 (10.7) —	直立し、わずかに外反する口縁部。	外面はタテハケを施すが、内面は磨耗のため不明。	
54	〃	〃	11.8 (4.7) —	直立する頬部より、直線的に開く口縁部。口唇部は丸味をおびた面をなす。	内外面ともに磨耗のため不明。	
55	〃	〃	8.7 (3.9) —	直線的に開く口縁部。口唇部はやや内傾する面をなす。	—	
56	〃	〃	18.8 (5.7) —	直線的に細くわずかに内湾し終わる口縁部。口唇部は外傾する面をなす。	内外面ともにナデ調整。	
57	〃	〃	13.0 (5.4) —	直立気味に開き、尖口状に内湾する口縁部。口唇部は丸くおさめる。	頬部外側に細いタテハケを施し、内面は右下がりのハケ目がみられる。	
58	〃	〃	12.5 (6.4) —	直立気味に開き、大きく内湾する口縁部。口唇部は丸くおさめる。	頬部外側にタテハケを施す。内面は磨耗のため不明。	
59	〃	〃	— (11.7) —	より張りをもつ頬部から大きく外反し開く頬部。	外面全面にタテハケを施し、内面には指頭圧痕を残しナデ調整。	
60	〃	〃	— (7.0) 19.4	最大径で強く屈曲する極平な頬部であり、屈曲部に突帯を貼付シナデにより凹む面をなす。	内面に指頭圧痕を残す他は磨耗のため不明。	断面に接合痕あり。割声内系の長張者である。

検査番号	造機番号	器種	法量 (cm)	口縫部 の形状 底辺	形態・文様	手法	備考
61	S R 1	皿	10.0 9.8	(10.0) — —	やや大きな平底から僅やかに立ち上る。	内外面ともに磨耗のため不明。	
62	"	"	4.1 4.2	(4.1) — —	小さな平底から大きく、緩やかに開く。	外面に一筋、横方向へのうねりがみられ、内面には指圧痕およびヨコハケがみられる。	
63	"	壺	15.0 (2.6) — —	強く風巻し、外反する口縫部。口唇部は丸味を帯びた面をなし、下唇部に斜目を施す。	内外面ともにナデ調整。		
64	"	"	14.8 (5.5) — —	唇の外に外反する粘付口縫部。外面に唇の斜行沈縫を施し、下に列点文を施す。	唇部内面に横方向の指ナデがみられる。	唇が開い。	
65	"	"	15.8 (5.3) — —	くの字状に強く外反し、扇形して開く口縫部。口唇部は肥厚し、下唇部に斜目を施す。頭部に列点文を配す。	頭部外面にタテハケを施し、内面はナデ調整。		
66	"	"	15.2 (4.2) — —	くの字状に緩やかに外反する口縫部。口唇部は上方に小さく肥厚し、下唇部に斜目を施す。頭部に斜行文を配す。	口縫部はヨコナデ。口縫下外面はタテハケを施し、内面は唇部以下を削り、ナデ調整。	口縫部から肥厚する。外面に横の付着あり。	
67	"	"	17.6 (3.0) — —	強く細めし外反する口縫部。口唇部はやや外傾する面をなす。	内外面ともにナデ調整。	口縫下外面に強の付着あり。	
68	"	"	14.8 (3.6) — —	くの字状に肥厚し外反する口縫部。口唇部は外傾する面をなす。	内外面ともに磨耗のため不明。		
69	"	"	19.0 (8.7) — —	直立兒株の胸郭より、強く屈曲し、左にく字状をなす。口唇部は子字により、やや上下に張張し面をなす。	"		
70	"	"	18.7 (4.1) — —	直線的に内傾する胸郭より強く外反する口縫部。口唇部は丸くおさめる。	"		
71	"	"	15.1 (3.7) — —	くの字状に強く回曲する口縫部。口唇部は外傾する面をなす。	内外面ともにナデ調整。		
72	"	"	17.8 (3.5) — —	直立兒株の胸郭より強く屈曲し、左にく字状をなす。口唇部は丸味を帯びた面をなす。	"		
73	"	"	21.2 (5.7) — —	緩やかに強く外反する口縫部。口唇部はやや肥厚し、2条の凹縫文を施す。	口縫下外面に指圧痕を残し、内外面ともにナデ調整。		
74	"	"	16.7 (4.7) — —	くの字状に強く外反する口縫部。口唇部は下方へ軽張し、2条の凹縫文を施す。	口縫部内面にわずかにヨコハケを残し、ナデ調整。		
75	"	"	18.6 (4.4) — —	くの字状に強く外反し、やや圓錐的で開く。口縫部は下方へ軽張し、2条の凹縫文を施す。	内外面ともにナデ調整。		

検証番号	通緝番号	器種	法量 (cm)	口唇 器高 脣厚	形態・文様	手 法	備考
76	S R 1	圓	17.0 (3.4) —	くの字状に強く屈曲し内面に棱をもつ。口唇部は肥厚し、2条の回線文を施す。	口唇下外面にタテハケを施し、内面はナゲ調査。		
77	"	"	19.5 (4.1) —	柔やかに外反し、口唇部は上方に延張。2条の回線文を施す。	内外面ともにナゲ調査。		
78	"	"	15.2 (5.2) —	くの字状に強く屈曲し、内面に棱をもつ。口唇部は上下に延張し、2条の回線文を施す。	"		
79	"	"	15.5 (3.6) —	くの字状に強く屈曲し、内面に棱をもつ。口唇部は肥厚し2条の回線文を施す。	"		
80	"	"	12.1 (6.3) —	なめらかに強く外反し、口唇部は肥厚させ、2条の回線文を施す。	口唇下外面にタテハケを施し、内面はナゲ調査。		
81	"	"	14.4 (10.4) 17.0	強く張った唇部より、なめらかに外反する口唇部。口唇部は上下に延張し3条の回線文を施す。	唇部外面に斜めのハケ目を施し、内面ともにナゲ調査。		
82	"	"	13.2 (5.1) —	よく張った唇部より強く屈曲し、口唇部は肥厚させ、2条の回線文を施す。	唇部外面にハケ目を若干施し、内面ともにナゲ調査。		
83	"	"	14.1 (5.8) —	唇部に強く張った唇部から強く屈曲する短かい口唇部。口唇部は肥厚し、2条の回線文を施す。	内外面ともにナゲ調査。		
84	"	"	16.1 (7.6) —	よく張った唇部より多くの字状に外反し、口唇部は上方に延張する。2条の回線文を施す。	唇部外面にハケ目を施し、内面ともにナゲ調査。		
85	"	"	14.2 (9.8) —	唇部に強く張りをもつ唇部より多くの字状に外反する口唇部。口唇部は下方へ延張し、2条の回線文を施す。	唇部外面はタテハケを施す。内面は上方唇部に、上方向のヘラ削りがみられる。		
86	"	"	13.7 (4.5) —	くの字状に強く屈曲し、口唇部は上方へ延張し、2条の回線文を施す。	内面上唇部から、左方向のヘラ削りがみられる。	器壁が非常に薄い。	
87	"	"	13.7 (2.3) —	くの字状に強く屈曲し、口唇部は上方へ延張し、2条の回線文を施す。	内外面ともにナゲ調査。		
88	"	"	14.4 (3.6) —	直立気味の唇部より強く屈曲し、口唇部は大きく延張し2条の回線文を施す。	"		
89	"	"	21.4 (3.8) —	唇部より強く水平に屈曲し口唇部は上方へ大きめに張る。3条の回線文を施す。口唇部内面も、回線状をなす。	口唇下外面にハケ目をわずかに施し、内面ともにナゲ調査。		
90	"	"	17.9 (3.3) —	なめらかに大きく外反し、口唇部は上方へ延張し、2条の回線文を施す。口唇部内面も回線状をなす。	口唇下外面にハケ目を施し、内面ともにナゲ調査。 口唇部内面にヘラ圧度あり。		

測定番号	造形番号	器種	法量 (cm)	口唇 器高 屈曲 屈度	形態・文様	手 法	備 考
91	S R 1	櫛	16.0 (3.2) — —	水平に強く屈曲する口縁部。 口唇部は肥厚し、2条の凹縮文を施す。	口縁下外側に斜めの長いハケ目を施し、内面ともにナゲ調整。		
92	"	"	14.8 (5.0) — —	水平に強く屈曲する口縁部。 口唇部は肥厚し、上方へ拡張、2条の凹縮文を施す。	内外面ともにナゲ調整。		口縫部および脣部に黒斑あり。
93	"	"	16.3 (5.8) — —	直線的に内側する脣部より強く水平に屈曲する口縁部。口唇部は上方に拡張し、2条の凹縮文を施す。	"		脣外部に黒斑あり。
94	"	"	9.8 (5.5) — —	よく第1脚部から多くの字状に外反し、口唇部は上方に拡張し、2条の凹縮文を施す。	内面に指面圧痕を施し、内外面ともにナゲ調整。	"	
95	"	"	13.4 (2.5) — —	強く屈曲し、直線的に開く口縫部、 口唇部は上方に大きく上方に拡張し、2条の凹縮文を施す。	内外面ともにナゲ調整。		
96	"	"	14.0 (2.1) — —	強く屈曲し、内面に横をもつ口縫部、 口唇部は大きく上方に拡張し、3条の凹縮文を施す。	"		
97	"	"	24.0 (1.7) — —	強く水平に屈曲し、口唇部は上方へ折り曲げ拡張、2条の凹縮文を施す。	"		
98	"	"	16.6 (3.3) — —	多くの字状に強く屈曲し、口唇部は上方へ拡張、2条の凹縮文を施す。	"		
99	"	"	14.4 (9.6) — —	なだらかに立ち上がる脚部から緩やかに外反する。口唇部は下方に生下し抵抗する。	脣部内外面にタテハケを施した後 にナゲ調整。		外面に大きく黒斑あり。
100	"	"	14.0 (6.4) — —	直線的に内側する脣部より緩やかに外反する。口唇部は下方に生下し抵抗する。	脣部外面にわずかにタテハケを施し、内外面ともにナゲ調整。		
101	"	"	12.8 (2.7) — —	非常に強く屈曲し、開く口縫部、 口唇部は上方へ拡張しやや丸みをもびた面をなす。	内面は脣部やや下より右方向へのうれりがみられる。外面はナゲ調整。		
102	"	"	14.5 (3.0) — —	緩やかに外反する口縫部、口唇部は上方に拡張し凹む面をなす。	口縁下外面に縦方向のハケ目を施し、内外面ともにナゲ調整。		
103	"	"	13.4 (3.2) — —	緩やかに外反し、口唇部は直立する。 外側は凹む面をなす。	口縁下外面に斜めのハケ目をわずかに施し、内外面ともにナゲ調整。		
104	"	"	15.0 (4.0) — —	直線的に内側する脣部より強く水平に屈曲する。口縫部は上下に拡張し、利む面をなす。	内外面ともにナゲ調整。		
105	"	"	16.3 (3.5) — —	緩やかに外反し、口唇部は凹む面をなし直立する。	脣部外面に斜めのハケ目を施し、内外面ともにナゲ調整。		

辨認番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口器部 脇径 底径	形態・文様	手 法	備考
106	SR 1	壺	12.4 (5.6) — —	底盤的に内傾する口器部より強く水平に屈曲し、口器部は凹む面をなす。	内面は上縁部から左方向へのラブリがみられる。外面はナデ調整。	
107	〃	〃	19.6 (4.4) — —	なめらかに外反し口器部は上方に底張、凹む面をなす。	口器部外面に斜めのハケが施され、内面はナデ調整。	
108	〃	〃	14.4 (3.0) — —	くの字状に外反し、口器部は上方に底張、脇部内面に棱をもつ。	内外面ともにナデ調整。	器壁が薄い。
109	〃	〃	15.5 (6.3) — —	緩やかに外反し、口器部は上方に底張、強いナデにより偽回線をなす。	〃	
110	〃	〃	19.4 (3.0) — —	強く屈曲し聞く口器部。口器部は上下に底張し、ナデにより偽回線をなす。	〃	
111	〃	〃	19.6 (6.0) — —	くの字状に緩やかに外反し口器部は上下に底張、ナデにより偽回線をなす。	口器部外面にタテハケを残し、内外面ともにナデ調整。	
112	〃	〃	13.6 (3.5) — —	くの字状に外反し、口器部を上下に底張、外傾する面をなす。	内外面ともにナデ調整。	
113	〃	〃	16.6 (4.2) — —	短かく屈曲し、外反する口器部、口器部は下方に底張し、やや凹む面をなす。	口器部外面にタテハケを残し、内外面ともにナデ調整。	
114	〃	〃	17.4 (6.8) — —	くの字状に強く屈曲し、口器部は上下に底張、外傾する面をなす。	内面に指印状痕を残し、外面ともにナデ調整。	
115	〃	〃	13.2 (6.3) — —	くの字状に強く外反し、口器部は上方へのや底張、凹む面をなす。	内外面ともにナデ調整。	
116	〃	〃	14.8 (9.0) — —	珠形に強く張る制御から短かく強く屈曲する口器部。口器部はやや厚張し、上開部に斜めの点状文を施す。	口器部はヨコナデ。口器部外面にタテハケを施し、内面には上開部に複合痕がみられ、以下左方向へのラブリが行なわれる。	断面に複合痕がみられ、外面に原底あり。
117	〃	〃	17.5 (6.3) — —	くの字状に強く屈曲し、内面に棱をもつ。口器部はわずかに底張し凹む面をなす。	内外面ともにナデ調整。	口器部に比べ口底部は薄い。
118	〃	〃	14.5 (5.0) — —	くの字状に強く屈曲する口器部。口器部は上方へ肥厚し凹む面をなす。	口器部外面は強くナデが施され、内面はタテハケを残す。内面はナデ調整。	
119	〃	〃	15.6 (4.8) — —	強く張る制御よりくの字状に外反し口器部はやや厚張する。	口器部外面に斜めのハケ調整を施し、内面はナデ調整。	
120	〃	〃	17.2 (5.6) — —	珠形に強く張りをもった制御から、強く屈曲し外反する。口器部はやや凹む面をなす。	内外面ともにナデ調整。	

標記番号	造構番号	器種	法量 (cm)	口唇 基部 脣厚 脣距	形態・文様	手 法	備 考
121	S R 1	櫻	18.0 (9.3) — —	よく強った唇部よりくの字状に外 反する口縁部。口唇部はやや肥厚 し凹む面をなす。	外面はナデ調整。内面は上脣部に 上方向へのヘラ削りがみられる。		
122	"	"	17.0 (15.2) 21.8	蝶形の張りの強い唇部から強く唇 当し外反する。口唇部はやや肥厚 し、凹む面をなす。	唇部外面全面にタテハケを施し、 上脣部内面にも斜めのハケ目がみ られる。		
123	"	"	18.7 (8.8) — —	くの字状に強く屈曲する口縁部。 口唇部は凹む面をなす。	唇部外面にタテハケを施し、内面 は口縁部にヨコハケ、脣部に斜め のハケ目がみられる。		
124	"	"	22.2 (4.0) — —	脣やかに外反する口縁部。口唇部 は肥厚しやや凹む面をなす。	口縫下外面に指根压痕を残し、タ テハケを施すが、磨耗する。		
125	"	"	19.4 (3.6) — —	短かく強く凹曲し、口唇部はやや 凹む面をなし外縫する。	内外面ともにナデ調整。		
126	"	"	16.1 (3.6) — —	なめらかに強く外反し、口唇部は やや凹む垂直な面をなす。	口縫下外面にタテハケを施す。 内面はナデ調整。		
127	"	"	12.6 (2.3) — —	短かく強く屈曲し口唇部は丸味を おびた凹む面をなす。	内外面ともにナデ調整。		
128	"	"	16.7 (3.5) — —	なめらかに強く外反し、口唇部は 垂直な面をなす。	口縫下外面にタテハケを施し、内 面はナデ調整。	口縫部外面に 黒斑あり。	
129	"	"	16.0 (4.4) — —	くの字状に強く外反し、口唇部は やや丸味をおびた垂直な面をなす。	内外面ともにナデ調整。		
130	"	"	13.0 (3.8) — —	くの字状に強く外反し、内面に複 数をもつ。口唇部は上下にやや拡張 し垂直な面をなす。	唇部外面にタテハケ、内面にヨコ ハケを施すが、磨耗する。		
131	"	"	13.5 (5.2) — —	脣やかに外反し、口唇部は下方に 拡張、外縫する面をなす。	内外面ともに磨耗のため不明。		
132	"	"	11.4 (3.6) — —	なめらかに強く外反し、口唇部は 肥厚し、丸味をおびた面をなす。	唇部外面にタテハケ、内面にヨコ ハケを施すが磨耗する。		
133	"	"	10.4 (4.2) — —	くの字状に脣やかに外反し、口唇 部は下方にやや拡張し、外縫する 面をなす。	口縫下外面にタテハケを施すが磨 耗する。		
134	"	"	20.4 (2.9) — —	くの字状に強く屈曲し、口唇部は 肥厚し、外縫する面をなす。	内外面ともにナデ調整。		
135	"	"	12.2 (6.2) 14.4 — —	やや扁平なよく張った唇部より、 くの字状に脣やかに外反する。 口唇部はやや肥厚し外縫する面を なす。	内面は上脣部から左方向へのヘラ削 りがみられ、外面はナデ調整。		

押出番号	造機番号	基 標	法 装 (cm)	口 槻 高 度 前 後 差 値	形 態・文 様	手 法	備 考
136	S R I	■	12.4 (5.6) — —	くの字状に緩やかに外反し、口唇部は外傾する面をなす。	内外面ともにナゲ調整。		
137	"	×	15.5 (6.0) — —	張りの少ない側部よりくの字状に外反する。口唇部は丸味をおびた面をなす。	内外面ともにナゲ調整であるが、斜めする。		内面に異常あり。
138	"	×	16.4 (10.2) 16.1 — —	大きく外反し聞く口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし側部の張りは少ない。	外面全面にタテハケを施し、内面は口縫部にヨコハケ、側面に指端江模を残す。		側部に異常あり。
139	"	×	15.2 (2.5) — —	緩やかに外反する口縫部。口唇部はやや回む面をなす。	口縫下外面にタテハケを施す。内面はナゲ調整。		
140	"	×	16.4 (4.2) — —	緩やかに外反し、大きく聞く。口唇部は丸味をおびた面をなす。	内外面ともに磨耗のため不明。		
141	"	×	13.1 (3.0) — —	緩やかに外反し、口唇部はやや内向気味に面をなす。	口縫部はヨコナダ。		
142	"	×	11.7 (5.2) — —	緩やかに小さく外反し、口唇部はやや回む面をなす。側部の張りは弱い。	口縫部はヨコナダ。以下磨耗のため不明。		側部の基準が弱い。
143	"	×	13.3 (4.5) — —	緩やかに外反し、口唇部は丸味をおびた面をなす。	上唇部外面に平行の印目を薄く残す。		
144	"	×	— (3.7) 4.3	しっかりとした上げ底から直線的に立ちあがる。	外面に指頭圧痕を残す。		側部の基準が弱い。
145	"	×	— (2.2) 5.5	底面全体がやや回む平底から丸味をおび小さくしゃくれ立ち上がる。	内外面ともにナゲ調整。		
146	"	×	— (2.3) 6.3	平底から小さくしゃくれ立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		全体に基準が弱い。
147	"	×	— (2.2) 6.4	底面全体が、やや回む平底から直立気味に立ち上がる。	"		
148	"	×	— (3.8) 6.8	平底から丸味をおび立ち上がる。	内外面ともにナゲ調整。		底面に接合痕あり。
149	"	×	— (4.3) 5.8	強い上げ底から丸味をおび直線的に立ち上がる。	外面にタテハケを施し、内面はナゲ調整。		底面に接合痕あり。
150	"	×	— (4.5) 4.2	強い上げ底からやや内向気味に立ち上がる。	内外面ともにナゲ調整。		

測定番号	遺構番号	器種	法値 (cm)	口径 器高 脚径 底径	形態・文様	手 法	備 考
151	SR 1	壺	<u>(3.3)</u> <u>6.8</u>		しっかりとした平底。	外面にハケ目をわずかに残し、内外面ともにナゲ調整。	
152	"	"	<u>(4.0)</u> <u>5.3</u>		底面全体が凹む平底から小さくしきれ立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	
153	"	"	<u>(4.9)</u> <u>4.5</u>		中央部が、やや凹む平底からならかに立ち上がる。	"	
154	"	"	<u>(3.5)</u> <u>6.8</u>		しっかりとした平底から直線的に開き立ち上がる。	内外面ともにナゲ調整。	
155	"	"	<u>(4.5)</u> <u>6.8</u>		非常に厚い平底から直線的に開き立ち上がる。	外面にタテハケを施す。	
156	"	"	<u>(4.9)</u> <u>6.8</u>		底面全体がやや凹む平底から直線的に開き立ち上がる。	"	
157	"	"	<u>(4.5)</u> <u>6.4</u>		"	内面に右方向へのヘラ削りがみられる。	
158	"	"	<u>(18.6)</u> <u>20.2</u> <u>7.8</u>		中央部が凹む平底から丸味をおびながら立ち上がる。底部の張りは少ない。	外面全面にタテハケを施し内面底部近くにヘラ削りがみられる。	底部内面に黒斑あり。
159	"	"	<u>(6.5)</u> <u>5.1</u>		中央部がやや凹む平底から直立し立ち上がり。ならかに開く。	内外面ともに磨耗のため不明。	
160	"	"	<u>(6.3)</u> <u>7.0</u>		しっかりとした平底から丸味をおび小さくしきれ立ち上がる。	外面にタテハケを施す。	
161	"	"	<u>(7.8)</u> <u>7.6</u>		底面全体が強く凹む上底から直線的に開き立ち上がる。	内面に指頭圧痕を残す。	磨耗が激しい。
162	"	"	<u>(7.2)</u> <u>6.0</u>		しっかりとした平底から丸味をおび立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	
163	"	"	<u>(18.9)</u> <u>23.4</u> <u>7.2</u>		底面全体が強く凹む上底からならかに立ち上がり。脚部はあまり強く張らない。	外面にタテハケを施し、内面は下脚部に上方脚への幅広いヘラ削りがみられる。	
164	"	"	<u>(7.3)</u> <u>—</u>		やや厚みをもつ丸底である。	外面に平行切目を残す。 内面はヨコハケを施す。	
165	"	"	<u>(4.6)</u> <u>6.1</u>		平底から丸味をおび立ち上がる。	外面にやや右下の平行切目を残す。 内面には指頭圧痕を残す。	外面に黒斑あり。

標因番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 底径	形態・文様	手法	備考
166	SR 1	甌	— (8.3) 15.0	—	縁やかに開く丸底を呈すると思われる。	内面にハケ目を残すが、外面は磨耗のため不明。	
167	“	高杯	20.6 (3.0) —	—	直立する口縁部外面に3条の印繩文を施す。	内外面とも磨耗のため不明。	
168	“	“	16.4 (3.9) —	—	やや深い杯底から口縁部は直立し、外面に4条の浅い印繩文を施す。	—	
169	“	“	18.4 (3.6) —	—	内側気味に直立する口縁部。外面は口唇部に1条の印繩文をもち、下部はやや閉む傾向をなす。	内外面ともにナゲ調査。	
170	“	“	26.8 (3.2) —	—	浅い杯底から緩やかに短く立ち上がる。	—	
171	“	“	23.2 (4.0) —	—	やや深い杯底から強く屈曲し外反する口縁部。外面にも縫をもつ。口唇部上面に2条の印繩文を施す。	—	
172	“	“	21.0 (3.7) —	—	やや深い杯底から直立し立ち上がる。外面は強く外反し縫をなす。	—	
173	“	“	25.0 (4.5) —	—	浅い杯底から強く屈曲し外反する。外面は特に強く外反し縫をなす。	—	
174	“	“	28.4 (3.5) —	—	縁やかに立ち上がり外反する。外面はより強く屈曲し、縫をなす。その間に山形の縫文を施す。	—	口縁部に風痕あり。
175	“	“	25.4 (3.4) —	—	強く屈曲し、大きめ外反する口縁部。口唇部は凹む面をなす。	—	
176	“	“	— (6.4) 10.8	—	瓶頸部に2条の印繩文を施し、内面底部はナゲにより大きく凹む。	外面はナゲ調査。内面は左方向のヘラ削りがほぼ全面に施される。	
177	“	“	— (6.0) 10.9	—	瓶頸部は上方へ膨張し、2条の上記に4条の印繩文を施し、その間に斜め文による内孔を施す。	外面はナゲ調査。内面は右方向のヘラ削りがほぼ全面に施される。	
178	“	“	— (4.4) 15.4	—	瓶頸部は大きく膨張し、3条の印繩文を施し、上部には7条の斜め文による内孔を施す。その間に斜め文による内孔と4倍1組の竹背文を配す。	外面はナゲ調査。内面は下部に左方向のヘラ削りが施される。	
179	“	“	— (3.3) 8.7	—	瓶頸部は小さく、上下に試溝し強めナゲによる内孔。瓶頸部には6—7条を1組とする斜め文による内孔を2ヶ所に施し、斜めによる内孔を配す。	外面はナゲ調査。内面は下部に左方向のヘラ削りがみられるが削耗する。	
180	“	“	— (7.0) 10.8	—	短かい柱状部より小さく開き、瓶頸部は丸くおさめる。	外面はナゲ調査。内面は中央部に左方向のヘラ削りを施す。	

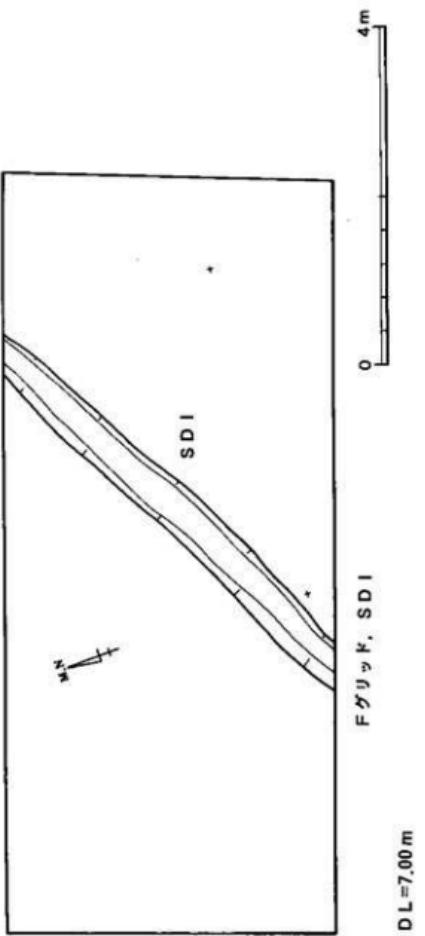
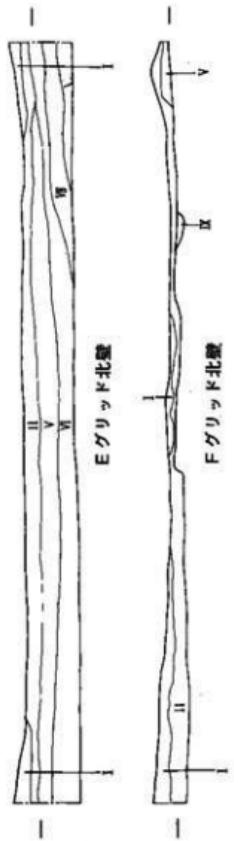
種別番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 基高 側径 板厚	形態・文様	手 法	備考
181	SR 1	高杯	（5.4） — —	廣やかに開く柱状部。中央部に穿孔を施す。	外面にタテハケを施す。		
182	—	—	— （11.8） —	直立する太い柱状部。根部は大きく開く。下部に穿孔を施す。	外面にわずかにタテハケを施し磨耗する。		
183	—	—	— （3.8） —	直線的に開く脚印。	—		
184	—	—	— （7.9） —	直立する柱状部から根部は大きく開くと思われる。	内面に板がみられる。		
185	—	器台	— （15.0） 20.2	廣やかに開き底端部はやや肥厚する。	外面の全面に太い凹溝文を施す。内面はナデ調整。		
186	—	鉢	27.2 （5.1） —	廣やかに内側立ち上がる。口唇部は丸くさめ、外面はテグにより切む。	口縁部はココナデ。以下磨耗のため不明。		
187	—	—	13.4 7.3 — 3.4	貼付状のやや不安定な底盤から廣やかに立ち上がる。口唇部は未調整。	外面は右下りの小さなタキキを算上部はナデ調整により消す。内面は右下りのハケ調整を全面に施す。		
188	—	皿	5.9 1.3 —	小型の皿であり、中央部に凹みをもつ。周囲に2個1組の穿孔をもつ。底盤部はナデにより皮膜がみられる。	内外面ともにナデ調整。		
189	—	把手	— — 1.7	断面円形をなす把手である。	全面に指輪压痕を残し、弱いナデ調整。		

第23表 遺構出土石器観察表

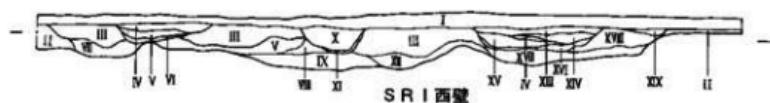
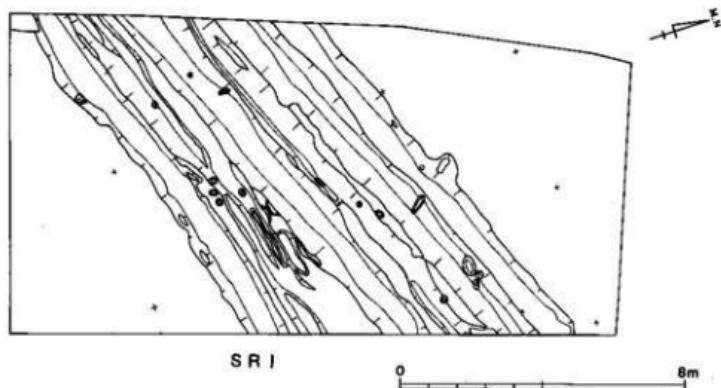
種別番号	遺構番号	器種	計測値 (cm, g)	最大幅 最大高 最大厚 重	材 质	特 徴	備 考
190	SR 1	石包丁	（8.1） 4.5 1.0 36.7	粗粒砂質片岩	刀盤はやや外斜な斜面であり、背側は大きく欠損する。表裏面に穿孔のために浅い凹みが2ヶ所みられる。		
191	—	叩石	（15.6） （6.8） 3.1 505.0	砂 石	大きく半分に欠損する。中央部に凹みをもち、橢円形の縦辺部に打痕がみられる。		
192	—	砥石	6.1 5.6 3.0 505.0	—	小型の砥石であり、表面を低面として使用し、やや削む。他の面は欠損している。		
193	—	石 砧	4.0 2.6 0.8 5.4	サスカイト	やや大型の平基式の石砧であり、表裏面とともに全面によく調整されている。		

種別番号	造営番号	器 標	計測値 最大長 最大幅 (cm, g) 最大厚 度	材 質	特 徹	備 考
194	SR 1	石 簾	3.9 1.3 0.4 3.1	サスカイト	平基式の石鐵であり、表裏面とともに周辺部に剝離が集中しており、中央部には主剝離面およびネガティブな面を残している。	

I 層
 斧作土
 II 層
 床 土
 V 层
 黄褐色粘質土層
 VI 层
 黄褐色粘質土層
 VII 层
 浅棕色沙質土層
 VIII 层
 青棕色沙質土層
 IX 层
 硫 土



第142図 調査区セクション、SD 1



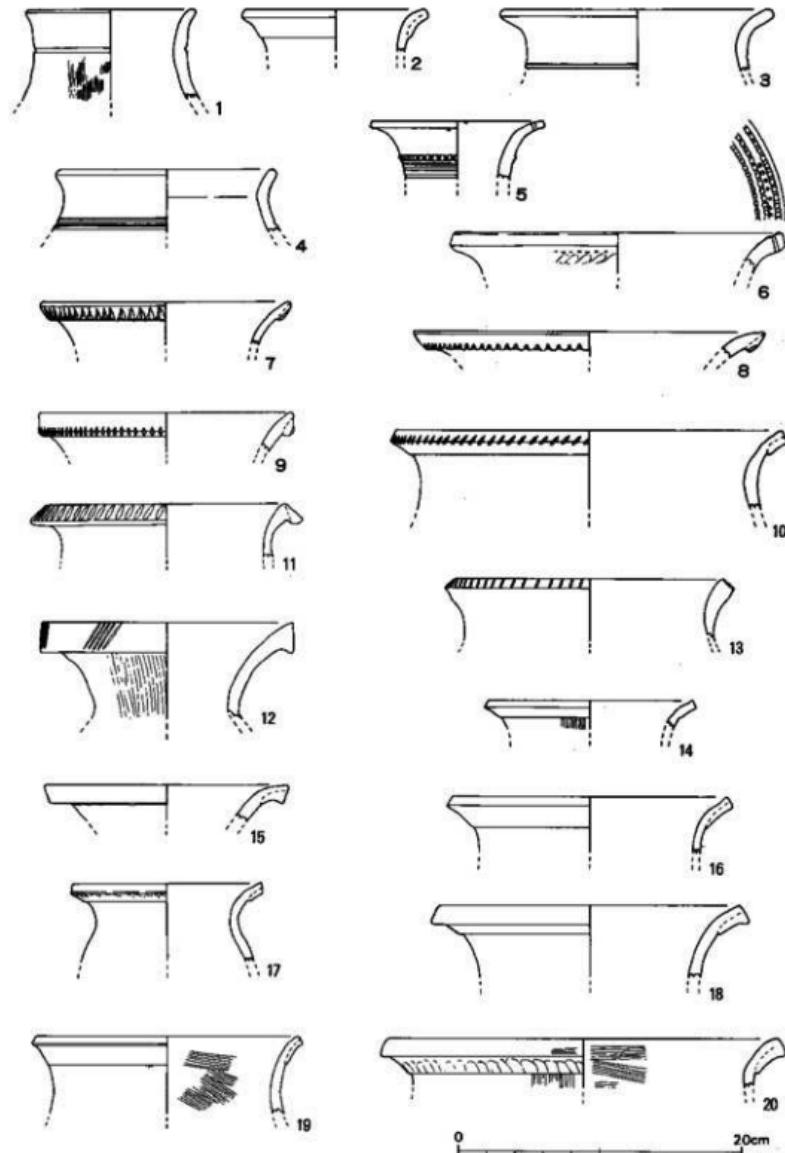
I 層 耕作土	VI 层 赤褐色粘質土	X I 层 亦黃褐色粘質土	X VI 层 灰褐色砂
II 层 紫褐色粘質土	VII 层 灰茶褐色砂質土	X II 层 明青灰色砂	X VII 层 青灰色砂質土
III 层 棕色粘質土	VIII 层 明灰色細砂	X III 层 黃褐色粘質土	X VIII 层 灰茶褐色粘質土
IV 层 黃褐色粗砂	IX 层 青灰褐色砂	X IV 层 青紫色粗砂	X IX 层 灰褐色粘質土
V 层 青灰色砂	X 层 青褐色粗砂	X V 层 青灰色粗砂	



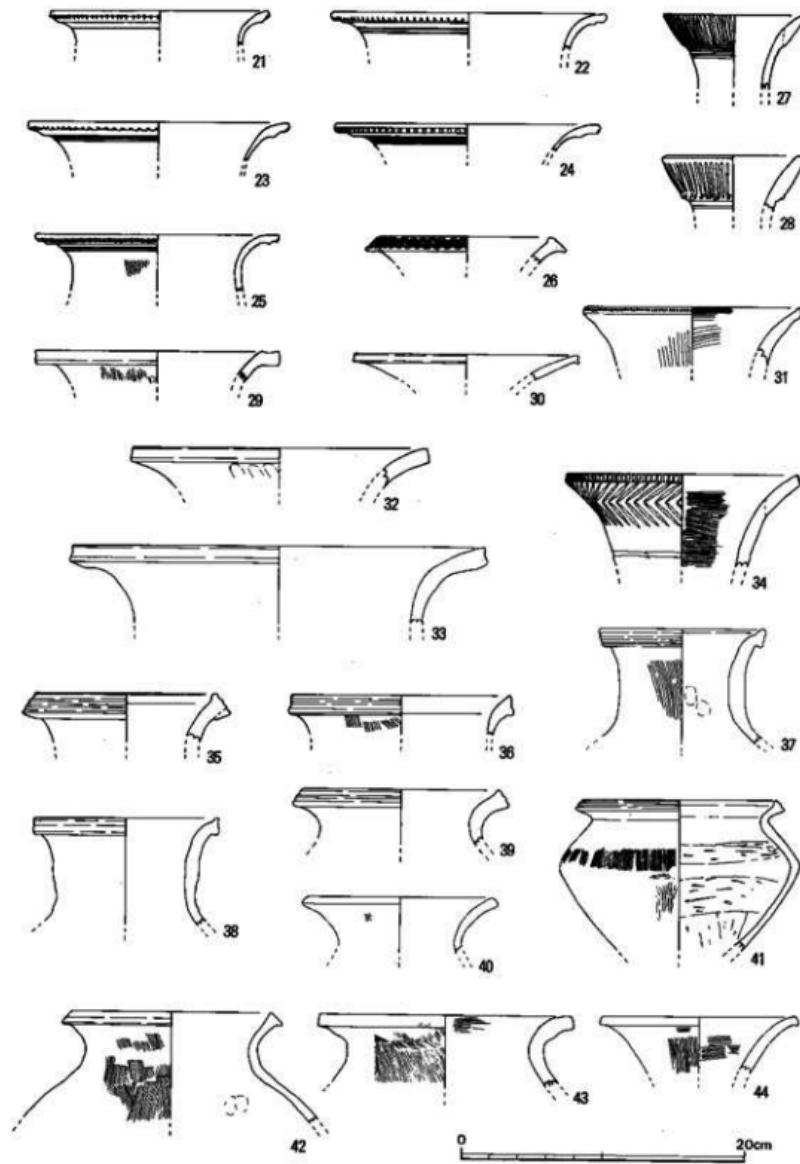
I 层 耕作土	VI 层 明黄色砂	X I 层 粉青灰色砂	X VI 层 青黄色砂质土
II 层 紫褐色粘质土	VII 层 青灰色粗砂	X II 层 明黄色砂质土	X VII 层 墨褐色粗砂
III 层 墨黄色粘质土	VIII 层 黄褐色砂质土	X III 层 明黄色砂质土	
IV 层 青灰色粘质土	IX 层 青灰色砂	X IV 层 墨茶褐色砂质土	
V 层 明青灰色砂质土	X 层 粉黄色砂	X V 层 增青灰色砂质土	

D L = 7.00 m 0 4m

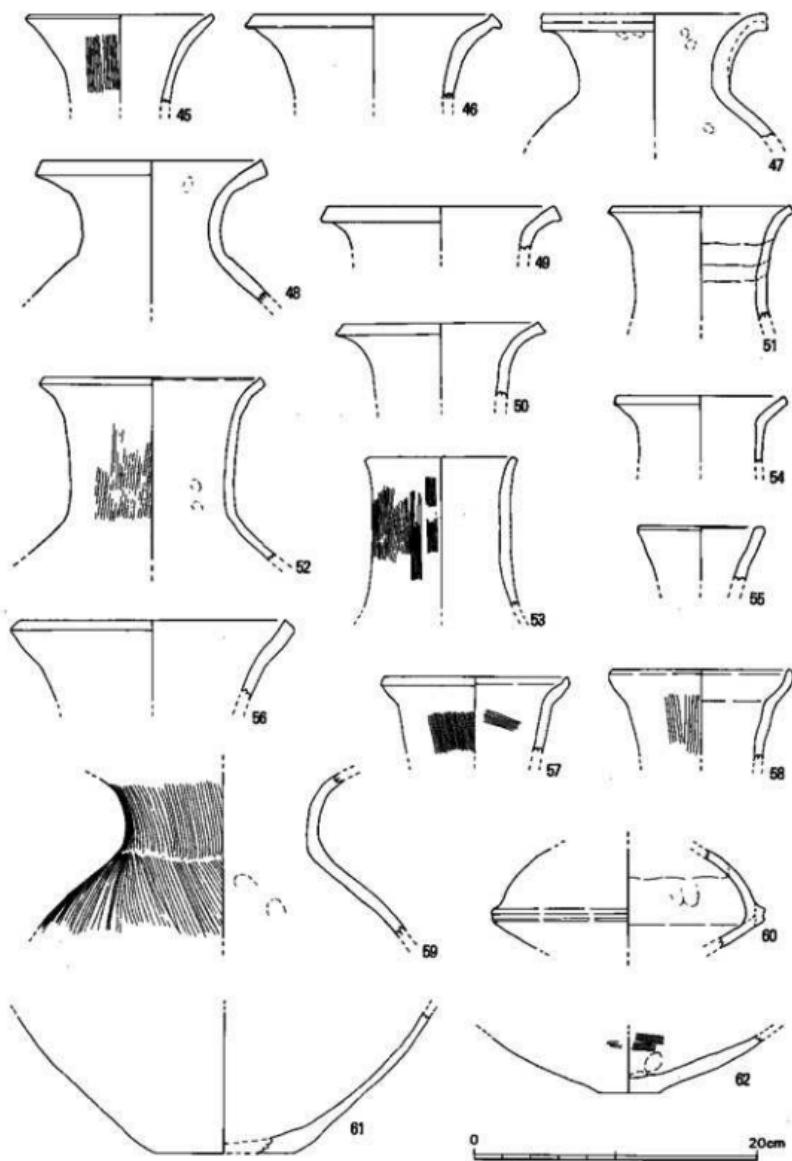
第143図 SRI・セクション



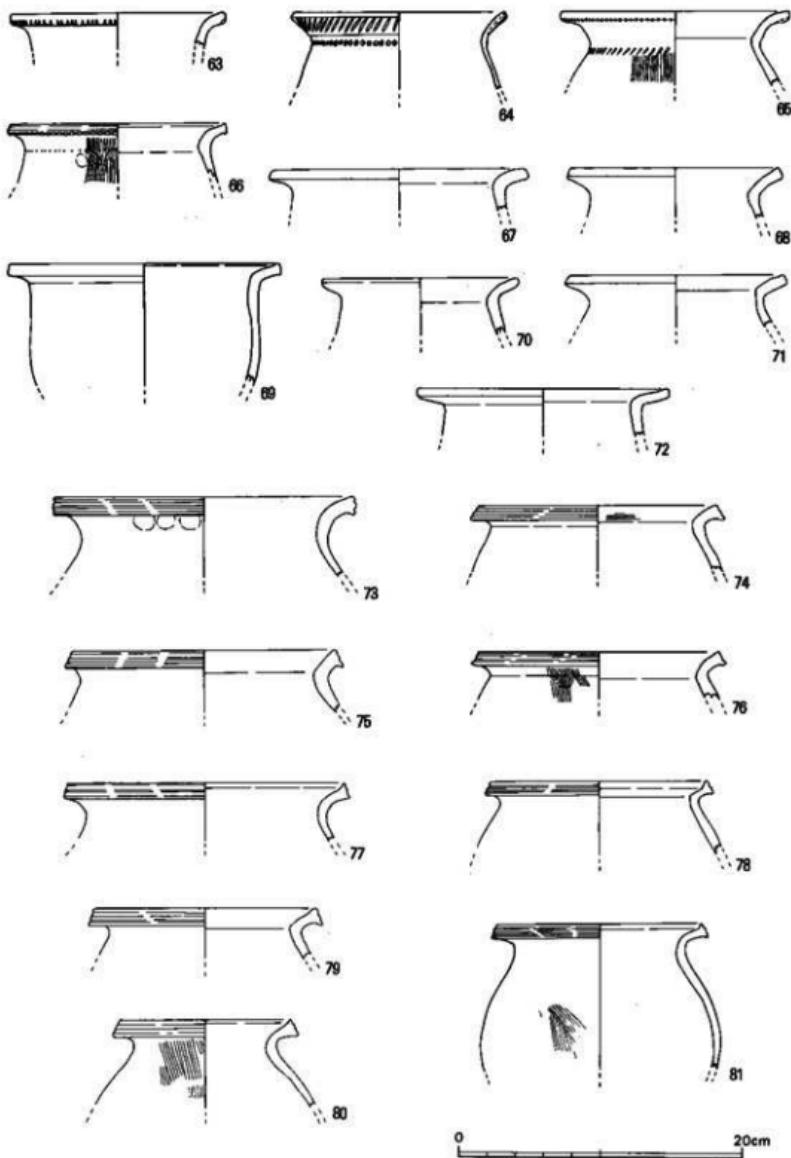
第144図 SR I出土遺物



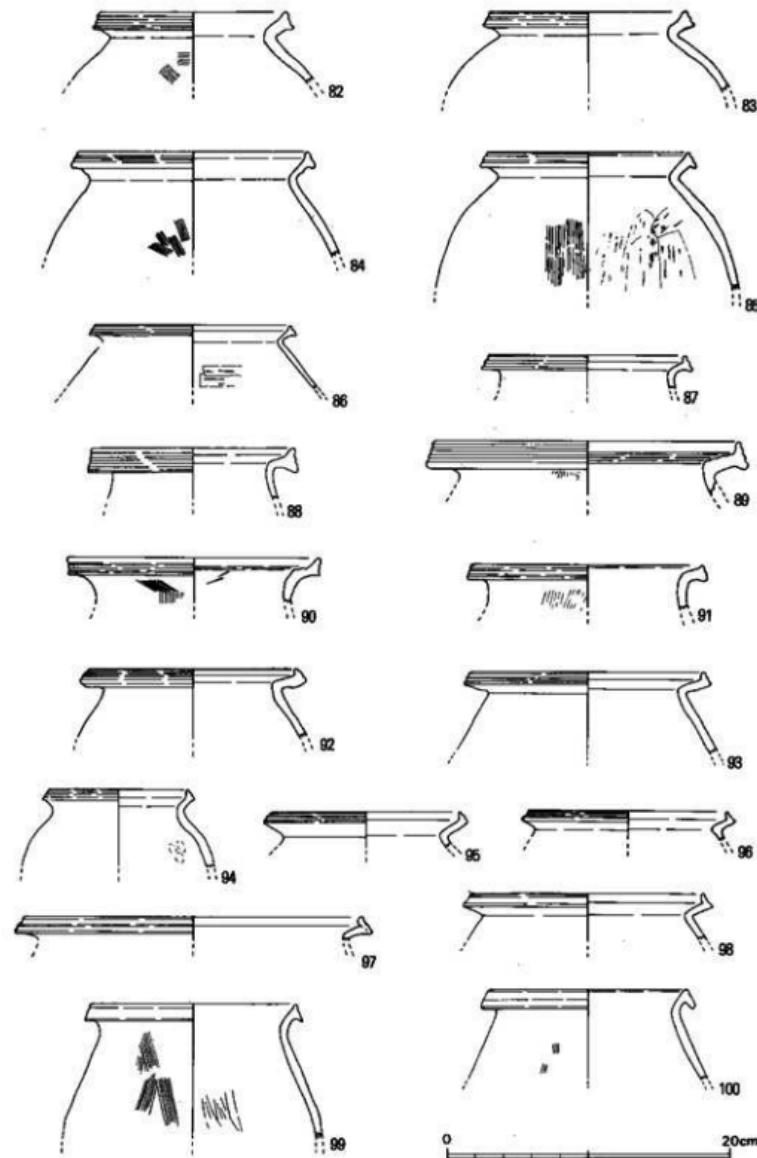
第145図 SR I出土遺物



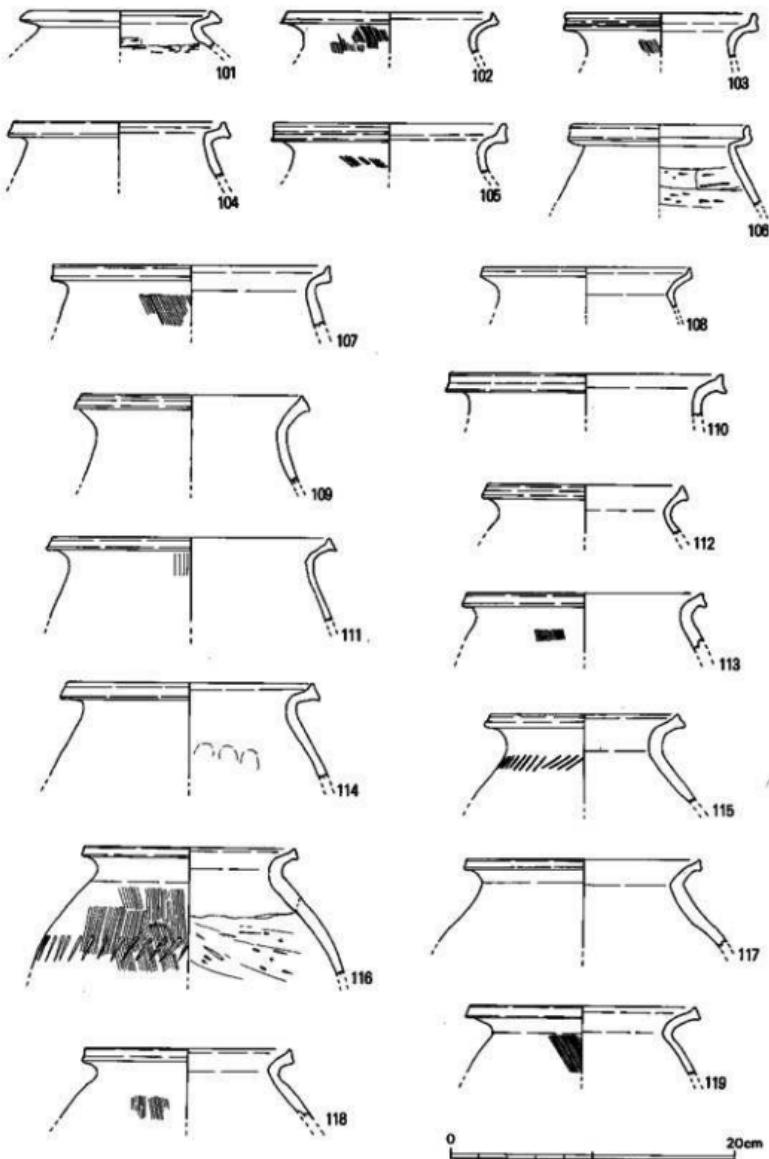
第146図 SRI出土遺物



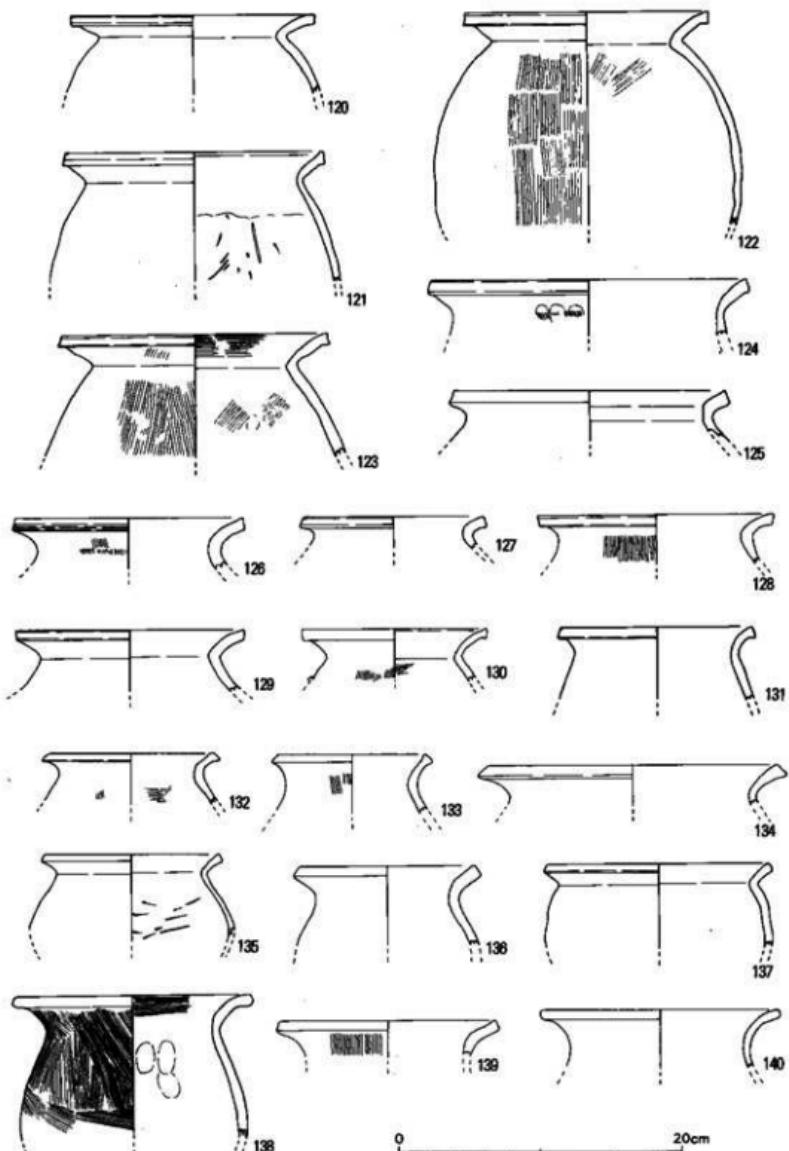
第147図 SR I出土遺物



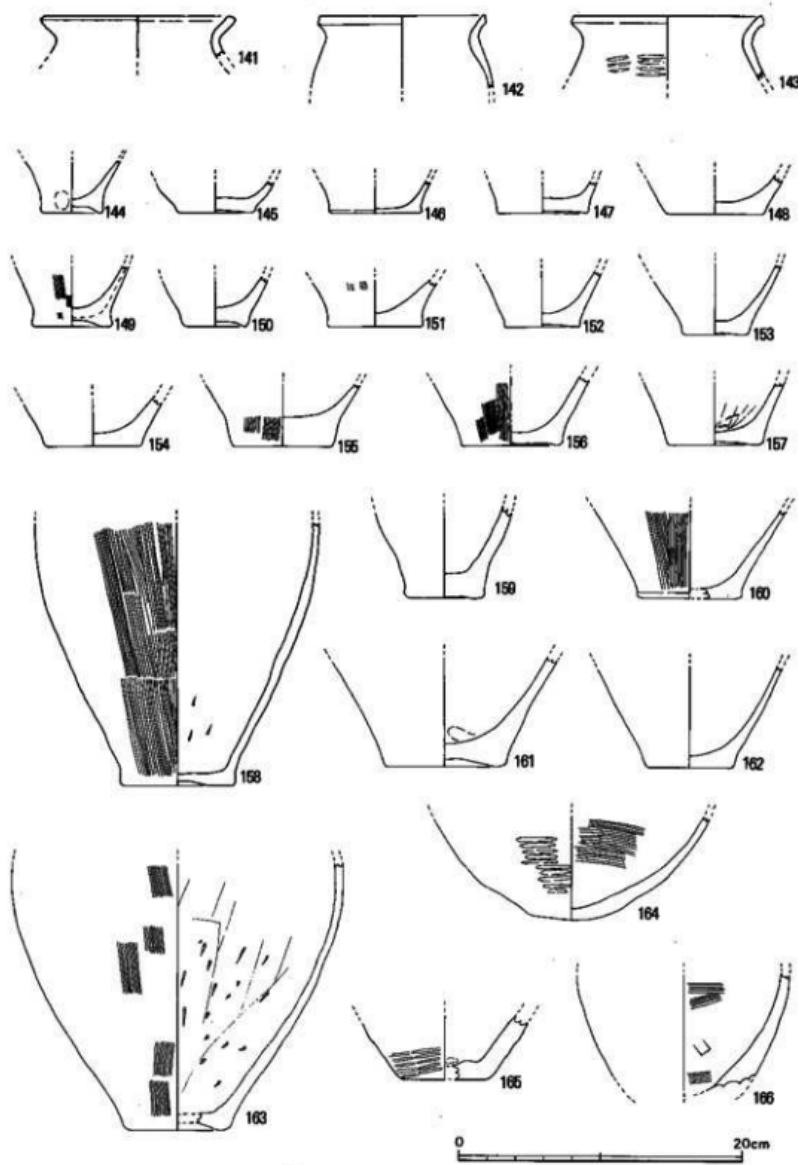
第148図 SRI出土遺物



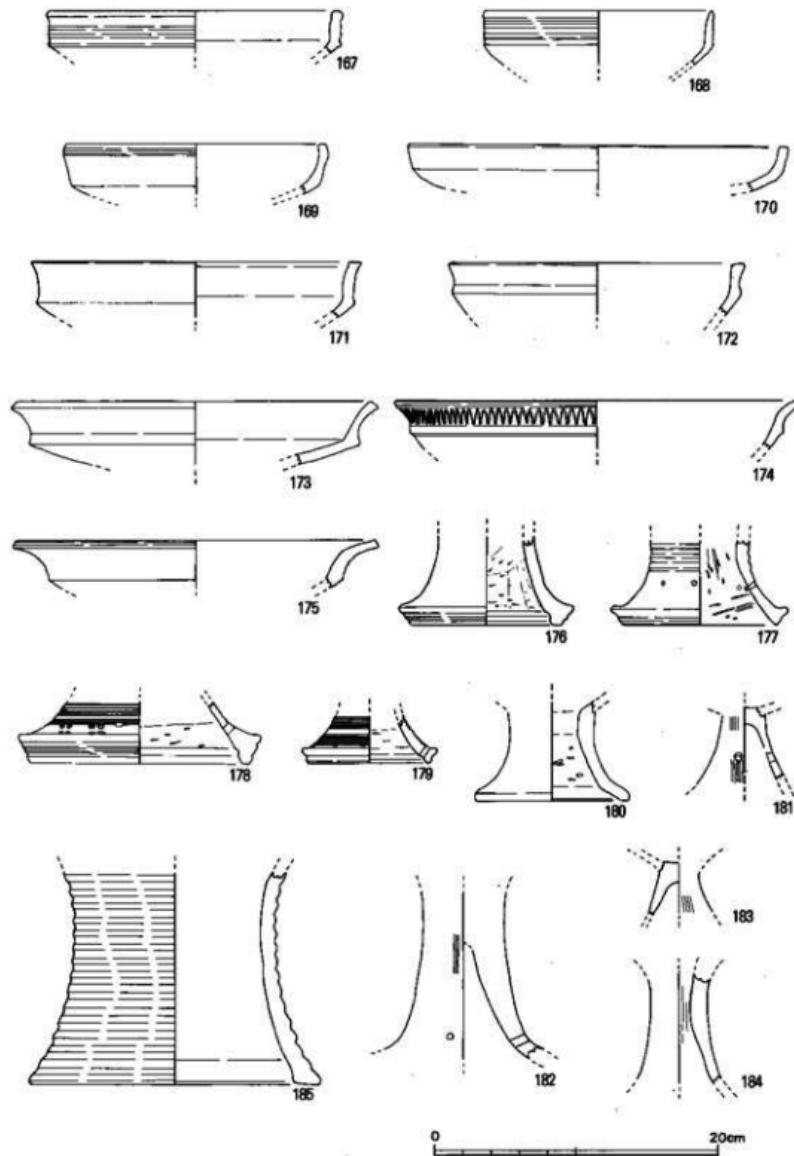
第149図 S R I 出土遺物



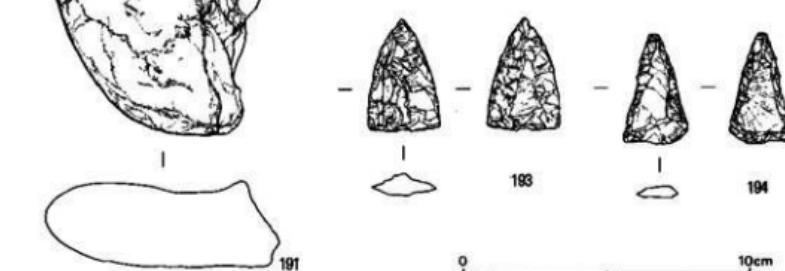
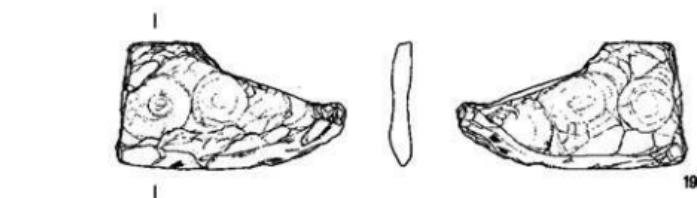
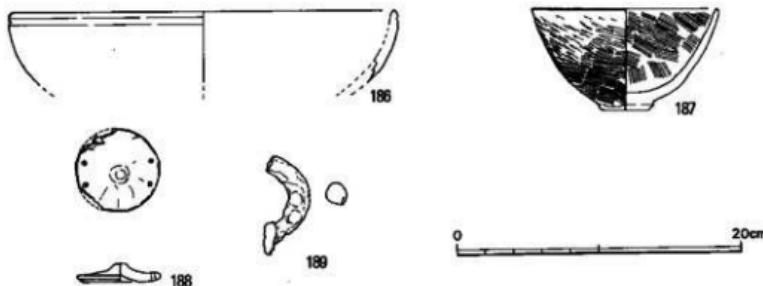
第150図 S R I 出土遺物



第151図 SRI出土遺物



第152図 S R I出土遺物



第 153 図 SR I 出土遺物

8. 弥生時代中期小結

8. 弥生時代中期小結

はじめに

中期の遺物・遺構についての概略を述べる。中期の遺構は、田村遺跡群の北西部を中心に分布しているが、良好な一括資料は量的に少なかった。したがって、中期の土器をⅠ期からⅢ期に時期区分することにした。中期Ⅰの土器の分類は、Loc.36AのSD2出土土器をもとにし、中期Ⅱの土器は、Loc.45のSD2出土土器を主として編年を試みた。中期Ⅲの土器は、古相と新相に分かれるが、良好な資料が得られなかつたため、細分を断念した。中期Ⅲの土器は、Loc.31~36・45・46等の各地点から多量に出土している。

I. 遺物（土器）

壺

(i) 中期の壺を形態及び貼付口縁の有無等により、A~E類に大分類した。

A類：貼付口縁のみられない壺

B類：貼付口縁のみられる壺

C類：薄手の壺

D類：細頸壺

E類：口唇部に凹線文の施された壺

(ii) 口頸部の施文による分類

I類：口頸部が無文のもの

II類：口頸部を幅の狭い貼付突帯と櫛描文で飾るもの

III類：口頸部を櫛描文で飾るもの

IV類：口頸部を貼付突帯で飾るもの

V類：その他の施文

(iii) 口唇部の施文による分類

a類：口唇部が無文のもの

b類：口唇部に刻目のあるもの

甌

(i) 中期の甌を口縁部の形態等により、A~C類に大分類した。

A類：口縁部が如意形に外反する類

B類：口縁部がくの字状に外反する類

C類：口縁部がくの字状に外反し、口唇部に凹線文の施される類

(ii) 上胴部の施文による分類

I類：上胴部が無文のもの

II類：上胴部に微隆起帶の施されるもの

III類：上胴部に構描文の施されるもの

(1) 中期Iの土器

壺

A I類：貼付口縁のみられない壺で、口頭部が無文の類である。A I類の壺は、口唇部の刻目の有無により、A I a類とA I b類に分かれる。

類例

A I a : L.34A-44, L.36A-9・58

A I b : L.36A-10~12・53

A II類：貼付口縁のみられない壺で、口頭部を貼付突帯と構描文で飾る類である。A II類の壺は、口唇部の刻目の有無により、A II a類とA II b類に分かれる。

類例

A II a : L.36A-67・69・70・73・74

A II b : L.34A-412・413, L.36A-72・76

A III類：貼付口縁のみられない壺で、口頭部を構描文で飾る類である。A III類の壺は、口唇部の刻目の有無により、A III a類とA III b類に分かれる。

類例

A III b : L.36A-52

B I類：貼付口縁の壺で、口頭部が無文の類である。B I類の壺は、口唇部の刻目の有無により、B I a類とB I b類に分かれる。

類例

B I a : L.36A-59

B I b : L.36A-13・61・62

B II類：貼付口縁の壺で、口頭部を貼付突帯と構描文で飾る類である。B II類の壺は、口唇部の刻目の有無により、B II a類とB II b類とに分かれる。

類例

B II a : L.36A-68, L.44A-8

B II b : L.36A-14

B III類：貼付口縁の壺で、口頸部を櫛描文で飾る類である。B III類の壺は、口唇部の刻目の有無により、B III a類とB III b類に分かれる。

類例

B III a : L.36A-63

B III b : L.36A-64・65

C類：薄手の壺で、上胴部に3条の微隆起帯がめぐらされる。C類の壺は、前期IVの薄手の壺に酷似しているが、上胴部に3条の微隆起帯がめぐらされる点が異なる。

類例

C : L.36A-15・16

壺

A I類：口縁部が如意形に外反し、上胴部が無文の壺で、やや胴が張り出す類である。

類例

A I : L.36A-23

A II類：口縁部が如意形に外反し、上胴部に3条の微隆起帯の施される類である。

類例

A II : L.36A-286・448, L.44A-3

A III類：口縁部が如意形に外反し、上胴部に粗い櫛描文の施された壺で、口唇部に刻目がある。

類例

A III : L.32-38

(2) 中期IIの土器

壺

A I類：貼付口縁のみられない壺で、口頸部が無文の類である。A I類の壺は、口唇部の刻目の有無により、A I a類とA I b類に分かれる。

類例

A I a : L.45-217

A I b : L.45-145

A II類：貼付口縁のみられない壺で、口頭部を貼付突帯と櫛描文で飾る類である。A II類の壺は、口唇部の刻目の有無により、A II a類とA II b類に分かれる。

類例

A II b : L.34A-275

A III類：貼付口縁のみられない壺で、口頭部に櫛描文を施す類である。A III類の壺は、口唇部の刻目の有無により、A III a類とA III b類に分かれる。

類例

A III a : L.33-69

A IV類：貼付口縁のみられない壺で、口頭部に貼付突帯を施す類である。A IV類の壺は、口唇部の刻目の有無により、A IV a類とA IV b類に分かれる。

類例

A IV b : L.36A-98・99、L.45-123

B I類：貼付口縁の壺で、口頭部が無文の類である。B I類の壺は、口唇部の刻目の有無により、B I a類とB I b類に分かれる。

類例

B I a : L.45-215、L.44A-47~52・54

B I b : L.44A-46・53

B III類：貼付口縁の壺で、口頭部に櫛描文の施される類である。B III類の壺は、口唇部の刻目の有無により、B III a類とB III b類に分かれる。

類例

B III a : L.33-7、L.36A-206、L.45-218

B III b : L.34A-457

B IV類：貼付口縁の壺で、頭部下端に貼付突帯の施される類である。B IV類の壺は、口唇部の刻目の有無により、B IV a類とB IV b類に分かれる。

類例

B IV a : L.45-211、L.44A-39・42

B IV b : L.44A-38

C 類：高知県の西部地域から搬入されたと考えられている薄手の壺である。

類例

C : L.34A-424・429、L.36A-187~194・287、L.44A-56~61、L.45-219

D 類：細頸壺である。

類例

D : L.34A-468・469、L.34B-88

E 類：出現期の凹線文土器であり、口唇部に凹線文が施された壺である。

類例

E : L.36A-207、L.45-228

甕

A I 類：口縁部が如意形に外反する甕で、口頸部が無文の類である。

類例

A I : L.45-65

B I 類：口縁部がくの字状に鋭く外反する甕で、胴部の張りは弱い。

類例

B I : L.44A-62~65

鉢

A 類：口縁部が如意形に外反する鉢である。

B 類：口縁部が直立気味に立ち上がる鉢である。

類例

B : L.45-240

C 類：口縁部が直線状に外反する鉢である。

類例

C : L.45-125・241

(3) 中期IIIの土器

壺

A V類：貼付口縁のみられない壺で、口頭部に刷毛状原体による羽状文が施される類である。

類例

A V a : L.34B-139

B I類：貼付口縁の壺で、口頭部が無文の類である。

類例

B I a : L.34B-83・84

C 類：高知県の西部地域から搬入されたと考えられている薄手の壺である。

類例

C : L.36A-2

D 類：細頸壺である。

D : L.36A-246, L.45-76・155

E 類：口唇部に凹線文の施された壺である。

類例

E : L.33-11・12, L.34A-112~114・481~484, L.34B-1, L.45-77・78

甌

A I類：如意形に外反する貼付口縁の甌であり、上副部が無文の類である。

類例

A I : L.34A-543, L.45-260

B I類：くの字状に外反する口縁部を有した甌で、上副部が無文の類である。

類例

B I : L.34B-2

C I類：くの字状に外反する口縁部を有した甌で、口唇部に凹線文の施された類である。

類例

C I : L.36A-4・5・7, L.45-29

鉢

A 類：口縁部が如意形に外反する鉢である。

類例

A : L.45-26・49、L.34A-366

B 類：口縁部が直立気味に立ち上がる鉢である。

C 類：口縁部が直線状に外反する鉢である。C類の鉢は、貼付口縁のもの（C₁類）と、口縁部外面に凹線文の施されるもの（C₂類）とに分かれる。

類例

C₁ : L.36A-348

C₂ : L.34A-62

高杯

A 類：杯部は上方で棱を有し、口縁部外面に凹線文の施された高杯である。脚部は、中空で、粘土板充填法がみられる。

類例

A : L.33-47、L.34A-24・870・871、L.34B-3・4、L.45-58・59・256

B 類：杯部の形態は、A類に酷似するが、口唇部を拡張し、そこに凹線文を施す点が異なる。脚部は、中空で、粘土板充填法がみられる。

類例

B : L.34A-636-640・872

2. 遺構

以上の田村遺跡群中期弥生土器3期分割の上に立って、中期の住居址を中心に論じたい。

田村遺跡群では、中期に属する住居址は全体で18棟検出されている。これらの内訳は、Loc.34Aが9棟（ST1・3・5・7・8・12・15・16・20）、Loc.35が1棟（ST1）、Loc.35Bが1棟（ST1）、Loc.45が7棟（ST4～10）である。これらの時期は、第24表の通りであり、中期Iに属するものが1棟、中期IIに属するものが2棟、中期IIIに属するものが14棟及び中期に属するが時期の不明なもの1棟である。なお、中期IIIから後期Iに属するものが5棟検出されているが、後期の小結の項で述べているので、ここでは割愛した。今回検出された中期の住居址では、圧倒的に中期IIIに属するものが多いが、これは調査範囲が限定されたためで、今後の周辺部の調査によって、中期I・IIの住居址も多数発見される可能性がある。

これらの集落構成についてみてみると、Loc.34Aでは主に中期IIIから後期Iにかけての集落が検出されており、住居址の総数は20棟に及び今回確認された集落では最大規模を誇る。この集落は住居址数からして、中期IIIの段階に繁栄期ともいえる時期をむかえたことがうかがえる。Loc.35は、從来から西見当遺跡として有名な地区で、前期II・IIIの時期の集落が確認されており、S T 1が1棟だけ中期IIIに属している。これは、S T 1が集落形態をとらずに存在したことと意味するとも思われるが、調査範囲が限定されたことに起因したとも考えられ、どのような集落構成であったかは今後の調査を待たねばならない。Loc.35Bは、Loc.34Aの北東約100mの地点で、S T 1以外に後期Iの住居址(S T 2)が検出されている。このS T 1は中期IIに属する住居址であるが、周辺部では、この期の住居址は検出されておらず、どのような集落

第24表 中期に編入される住居址の時期区分

地区・ 住居址	時期	中期I	中期II	中期III
L.34A				
S T 1		—		
S T 3			—	
S T 5		—	—	—
S T 7			—	
S T 8			—	
S T 12			—	
S T 15			—	
S T 16			—	
S T 20			—	
L.35				
S T 1				—
L.35B				
S T 1			—	
L.45				
S T 4				—
S T 5				—
S T 6				—
S T 7				—
S T 8				—
S T 9				—
S T 10				—

構成になっていたかは不明である。Loc.45は、Loc.34Aの西約50mの地点で、10棟の住居址が検出されており、中期IIが1棟、中期IIIが6棟、後期Iが1棟、後期IIIが1棟及び後期に属する住居址が1棟確認され、Loc.34A同様中期IIIに集落の繁栄期をむかえたことが看取できる。また、周辺部にもまだ多数の住居址が埋蔵されていると考えられ、大集落であったと推測される。以上の集落構成から、中期IIIの時期の集落は、田村遺跡群の北西部にその中心があったことが判明した。しかし、中期Iの時期は、Loc.34AのST1以外にLoc.10BのSD2しか遺構が確認されておらず、集落の中心及び集落構成については、今回の調査では明確にできなかつた。中期IIの時期も中期I同様、確認できた遺構は先述の住居址2棟以外にLoc.45の溝2条(SD2・6)のみで、その集落については明確にできなかつた。

次に、住居址の形態と規模についてみてみる。検出された住居址は、すべてほぼ円形を呈し、完掘していないものや後世の遺構に壊されているものを除けばすべて住居址の真中に、平面形が円形ないし横円形を呈す中央ピットを1個保有する。また、壁溝も各期の住居址で確認されたが、時期及び住居址によってそのあり方が異なる。すなわち、壁直下を一周する壁溝は中期III期の住居址に限られ、中期I・IIの住居址ではごく一部に設けられているにすぎない。ただし、中期IIIの住居址でも、一部にしか壁溝が設けられていないものもある。これら住居址は、主に4~6個の主柱で棟を支えていたとみられ、中には建替を行ったと考えられる住居址(Loc.34AのST1・5・12・15、Loc.35BのST1、Loc.45のST10)もある。集落内の建替の比率をみてみると、Loc.34Aの中期III期で29%、Loc.45の中期III期で17%であり、建替えを行った住居は比較的少なかったといえるのではなかろうか。また、焼失住居は全体で6棟確認されている。その内訳は、Loc.34Aが3棟(ST7・15・16)、Loc.35が1棟(ST1)、Loc.45が2棟(ST4・7)である。Loc.34Aの3棟はほぼ同期のものであり、1棟の火災により他の2棟が類焼したとみられる。Loc.45の2棟はほぼ同期と考えられるが、約40m離れ、かつ、その間の住居の様相が不明であるため、類焼による焼失住居であったとは断定できなかつた。次に、住居址の面積をみてみると、中期Iは1棟のみで、21.2m²、中期IIは2棟でその平均は28.6m²、中期IIIの14棟の平均は29.5m²である。中期I・IIの資料に乏しく、断定できないが、中期IからIIIにかけてその面積は徐々に広くなつたと考えられる。そして、後期にはいり、住居の面積の縮少化がみられる。このことは、Loc.34Aの集落でもいえることであり、また、住居の面積の縮少傾向に伴つて、集落自体も縮少している。すなわち、Loc.34Aの場合、中期III期には、集落の境界をなすSR1までの場所に万遍なく住居が存在するのに対し、後期にはいり、中央部に集中する傾向がある。このことが、他の集落でも言えることかどうかは今後の調査に期するところである。

最後に、住居址以外の遺構についてみてみる。ここでは注目されるのは、自然流路(SR1)が確認されたことである。SR1は幅3~10m、深さ1~2mを測り、Loc.33から南へ向つて約200m延び、さらに調査区外へ延びている。Loc.33以北では2本に分かれ、北西へ延びる

ものはLoc.34Aの集落の北側と東側の境となり、北東へ延びるものはLoc.35Bの北へさらに延びている。また、SR1は多数の支流に分かれる。ここからの遺物は、前期から後期、一部古式土師器まで出土しているが、そのほとんどは、中期IIIから後期Iにかけての遺物であり、この自然流路もその頃に存したと考えられる。また、この自然流路の水を利用した水田経営も考えられるが、今回の調査では確認できず、今後の周辺部の調査によって、弥生中期後半から後期にかけての水田址も発見される可能性が強い。

土塙についてみてみると、平面形が舟形を呈するものが多い。特に、Loc.34Aの集落では、住居址に隣接して、1～2基が存する。時期的には、出土遺物が少なく、明確にし得なかつたが、ほぼ同期のものと考えられる。構造的には、底面中央部にピットが検出されたものがあり、当時は、柱を1本たて、それによって覆いをしていたと考えられ、貯蔵穴の性格を有していたのではなかろうか。一方、平面形は異なるが、Loc.34BのSK69から中期IIIの土器がセット（壺1、甕1、高杯2）で出土している。このような例は他にはなく、意識的に埋められたものとみられ、何らかの祭祀に関係すると考えられ、Loc.34Aの集落との関係や中期IIIの土器の組成を考える上で注目される。

以上、弥生中期の遺構についてみてきたが、集落址を確認できたのは、Loc.34AとLoc.45の2地区のみである。Loc.45は、トレンチ調査であったため、集落の規模や構成については論ずることができなかった。一方、Loc.34Aの集落では、住居址の変遷を概ね把握し得たと考えるが、西側には集落の約3分の1が残存しているとみられ、十分な集落構成をつかめたとは言い難く、今後の周辺部の調査を待って、解明していきたい。

9. 弥生時代後期小結

9. 弥生時代後期小結

I. 遺物

弥生後期の土器は、時期的に大きく2時期に分ける事ができる。すなわち、叩き技法を持つものと持たないものであり、叩き技法を持つものが時期的に後出である。これは、畿内地方の影響が後期中葉以降増大したためとみられる。この叩き技法を持つ土器は、岡本健児氏が土佐山田町ヒビノキ遺跡の報告で述べたように、さらに2つの時期に分類できよう。そこで、本報告では叩き技法をみない段階の後期の土器を後期I、叩き技法が出現する段階の土器を後期II、そして、叩き技法が盛行する段階の土器を後期IIIとし、大きく3期に分けた。なお、後期Iはその高杯形土器から、さらに細分される可能性を含んでいるが、今後の課題としたい。

今回の発掘調査で検出された住居址の大半は後期Iであり、後期II・IIIのものは少なく、その出土遺物も同様な状況である。それがゆえ、後期II・IIIの弥生土器資料は乏しく、詳述できない。

さて、弥生後期の土器を各器種とも形態により以下のように便宜上分類する。もちろん各期にすべての類が存するとは限らない。

壺形土器 口頸部の形態により6類に分ける。

- A類 口頸部がゆるやかなカーブを描いて、口縁部が上外方へ開くもの。
- B類 頸部が斜めに直線的に開くもの。
- C類 頸部が外反するもの。
- D類 頸部が短かく、やや強く外反するもの。
- E類 長頸壺の類。
- F類 短頸壺の類。
- G類 口縁部が水平に開くもの。

甕形土器 口縁部の形態により3類に分ける。

- A類 頸部がくの字状に屈折するもの。
- B類 頸部がゆるやかなくの字状の屈折をなすもの。
- C類 口縁部が跳上状口縁をなすもの。

高杯形土器 杯部の形態により3類に分ける。

- A類 杯部に稜を持ち、斜め上方へ延びる口縁部を持つもの。
- B類 杯部に稜を持ち、外反する口縁を持つもの。
- C類 梶状の杯部を持つもの。

鉢形土器 口縁部の形態により大きく2類に分ける。

- A類 外反する口縁を持つもの。
- B類 直口の口縁を持つもの。

以上の基本的分類に従って、各造構出土の土器を次の如く三型式に分類して述べる。

〈後期 I〉

この段階は、多数の遺構が検出され、ほぼ全器種が出土している。ここで記載したものは、住居址及び土塙からの一括資料であり、ほぼ同時期とみて間違いないと考えるものである。

変形土器

A類 口径12cm前後の小形と口径20cm以上の大形がある。口唇部は、中期Ⅲのように上下に大きく拡張されず、ヨコナデ調整により若干拡張したものや拡張されないものもある。また、中期Ⅲの凹線文は擬凹線文に変化する。頸部には施文がない。

類例

L.34A-111・360

B類 口唇部を下方に拡張している点が特徴であるが、拡張部は中期のものに比すると短い。凹線文に類するものは認められず、ヨコナデ調整によって仕上げている。

類例

L.34A-239

C類 口唇部は面をなし、凹線文は施されない。中期Ⅲに比べ肩が張り、胴部最大径が上胴部にある。胴部内面中位以下に範削りが施される。

類例

L.34A-240

D類 A類に比べ、頸部からの外反の度合が大きい。口唇部は、ヨコナデ調整によってやや拡張され、擬凹線文を施す。口頸部内外に刷毛調整を施しているものもある。

類例

L.34A-236・312・313

E類 長頸壺の類であり、頸部が長く立ち上がり、口縁部がやや外傾し、端部は面をなすもの、それと同時にいわゆる細頸壺もある。

類例

L.34A-311、L.35B-6、L.45-22

F類 中胴部に胴部最大径を有する短頸壺である。頸部以上は短く外傾する。後期Ⅱ以降にはこの類の出土はなかった。

類例

L.34A-253・353・582

変形土器

A類 この類の窓は、他の変形土器に比べ出土頻度が高く、変形土器の主要部分を占めていたとみられる。上胴部に胴部最大径を有するものと中胴部に胴部最大径を有するものとがある。内面頸部直下より範削りを行っているものもある。口唇部に擬凹線文を施しているものもある。

類例

L.34A-128~130・246~249

B類 上胴部に脚部最大径を有するとみられ、口唇部は面をなす。擬凹線文が施され、腹形土器A類に比して大型のものが多い。

類例

L.34A-231・256

C類 この類は量的に少ない。頸部は短く立ち上がり、口縁部で外傾し、跳上状口縁をなす。後期II以降の類例はない。

類例

L.34A-127

高杯形土器

A類 口径15cm前後の小形のものと口径20cm前後の中形のものとがあり、口縁部の傾斜度はゆるい。杯に稜の明確なものは後出的な要素を持つものである。脚部は、内面にしづら目が残存するが、範削りは施されていない。杯底部の成形は円板充填であり、この段階まで円板充填による杯底部成形が一部残存していたことを知る事ができる。

類例

L.34A-97・98・263・324・364

B類 口縁部は短く外反し、杯部は内湾気味に立ち上がる。口唇部は外傾する面をなし、擬凹線文を施すものもある。後期IIのものに比べると稜線以上が短い。脚部は大きく開き、円形の透しを施すものもあり、また、端部に擬凹線文を施すものもある。脚部内面はナタ調整のみで、範削りは全く施されず、杯底部成形はへそ状粘土充填による。

類例

L.34A-265

鉢形土器

A類 口縁部は外反し、端部を丸く仕上げ、体部は平底から内湾気味に立ち上がる。B類に比べ大形のものが多く、大型の鉢形土器の主流をなしていたと考えられる。

類例

L.34A-366

B類 口縁部が直口する類であり、口縁部の存り方で少し異なり2つに細分できる。すなわち、口縁部が、体部からそのまま立ち上がるものと体部から角度を変えて立ち上がるものである。底部は、平底のものとあげ底気味のものとがある。これらはいわゆる鉢々器と呼称される鉢の類であり、この段階から出現するとみられる。

類例

L.34A-269・325・326・365

〈後期II〉

この段階のものは、一括資料に乏しく、一部Loc.34 AのS T14出土のもののがあげられる以外は、溝及び自然流路からの出土であり、他の時期のものと混在して検出されたため、全てを抽出することは困難であった。そのため指摘し得たのは、壺形土器A・D、甕形土器A、高杯形土器B・C、鉢形土器Bの各類である。

壺形土器

A類 口唇部に擬凹線文に類するものが全くなくなる。直立する頸部から短く外傾する口縁部を有するものと、直立する頸部から外反する口縁部を有するものとに分けられる。ともに口頸部内外面に刷毛調整を加えている。

類例

L.45-165・167・169

D類 前段階と形態的にはほとんど変化しないが、壺形土器A類同様口唇部に擬凹線文に類するものは姿を消す。端部は外傾する面をなし、口頸部内外面に刷毛調整を加える。

類例

L.45-166

甕形土器

A類 前段階に比べ頸部のカーブの度合が大きくなり、口唇部に擬凹線文に類するものはなくなる。胴部最大径は中胴部に求めることができ、上胴部外面以下に平行の叩き目が残存し、その上に縱方向の刷毛調整を加えるものもある。胴部内面には中位以下に跑削りが施される。

類例

L.34A-250、L.34B-162

高杯形土器

B類 杯部に明瞭な棱を持ち、口縁部は外反する。端部は外傾する面をなし、杯部内外面に丁寧な範磨きを施す。杯底部成形はへそ状粘土充填による。脚部は内面にしばり目が残存する。脚は裾部で大きく開く。

類例

L.34A-264・268

C類 杯部は浅い碗状をなし、口縁部は外傾し、端部はほぼ丸く仕上げられる。脚部は短く裾部は開く。中実の脚部上端外面に粘土を塗いで杯部を成形するもので、この段階以降脚部の中実のものが主流をなす。

類例

L.34A-25

鉢形土器

B類 体部は内湾気味に上がり、口縁部は内傾するもので、前段階にみられなかった新相である。その端部は丸く仕上げられる。体部内面には横方向の刷毛調整が施される。なお、前段階と同ヒタイプのものも残存すると考えられるが、出土していない。

類例

L.34A-270

〈後期III〉

この段階のものは、前段階以上に資料が乏しい。よって指摘し得たのは壺形土器F類、壺形土器F類、高杯形土器B類、鉢形土器A類のみである。

壺形土器

G類 Ⅲ期のみに見られる。口唇部には凹線文が残る。

類例

L.45-17

壺形土器

A類 前段階に比べ、叩きが施される部位が頸部まで達し、その単位も不明瞭になる。頸部のカーブは前段階に増し大きくなる。口唇部は外傾する面をなし、口縁部内面には刷毛調整が施される。

類例

L.33-53・54

高杯形土器

C類 杯部は椀状を呈し、脚部は円柱状からなし、ハの字状に開く。

類例

L.44C-195

鉢形土器

B類 外面に叩きを有する。

類例

L.44C-192

2. 遺構

以上の田村遺跡群後期弥生土器3期分割の上に立って、後期の住居址について論じたい。

田村遺跡群では、後期に属する住居址は全体で15棟検出されている。これらの内訳は、Loc.10Bが1棟(ST3)、Loc.34Aが9棟(ST2・4・6・10・11・13・14・17・19)、Loc.45が3棟(ST1~3)、Loc.35Bが1棟(ST2)、Loc.36Bが1棟(ST1)である。これら住居址の時期は、第25表通りであり、中期IIIから後期Iに属するものが5棟後期Iに属す

るものが8棟、後期IIIに属するものが1棟及び後期に属するが時期の不明なもの1棟である。この内、Loc.34AのST14は後期IIの時期にも属するとみられる。これから、後期Iに属する住居址が圧倒的に多く、後期II以降の住居址は非常に少ない。このことは、調査範囲が限定されたためとみられ、単に後期II以降他の地域へ集落の主体が移行したとは即断できず、今後の調査によってそれらの数が増加する可能性もある。

これらの集落構成についてみてみると、Loc.10Bは、前期IVの時期に属する集落が検出され、後述の4地区より南東へ約700m離れた地点にあり、後期IとみられるST3は単独で存在する。このことは、ST3が集落形態をとらずに存在したことを意味するとも思われるが、これにて発掘範囲の限定から断言は出来難い。Loc.34Aは、中期IIIから後期Iにかけての集落が検出された地区であり、確認された住居址は20棟に及び、中期IIIの住居址が7棟、中期IIIから後期Iにかけての住居址が5棟、後期Iの住居址が4棟であり、後期になって集落の縮少化がみられ、ST14を最後に住居址は姿を消す。この地区的西約50mの地点がLoc.45である。Loc.45からは、10棟の住居址が検出されており、中期IIから後期IIIにかけての集落とみられる。内6棟は、中期IIIとみられ、Loc.34A同様中期IIIの集落の繁栄が察知できる。なお、Loc.45の周辺には、まだ多数の住居址が埋蔵されている可能性が非常に強く、その集落構成については多くの課題

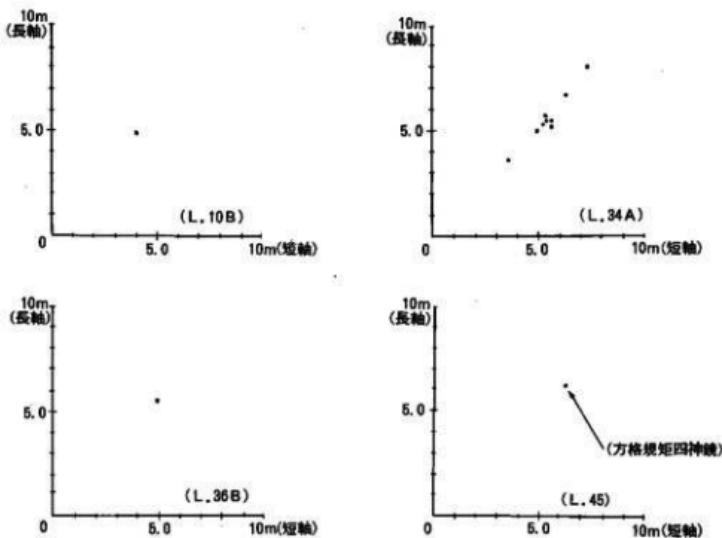
第25表 後期に編入される住居址の時期区分

地区・住居址	時 期	中 期 III	後 期 I	後 期 II	後 期 III
Loc.34A	ST2	-	-		
	ST4		-	-	
	ST6	-	-		
	ST10		-	-	
	ST11	-	-		
	ST13	-	-		
	ST14		-	-	
	ST17	-	-		
	ST18	-	-		
Loc.45	ST1				- - - - -
	ST2		-	-	-
	ST3		-	-	-
Loc.36B	ST2		-	-	
Loc.36B	ST1		-	-	
Loc.10B	ST3		-	-	

を残すものである。それと同時に、Loc.34Aと近接していることから、--連の集落あるいは密接な関連にある集落と考えてもおかしくないものである。Loc.35BのST2は、中期IIの住居址(ST1)を切っているが、Loc.34Aの北東約100mの地点で単独で検出された。Loc.34Aの集落とは直接結び付けることができないが、何らかの関連を持っていたのではなかろうか。Loc.36Bから検出された住居址(ST1)は、Loc.34Aで確認された集落とは自然流路(SR1)を隔てて存在する。Loc.34Aの集落は、SR1に東側を区画された形で集落を構成しているとみられ、その住居址がこの集落の一環であった可能性を残すとしても、このような形での住居址の存在が集落内においてどのような役割を果していたかは今後の問題点である。

次に、住居址の形態と規模についてみてみる。検出された住居址は、すべて円形ないし円形に近い楕円形を呈し、その面積の平均は約27.2m²である。これら住居址のほとんどは、住居内に壁溝や中央ピットを保有し、4~6個の主柱で棟を支えていたとみられる。これらの内、建替えが確認されたのは、Loc.34AのST13・14・17であり、Loc.10BのST13もその可能性がある。また、焼失家屋であったとみられるものは、Loc.34AのST14のみであった。これらのほとんどは、一般の住居とみられるが、特異な形態を示す住居址も数棟確認された。まず、Loc.34Aでは、ST14がそれに該当し、同集落内では最大の規模を誇り、かつ、勾玉等他の住

第26表 調査区における後期堅穴住居址の規模



居址ではみられなかった遺物も出土している。このことは、ST14が集落内で中心的存在であったことを示している。次に、Loc.45では、ST1からベット状遺構が検出され、床面より方格規矩四神鏡片が出土している。このような特異な住居址、特異な遺物の住居址内の出土は、そこに比較的有力な(農業)共同体の存在を示唆していると考えてよかろう。また、同地区的ST2は、推定径9.4mと後期の住居址の中では最大のものであり、Loc.34AのST14の例から考えて集落の中心的存在であったとみられるが、出土遺物が他の住居址とほとんど同じであり、その点で集落における共同集会所等の共同的性格の濃いものであった可能性が強く感ぜられる。Loc.36BのST1は、規模及び出土遺物から特異な住居址とは考えられないが、小さな壇部を有する点で他と異なる。ただ、この壇部がベット状遺構として把握できるかは今後の調査の課題である。

これら後期の住居址に密接な関連を持つものとして、Loc.34BのSP1から出土した方格規矩四神鏡片をあげることができる。これも破砕鏡であるが、Loc.45のST1から出土した方格規矩四神鏡片が破砕面を研磨しているのに対し、全く調整を加えていないものである。これは、明らかに廃棄されたものであり、Loc.34Aの集落と密接に関連するとみられる。この集落の西側は未調査であり、断言できないが、ST14が時期的に…応この集落において最後まで存した住居と考えてよかろう。のことからして、この方格規矩四神鏡片は、ST14が廃絶する後期II段階に廃棄されたとしなければならない。Loc.45のST1が後期IIIの時期に属していることから、この2つの鏡片の廃棄された時期は、後期II～IIIの時期であろう。ここで、いま少しこの2つの鏡片の意味について考えてみたい。高橋徹氏は「廃棄された鏡片」の中で「鏡片は比較的有力な農業1共同体に少なくとも1～2点程度保有されており、ある種の権威の象徴として、あるいは、また、祭祀品としての機能を有す間伝世されたと考えてきた。そしてこれらの鏡片に水系、あるいは平野単位での各共同体群の結合や統合の象徴としての機能までは想定し得ないとした。」と述べている。これは豊後においてのものであり、集落の実体がまだ十分解明していない本地方へ直接結び付けて考えるのは危険であるが、将来的な予測としては十分参考になり得る。そして、この2つの鏡片の存在は、Loc.34AとLoc.45で検出された集落が密接な関連を持っていたことを示唆していると考えられる。しかし、それらがこの田村遺跡群の存在する香長平野や物部川水系との範囲までを包括していたかは、今後の調査に期するしかない。また、高橋氏は、同論文で「小地域共同体が平野的規模での強力な結合、統合の關係に入るには、平野的規模で君臨する大形古墳(前方後円墳等)の出現を待たねばならないだう。」と記し、鏡片の廃棄は、弥生時代的なものの否定、そして新たな動きが開始された反映ではないかと考えている。この田村遺跡群の場合、後期III以降古墳時代にはいってからの遺構はほとんど発見されていない状況であり、物部川水系全体でもこのことは言えることである。しかも前期古墳はこの地域で全く発見されていない。この2つの破砕された鏡片により、高橋氏所論の新たな動きは予測されるが、これを証明するには、今後この地域の前期古墳の調査

が一つの鍵であると言えるのではなかろうか。

註1 土佐山田町教育委員会『ヒビノキ遺跡』 1977

註2 高橋徹「発棄された鏡片」「古文化談叢」第6集 1979 P83

註3 2に同じ P80

10. 総 括 I

10. 総 括 I

——縄文・弥生時代——

田村遺跡群は南四国中央部の弥生時代の拠点的母村集落遺跡であるが、今次の発掘によって発見された造構は全てこれを裏付けるものである。実はそのような弥生遺跡群よりも更に古く、この土地に縄文後期中葉の遺跡が検出されたのは驚くべき事であった。最近高知平野の低地にも2~3の縄文遺跡が発見されているが、Loc.47の縄文遺跡はそれらの遺跡の中では、最も多く遺物の検出された遺跡である。特に多く検出されたのは彦崎K.I式土器と、それに伴う打製石斧である。四国地方で大量に打製石斧が出土するのは、この遺跡から検出されている彦崎K.I式土器の段階がその最上限であって、それ以前の縄文時代ではこれ程の打製石斧は検出されない。この打製石斧の用途として、筆者は当時の平野部に繁茂したクズ・ワラビ・ユリ・カタクリ・ヒガンバナ・ヤマイモなどの地下茎・球根類の掘り棒と考える。また、この遺跡からは多くの石錘も検出されている。この石錘は河川流域の漁網のものより大きく、海浜での漁網のものと考えられる。縄文前期の海進が終り、以後の海退に伴って本遺跡の南部2キロの太平洋岸にある砂丘の内側に広大な潟が、この当時存在していたと筆者はみる。この潟での漁網の重りがこの石錘である。Loc.47の縄文遺跡で発見されている考古資料では、縄文後期稻作論を証する事は出来難い。また、この遺跡は四国の山間部の大半の縄文遺跡と同様に、土器型式で言えれば1型式の時期のみの短住・移動型の遺跡である。

弥生時代の遺構として注目すべきものにLoc.16・Loc.25における掘立柱建物址群と竪穴住居址群の検出、Loc.23・Loc.37・Loc.39における弥生水田の発見、さらにLoc.34の弥生中期III~後期I段階の竪穴住居址群の検出であろう。また弥生関係遺物の発見として重要なものはLoc.35の土塙から検出された朝鮮式無文土器、Loc.34B検出の分綱形土製品等の祭祀遺物類、そしてLoc.34B・Loc.45からの方格規矩四神鏡の破碎鏡の検出、さらにLoc.45を中心とした搬入品とみられる弥生土器群の検出である。搬入の土器の時期は中期II・中期III、そして後期Iである。茶褐色の胎土に角閃石を含む土器で、なかに上東I式土器とみられるものもあり、その大半は中部瀬戸内地方からの搬入とみられる。それらの搬入の土器は、生活址としての貯蔵穴から多く検出する事から特殊な品を土器に入れ運ばれて来たものと考えてよい。南四国では製塩土器が全く検出されていないので、瀬戸内の塩がこれに収まっていた可能性は非常に強い。

田村遺跡群における前期Iの土器は注目されるべきものである。この土器が検出された当初、これは南四国で未発見の前期弥生土器である所から、検出地の地名を取って東松木式土器と命名した。その特徴は、特に1部の夔形土器にみられ、夔形土器の口縁に接して突蒂文土器の突蒂に近いものを付する。この東松木式土器の夔形土器は、東松木式土器よりやや先行すると考えられる入田B式・入田I式土器を出土する入田遺跡からも検出されている。田村遺跡群そしてごく1部であるが入田遺跡で検出された東松木式土器は、現在までの発見状況からみて南四

国で成立したものと考える。そしてその場合、その土器文化の系譜を筆者は龜の甲土器文化の中に求めたい。しかもそれは九州西海岸沿いに南下するものではなく、九州東海岸を南下する1条帶を特徴とする龜の甲土器を考える。東九州にみられる同土器文化系統の下城式土器よりも早い段階に、それは成立したものである事は論を待たない。田村遺跡群における前期IIの弥生土器は、これも筆者が西見当I式土器と称し、板付IIA式土器に近い特色を持つものとした事がある。この前期IIの土器の成立についても、前期I（東松木式）土器の後、第2波として北九州からの影響を考える。

Loc.23・Loc.37・Loc.39の弥生水田について、その地理的位置、集落と水田の比高、水田への灌水等々を考慮すると、西見当・カリヤ・北カリヤにまたがる環濠集落一前期II・III段階一の水田と考えるのが順当であると思う。そして同じ観点でLoc.16・Loc.25にみられる前期Iの集落址に伴う水田を求めるすれば、該当集落の東部から東北部の当時の低湿地「川原田」周辺に常識的に的を絞る事になろう。中山三男教授の田村遺跡の花粉分析について、兎や角言うものでないが、Loc.6の花粉分析資料に存するイネ花粉のあるものは弥生前期Iの段階のものであるかも知れない。しかし、この考え方は調査に当った発掘担当者の報告内容とは異なるものである。

Loc.10は前期IV段階のもの、この段階は県内諸遺跡をみても分村が盛んに行われる段階である。特にLoc.10で注目される事は、前期IV段階のみに限定されて集落が成立している事である。県内各地のこの時期の集落は、中期Iの段階まで継続して営まれているのが普通であって、住居址内や貯蔵穴で前期IVと中期Iの弥生土器が混在して検出される事が多いが、Loc.10は前期IVの土器だけが検出されている。さらにLoc.10の住居址や土塙の中の土器を詳細に検討すると、前期IV段階でも主体となるのは、その前半のものであって、Loc.10については前期IVの前半段階で分村し集落が形成され、その盛期はその段階であり、前期IV後半の段階ではすでに集落の衰退期を迎えていた事が察知できる。田村遺跡群の発掘で特に注意すべき事は、弥生時代の井戸が1基を検出されていない事である。これは発掘で数多く検出された溝状遺構がこれに代わるものであり、特に遺跡の南北を貫く自然流路S R 2の存在は重要なものであろう。Loc.23・Loc.37・Loc.39の弥生水田の灌漑用水の検出は出来なかったが、多分この旧田村川と称してよいS R 2より引いたものであろうし、飲料水もこれから得たと考えられる。

弥生中期I・II期の住居址の検出は少ない。Loc.34 AのST1は中期IまたはII、そしてLoc.45のST8、Loc.35BのST1は中期IIである。この3地点に囲まれる地区は未発掘であるが、調査すれば中期II段階の住居址群が検出される可能性を持っている。しかし、それでも中期I・IIの段階の住居址の検出は少ない。これは筆者のこれまでの分布調査の結果として、それらの時期の土器片は西見当遺跡の東北部に多く集中して包藏されており、今回の調査区外にそれらが存したためである。中期III～後期IIの住居址群はLoc.34・Loc.45において30棟近く検出されている。うち大半は中期IIIと後期Iの時期のものである。しかもこれらの住居址群中にその

型態や出土遺物によって、住居址群中の中心的なものが1棟～2棟存する。また住居址中に火災に遭遇したものがあるが、集落全部の火災でなく計4棟の豊穴住居が火災に遭遇している。うちST7・ST15・ST16の3棟は共に中期IIIの土器を出土し、中期IIIの段階で隣接する豊穴住居である点から考えて、これらは類焼したものとみられる。しかも3棟の住居址とも、火災後建て替えられている点を考慮すると、この火災は失火と推測せざるを得ない。これに対し、出土遺物から特殊な住居址とみられるST14は後期I～IIの段階のものであるが、これと同時期の住居址の広がりはその西部の未発掘区にあるとみられる。その点でST14の焼失原因等を明確にする事は出来難いが、この住居址の焼失は後述する破碎鏡の放棄と関連させて考えてよい問題であろう。

Loc.34Bからも重要な弥生中～後期の遺構群が検出されている。SK69からは壺・甕が各1点とやや型態を異なる高杯2点が出土しているが、これらは中期IIIの土器で、筆者の言う典型的な龍河洞式土器である。高杯の脚部内面と壺下胴部内面に範削りが存する事は注目してよい。このSK69に接するSK70からは小型の挟りのある石製品が検出されている。筆者はこの石製品の型態から岩偶の一種と考える。人面を表現していないが護符か祖靈像としての使用も考えられる。いま1つ祭祀用の土塙とみられるものに、SK69とは12m程離れたSR1の中の1土塙がある。この中からは、筆者が古くから県西部の中期III段階の土器でみている神西式土器が入子で2個検出されている。この2個の壺には範削りはみられない。祖靈像を収めた土塙、そして龍河洞式土器4点を収めた土塙、さらに神西式土器2個を入子にして収めた土塙、後者の土器を収めた土塙は祖靈像への供獻の土器なのであろうか。また集団内の出自によって、このような型式の異なる土器を供獻したのであろうか。以上の3土塙の他に、Loc.34Bからは方格規矩四神鏡片が水溜り状遺構とみられるSP1から検出され、SR1の下部から分銅形土製品が出土している。以上の如くLoc.34Bは、多くの祭祀のための土塙・遺物が出土し、いわば弥生中～後期の祭祀のための場であったと考えよかろう。

弥生後期の土器について、I・II・IIIと型式編年がなされている。うち後期IIはヒビノキI式、後期IIIはヒビノキII式と呼称しているものである。そして、後期IはLoc.34の発掘によって検出され、龍河洞式土器からの系譜のもので、かつヒビノキI式・II式土器のように叩き技法を持たない後期前半の土器で、検出当初横手II式土器と呼称したものである。このように南四国の後期弥生土器を3型式に分かち得たのも、田村遺跡群の発掘の成果である。弥生後期の「小結」でも述べられているように、Loc.34の住居址20棟のうち、後期I段階の住居址は4棟、そして後期IIの段階はST14の1棟のみ、しかも後期IIで以てこの集落は姿を消す。さらにLoc.45においても中期I～後期IIIにかけての住居址はみられるが、その中で中期III段階の繁栄の姿は把握出来ても、後期II・III段階の繁栄の姿を掴む事は困難だという。田村遺跡群における後期II・III段階の集落の衰退は、同遺跡群が撲滅的母村集落の役割を果し得なくなった事を物語っていると同時に、またそれが故に後漢の2面の破碎鏡が放棄されているのである。

- 註1 繩文後期の宿毛貝塚では3～4型式の繩文土器が発見され、長期にわたって繩文人の定住が考えられる。これを筆者は定住・定着型の遺跡と呼び、これに反して1世代ないしはそれ以下の集落形成の遺跡を短住・移動型の遺跡と呼んでいる。県内の繩文遺跡の80%は後者の短住・移動型である。
- 註2 岡本健児「土佐考古学の諸問題」『高知の研究』1 清文堂 1983
- 註3 木村剛朗「高知県入田遺跡出土の入田B式土器」「遺跡』27 遺跡発行会 1985
- 註4 刻目突帯文系の弥生斐形土器を持つ土器型式群を総括して亀の甲土器文化と筆者は呼称している。
- 註5 宮本工・村上久和・城戸誠「山国川下流域における縄文時代後・晩期の遺跡」『九州考古学』59 九州考古学会 1984
- 註6 岡本健児「西見当I式土器とその縄文的要素」『考古学ジャーナル』170 ニュー・サイエンス社 1979
- 註7 本報告書中に、山中三男「高知県南国市田村遺跡の沖積世後期堆積物の花粉分析学的研究」がある。
- 註8 岡本健児・広田典夫「高知県ひびのき遺跡」土佐山田町教育委員会 1977
- 註9 註2に同じ。

執筆分担

- | | |
|-------------|---------------|
| 1. Loc. 35B | 下村 |
| 2. Loc. 35C | 下村 |
| 3. Loc. 36A | 角谷 |
| 4. Loc. 36B | 下村 |
| 5. Loc. 41 | 下村 |
| 6. Loc. 45 | 出原 |
| 7. Loc. 46 | 森田 |
| 8. 弥生時代中期小結 | 角谷（遺物）、廣田（遺構） |
| 9. 弥生時代後期小結 | 廣田 |
| 10. 総括 I | 岡本健児 |

高知空港拡張整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

下村遺跡群第5分冊

本文 V

1986年3月31日

編集・発行 高知県教育委員会
印 刷 弘文印刷株式会社